

山口大学大学院東アジア研研究科
博士論文

明治・大正期における日本人の北京官話の学習

—日本人編纂の北京官話学習書を資料として—

平成29年1月

オウ セツ
王 雪

目次

序論	1
1 問題提起と研究目的	1
2 資料の利用及び資料選択の理由	3
3 論文の構成	6
4 先行研究	7
4.1 近代日本の中国語教育史について	7
4.2 北京官話教科書について	9
4.3 北京官話辞典について	11
5 近代日本における北京官話の発足	12
第1章 近代日本における北京官話教科書	17
1.1 近代における北京官話教科書	17
1.1.1 近代における北京官話教科書の概況と書目の補充	17
1.1.2 北京官話教科書の性格の一端—戦争語学	19
1.2 西島良爾と中国語教科書	30
1.2.1 西島良爾と中国語教科書	30
1.2.2 西島良爾の中国語観	33
1.3 まとめ	35
第2章 明治・大正期に日本人が編纂した北京官話辞典	36
2.1 明治・大正期の日本人編纂の北京官話辞典の書誌	37
2.2 明治・大正時代の日本人が編纂した中国語の辞典の特徴	50
2.3 井上翠と中国語辞典の補充研究	54
2.3.1 時文教科書と東亜経済研究	54
2.3.2 直筆原稿『日清語辞典』と『井上日華新辞典』の比較	56
2.4 まとめ	63
第3章 明治北京官話教育初期に日本人が学習した北京官話	
—西島良爾の著書を中心に—	65
3.1 『清語会話案内』の北京語の考察	65
3.1.1 『清語会話案内』の成立	65

3.1.2 『清語会話案内』の北京語.....	72
3.1.3 『清語会話案内』の誤訳.....	84
3.2 『四声標註支那官話字典』の北京俗語の考察.....	86
3.2.1 『四声標註支那官話字典』の編纂.....	87
3.2.2 『四声標註支那官話字典』の北京俗語.....	90
3.2.3 『四声標註支那官話字典』の誤訳.....	95
3.3 まとめ.....	97
第4章 明治・大正期の日本人の北京官話 r 化音の学習	99
4.1 『日漢英語言合璧』に見る発音の片仮名表記.....	100
4.1.1 『日漢英語言合璧』の発音表示符号.....	100
4.1.2 『日漢英語言合璧』の韻母の仮名表音体系.....	110
4.2 『日漢英語言合璧』の r 化音.....	115
4.2.1 『日漢英語言合璧』の r 化語.....	115
4.2.2 『日漢英語言合璧』の r 化音.....	117
4.3 明治・大正期における日本人の r 化音への認識諸相.....	123
4.3.1 明治・大正期の日本人の r 化音への認識諸相.....	123
4.3.2 『日漢英語言合璧』の r 化音の位置づけ.....	129
4.4 まとめ.....	131
第5章 北京官話辞典における北京官話 r 化語の扱いの変化	133
5.1 『日華語学辞林』と『井上支那語辞典』における r 化語の扱い.....	134
5.2 『支那語辞彙』1904年版と1921年版における r 化語の扱い.....	140
5.3 明治初期の中日辞典に見られる r 化語の安定性の一考察	
— 『日華語学辞林』の r 化語の現代北京市民への調査を通して—.....	144
5.4 まとめ.....	147
5.5 付録.....	149
結論	169
1 本論文の独自性.....	169
2 各章の要約と考察成果.....	170
3 全体的な結論.....	173
4 今後の課題.....	174
参考文献	177

序 論

1 問題提起と研究目的

日本は古い時代から中国の漢字を借用している。近現代日本の中国語教育の源流は、江戸時代の長崎唐通事¹に発し、唐話の教授を唐通事が担当していた。しかし、明治時代にこの唐通事の制度は消滅し、初期は唐通事の伝統的な教育を踏襲して「南京官話」を教授したが、明治9年（1876）から北京官話に転換することになった。明治の新政のもとに、新しい形の中国語教育が日本に生まれ、官立、私立のさまざまな形態の中国語教育機関が設立された。現在の中国語教育が直接のつながりを持つてくるのは明治時代である²。

北京官話教育の実施に応じて、数多くの北京官話の教科書が発行されるようになった。近代日本における中国語教科書は1000冊以上（明治元～昭和20年の間には1474冊がある。第1章を参照。）がある。明治以降日本の中国語教科書に大きな影響を与えた本としても知られているのは、イギリスの駐清公使トーマス・ウェード（Thomas Francis Wade 1818-1895）の著になる会話書『語言自邇集』（1867）である。のちに日本人は『語言自邇集』を基にして『官話指南』（1881）という教科書を作った。『官話指南』は中国語教科書の見本となって、その後の教科書の構成はその体裁を引き継いできた。教科書の出版に続いて、辞典も欠かせない道具として少数ながら出版された。最初の日中辞典は西島良爾と牧相愛によって1902年に出版された『四声標註支那官話字典』であり、最初の中日辞典は1904年に出版された石山福治編の『支那語彙』である。1902年から1945年までの43年間に出た字典ないし辞典は57点³ある。内容上、実用の暗記書のような、字或は単語を数百から数千個集めたものが多い。

ところで、外国語を学習する方式は学習動機に決定されている。相手国の文化を学習するために誕生したのは文化語学であり、社会的な諸活動、たとえば政治・経済の交流の手段としてとりかかるとは実用語学である⁴。

それでは、日本の外国語教育において中国語はどのように位置づけられるのであろうか。中国語が明治以来、安直な実用主義の立場から学ばれ、実用語として認識されたことは事実である。すなわち、貿易・通商或は軍事的な必要から実用会話さえ出来ればよ

¹「唐通事」とは、祖先は中国人で、日本に帰化して長崎に定住したものの子孫で、中国との通商貿易のために活躍した「訳司」のことである。

² 六角恒廣『近代日本の中国語教育』不二出版、1996年、p.9。

³ 六角恒廣編『中国語関係書書目（増補版）』（2001年）、陳娟『清末における日本語の辞書—中国人学習者を対象として』（2014年）を参考にした。

⁴ 「文化語学」と「実用語学」という言い方は、六角恒廣『日本における中国語教育の歴史的な性格』を参考。

いとされた。そのため、言語学的な関心はもたれず、科学的な文法や発音の教育は重視されず、中国語の背後にある中国の文化や思想はまったく学ばれなかった。日本における北京官話の学習はこのような安直な実用主義の立場から始まり、第二次世界大戦に敗れた昭和20年(1945)まで続いた。

中国語が言語学と乖離していた時代の教科書も辞典も局限性があるのは仕方がないことである。しかし、明治・大正期において日本人が編纂した中国語教科書及び辞典は、歴史の一環として日本の中国語教育史においても中国語学史においても、看過できない価値がある。

近年、これらの文献資料に目を向け、教科書の成立経緯、編纂方法や内容を論ずる成果が多々出ている。また、清末の北京語の言語実態などについて相当広範な分析が展開され、評価できる成果に至っている。しかし、先行研究において取り扱われた資料は有名ないくつかの教科書に限られている。それ以外の資料を詳しく利用せず、現時点でも未公開の資料があり、教科書に比べて辞典の編纂史の系統的研究はなされていない。

一方、近代日本の社会環境下、日本人は半世紀以上の長い間、中国語に対していかに冷淡であったとしても、中国語に接触し、摂取していた過程で、中国語への学習意欲と学習方法がまったくなかったわけではない。言語の面で北京官話への認識と学習方法は必ずある。日本語と中国語とは同様に漢字を用いるという共通点があるが、読み方はまったく異なる。日本において、江戸時代以前に学習していた中国語は純粋な漢文であり、漢文は古典を読むために必要な古典語であった。学習方法は見ることを主とし、読むにしても漢字を日本字の発音で読むのであった。江戸時代は白話小説が読まれ、会話文が学ばれ、中国語の発音にも一定の関心が持たれていたが、学ばれた口語中国語は主に南京官話であった。更に明治期の北京官話時代に入って、実用主義的な会話を目標にしてはじめて、中国語は徹底的に過去の伝統的な漢文から口語へと変わった。換言すれば、近代日本において中国語を話すという志をたて、口語を重視し、発音と四声を学習し、さらに方言まで身をつけるために努力を払ってきた。

そこで、中国語の発音を習得するために日本人はどんな方法を採用したかを明白にしなければ、日本人の中国語の学習史、受容過程は不明のまま、近代日本人の中にある中国語の本質はみえない。そのため、日本人は北京官話を言語学的にどのように学習し、どの程度認識していたか、という視点から考察する意義は大きい。しかし、従来の研究は、日本人の立場から社会文化の面で北京官話を実利追求の道具と認識したことを力説しているが、言語学的に学ぶ方法から着手したものはごく少数である。

近代日本人は北京官話を学習する時に、使い慣れた仮名で中国語の発音を適切に表現しようとした試みが見られるが、十人十色で統一しておらず、無論中国語の発音を的確に示しきれないところが存することは免れない。しかし、一部の教科書にある記載から、特殊な符号を用いて中国語特有の有気音、舌音などを表記する工夫がみられる。

特に、話し言葉に見られる r 化語は北京官話の特色であり、r 化する時韻母において複雑な音交替が生じ、学習者には難しい。北京官話が教えられた時期の日本人は会話を重視したので、r 化語を避けることはできず、r 化語に対しても、日本人の取扱い上科学的に記録したものが見られる。大正・昭和期になると、ある語を r 化するかどうかの処理が、現在中国の標準語（普通話）に近づいてくる。

このような先進的な学習方法は、北京官話教育において主流とならなかったが、無視することはできない。

以上の現状に鑑み、本論は、日本の北京官話教育において、今日までに論証された僅かな代表的な著者と教科書・辞典以外の日本人による北京官話学習書を収集・補充し、そのうち重要なものを資料とし、日本人が北京官話を言語学的に学習した可能性を探索し、日本人はどのように北京官話を学習したか、北京官話をどう学習したかに焦点をあてる。

具体的には、(1) 北京官話辞典ほどの程度出来上がったか、そしてそれらの編纂経緯と形式はどうであったか；(2) 日本人が学習した北京官話の分野、表現などの実態はどうであったか；(3) 北京官話の特色である r 化音の性質と音交替に対して、日本人がどのような認識をもっていたか、また r 化するかどうかに対してどのように扱ったか、といった日本人の北京官話の学習に関する問題を明らかにすることが本論の目的である。

2 資料の利用及び資料選択の理由

本論は、前述した問題意識を以て、先行研究と関連資料を広範に収集し分類して、北京官話の教科書に対する今日までの研究を補充し、辞典の全体像を捉える。その上で、権威と代表性があり、本論の目的を解決できる資料を選別した。それらは次のものである。

(1) 『清語会話案内』

『清語会話案内』は西島良爾によって明治 33 年（1900）年に出版された北京官話の教科書である。西島良爾は生涯において中国語の教授に力を注ぐと同時に学習書の編纂にも取り組み、1930 年代までに中国および中国語に関連する書籍を改題再出版も含めて 20 点以上刊行した。西島と中国語教育については、短い論文が何点かあるが、彼の教科書と辞典についての研究はない。

『清語会話案内』は、日本の中国語教育の初期においては珍しく、内容上も形式上も整えられた教科書である。西島良爾が編纂した他の教科書にも本書から継承された部分が多いことから、本書はこの時期を代表とする教科書であるといえる。また、『清語会話案内』は当時の日本人が受容した北京語の実態をかなり忠実に反映しているため、相当

な言語的価値も持っている。しかし、現時点まで『清語会話案内』に関する詳細な研究は行われていない。

『清語会話案内』は多数の公共図書館に所蔵されており、国立国会図書館デジタルコレクションでも公開されている。本論文で利用したのは山口大学図書館所蔵のものである。

(2) 『四声標註支那官話字典』

『四声標註支那官話字典』は近代日本で日本人が編纂した最初の中国語辞典である。西島良爾と牧相愛が共編し、明治35年(1902)に出版された。近代最初の辞典であるため、参考にするものもないという時期での成立過程と編纂方法は研究する価値がある。加えて、北京土語⁵が収録されていることが特色である。波多野太郎(1984)は老舎の著書と『西游記』などを参考にし、「本書は北京土白やクラシックな口語をよく収録した辞典である点、異色である。」と解題で指摘している⁶。しかし、現時点まで本字典を取り上げた研究は行われていない。

『四声標註支那官話字典』は秋田県立図書館、大阪府立中央図書館に所蔵されており、波多野太郎編『中国語学資料叢刊：白話研究篇』の第2巻にも影印の形で収録されている。本論文が利用したのは後者の影印本である。

(3) 『日漢英語言合璧』

『日漢英語言合璧』は鄭永邦⁷と呉大五郎⁸により、明治21年(1888)に初版、大正8年(1919)までに15版を重ねた⁹教科書である。この本は英語、中国語、日本語の順で横書き、3言語を対訳する体裁を採用している。そのうち、中国語の声母・韻母を仮名表記で注音することに種々の工夫が加えられ、特にr化語への表記は驚くほど柔軟である。筆者の調べたところ、『日漢英語言合璧』のr化語についての記録は先進的なものと位置づけられる。中国語を注音する時使用されている仮名表記とr化音への認識を解明するために『日漢英語言合璧』を用いる。

⁵ 北京官話と北京土語の分別について明確な基準はないが、北京土語は俗語を含んだ北京の街角で話される日常語であり、一方北京官話は教養ある知識人の北京語であると一般的に認識されている。

⁶ 波多野太郎編・解題『中国語学資料叢刊：白話研究篇』不二出版 1984年

⁷ 鄭永邦(1863-1916) 唐通事の家柄、明治・大正時代の外交官。「北に鄭あり、南は御幡」と言われるように、明治時代中国語の両巨頭の一人と称えられている。(六角恒廣『漢語師家伝 中国語教育の先人たち』東方書店、1999年、p.128)

⁸ 呉大五郎(1862-?) 唐通事の家柄、明治時代の外交官。北京に留学したのち、外務属となりボンベイ領事、三井物産の支配人などを務めた。(渡辺慎治『天才乎人才乎：現代実業家月旦』東京堂、1908年、pp.170-172)

⁹ 国文研究資料館の明治期出版広告データベースに、『日漢英語言合璧』の出版広告は3つが見られる。それぞれの時間は1889年の1月22日、2月1日、5月22日である。

『日漢英語合璧』は多数の公共図書館に所蔵されており、国立国会図書館デジタルコレクションでも公開されている。本論文で利用したのは山口大学図書館所蔵のものである。

(4) 『日華語学辞林』と『井上支那語辞典』

井上翠が編纂した中国語辞典は近代日本において一番信頼すべき辞典として広範に使用されていた。

『日華語学辞林』は井上翠の最初の中国語辞典で、明治39年(1906)に発行された。一方、『井上支那語辞典』は井上が中国北京の地元の材料を集め中国人の協力を受けて、昭和3年(1928)に初版した浩大な中国語辞典である。井上の辞典は非常によく使用され、一時代の日本人の学習した中国語の代表であるといえる。『井上支那語辞典』は『日華語学辞林』を踏襲し、20年以上を隔てて刊行されたことから、両者に載せている語のr化するかに関する扱いには異なりが見られるので、それを比較して分析することによって、日本人によるr化語の扱いの変化を窺うことができる。

『日華語学辞林』は多数の公共図書館に所蔵されて、国立国会図書館デジタルコレクションでも公開されている。また、影印本として六角恒廣編『中国語辞典集成：編集復刻版』の第2巻にも収録されている。

『井上支那語辞典』は1928年初版と1932年再版があり、両方とも多数の公共図書館に所蔵されており、1928年版は六角恒廣編『中国語辞典集成：編集復刻版』の第4巻に収録されている。本論文で利用したのは山口大学図書館所蔵の1928年の初版本である。

(5) 『支那語辞彙』1904年版と1921年版

石山福治は日本の辞典をはじめ中国語に関係する学習書を何冊かを編著した。そのうち、日本近代最初の中日辞典である『支那語辞彙』は1904年に初版が刊行され、1921年に再版された。17年間を経た再版では、1904年版所載のr化語につき-rを継承するか削除するかの点で初版とは違う扱いが見られる。その背後には石山の人為的な取捨選択の判断標準があると思われる。(4)で挙げた資料と同様に、それを比較することによって、日本人のr化語の扱いの変化を窺える。

『支那語辞彙』1904年版は小樽商科大学附属図書館、九州大学附属図書館などに所蔵されており、六角恒廣編『中国語辞典集成』第一巻にも収録されている。本論文が利用したのは『中国語辞典集成』に収録されているものである。

『支那語辞彙』1921年版は東京外国語大学附属図書館などに所蔵されており、国立国会図書館のデジタルコレクションでも公開されている。本論文が利用したのは後者のデジタル版である。

3 論文の構成

本論文は序論、本論の全五章、結論からなる。

序論では、本研究に着手した動機、執筆目的、先行研究、及び問題の背景を記述する。

第1章では、北京官話教科書について今日までの研究を補足し発展させる。第1節では、北京官話教科書を広範に発掘・収集し、新しいものを補充する。全般的に教科書の出版数の変遷を軍事との関連でみていき、教科書の性格の一端としての軍事語学を再論証する。第2節では、北京官話教科書を改題再出版も含めて20点以上刊行した日本人・西島良爾に着目し、西島良爾と北京官話教科書の編纂について論ずる。

第2章では、北京官話辞典を取り上げ、辞典の編纂数、形式、特徴などを明らかにする。第1節では、収集した17点の辞典について、書誌学の考察をはじめ、語の収録などの特徴を明らかにする。第2節では、中国語辞典をライフワークとした井上翠の生涯と彼の辞典について補充研究をする。特に今日まで、公開されておらず、資料として利用されていなかった『井上日華新辞典』(1931)の直筆原稿『日清語辞典』を紹介し、その成立と内容を見る。

第3章では、西島良爾の著書を利用して、日本人が学習していた北京官話の様相を見る。第1節では、『清語会話案内』の成立経緯と言語の範囲、及び清末の北京語の実態を明白にする。第2節では、近代日本における最初の日中辞典である『四声標註支那官話字典』の編纂方法を考察し、収録されている語の範囲、清末の北京土語・俗語の実態と意味を検討し、その位置づけを考案する。これにより、北京官話教育初期の日本人が学習した北京語の様相を明らかにする。

第4章では、話し言葉でもあり北京官話の特徴でもあるr化音に対して、明治・大正期の日本人の学習方法、認識を明らかにするために、『日漢英語言合璧』を始め13点の北京官話学習書を資料とし考察する。第1節では、『日漢英語言合璧』の中国語の仮名表記とr化音の注音を分析する。第2節では、同期に発行され、r化語の性質または発音に関わる記述がある北京官話学習書12点を調べ、明治・大正期の日本人のr化音への認識を明白にし、『日漢英語言合璧』のr化音の扱いの位置づけを確認する。

第5章では、北京官話辞典における、明治から大正期を経て昭和初期にかけて日本人のr化語の扱いの変化を考察する。第1節は『日華語学辞林』に掲載されているr化語をデータとし、『井上支那語辞典』のそれらの継承状況を調べる。第2節は『支那語字彙』の1904年版所載のr化語を1921年版に継承される状況を考察する。r化のまま引き継がれた語と非r化語とされた語彙の性質の確認によって、r化語の扱いの基準を見る。更に、現代の北京人へのアンケートを通じて明治時代の『日華語学辞林』のr化語の安定性を考察する。

結論では、明治・大正時代の日本人の北京官話の学習状況をめぐって、各章を要約し、本論文の提出した観点に対する結論をまとめる。

4 先行研究

日本の北京官話教育に関しては、多岐にわたる幅広い視野を備えた先駆的な研究がなされており、日本の学界の研究者は中国に先立ってこの分野に注目した。特に先鞭をつけた六角恒廣をはじめとする研究は後の研究に大いに裨益することとなった。

以下に、分野別に今日までの研究結果を紹介する。

4.1 近代日本の中国語教育史について

近代日本の中国語教育史研究の分野に力を尽したのは六角恒廣（1919-2004）である。彼の著書には教育史学の視点からのものが多い。主なものに『近代日本の中国語教育』（不二出版、1984）、『中国語教育史の研究』（東方書店、1988）、『漢語師家伝 中国語教育の先人たち』（東方書店、1999）、『中国語教育史稿拾遺』（不二出版、2002）、『中国語学習余聞』（同学社、1998）などがある。

六角恒廣は近代日本の中国語教育史を2つの時期に分けた。第1期は明治初年から昭和20年（1945）8月までの時期、第2期は昭和20年8月以後現在までの時期である。その区分は、いわゆる日本の敗戦を境としている。第1期は、語学としての科学的方法論をもたなかった日本の中国語は、語学的研究成果の蓄積を基礎とした語学発展史の体系を形成していない。第2期に入って以後語学として新しい学問的成果があげられた¹⁰。六角恒廣によって、第1期明治前期（明治10年代まで）の目標は、日本と中国との外交という意味から通弁を養成することと、欧米のアジア支配から脱却したアジアの世界をつくるための日本と中国の和親を求めることであった。明治20年代の中国語教育は商業上の必要に応じる意義をもった。明治20年代の終わりごろ日清戦争がおこり、中国語教育を中国侵略の役にたたせるように巻き込んで、学問研究という方向からますます遠ざかり、卑近な生活会話に終始する教育の基礎が、明治30年代に入ってしっかりと固められた。六角はその間の官立や私立の外国語学校、官立私立の高等商業学校をはじめ、私立大学予科或は各地の講習会及び中国語教育に関する制度を研究した。そして、近代日本の中国語教育は日本の近代化のひずみと同調した、大きなひずみの歴史と結論した¹¹。

また、六角は日本の北京官話教科書の源流といえる『語言自邇集』などの教科書、台湾語のこと、伊沢修二¹²と彼の中国語研究などを分析した¹³。一方で、終生或は晩年にいたるまで中国語を教えた教師、若年の一時期に中国語教育に力をそそいだ教師のなかで、

¹⁰ 六角恒廣『近代日本の中国語教育』不二出版、1996年、pp.9-11。

¹¹ 六角恒廣『近代日本の中国語教育』不二出版、1996年、pp.72-75、p.106。

¹² 伊沢修二（1951-1917）、明治時代の日本の教育者、文部官僚。

¹³ 六角恒廣『近代日本の中国語教育』不二出版、1996年。

その名を留めておきたいと思われる7名をとりあげて略伝を書くなど¹⁴、近代日本の中国語教育という領域と関わる歴史を明らかにした。

六角は近代日本の中国語教育の研究で画期的な成果をあげたと評されている。中国語教育についての認識は、この分野において確固たる基礎を築き、以後の研究者にも認められた。筆者は、「近代日本の中国語の実用語であるが、その性格は明治30年代に決定的に形成され、しだいに商業的粉飾をほどこして侵略用語へ転落し、その態勢をそのまま1945年8月の日本の敗戦まで維持していた¹⁵」、という六角の論述から、戦争と関係する北京官話学習書の出版状況を考察するのを感じた。そして、六角は歴史の角度から見た日本の中国語教育が科学的なものではないという性格を論じたが、筆者は一部の資料から近代日本人が中国語を科学的に探索した痕跡をみつけたので、それとは違う視点から異論が出てきて、本論文の主な論点とした。

安藤彦太郎(1917-2009)¹⁶は『中国語と近代日本』(岩波書店、1998)を著した。『中国語と近代日本』は近代の複雑な中日関係をふまえて、中国語教育という視点から、近代の日中関係の歴史、或は日本の近代の思想のありかたをのぞいてみよう、という意図で書かれたものである。本書では、中国語教育の民間在野での努力を重視し書いて、中国語教育の需要が日本の大陸進出と深く関わっていることも強調されている。戦前の日本の中国語教育について、中国語と戦前の教育制度、『急就篇』17とその周辺、中国語と漢文、中国語教育の流派、戦争と中国語などが論じされた。

安藤彦太郎の論文は『中国語教育の歴史的な性格』(『教養諸学研究』第二号、早稲田大学政経学部教養諸学研究会、1955)、『中国語教育の歴史と課題』(『中国研究』、中国研究所、1968年9月号)がある。安藤は日本における明治前後の中国語教育の歴史を遡りながら、「実用主義」のもとで、中国語は「漢字」だけで言葉がわかること、商売や戦場に役立つことなどを論じた。

倉石武四郎(1897-1975)の『中国語五十年』(岩波書店、1973)は、倉石の中国語の学習と研究に関わった50年の歴史を述べている。これは2部に分けられている。第1部は明治時代から1968年までの関連研究を論述したものである。明治以後の漢文から中国語の教育に切り替わった時期の学校の中国語科目の成立と使用された教材について述べている。第2部は日中国交正常化後に関わる討論、及び日中交流の展望をあらたに書下ろしたものである。倉石は北京語を学習したことで中国語の文学の学習方法について、漢文を訓読ではなく中国語で音読すべきであるという考えを発表した。

邵艶の論文『近代における中国語教育制度の成立』(『神戸大学発達科学部研究紀要』2005)は近代日本の中国語教育制度の成立を考察したものである。邵は近代日本の中国

¹⁴ 六角恒廣『漢語師家伝 中国語教育の先人たち』東方書店、1999年。

¹⁵ 六角恒廣『近代日本の中国語教育』不二出版、1996年、pp.106-107。

¹⁶ 安藤彦太郎は早稲田大学の政治経済学部教授を務め、定年退職後、日本を代表する民間の中国語学校である「日中学院」の院長を務めたなどの経歴を持つ。

¹⁷ 『急就篇』は1904年に善隣書院から出版された中国語の教科書である。

語教育制度を3時期に分けている。第1期は成立期であり、東京外国語学校を除けば主に民間の学校において中国語教育が行われた時期である。第2期は展開期であり、専門学校や高等商業学校で中国語教育が盛んに行われた時期である。第3期は発展期であり、日本の中国侵略とともに中国語学習が「ブーム」となった時期である。

4.2 北京官話教科書について

(1) 著書

近代日本で発行された北京官話教科書を収録したものに、六角恒廣による『中国語関係書目（増補版）』（2001）がある。明治以後の近代日本において、中国語教育に使用された教科書を主として、辞書、商業会話・軍用会話・旅行会話などの類をも収録している。1867年から1945年を第1部とし、以後2000年までの書目は第2部で増補し、増補版として発行された。

中国人の学者・李無未による『日本漢語教科書匯刊』（全8巻、中華書局、2015）がある。これは江戸・明治時代に日本の漢語教育体系下で使用された代表的な漢語教科書134種を収集している。収録文献は歴史関係・教学重点・文体・応用・言語類別などの分野に基づき8巻に分かれる。第1巻は江戸の唐話課本で、江戸時代の一般の漢語学習者を対象として公開発行された漢語教科書及び唐通事が子弟の漢語教育に用いた家伝的性質の教科書を収録している。第2巻は明治の一般課本で、明治時代に広く一般の漢語教学活動に使用された総合的な漢語教科書を収録している。『日本漢語教科書匯刊』に収録された各書の解題は『日本漢語教科書匯刊 総目提要』にまとめられている。

近年では、言語学の立場から、日本人による北京官話教科書を利用して、北京官話の実態を解明しようとする一連の研究結果が立ち続けに発表されている。主なものとしては、魏薇の『北京官話教科書詞彙研究』（吉林大学出版社、2013）、李無未の『日本明治時期北京官話課本語音研究』（商務印書館、2014）、楊杏紅の『日本明治時期北京官話課本語法研究』（廈門大学出版社、2014）がある。これらは北京官話教科書を利用して、北京官話の語彙、語音と文法を解析したものである。

(2) 論文

日本では、北京官話の教科書を取り上げた先行研究は僅かである。清末の北京語の実態に関しては、山田忠司が「清末北京語の一斑—『燕語新編』を資料として—」（文教大学『文学部紀要』2003）と『「北京官話 今古奇観」の言語について』（文教大学『文学部紀要』（18-1）2004）を執筆した。前者は『燕語新規』を実際に話されていた北京語を反映しているものとし、その言語を太田辰夫（1964、1969）の論考に照らし、また同時代の性格が類似している資料との比較を行い、『燕語新編』の言語が北京語であることは疑う余地が無いが、多くの点で他の資料とは異なっているという事実から、単に北京語

と言ってもそれは均質的なものではないとの結論を出した。他に北京官話の教科書に関するものとして、林怡州の「宮島大八『官話急就篇』の語彙について」(『国際文化表現研究(9)』2013)、松田かの子の「官話教科書『華語萃編』の成立に関する一考察」(慶應義塾大学『藝文研究』(80)2001)などの論文がある。張照旭の博士学位論文である『明治期中国語教科書における中国語カナ表記についての研究』(岡山大学大学院、2014)は、『大清文典』¹⁸の中国語カナ表記を11本の近世訳官系唐音資料と比較し、『大清文典』は杭州音に一致すると結果とし、そして『日清字音鑑』を中心に多くの教科書の韻尾ngを仮名「グ」に近い表記をで表すことを明らかにした。例えば『日清字音鑑』では「ク」を採用し、『支那文典』では「ング」を用いている。

中国では、北京官話教科書について、李無未・陳珊珊の『日本明治時期的北京官話「会話」課本』(『世界漢語教学』2006)がある。彼は会話教科書を収集して全般的な特徴を討論する。閔峰の『日本明治時期商用漢語研究』(『吉林大学』2007)は2点の商業教科書を取り上げ、教科書の言語選択意識、教育方法などを論証した。

特定の資料を対象とする論が分散的に発表されている。例えば、董氷華による『日本漢語教科書「日清会話」的語言特点』(『長春師範大学学报』2013)があり、『日清会話』¹⁹を通して19世紀の中国北方方言の実態と特点を明らかにした。王禮華の『日編漢語讀本「官話指南」的取材與编排』(『上海師範大学学报』2006)は、教育上の視点から『官話指南』の内容の配列と難易度を分析し、教科書とする利点と欠点を指摘した。

近代日本の中国語学習書を材料としr化語を考察した先行研究は3文が見られる。

1つは林怡州による『「亜細亜言語集」の中のアル化語彙—明治期における中国語教材の探究—』(『国際関係研究』31(2)、2011)で、作者は『亜細亜言語集』の第一巻から第七巻までに出てくる全てのr化語を統計、分類し、現行の「常用儿化詞表」と比較し、その状況を分析してから、現行のr化語の専門字典の典拠になることを提言した。

2つ目は呉菲による『「日漢英語言合璧」語音教学研究』(吉林大学修士論文、2007)は、本論文と同じ資料を使い重なる問題を論じるが、研究視点も研究方法も違うので、本論の参考とならない。呉菲(2007)は『日漢英語言合璧』を取り上げ、中国語の漢字につけている日本仮名表記によって、教育史の一端として『日漢英語言合璧』の語音系統と教育方法を明らかにした。しかし、声母、韻母の仮名表記の例をあげず、不明なところや詳細さに欠けるところがあるだけでなく、r化音の音交替えについても議論を展開せず、その規則をまとめていないので、『日漢英語言合璧』の価値を十分に利用していないと思われる。

3つ目は楊杏紅による『日本明治時期北京官話課本中的儿化詞』(『長春師範学院学报：人文社会科学版』2013年6月)である。作者は北京官話学習書のr化語の類型を品詞によって考察し、その特徴を4点にまとめる。つまり数量は少ないこと、仕組みに規則が

¹⁸『大清文典』は1877年に金谷昭によって訓点された中国語文法書である。

¹⁹『日清会話』は1894年に木野村政徳により発行された教科書である。

みられ二音節語が数多くでてくること、r 化語が主に些細事物を表すこと、及び北京官話学習書に載せている r 化語は同時代の中国の文献のそれと差異があることである。ただし、この論文に収集された r 化語は一体どの教科書を根拠とするかはっきり説明しておらず、北京官話教科書に見られる r 化語はそれより豊富だと思われる。

さて、本論文で論じる教科書『清語会話案内』と著者の西島良爾に関する先行研究には、柴田清継による 4 本の論文『西島良爾—中国語とともに生きた明治人』(馬場憲二・管宗次編『關西黎明期の群像第二』和泉書院、2002)、『西島良爾神戸在住期の対中国活動—「日華新報」の初歩的考察を兼ねて』(『孫文研究：孫文研究会会報』2002)、『西島函南』(『孫文研究：孫文研究会会報』2007)、『在阪時の西島良爾とその中国語教育活動』(『中国学論集：一海・太田両教授退休記念』翠書房、2001)がある。これらの論文は歴史の観点から西島の生涯を明らかにしたが、彼は中国語教科書などを編纂したことを言及したが、著書の取材と内容を探っていない。本論文では、西島の生涯については柴田清継の先行研究を参考した。

4.3 北京官話辞典について

六角恒廣は辞典の散逸を防ぐために、明治期から昭和 20 年 (1945) までの間に中国語学習に使用された辞典をおさめた全 16 巻の『中国語辞典集成』を作って、2003、2004 年に刊行した。これには多数の辞典を収録している。そのうち、大正元年 (1912) 以前の辞典としては『支那語辞彙』(1904)、『日漢辞彙』(1905)、『北京正音 支那新字典』(1905)、『日華語学辞林』(1906)、『同文新字典』(1909) などがある。

また、中国語に関わる叢刊類にも辞典が見られる。波多野太郎編『中国語学資料叢刊：白話研究篇』(1984) の第 2 巻には『四声標註支那官話字典』(1902) を収録している。波多野太郎編『中国語文資料彙刊』の第 4 篇第 3 巻 (1994) には『日清会話辞典』(1903) を収録している。一方、国立国会図書館のデジタルコレクションでも多くの辞書が公開されている。たとえば、先に挙げた集成と叢刊にはない『日華会話辞典』(1906) のデジタル化版がある。

論文では、陳娟による『清末における日本語の辞書—中国人学習者を対象として』(2014) は明治期の何点かの日中辞典を取りあげ考察を行っている。趙小丹による『「日清會話辞典」語音研究』(『吉林大学』2006) は、『日清會話辞典』²⁰のローマ字注音によって声母、韻母及び声調の語音系統を研究した。辞典の声母、韻母は実際の北京官話の発音と異なるところがあることを指摘し、日本語の発音にはないことが理由であると説明している。辞典は発音を表示するために日本仮名表記も採用しているが、この論文では仮名表記をただ参考とし、分析を行っていない。呉姝純による『「日漢辞彙」與清末北京官話常用詞

²⁰ 『日清會話辞典』は 1903 年に池田常太郎により発行された日中辞典である。

研究』(廈門大学修士論文、2013)があり、『日漢辞彙』²¹の成立、体裁と内容を考察して、所掲の多音節語を主に分析して特徴をまとめた。

井上翠と彼の著書に関わる先行研究については、六角恒廣の『漢語師家伝 中国語教育の先人たち』の中に「井上翠—辞書編纂をライフワークに」の1章がある。これは井上翠を「辞書編纂をライフワークにした」と評価し、彼一生の伝記を記したものである。井上翠の辞典について、「今は昔、中国語が「支那語」と呼ばれた時代に、「支那語」を習った者がお世話になったのは何といても井上翠編の辞書であった」²²と称えている。また、山根幸夫著『近代中国のなかの日本人』(研文出版、1994)にも「井上翠と中国語辞典」の1章がある。この2つの記事は井上翠の生涯と中国語辞典編纂の経緯を紹介している。このように井上翠については様々な研究がなされているが、彼が編著した『支那語講座 時文編第二』と『東亜経済研究』についての言及がなく、直筆原稿である『日清語辞典』などについての研究も見当たらない。論文では、趙若冰の『「井上支那語辞典」基于「日華語学辞林」的詞条増補研究』(『外国語学研究』大東文化大学大学院外国語学研究科、201403)は、『井上支那語辞典』と『日華語学辞林』の成語と俗語の比較により、『井上支那語辞典』は『日華語学辞林』と比べて3倍の成語や2倍の俗語が収録されており、内容上口語の特色を持っている成語と俗語が増加していると結論した。本論文も同じくこの2点の辞典を取りあげるが、重点をr化語にしぼることにする。

5 近代日本における北京官話の発足

日本において、北京官話が中国語教育に登場した経緯は、中嶋幹起(1999)²³によれば次のようである。明治初期に教授された南京官話は江戸時代の唐通事に発した唐話を受け継いでいた。鎖国の続いた江戸時代、日本が海外に開放した窓口は長崎、対馬口、琉球口、松前口の4つがあった。このうち長崎は正規の開港地としてオランダと中国との交易が行われており、諸外国の文化の伝来する唯一の門戸であった。明治6年(1873)東京外国語学校が開校し、漢語学科が設立された。中国語教育が開始した時は、南京官話が中心で、教授陣も唐通事からなり、学生の多くも唐通事の後裔であった。ところが、中国で南京官話に代わり北京官話が重要になるような国情の変化に伴い、日本の中国語教育も南京官話から北京官話に転換した。一方、『日清修好条規』の締結以来、日本と中国との関係がいよいよ深まったため、日本においても北京官話の重要性が認識されだした。このような事情から、日本の南京官話という伝統的な教育は終焉に近づいていた。明治9年(1876)、日本の中国語教育は「北京官話」に転換した。

²¹ 『日漢辞彙』は1905年に石山福治により発行された日中辞典である。

²² 六角恒廣『漢語師家伝 中国語教育の先人たち』東方書店、1999年、p.224。

²³ 中嶋幹起『唐通事の担った初期中国語教育』(『東京外国語大学史』1999年。)

中国の官話が南京官話から北京官話に変わった経緯については、明朝から清朝までの歴史を振り返る必要がある。明朝の時、中国の都を南京に定めたが(1368)、永楽年間(1421年)北京に遷都した。この遷都に伴い、江淮出身の皇室・貴族、及び南京に集められていた江淮地方からの移住民は北上した。これによって、江淮方言を基礎とする南京語が「官話」の地位を得た²⁴。その後、清朝において満州族の「入関²⁵」により、北方方言が南京官話に大いに影響し、実際に、南京官話の地位が失墜し、代わりに、北京官話が通用語となった。

中国の北京官話の流通に応じて、日本においても、中国との関係がいよいよ深まる中で、北京官話の学習を余儀なくされることとなった。その上、1871年に日中両国が署名した『日清修好条規』が1873年に発効し、日本と中国の交流は頻繁になった。日本の中国語教育は南京官話から北京官話に転換せざるを得なくなった。かくして、明治9年(1876)に「北京官話」に転換した。同年の4月、旧東京外国語学校に新たに入学した20余名の生徒から北京官話の教育を始めた。唐通事の伝統的な南京官話を学習した生徒の大半は北京官話に移った。中国語の教員も北京に留学し、改めて北京語の学習に努めた²⁶。

中国語の学習書をみることにより、日本人が中国語に関心を持っていたことは明白である。当時、日清社²⁷の創設者である廣部精(1854-1909)は『亞細亞言語集 支那官話部』²⁸の序に、「夫言語者。宣我之意。而達之于彼也。凡在同國。猶必藉之以通其情。況異邦之人。苟不諳其語。則相對於木偶人。焉能通彼此之情哉。」²⁹と述べている。国と国との往来をなすにおいて、相手国の言葉を知ることが非常に肝要であるという意味である。

中国の北京で中国人学生の日本語教育に努めた服部宇之吉(1867-1939)は、1898年に『談論新篇』(全国璞・平岩道知、1900)に「東洋諸國の語又は露西亞西班牙等の語を能くする者は甚稀なり 是れ所謂情を通し信を堅くするに於て遺憾無きを得ざるのみならず 學術研究の上に於て亦一の欠点なり 幸に近時世上漸く此に注目するに至り」³⁰という序文を寄せた。中国語が交際でも學術でも必要なことなので、中国語教育の実現が非常に喜ばしいことであるとの気持ちを表している。

北京官話が日本人に受け入れられた際に、日本の学者は北京官話をどのように理解していたのだろうか。それは日本人が編著した北京官話の教科書の序文などから窺える。

²⁴ 黄笑山『「切韻」和中唐五代音位系統』(1991年廈門大学博士論文)文津出版社、1995年、p.9。

²⁵ 1644年に、山海関を経て北京を占領。

²⁶ 以上の記述は、中嶋幹起『唐通事の担った初期中国語教育』(『東京外国語大学史』1999年)を参考した。

²⁷ 明治10年(1875)に設立した中国語を教える私立学校である。

²⁸ トーマス・ウェード(Thomas Francis Wade)の『語言自遷集』を底本とし掲載した。

²⁹ 「言語とは、意思を宣伝し、相手に届けるものである。日本において、日本人の間さえ言語を用いて交流しているが、外国人を相手とすると言うまでもない。相手国の言語を分からなければ、木の人形しかない。両者の情報を支えるわけではないだろう。」筆者翻訳。廣部精『亞細亞言語集 支那官話部』巻一、1879年、p.1。

³⁰ 全国璞『北京官話 談論新篇』積嵐楼書屋藏版、1900年、p.1。(『中国語教科本類集成』第一集第四巻、p.2。)

たとえば、廣部精は『亞細亞言語集 支那官話部』³¹で中国語を次のように類型化している。本論文は統一的に現在日本で通用する日本字で書くが、引用の部分は原文のまま転写することにする。

支那言語。分爲四部。第一官話。第二南邊話。第三滿洲話。第四嶺南話。官話部分十類。曰六字話。曰散語。曰歐洲奇話。曰敘散語。曰常言。曰問答。曰談論篇。曰平仄編。曰言語例畧。曰東西事情³²。

『亞細亞言語集 支那官話部』の2年後に出版された『官話指南』の著者である吳啓泰、鄭永邦は北京語の官話を独立させ重要な位置において教えることを主張している。

京話有二，一爲俗話，一爲官話。其詞氣之不容相混，猶涇渭之不容並流，是編分門別類，令學者視之井井有條³³。

しかし、『日清會話辭典』³⁴で異なる観点が現れる。

北京語は一に之を官話とし名づけ清國上流士人の用語なれば他の地方語に比すれば古来の漢語を用ゆるを稍や多しご難も言文の間に甚しき差異を有する…

平生使用するところの俗語或は時文の用語を全く區別を爲せり故に北京語と云ひ或は官話と稱する…³⁵

すなわち、北京語を「官話」と呼び、「清国上流人士の用語」ではあるが、「俗語」の範囲に属するということである³⁶。北京官話と称されているものが、実に「官話」の位置に認められている北京語であったのは、当時の共通点であった。

また、足立忠八郎は『北京官話 支那語學捷徑』³⁷のなかで官話の使用される範囲を解説している。

³¹ 広部精編『亞細亞言語集 支那官話部』青山堂、1902年。本論文が利用したのは『中国語教本類集成』第一集第一巻に収録している影印本である。

³² 「支那語は、四部に分ける。第一は官話。第二は南方語。第三は満州語。第四は嶺南語。官話の部分は十類に分かれる。六字話。散語。欧米奇話。叙散語。常言。問答。談論篇。平仄編。言語例畧。東西事情。」筆者翻訳。『亞細亞言語集 支那官話部』の凡例（『中国語教本類集成』第一集第一巻、1991年、p.219。）

³³ 「京話は2つに分かれ、一つは俗語、一つは官話である。涇水と渭水が合流できないように、俗語と官話はその語とニュアンスが、混ぜ合わせてはいけない。学習者がはっきり見えるように分類するべきである。」筆者翻訳。吳啓泰、鄭永邦『官話指南』楊龍太郎、1881年。（六角恒廣編『中国語教本類集成』第一集第二巻、1991年、p.80。）

³⁴ 池田常太郎編『日清會話辭典』丸善、1905年。本論文が利用したのは波多野太郎編『中国語学資料彙刊』第4篇第3巻に収録している影印本である。

³⁵ 波多野太郎『中国語学資料彙刊』第4篇第3巻、1994年、p.136。

³⁶ 李无末『清末期の日本人学者による北京官話の声調認識—四種類の、日本人学者編集の中国語の辞書と教科書を手がかり—』（『日本文藝研究』関西学院大学 56（2）、20040910）にも述べている。

³⁷ 足立忠八郎『北京官話 支那語學捷徑』金刺芳流堂、1903年。本論文が利用したのは六角恒廣編『中国語

元来支那ニハ北京官話ノ外尚ホ南京官話ナルモノアリ 即チ南京ノ言語ニシテ上流ニ用イラル、コト北京官話ノ如シ 然レドモ其範圍僅カニ南京附近ニ止マリ 全國ニ應用スル能ハザルナリ³⁸

西島良爾は『清語教科書』³⁹の第一章に「官話ノ性質」を特別に説明しており、官話といっても風土によって異なると指摘している。

支那大陸ニ於テ言語種類ノ複雑ナル 各省至ル所特種ノ言語ヲ有シ 南北其字音ヲ異ニスト雖 今日清國ノ語言トシテ之ヲ研究スルトコロノ官話ハ南北官話ノ二種ニ大別ス 而シテ南北官話ハ其組織字音等略ボ同一ニシテ 只風土ノ變自ヲ其發音ニ差異ヲ生ジタルモノナレバ 學者既ニ其根本ヲ了得スルニ於テハ之ヲ推考スルニ難カラザルナリ⁴⁰

以上のように、日本人学者は北京官話の重要性に対する自身なりの認識を持っている。北京官話を採用しようとする決心をしても、突然の切り替えの中、北京官話のできる日本人が全国にいなかったことが問題となり、これに対して、日本は中国から官話教師を招聘すると同時に、官話学習のために中国へ中国語教員を派遣する方法を採用した。この政策で、中国人教習として薛乃良が1876年、東京外国語学校の北京官話の教師として着任した。当時、北京官話を知っていたのは、薛乃良以外に日本にはいなかったともいわれる⁴¹。

一方、1895年に、北京公使館は日本の外務省に通訳の派遣を要請し、1896年に中田敬義が選ばれ、ほかの二人と共に通弁見習として北京官話を習得するために北京に行った。北京滞在中、中田は北京官話のいくつかの本の執筆に取りかかった。そして、1901年に帰国した。彼も中国への留学生の派遣を制度化する必要を感じ、関係する部署に意見を述べて廻った⁴²。その後も、次々と日本人が中国に留学し、滞在中に中国を見学し、調査した。彼らが中国本土で学んだ言語だけではなく、経験したことも後日編纂された中国語学習書の内容に収録されている。

たとえば、宮島大八（1867-1943）は日本で中国語を学んだのち、1887年から7年にわたって中国留学をした⁴³。帰国後の1895年に詠帰舎⁴⁴を開き、1897年の『官話輯要』

教本類集成』第一集第四巻に収録している影印本である。

³⁸ 六角恒廣編『中国語教本類集成』、不二出版、第一集第四巻、1991年、p.377。

³⁹ 西島良爾『清語教科書』大阪清語学校蔵版、1902年、p.1。本論文が利用したのは山口大学図書館の所蔵している1902年版である。

⁴⁰ 西島良爾『清語教科書』大阪清語学校蔵版、1902年、p.1。

⁴¹ 六角恒廣『中国語学習余聞』同学社、1998年、pp.216-217。

⁴² 六角恒廣『漢語師家伝 中国語教育の先人たち』東方書店、1999年、p.94・95・107・109。

⁴³ 宮島大八は父の友人である清国公使黎庶昌の紹介を得て、保定の蓮池書院の山長（学長）張廉卿の門に入

をはじめ6冊の中国語学習書⁴⁵を編纂した。『官話篇』は内容からして、宮島が清国留学中に見聞したものがもりこまれているものと考えられる⁴⁶。

留学以外の目的で中国に滞在し、その期間に中国語の材料を蒐集した状況もある。「辞書編纂をライフワークとした」と言われる井上翠は1907年から1911年まで京師法政学堂で日本人教習として、中国の生徒に日本語などを教えていた⁴⁷。井上は中国にいる間に『日華辞典』の材料蒐集と並行して中国語辞典の材料を集めていた⁴⁸。

福島安正（1852-1919）は参謀本部将校であり、1882年、上海から山東各地を視察、翌年陸軍大尉に昇進し、北京公使館附武官となり、1884年に帰国するまでの間に『四聲聯珠』を作った。その内容は俗事、風俗、官衙などの雑事で福島が口伝し、中国人の教師が協力して筆記したと推察される⁴⁹。

以上のように、国家間の往来交流において、双方で言語が通じることの必要性を認識したことにより、日本人は中国語の教育を開始した。教育した中国語は中国の状況に応じて南京官話から北京官話に転換した。そのため、日本人は北京官話を習得するために中国に留学し、或は仕事に携わる傍ら北京官話を学習し、一方で、積極的に中国現地の資料を収集し、中国人の協力を得て教科書や辞典の編纂に励んだ。

った。(安藤彦太郎『日本人の中国観』勁草書房、1971年、p.176。)

⁴⁴ 中国語を教える学校、後に善隣書院と改称。

⁴⁵ 明治30年『官話輯要』(哲学書院)、明治33年『支那語独習書』(善隣書院)、明治36年『官話篇』(善隣書院)、明治37年『官話急就篇』(善隣書院)、大正6年『支那官話字典』(善隣書院)、大正10年『支那語会話篇』(善隣書院)(六角恒廣編『中国語関係書目』による。)

⁴⁶ 六角恒廣『漢語師家伝 中国語教育の先人たち』東方書店、1999年、p.212。

⁴⁷ 六角恒廣『漢語師家伝 中国語教育の先人たち』東方書店、1999年、p.242・254。

⁴⁸ 井上翠『井上日華辞典』文求堂、1931年、pp.238-260。

⁴⁹ 『四聲聯珠』pp.48-49(六角恒廣編『中国語教本類集成』第一集第三巻、1991年。)

第1章 近代日本における北京官話教科書

北京官話教育の誕生に伴って、北京官話の教科書は差し迫って必要となり、さまざまな著者によって、つぎつぎと教科書が出版されるようになった。大量な教科書は初級の会話書を主としていた。中国語の授業は、先生に就いて朗々と読み上げ暗唱する形式のものである。現在、多数の教科書が大事にされ収集・収蔵されている。この時代の教科書は、歴史背景と内容を論拠とし、「実用主義」、「会話主義」などの性格を持つとされたとあいまって、近代日本で教育していた北京官話の性格の一端として「軍事用語」説もかなり指摘されることがある。教科書の会話の内容はあらゆる分野にわたっているが、現代ではあまり見られない軍事に関わる会話が含まれている。

本章では、近代日本の日本人編纂の北京官話教科書について、先行研究が取り扱っていないものを補充するとともに、教科書からみた「軍事語学」の性格を論証する。次に、数多くの北京官話教科書の著者である西島良爾について、著作と中国語観の方面から探る。

1.1 近代における北京官話教科書

1.1.1 近代における北京官話教科書の概況と書目の補充

近代日本に導入された最初の教科書は、イギリスの駐清公使トーマス・ウェード (Thomas Francis Wade 1818-1895) の著になる会話書『語言自邇集』(1867)で、これは珍重された。日本人の手に成る最初の教科書は『官話指南』(1881)で、これは『語言自邇集』に基づいて改良を加え、「散語」「問答」「談論」の3部分から構成されたものである。その後の教科書はだいたい『官話指南』を踏襲して、簡単な単語からやや複雑な会話へと順を追っていくようになった。会話ではあるが、前後の脈絡がなく暗記するために排列してあるため、なおさら文法的な配慮は必要なかった。

六角恒廣の『近代日本の中国語教育』、『中国語教育史稿』などの著書は、この領域の基礎を固めると評価されている。近代日本における中国語教科書の研究は、六角以来豊富にある。『中国語関係書目』は近現代の日本の中国語関係書目を殆ど漏らさずに網羅している。『中国語教育史稿』にある福島安正の『四声聯珠』の考察のように、ある教科書の検討も見られる。六角の研究によって、近代日本の中国語関係の教科書は「教える」という視点から見ると、日常会話、商業関係を問わず、やはり交流できるような会話を習得させることを主眼としている。一般の教科書と専門的な文法書には大差はなく、単語、文型の学習項目(或は文法)、会話から構成されたものが多い。

六角恒廣の『中国語関係書目』には、近代（1867-1945）日本の中国語関係書計 1,474 冊が集録されている。その中に「山口高等商業学校図書館『東亜関係図書目録』所載」と記されているものがあるが、筆者は山口大学の図書館に所蔵されている中国語教科書に関係する原本を整理した際に、『中国語関係書目』に収録されていない本をみつけた。そこでそれらを発行年順に表 1.1 に表した。なお、3 番目の書物と台湾語の 1 冊は国立国会図書館でみつけたものである。

表 1.1 近代日本における中国語関係書目の補充（明：明治、大：大正、昭：昭和）

	書名	編・著者	出版社	出版年	元号
1	北京官話土商叢談便覽下巻	金国璞 著	東京：文求堂書店	1882	明 15
2	増訂亞細亞言語集	広部精 編	東京：青山堂	1902	明 35
3	満洲語会話一ヶ月卒業	西島良爾 著	大阪：石塚猪男蔵	1904	明 37
4	支那語の訳方	佐藤留雄 著	大阪：同文社	1922	大 11
5	中華民国国語集 巻一	趙仲仁 著	東京：文求堂	1925	大 14
6	中華交際会話	白廷蕢・白廷藝 合著	東京：大阪屋号書店	1936	昭 11
7	初級支那時文講義	清水元助 著	東京：外語学院出版部	1936	昭 11
8	簡易支那語会話	土屋明治・土屋 申一 合著	東京：弘道館	1938	昭 13
9	支那語法入門	倉石武四郎 著	東京：弘文堂書店	1939	昭 14
10	漢字の学び方教え方	後藤太郎 著	東京：丸井書店	1940	昭 15
11	簡易日支交通会話	田中慶太郎 編	東京：文求堂	1940	昭 15

台湾語関係書目

1	独習自在 台湾語全集	木原千楯編	松村九兵衛	1896	明 29
---	------------	-------	-------	------	------

所載の近代の書に上の 12 冊を加えると、近代における中国語関係の書目の総数は 1,486 冊となる。また、『中国語関係書目』（p. 26）は『清語会話』が明治 45 年に発行され、出版社が不明と記しているが、筆者は明治 42 年に東亜学会から発行した版本をみつけた。

年ごとの発行数を表 1.2 に示す。これは最終的な数ではなく、今後増加する可能性もある。

表 1.2 近代日本の中国語関係書目の年次発行数 (明：明治、大：大正、昭：昭和)

年	発行数	年	発行数	年	発行数	年	発行数	年	発行数
1867	3	明 16	0	明 32	9	大 4	18	昭 6	27
明 1	0	明 17	0	明 33	11	大 5	18	昭 7	52
明 2	1	明 18	1	明 34	12	大 6	9	昭 8	41
明 3	0	明 19	2	明 35	21	大 7	10	昭 9	44
明 4	0	明 20	2	明 36	14	大 8	14	昭 10	48
明 5	0	明 21	1	明 37	53	大 9	15	昭 11	51
明 6	0	明 22	1	明 38	46	大 10	22	昭 12	50
明 7	0	明 23	2	明 39	33	大 11	30	昭 13	90
明 8	0	明 24	0	明 40	21	大 12	21	昭 14	129
明 9	0	明 25	4	明 41	12	大 13	27	昭 15	91
明 10	2	明 26	1	明 42	7	大 14	24	昭 16	74
明 11	0	明 27	9	明 43	6	昭 1	24	昭 17	68
明 12	2	明 28	17	明 44	9	昭 2	22	昭 18	32
明 13	5	明 29	12	大 1	3	昭 3	18	昭 19	18
明 14	0	明 30	5	大 2	10	昭 4	16	昭 20	5
明 15	1	明 31	7	大 3	13	昭 5	20		

1.1.2 北京官話教科書の性格の一端—戦争語学

日本の北京官話教科書の性格については多数の論説が見られるが、「実用主義」の方針を貫いている「実用語学」との評価が一般的である。文化的背景を無視し、語学の検討を軽視し、実用語学を中心とするような特殊な語学教育は何に起因するのか。突き詰めて考えれば、政治、経済のほか、軍事もその一つと思われる。

戦争期という背景の下に、近代日本人に教授された中国語は「戦争用語」として位置づけられることがある。南京語から北京語への転換は、日本と中国が 1873 年 4 月に正式に外交関係を樹立して以後、通訳の養成を目的とする以外に、軍事紛争の必要に応える目的もあった。1871 年に台湾に上陸した琉球民が高山族に殺されたことを口実に、日本は 1874 年 5 月に台湾へ出兵したが、この時日本の外務省は中国政府と交渉するため北京官話の通訳を緊急に必要とした。

その後 1894 年頃までのごく短い期間に、日本人の中国に対する軍事的意図は強くなった。戦争の影響力は格段に大きく、北京官話の教科書からも捕捉しやすかった。例えば『華語跬歩』(1890)には、軍事や戦争に関係する単語や会話は全くみられない。しかし、

時代が進むにつれ、日本は中国に対して経済進出をし、戦争を起こして、次第に侵略的政策を打ち出していった。このような日本の対外拡張を反映して、日本人の中国観も次第に変化し、中国語教育も対外拡張のための教育に変わっていった。そして、1900年前後から、その後の1945年まで、対外拡張タイプの中国語教育の基礎が形成された⁵⁰。「対外拡張タイプ」というより、「軍事的性格」と言う方が実情に即しているだろう。

六角恒廣は『近代日本の中国語教育』で「日清戦争と中国語教育」の一節を立て、日清戦争という時局を反映して、当時各地に中国語学習熱がさかんになった上に、陸軍から中国語の小本もだされた。このような事実をみて、中国語には戦争語学という非文化の最極限を見出すことができる、と論じた⁵¹。

現時点まで、軍事目的の元での北京官話の性格について分析したものは少ないため、ここでは六角恒廣の「戦争語学」を借用して、教科書の発行数や内容から以下の6つの視点からみてみることにする。

(1) 軍事情勢と出版数の連動

初めに、近代日本における中国語関係のすべての書籍の出版数の年毎の推移を、図1で確認しておこう。

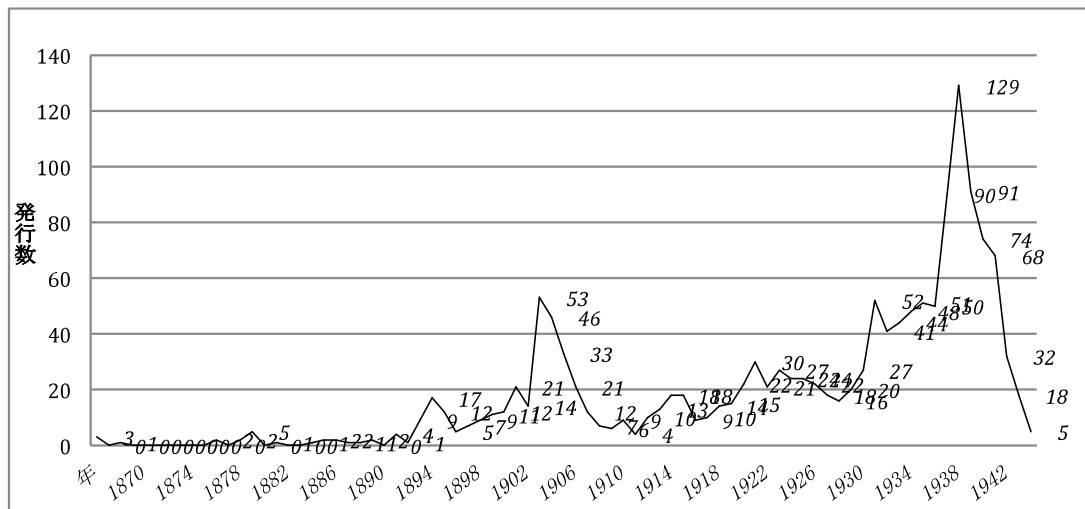


図 1.1 近代における中国語学習書の発行数

図 1.1 をみると、出版数の多寡がはっきりとわかる。その背後には様々な原因が絡み合っていたが、根底にある要素は軍事、すなわち戦争であると思われる。以下に年代順に詳しくみてみよう。

⁵⁰ 六角恒廣「日本における中国語教育の歴史的な性格」(『中国語教育史論考』不二出版、1989年、p. 75。)

⁵¹ 六角恒廣『近代日本の中国語教育』不二出版、1984年、pp. 79-82。

第1回の小高潮は1895、1896年ごろである。これは、1894年7月から1895年3月にかけて、主に朝鮮半島をめぐる日清戦争⁵²に刺激されたものである。日・清・韓の3国の言語を対照する形の教科書『日清韓三国会話』⁵³はこの時、1894年に出版された。六角は「明治20年代の終わりごろには日清戦争がおり、その後の日本と中国との関係を決定づける方向がさだめられた感がする。そうしたなかで、日本における中国語ないし中国語教育の意義づけもしだいに決定されていった。」⁵⁴と語っている。

第2回の高潮は、1904年・1905年・1906年である。1904年から1905年に日本とロシアとの間に、朝鮮半島とロシア勢力下の中国の満州南部と、日本海を主戦場として「日露戦争」が戦われた。この2年間で100点が発行された。これらの中には、軍用会話など臨時的なパンフレットのような綴本が22種含まれている⁵⁵。また、『日露清韓会話自在』⁵⁶や『日清露会話』⁵⁷など、ロシア語も入れた中国語或は韓国語を対照する教科書も出現した。

1906年以後も数は多くはないが出版され、1914年からふたたび増加し、1916年ごろに小高潮に達する。1914年から1918年は、日本は第一次世界大戦でドイツ帝国の権益であった山東省を攻略し、ドイツの権益をすべて日本が引き継ぐこととなった時期である。

1921年から1930年までは漸増している。日本はこの間、たびたび山東省済南市に進軍した。その後、中国への関心は徐々に強くなった。1931年に新しい急増がみえる。この年、「満州事変」が起こり、日本は中国満州（中国東北部）の全土を占領した。

その後、1937年から突発的に増加し、1939年にピークに達した。これは最大のブームであり、「満州事変」から「支那事変」にかけて、「大陸進出」が企てられた時代に当たる。1937年に日中戦争が勃発して以降、日本は1945年まで全面的に中国に進軍したが、1941年12月の対米英蘭の太平洋戦争開戦に伴い中国から対英米戦までを大東亜戦争とした。このように、戦争によって中国語への関心の増減を招いていることになる。それゆえ、教科書は1941年から激減し、1945年ごろ5冊しかみえなくなった。

以上のように、「戦争語学」とも言われる中国語の教科書は、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦と戦争のたびごとに出版数が増加した。

(2) 台湾語教科書の登場

近代日本において110冊の台湾語の教科書が出版されたことにも注目したい。その理由を探るまえに、台湾語教科書の年次出版数を、図1.2から確認しておこう。

⁵² 日清戦争は中国では「中日甲午戦争」と呼ぶ。

⁵³ 坂井釦五郎『日清韓三国会話』松榮堂、1894年。

⁵⁴ 六角恒廣『近代日本の中国語教育』不二出版、1984年、p. 74。

⁵⁵ 陳明娥『日本明治時期北京官話課本詞彙研究』厦門出版社、2014年、p. 213。

⁵⁶ 通文書院『日露清韓会話自在』玄牝洞、1904年。

⁵⁷ 粕谷元・平井平三『日清露会話』文星堂、1904年。

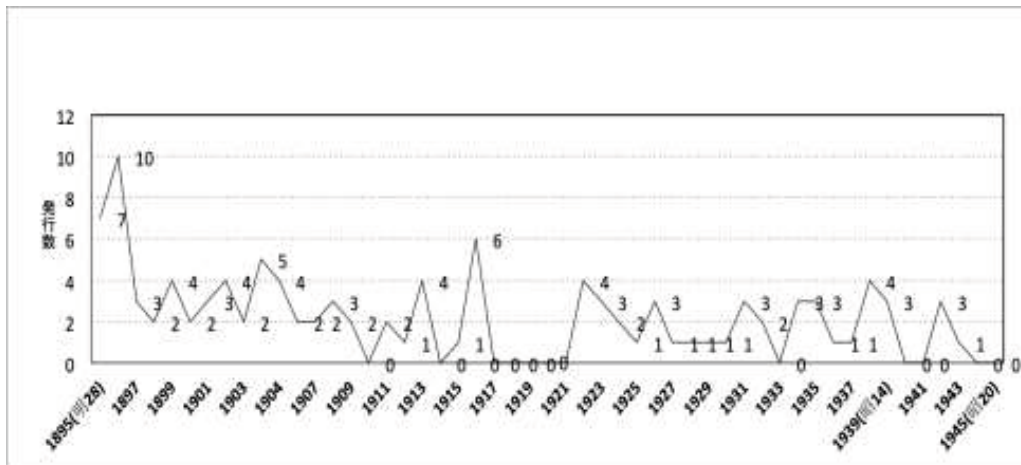


図 1.2 近代日本における台湾語学習書の発行数

台湾語学習書は、1894、1895年に『台湾語集』を始め教科書が登場した。この2年間に、資料をみる限りでは、『台湾語集』、『台湾言語集』、『台湾地誌及言語集』など17冊⁵⁸がある。台湾語学習書が出現した理由は、日清戦争の勝利によって、日本は台湾を植民地として領有したからである。以後半世紀余りにわたる台湾に対する植民地支配が開始された。初期の20年間に、公学校と国語学校において日本語を「国語」⁵⁹として教育したことによって、日本語は一部の台湾人に習得された。しかし、社会一般や家庭内では依然として台湾語を使用していた⁶⁰。この時期、日本では外海領土であった台湾の開発に携わる人材がまず必要とされたため、当時の中国大陸で使用されるのとは異なる台湾語が必要となった。

『台湾語集』の序文に「本篇は固より速成的に臺灣の日用土語を學はんと欲する者の一助に供せるに過ぎず」とあり、また『台湾語全集：独習自在』の自序に「明治二十七八年之役に臺灣島我新版圖に歸す……於是乎臺灣島土語之必要は乾土に水を望むが如く然り……本書を編纂……」とあるように、編集の目的をはっきり記している。そして、『台湾土語』の「自序」の「新領地ニ日本人ノ霹靂手腕ヲ揮ハント欲セバ先ズ其第一ノ

⁵⁸ ①『台湾語集』 俣野保和、明治28年。 ②『台湾言語集』 岩永六一、明治28年。
 ③『台湾地誌及言語集』 岩永六一、明治28年。 ④『台湾会話篇』 坂井鈞五郎・岩永六一、明治28年。
 ⑤『台湾土語』 佐野直紀、明治28年。 ⑥『台湾語』 田内八百九万、明治28年。
 ⑦『台湾土語』 台南民政支部通訳官、明治28年。 ⑧『台湾土語全書』 田部七郎・蔡章機、明治29年。
 ⑨『日台会話大全』 水上梅彦、明治29年。 ⑩『警務必携 台湾散語集』 御幡雅文、明治29年。
 ⑪『実用 日台新語集』 秋山啓之、明治29年。
 ⑫『台湾十五音及字母表 附八声符号』 台湾総督府学務科、明治29年。
 ⑬『台湾十五音及字母表詳解 附八声符号』 台湾総督府学務科、明治29年。
 ⑭『台湾適用 会話入門』 台湾総督府学務科、明治29年。
 ⑮『台湾会話篇』 辻清蔵・三矢重松、明治29-33年の間。
 ⑯『独習自在 台湾語全集』 木原千楯、明治29年。 ⑰『独習自在 台湾語全集』 木原千楯、明治29年。

⁵⁹ 植民地である台湾に日本語を強制的に学習させる政策である。

⁶⁰ 王秋陽『日本統治前期の台湾における「国語」教育に関する研究』山口大学博士論文、2012年。

利器トシテ土語ヲ研究スベシ…論者ガ云フ如ク臺灣語ヲシテ日本化セシメント欲スルノ上ニ於テモ亦極メテ必要ナリ…」では更に台湾語を日本化するという植民政策を明言し、教科書の軍事政策の緊密な関係は一目瞭然である。

1894年から1945年まで、植民地の台湾語の教育は途切れることなく行われていた。ところが、台湾語学習書が発行されなかった時期がある。つまり1917年から1921年のごく短期間である。これは、恐らく第一次世界大戦の影響で、植民地である台湾に対しての同化政策を厳しく推進し、台湾側でもその方針が確認されて、日本語教育を集中的に行っていたからであろう。その後再び、台湾語学習書が発行されるようになった⁶¹。

ここで注意すべきことは、「台湾語」という呼称である。これは一般的な方言とは意味が違い、植民地で行われる言語に対する日本人の特別な扱い方からきたいまわしと考えられる。このことは、後の1932年になって、いわゆる「満州国」なるものができること、その地方で話される中国語を、とくに「満州国語」、はなはだしきは「満州語⁶²」と呼んだのと似ている⁶³。

(3) 軍事用語を書名に含む

軍事に関することばを中国語学習書に冠したものは1984年に初出し、1945年まで断続的に見られる。図1.3は軍事用語を冠した書名の学習書の年次発行数である。

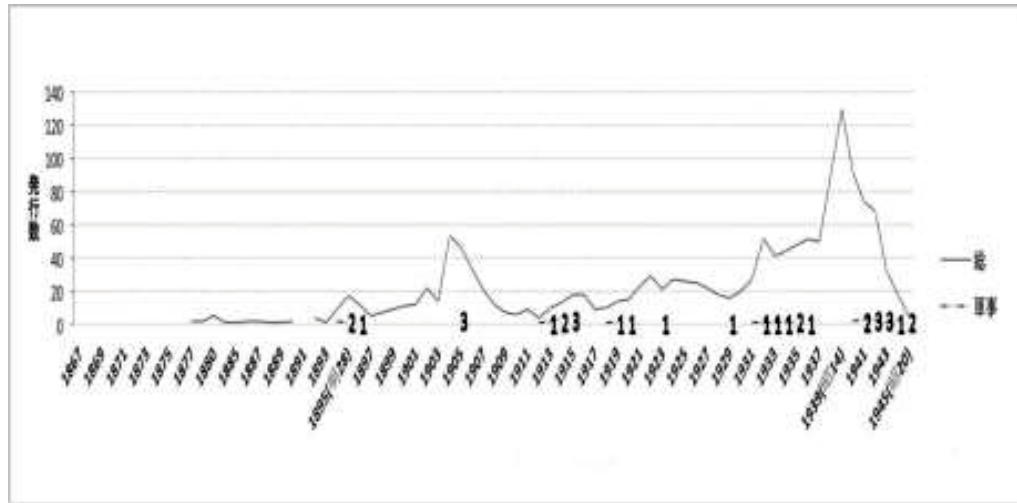


図 1.3 近代日本の軍事用語を冠した中国語学習書の年次発行数

軍事に関係する語が書名に入っている教科書の出版数は、先にみた図1.1の中国語学習書の出版数と一致している。日本が戦争の道を進むとともに、軍事用語を書名に含んだ語学書が多く出版されるようになった。最初期のものをいくつか表1.3に示した。

⁶¹ 六角恒廣『近代日本の中国語教育』不二出版、1984年、p. 178。

⁶² 本来の満洲語は満州族の言葉で、中国語とは全く別の言語である。

⁶³ 六角恒廣『近代日本の中国語教育』不二出版、1984年、p. 175。

表 1.3 明治期の軍事用語を書名に含む学習書

『兵用 支那語』	近衛歩兵第1旅団	明治27年	東邦書院
『筆談自在 軍用日清会話』	鈴木道宇	明治28年	山中勘次郎
『軍用商業会話自在 支那語独案内』	星文山人	明治28年	柏原政次郎
『警務必携 台湾散語集』	御幡雅文	明治29年	台湾総督府民政局
『軍人用台湾語』	俣野和吉	明治30年	軍事教育館
『軍隊主要 日台会話』	前田鉄之助	明治33年	博文堂（台北）
『支那語速成 兵事会話』	善隣書院	明治37年	
『北清通話 兵時会話』	善隣書院	明治37年	
『清国時文 兵時告示文範』	善隣書院	明治37年	文求堂
『警察会話篇』	台湾総督府警察官	明治37年	

これらの原本を調べると、軍などの語で名づけられていても、軍事用の専門的な学習書とは限らない。とにかく、当時の中国語は実用性や会話にこだわり、編集のスタイルも内容も実用を重視しており、軍事用語と会話を独立させて章を設け、他の内容は普通の教科書と同様に編纂し、全体の構成は整備されているといえる。例として、明治28年に出版された『筆談自在 軍用日清会話』の目次を表1.4に示した。これをみると、一般的な教科書と大差がないことがわかる。

表 1.4 『筆談自在 軍用日清会話』の目次

第一編 単語部	第一章	人類	第二章	軍事用語	第三章	舗店類
	第四章	房屋類	第五章	天文類	第六章	地理類
	第七章	身体類	第八章	数目類	第九章	貨幣類
	第十章	時令類	第十一章	斤数	第十二章	里程類
	第十三章	尺度類	第十四章	量目	第十五章	穀類
	第十六章	飲食類	第十七章	野菜類	第十八章	草物類
	第十九章	草木類	第二十章	鳥類	第廿一章	獸類
	第廿二章	魚類	第廿三章	虫類	第廿四章	文具類
	第廿五章	衣類	第廿六章	日用品		
	第二編 会話部	第一章	軍事会話 歩哨用語 小哨及ビ查所用語 尋問用語 給養軍曹用語 炊事軍曹用語			
第二章		雑用語 興地名 直隸省有名地 山東省有名地 有名山川				

軍事の語が書名に冠されたのは、軍事行動の緊迫性に刺激され、その需要に早急に応え、本来の軍用語を含まないものと分別しやすくしたためだと考えられる。この種類の学習書の特徴は、軍用語を含むほかに、中に中国の交通情報、地図などが載せられていることである。戦争のために必要なさまざまな情報を収集し、教科書によって伝播するという意図が、本来教育を目的とすべき教科書に浸透している。

清國要所各地里程表

○ 從天津至德州

○ 從天津至青洲

○ 從烟台至北京

○ 從烟台至濟寧

○ 從烟台至青島

○ 從烟台至煙台

○ 從烟台至威海衛

○ 從烟台至龍口

○ 從烟台至濰縣

○ 從烟台至博山

○ 從烟台至淄川

○ 從烟台至沂水

○ 從烟台至莒州

○ 從烟台至臨沂

○ 從烟台至徐州

○ 從烟台至開封

○ 從烟台至鄭州

○ 從烟台至洛陽

○ 從烟台至西安

○ 從烟台至長安

○ 從烟台至咸陽

○ 從烟台至西平

○ 從烟台至漢口

○ 從烟台至沙市

○ 從烟台至宜昌

○ 從烟台至重慶

○ 從烟台至成都

○ 從烟台至昆明

○ 從烟台至貴陽

○ 從烟台至蘭州

○ 從烟台至西寧

○ 從烟台至拉薩

○ 從烟台至北京

○ 從天津至北京

○ 從天津至保定

○ 從天津至石家莊

○ 從天津至張家口

○ 從天津至歸綏

○ 從天津至包頭

○ 從天津至太原

○ 從天津至西安

○ 從天津至長沙

○ 從天津至重慶

○ 從天津至成都

○ 從天津至昆明

○ 從天津至貴陽

○ 從天津至蘭州

○ 從天津至西寧

○ 從天津至拉薩

複写資料 1.1 『筆談自在 軍用日清会話』中の実測里程表



複写資料 1.2 『兵事会話 清語速習』中の中国東北地区と朝鮮の地図

(4) 著者・編者・出版社の軍事関係者と軍事部門

近代日本における中国語の学習書の著者には軍事に携わる者が多い。例えば、福島安正（1852-1919）は参謀本部将校であり、1882年から、戦争を準備するために上海から山東省各地を視察し情報を収集した。翌年大尉と北京公使館附武官となり、1884年帰国するまでの間に中国人の教師と協力して『四聲聯珠』を作った⁶⁴。日清戦争と日露戦争に通訳として従軍した人たち、例えば、青木喬は『支那時文類編』（1918）、『現代支那尺牘教科書』（1924）を著し、甲斐靖は『北京官話日清会話捷徑』（1906）と『独習速成日支単語と会話』（1932）を著し、西島良爾は『清語会話案内』（1900）など20点の中国語学習書を著し、牧相愛は『燕語啓蒙』（1899）などを著した。

西島良爾は『満洲語会話一ヶ月卒業』の凡例に、「編者先き日清戦争に通訳として従軍し普く戦地を経由し来り多少の経験あり此次又同地を職務とし其語を必要とす」と編纂の背景を説明している。また、西島が編著した『清語会話案内』はほとんど『華語跬歩』を踏襲し、下巻に戦争の背景と自身の経歴による「軍事」と「法律」用語を添加した。

『満韓土語案内』の著者の平山治久は陸軍歩兵大尉で、「序文」に「本書ハ満洲土語ヲ以テ成リ。本書ハ主トシテ満韓ニ於ケル軍隊行動ノ使ニ資センガ爲メ特ニ軍事的着眼ヲ以テ編纂セリ、故ニ其目的ニ合スルモノト誤ムル言語ノミヲ蒐集連結シ」と記し、軍隊行動において使用された資料を蒐集し、本書を著したことがわかる。

出版社や編者には陸軍文庫、近衛歩兵第1旅団、軍事教育館など軍事と関係する部門が多く存在する。軍事部分が直接に学習書の編纂に参加したのは、近代にしかみられない現象である。

(5) 総合的教科書の中の軍用語

それでは、教科書には軍事と関わる言葉を収録するのは普通であるが、軍用教科書はいうまでもなく、総合的教科書には軍事と関わる内容も多い。例えば、『満洲語⁶⁵会話一ヶ月卒業』に載っている職業を表す62個の呼称のうちには33個の軍事語がある⁶⁶。

『清語正語』⁶⁷に40個の「軍用語」が収録されている。一方、時代に伴い軍事関係の用語にもいろいろな新しい語が生まれ、『日華會話筌要』⁶⁸には「宣战书宣戦佈告」「停战

⁶⁴ 『四聲聯珠』 pp. 48-49。（六角恒廣編『中国語教本類集成』第一集第三卷、1991年。）

⁶⁵ 19世紀の日本では満洲、満洲国とは中国東北の地域をさし、民族は「満洲族」と呼ぶようになった。しかし、ここで「満洲語」とは中国東北地方の言葉ではなく、広義で中国語を指している。

⁶⁶ 『満洲語会話一ヶ月卒業』にある職業を表す62個の呼称は以下の通りで、33個の軍事と関わる語に下線を引いて示す。

皇上 王爺 中堂 大人 大老爺 太爺 軍國長 大將 師團長 中將 旅團長 少將 聯隊長 大佐
中佐 大隊長 少佐 中隊長 大尉 小隊長 中尉 分隊長 軍曹 伍長 經理部 衛生部 上等兵
一等兵 二等兵 歩兵 騎兵 馬隊 砲隊 糧食隊 第四師團歩兵第八 聯隊長 本部 司令部
民政廳司令官 翻譯官 通官 東家 房東 店東 趕車的 車夫 馬夫 賣菜的 木匠 鐵匠 看家的
剃頭的 跟班的 買賣人 跑信的 大夫 探子 帶道的 老板 廚子 挑水的 鐘表匠

⁶⁷ 清語学堂速成科『清語正語』1906年。

⁶⁸ 平岩道知『日華會話筌要』岡崎屋書店、1929年。

休戦」「通報 通牒」など 50 個余りの新語が出ている⁶⁹。会話の部分では、「行軍・宿營・運輸・警戒・詢問・慰撫」などを主なテーマとしている。

また、同時期の教科書には他の教科書と重なる内容が多く見られる。たとえば、筆者は表 1.5 に示したように、「日露戦争」期の 3 点の教科書の中に同じテーマの会話を発見した。

表 1.5 教科書中の同テーマの会話

『満洲語会話一ヶ月卒業』 (1904)	『兵事会話 清語速習』(1904)	『満韓土語案』 (1904)	大意の訳文(『満洲語会話一ヶ月卒業』より、筆者訳)
你老、我們日本兵今兒下半天來這村莊裡過一夜、你的屋子的二三間也要借用好麼 還是我們兵有規矩 老人家女孩都在家好了沒有嗜怕的事不是那個俄國的不規矩	今兒晚上我們都在這兒住 你們騰幾間房子讓我們住 你們一家子的人都到後頭屋裏去住 娘兒們都在後頭院子裏住罷 我們決不能扰你們	なし	私たちはあなた達農民のお宅を借りて泊まりたいが、老人、婦人と子供は家に残っても大丈夫です。私たち日本兵はロシア兵ではなくて、決して悪いことをしないから、安心してください。
俄羅斯兵在那兒麼	你們那兒有俄國兵沒有 他們是馬隊啊是步隊呢	俄國兵這場來過么 甚么樣的兵來么 步隊來馬隊也來	ロシアの兵隊は来たか?
還是我們兵有規矩、不是那個俄國的不規矩	你們不是我的仇敵 我們是替你們打俄國來的 我們既來了你們只可放心了	我的兵軍令最嚴不能搶奪爾們放心罷 俄國兵來行惡鄉民受苦了	私たちの兵はロシアの兵隊のように悪いことをしない。

これをみると、戦争で日本とロシアとの間の奪い合いが反映され、日本側は日本にまったく悪意がないことを宣伝していることがわかる。ここから、学習書を借りてのプロパガンダの意図が窺える。

⁶⁹ 陳明娥『日本明治時期北京官話課本詞彙研究』厦門大学出版社、2014年、p. 242。

(6) 教科書の序文からみた「軍事語学」

ここでは、近代において日本で発行された中国語教科書の序文の中から、中国語が「軍事語学」と関わる内容を見る。

日露啓釁、旗鼓滿州關東之野相見ゆ、戦時戦後に於ける支那語研究の必要は須臾も忽がせにすべからざるものあり。清語學堂茲に見あり、率先して速成科を創じめ、以て聊か蹇蹇の節を効して軍國の急需に應ぜむとす。

『清語正規』(文求堂、明 39.4) 青柳篤恒 序

近来時勢の發展により支那語の研究者が大いに其数を増加し来たので支那語の書物…

『初歩支那語独修書』(原口新吉、明 38・39)

噫吾人々東大陸の形勢如何を思へば實に後程悠遠の職責あるを忘る可らざるなり。戦敗の支那帝國

『支那語学速修案内：日英対照』(川辺紫石、明 28)

今や東洋の平和を擾乱し、延いて列強の利権を侵迫し、以て自國の利を貪らんとする北狄の魯國に膺懲を加ふるに際し、出征諸士は無論商工業家の利便に資せんことを欲し、自から揣らず、本書を公にするに至れり。

『日清会話独習』(山岸辰蔵、明 37.7)

…日清役終り告ルニ及ビ我忠勇ナル將卒ノ熱血ヲ流セシ遼東半島ヲ三國干涉ノ下ニ還附セシメ舌端末ダ乾カザルニ白カヲ畧取シ顧ミル所ナク……今回日露鋒ヲ交フルニ至リ 我ハ攻レバ必ズ取ルノ勢ヲ以テ連戦連捷最早彼ヲ「ハルビン」ヨリ驅逐セントスル時ニ至リ米國大統領ノ仲裁ニヨリ媾和申込ヲナセリ我ハ情義ニ依リ米國ノ言ヲ諾シ米國首都ニ於テ會議ノ結果平和克復シタレバ是ヨリ我同胞渡清踵ヲ接スルモノ日ニ月ニ幾何アルヤ答ニ苦シム可シ其時ニ至リ尤モ先務タルハ該國ノ語ニ通ズルニアリ故ニ余感ズル所アリ故山茅屋ヲ去テ神戸ニ来リ專ヲ初學者ノ便ヲ量ルガ爲メニ支那語ノ會話書ノ稿ヲ起ス名ヲ清語新會話ト名ヅク

『清語新会話』(山崎久太郎、明 39.2)

以上のように、多数の教科書、とくに戦争前期と戦中期に出版された教科書の序文で、戦争に言及している。戦争と中国語の直接の関係は明言されていないが、戦争の主因、そして、戦争後の交際の為に中国語が必要となると読める。

一方で、中国語の学術的な研究が必要であると主張した論もある。

近来我が國に支那語の研究が盛んに起つてきたのは東洋語研究上注目すべき現象である。けれども翻つて考ふるに今日の所謂支那語研究は單に實用の側のみに止まって居て其れ以上には一步も進んで居ない…

併し支那語の眞の研究は單に實用の側を觀る丈けては未だ十分とは云へないので更に進んで支那語そのものの眞相を學術的方面から看破しなければならぬ。支那語の學術的研究とは支那語を言語學の立脚地から科學的に觀察するのであるが…

『現代支那語学』（後藤朝太郎 明 41. 2）

近代後期になると、中国語が「戦争語学」として認識されていたにもかかわらず、後藤朝太郎などの日本人は中国語を言語学として研究する必要を主張した。しかし、これは「戦争語学」から引き出して押し広めていた過程に生じたものであることは否定できない。

以上、近代の戦争の背景の下に、近代日本において、教育者の側も中国語を「戦争語学」として位置づけていたことが、中国語の学習書の文字上に見られることを確認した。軍事情勢と教科書出版数の連動の一致することと、台湾語教科書の登場も植民地の統治と関連していたことは明白である。教科書の書名、著者、編者、出版社が軍事と繋がるものも多く見られ、内容の文字上では総合的な教科書にこそ軍用語が多く採用されていることが分かった。

また、清末の中国の日本語教科書と比べると、同時期日本の中国語教科書は「軍事」という顕著な特色が容易に分かる。中国では日本語学習する歴史も古いが、日本語教育の必要性を最も痛感させられた契機となったのは日清戦争の敗北であった⁷⁰。つまり自国の主権と領土の保全が危うくなるという情勢の打撃で、日本に学んで発展を求めようとする目的で、日本と逆の立場と動機から日本語教育を本格的に始めた。『中国人の日本語学習史』に附している「清末日本人編集の教科書」、「清末中国人編集の教科書」、「清末中国発行日本人編集の教科書」のリストには、軍用語が入る書名と軍事と関係する発行者が見られない。教科書に載せる内容は一々確認していないが、調べた総合的教科書である『日語独習書』⁷¹には軍事語がみられず、『新編日本語言集全訳日本新辞典合璧』⁷²の単語部分には軍事語が見られるが、会話部分に軍事についての内容がみられない⁷³。多くの教科書の確認が必要と思うが、以後の課題とし続ける。日本の教科書に窺えるプロパガンダの意図がないと予想できる。

⁷⁰ 劉建雲『中国人の日本語学習史—清末の東文学堂—』学術出版会、2005年、p. 9。

⁷¹ 郭祖培・熊金寿『日語独習書』東文学堂、1903年。

⁷² 王傑編『（新編）日本語言集全訳日本新辞典合璧』1906年。

⁷³ 李小蘭『清季中国人編日本教科書之探析』（『杭州師範学院学报』2006年第4期。）

以上は、近代日本において発行された中国語学習書の出版数、出版関係者、種類、書名、内容など戦争との繋がりを明らかにした。「戦争語学」という中国語への認識は近代日本の教科書に溶け込んでしまったといえる。

1.2 西島良爾と中国語教科書

1.2.1 西島良爾と中国語教科書

西島良爾は、明治、大正時代の中国研究家である。1870（明治3）年11月1日、静岡県函南村で志良以（又は志良井）新右衛門の三男、染之助として生まれた。柴田清継（2002）の研究をもとに、西島良爾の生涯を簡潔に述べると次のようになる。

西島は1890年、静岡県選抜生として上海の日清貿易研究所に入学し、中国語を学んだことが、彼の人生を大きく方向づけ、中国語関連図書の著述の基礎となった。上海日清貿易研究所は1889年9月に荒尾精により創立された。研究所は学科3年、実習1年の計4か年で、商業に関する学科を主とし、ほかに英語（1週6時間）、中国語（1週12時間）も設置されていた。1894年8月に日清戦争が勃発し、研究所の卒業生89名中72名、職員7名が陸軍通訳または軍人探偵として従軍した。西島もその1人で、陸軍通訳になり、後年その体験を「従軍漫録」と題して著した。戦後は台湾総督府に勤務した。この間の1896年、西島千代と結婚して西島良爾と改名し、出身地の名前に因んで「函南」と号するようになった。1899年から1904年まで大阪控訴院及び大阪地方裁判所の中国語通訳官として勤務する傍ら、大阪で中国語教育に努めた。西島が中国語を教授していた場所は2か所あり、大阪外国語学校⁷⁴と大阪清語学校⁷⁵である。大阪清語学校は「支那語学堂」ともよばれ、西島が自宅に創設したもので⁷⁶、清水芳吉が校長を務めていた。

1904年、日露戦争が始まると、西島は再び召集されて軍旅に従った。1905年に帰国した後、神戸に移った。教壇に立ったのは市立神戸商業補修学校に一時期だけであったが、個人的に彼の中国語の教授を受けた者はいたようである。彼の長男・五一（1899-1976）の回想によれば、西島の自宅には「函南書院」という額がかかっており、毎晩、林義昌が中国語を習いに来ていたという⁷⁷。林義昌は西島の大阪清語学校の学生の一人である。

西島は後半生の大部分を過ごした神戸において、1917年に設立された神戸日支実業協会の職員となり、5年の後に創刊した機関誌『日華実業』の編纂主幹を担当した。また、

⁷⁴ 今の大阪大学と合併する前の大阪外国語大学の前身ではなく、1900年に富岡半三郎によって設立された私立学校である。

⁷⁵ 清語学会・清語講習会・清語学堂とも呼ばれる。

⁷⁶ 西島函南『日支会話獨修：三週間完成』（近代文芸社 1932年 pp.1-2）の例言に「東歸以來忝居法署譯職公餘之暇 創辦支那語學堂」がある。

⁷⁷ 柴田清継『西島函南』（『孫文研究（42）』2007年、pp.30-41。）

柴田は西島五一「諏訪山小学校七十年」『日華月報』（第51号、1971年）を引用している。

遅くとも 1910 年以前から 1917 年までの間、『日華新報』の編纂に従事していた。一方、1913 年の始め、孫文と交際し始め、孫文の訪日全行程を記録した。その記録は孫文の足跡の一端を詳細に記録した貴重な資料であり、中国で最新の『孫中山全集』にもその一部が採られている⁷⁸。西島はその後、孫文から「博愛」の書を贈られている。なお、長男・五一が、「孫文は、国民政府を樹立した後も、しばしば来日している。彼が神戸に上陸するたびに、公式の席上での通訳は父の役目であった。」との回顧文を残している⁷⁹。西島は 1923 年 12 月 16 日、肝硬変のため 53 歳で急逝した。

西島は表 1.6 のように、教科書（速成、一般）、時文・尺牘⁸⁰、会話（商用・一般）、字典、中国事情など多種多様な中国語学習書を著した。それらは版を重ね、その出版は西島の没後も続けられた。

表 1.6 西島良爾の著書

No.	著書名（出版年）	No.	著書名（出版年）
1	実歴清国一斑（1899）	18	三字経・千字文・孝経・忠経新註（1910）
2	清語会話案内（1900）	19	最近支那事情（1911）
3	和文対訳支那時文集（1901）	20	新編支那語教程（1914）
4	従軍漫録（1901）	21	最新実用支那語教科書（1915） （林達道と共著）
5	四声標註支那官話字典（1902）	22	日支会話問答（1917）
6	『支那官話字音鑑』（1902） （牧相愛と共編）	23	支那語北京官話教範（1921）
7	清語教科書（1902）	24	支那語会話六十日間卒業（1923）
8	対訳日清会話六十日間卒業 （1902）	25	日支商用会話（1924）
9	清語読本（1902）	26	日支会話助辞動詞詳解（1924）
10	支那現今尺牘類纂（1904）	27	支那語教程：四週間速成（1928）
11	新編中等清語教科書（1904） （林達道と共編）	28	六十日間卒業支那語独修：満洲語会話 （1932）
12	清語三十日間速成（1904）	29	日支商用会話独修：三週間完成（1932）
13	日清会話入門（1905）	30	日支会話独修：三週間完成（1932）

⁷⁸ 柴田清継『西島良爾—中国語とともに生きた明治人』（馬場憲二・管宗次編『關西黎明期の群像第二』和泉書院、2002 年、p. 180。）

柴田清継は西島良爾の次兄志良以喜太郎の孫の志良以孝氏と西島本人の孫の片柳和子氏より、数々の貴重な資料の提供を受けたという。

⁷⁹ 柴田清継『西島函南』（『孫文研究（42）』2007 年、pp. 30-41。）

⁸⁰ 時文とは中国の清末から民国にかけて、国書、奏摺、公示文、尺牘などに使われた文体である。尺牘とは、尺素（せきそ）・尺書・尺翰などともいい手紙のことである。古来中国で 1 尺四方の牘（木の札）を書簡に用いたことに由来する。

14	最新清語捷徑 (1906)	31	日支會話獨修 (1937)
15	新編清語教程 (1906)	32	標準支那語教程：自習・速成 (1939)
16	華瀛商用會話 (1907)	33	北京官話長髮亂記 (出版年不明)
17	支那語學教科書 (1907)		

表3の著作を通覧すると、教科書が一番多い。後期の多数の教科書は初期の教科書の内容を若干変更し、改題し、或は再出版したものである。教科書の基本的な内容は、初期に刊行された『清語會話案内』と『清語教科書』にほぼ網羅されているといっても過言ではない。大阪清語学校で使用された教科書は、すべて西島の自著『清語會話案内』、『清語教科書』、『清語読本』などである⁸¹。

1902年に、中国の嚴修⁸²が日本の教育事情を視察するため大阪を訪問した際、通訳として随行したのは大阪清語学校の校長・清水芳吉であった⁸³。これをきっかけに、西島は嚴修と知り合うことになった。嚴修は西島の著した教科書の評判や売れ行きに関して言及しており、1932年に出版された西島の著書『日支會話獨修：三週間完成』に以下のように序文を寄せた。

日本西島函南君久客吾國 習吾國語言 比其反也 則著書以傳其國人 所著書十餘種 就中支那語教科書 日支會話六十日間卒業書等 最膾炙人口……余來大阪所遇土人 能操吾國語者 大率皆君之徒侶 其客有津者 則皆奉君著書為枕秘 則是書固甚適學者之用 可以信今而行遠無疑也⁸⁴

すなわち、西島は中国に長く住んで中国語を習得し、数十冊の中国語教科書を日本人に提供し、そのうち『支那語教科書』、『日支會話六十日間卒業書』などはもっとも広範に伝播していた。当時嚴修が大阪で出会った中国語が話せる日本人は、そのほとんどが西島の弟子であり、嚴修の住んでいた中国天津在住の日本人は、みな西島の著書を宝のように大事にしていたという。

当時の三重県立四日市商業学校では、西島と林達道の著した『最新实用支那語教科書』をテキストとして採用していた⁸⁵。また、近代日本において最初の日本人の編纂になる中国語辞典は、筆者の管見の限り『四声標註支那官話字典』(1902)である。このようにみえてくると、西島良爾が明治日本の中国語教育において大きな役割を果たしたことは明白である。

⁸¹ 柴田清継『西島函南』(『孫文研究(42)』2007年、pp.30-41。)

⁸² 後の南開大学の創立者。

⁸³ 『日本研究論集』南开大学出版社、2005年、p.447。

⁸⁴ 西島良爾『日支會話獨修：三週間完成』松浦一郎、1932年、pp.1-2。

⁸⁵ 西島良爾・林達道『最新实用支那語教科書』石塚書舗、1915年、p.2。

1.2.2 西島良爾の中国語観

西島良爾の中国語観は彼の恩師の荒尾精⁸⁶の忠実な信奉者であるところから生じていると考えられる⁸⁷。即ち、基本的に、興亜論⁸⁸のもとに中日の富強を求める視点である。しかし、中国語教育活動を続けた西島は中国語に対してどのような中国語観を抱いていたのであろうか。

中国語へ踏み出す理由について、西島は『清語会話案内』の自序では、「日清比隣唇齒相依利害ノ連鎖錯り得失ノ關係存ス我邦人タルモノ豈其語言ニ通セスシテ可ナランヤ」と述べている。これは彼の中国語教師である御幡雅文の論説と酷似している。御幡雅文（1859-1912）上海の日清貿易研究所で西島に中国語をおしえたことがある。彼は『華語跬歩』（1908）の序文で、「日清相距一帯水耳其緩急利害關鍵在焉貿易往來得失繫焉我邦人不通曉華語言而可得乎」と述べている。すなわち、西島の中国語への関心の出発点は、御幡雅文の観点を引き継ぎ、実用性ということであった。

一方、西島は『最新実用支那語教科書』の序文では、「善隣ノ誼ヲ敦フシ提挈輯協ノ實ヲ擧ント欲セバ語言ヨリ先ナルハ莫シ語言ハ實ニ國交ノ連鎖ナリ孔子曰ク國ニ入りテハ禁ヲ問ヒ郷ニ入りテハ俗ヲ問フト若シ夫レ語言ニ通曉セズンバ焉ゾ其情誼ヲ悉クス得ンヤ」と述べ、中日両国の友好の架け橋としての中国語の必要性を説く。周知のように、近代日本において、主として外交的・商業的・実利的・軍事的な実用的目的のために、中国語教育がなされていた。このように、西島は中国語が貿易と善隣のために必要であるとの認識を以て中国語へ関心を寄せた。

さて、明治期の日本人の中国語への研究はほとんどなかった。「第二言語教授法」がほとんど確立していなかった。理由を考えると、中国側でも伝統的に文法研究があまり発達せず⁸⁹、外国人が手本とすべき北京官話の文法書がほとんどなかったことが、日本の中国語の科学的研究の妨げになっていた。また西洋の中国語研究と違って、日本の場合は唐通事や禅宗僧侶による中国語教育が近代以前からあり、明治時代においてもそれを踏襲するところから始まっているので、西洋近代科学が入り込む余地が少なかった。それ以上に、日本国内では、中国語教育の目的は実用的にあり、教師も学習者も、中国語を科学的研究と教育の必要を自覚していなかった。

⁸⁶ 荒尾精（1859-1896）は日本の陸軍軍人、日清貿易研究所の設立者である。彼は日中提携による亜細亜保全、つまり「興亜論」を唱えた明治の先覚者である。

⁸⁷ 柴田清継『西島良爾—中国語とともに生きた明治人』（馬場憲二・管宗次編『關西黎明期の群像第二』和泉書院、2002年、p. 180。）

⁸⁸ 「興亜論」とは明治の前期にあって、欧米列強に対して「亜細亜の衰運」を挽回し、亜細亜連帯の思想である。これに正対するのは「脱亜論」である。「脱亜論」とは、「後進である亜細亜を脱し、ヨーロッパ列強の一員となる」ことを目的とする思想である。明治初期に、政府が実行した政策の根幹となった思想は「脱亜論」で、後の韓国合併、満州国建国、日中戦争など亜細亜への侵略に至る流れの始まりとみることがある。

⁸⁹ 「馬氏文通」が中国人による最初の中国語文法書で、1898年に初版として発行された。

しかし、西島の中国語への実践はそのような大勢とは対照的である。まず、著書の体裁からみると、『清語会話案内』は『華語跬歩』より中国語の語や語句に対する日本語訳を増やし、『清語教科書』は『清語会話案内』より文法略説や応用問題などを増やし、基本文例に和訳演習や清訳演習を効果的に組み合わせることによって、学習者にとって有益なものを作り出そうとする意図が窺えるとともに、中国語への探索も教科書の科学性に反映されている。また、著書の範囲からみると、発音辞典の『支那官話字音鑑』と文法解説『日支会話助辞動詞詳解』⁹⁰の発行は、西島の中国語の研究が発音、文法などの分野に及んでいることを示す。『支那官話字音鑑』の緒言に、「清語學ニ関スルノ著書近來稍ヤ其數ヲ加フ然レドモ清字音ヲ正確ニ速知スルノ書物ニ至テハ甚ダ稀寥ヲ覺フ清語學者ノ遺憾トスルトコロナリ」との記述があるように、中国語に語学として関心を示していた彼の態度は注目に値する。『支那官話字音鑑』は僅か43頁であるが、日本で最初に出版された中国語の発音辞典『日清字音鑑』(1895年)⁹¹より1,000字ほど多い⁹²。『支那官話字音鑑』(1902)が出るまでの間、発音辞典はこの1点しかみられない。更に、彼の俗語と時文に関する研究論著も屢々世に提供された。西島が中国語の科学的な教育を実行しようとして多くの著作を世に出した業績の背景には、彼が実用語の範疇を越え、言語学の研究対象として中国語に接していたことが窺える。

中国語学習法については、西島は『清語会話案内』の緒言に「語学の第一の要務は実地に活用すること」と明確に記述している。さらに、言語は歴史・風俗に由来するものであるから、歴史、風俗、習慣を研究することを力説している。『新編中等清語教科書』の序にも「言語を習得するためには活用が肝心であり、活用の巧みは暗誦と練習にある⁹³」とある。この実地で活用する方法は現代でも通用する。西島の中国語の学習法は系統的ではなかったが、明治日本人において、中国語の学習と教育を大事業とみなしたことは珍しかった。

以上のように、西島の中国語観は、外交的・商業的な実用的な目的で出発したが、その後、中国語の発音、文法などの知識について研究し、学習方法を科学的に提案し、中国語への探索を停滞することなく、積極的に進めたのである。

⁹⁰ 今見られるのは1924年に出版されたもので、西島が1923年に急死したため、再版本のはずである。

⁹¹ 『日清字音鑑』は1895年に伊沢修二(1851-1917)により出版され、日本語五十音順に排列する。

⁹² 『支那官話字音鑑』には5383字(『支那官話字音鑑』p.4)があり、『日清字音鑑』には「四千有余」がある(六角恒廣編『中国語書誌』不二出版、1994年、p.62。)

⁹³ 原文は「語言之學唯在活用 活用之妙唯在其人學者能諳熟習練」である。訳は筆者による。

1.3 まとめ

本章は、近代日本における中国語学習書をめぐって展開した論述である。前半では先行研究を踏まえながら、資料となる教科書を補充して、教科書を主とする学習書の「軍事語学」の性格を検討した。後半は西島良爾と教科書の編纂、彼の中国語観を分析した。

まず、六角恒廣の『中国語関係書目』を踏まえ 12 点を補充した。次に、近代日本の教科書を含み中国語の学習書は総 1,486 点があり、それらの学習書の出版年、数、書名、内容などから「戦争語学」の性格を検討した。その結果、軍事情勢と教科書出版点数が連動すること（すなわち、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、及び第二次世界大戦時に教科書が多く出版されていたこと）と、台湾語教科書の登場が植民地の統治と関連することが明らかになった。教科書の書名、著者、編者、出版社の性格が軍事と繋がるものも多く見られ、内容の面では総合的な教科書にも軍用語が多く採用されている。これによって、近代日本において発行された中国語学習書が、人々に「戦争語学」という中国語への認識を植え付けたことは明らかである。

最後は、「中国語とともに生きた」と評される西島良爾の中国語観について、実用的な目的で出発したが、言語学に近づき、中国語の発音、文法などの知識、及び学習方法の研究を積極的に進めたことを述べた。

日本近代の教科書の軍事と繋がる特徴をもっと有力に論証するために、同時代の中国の日本語教科書との比較を今後の課題とする。

第2章 明治・大正期に日本人が編纂した北京官話辞典

辞典は時代の文化をよく表し、各分野での研究に有用であり、特に100余年前の辞典は貴重な歴史的、文化的、言語的価値を持っていると同時に、教育史の研究に不可欠とされている。近代日本における中国語辞典の編纂は、20世紀初頭まで遡ることができる。最初の日中辞典は西島良爾・牧相愛共編の『四声標註支那官話字典』（1902）であり⁹⁴、最初の中日辞典は石山福治編の『支那語彙』（1904）である。1902年から1945年まで43年間に57点⁹⁵がある。明治・大正時代にすでに20点の中国語辞典が出版された。しかし、近代日本の中国語辞典を取り扱った先行研究の中で、初期の辞典を形式から内容まで取り上げた考察は見当たらない⁹⁶。

そのため、本章はまず、これらの辞書を判型、体裁、版面など書誌学の考察をはじめ、語の収録などの特徴を一つ一つ考察して、全体像をつかんでその時代の共通点を明らかにする。次に、中国語辞典の編集に情熱をかたむけ、生涯にわたって日本人の中国語学習者に崇められていた井上翠（1875-1957）について取り上げる。先行研究には井上に関わる論述が多々あるが、筆者が調べていたところ新しい資料を発見した。それは、井上の東亜経済と時文の研究と日中辞典の直筆原稿『日清語辞典』である。そこで、井上翠の生涯を補充し、今回発見した、今日まで公開されていない『日清語辞典』の価値を確認する。

⁹⁴ 陳明娥『日本明治時期北京官話課本詞彙研究』（1905、p.177）、及び吳妹純『「日漢辞彙」與清末北京官話常用詞研究』（2013）は、『日漢辞彙』が日本で最初の日中辞典であると主張しているが、筆者はこれは誤りではないかと思う。

⁹⁵ 六角恒廣編『中国語関係書書目（増補版）』（2001）、陳娟『清末における日本語の辞書—中国人学習者を対象として』（2014）を参考にした。

⁹⁶ 先行研究には、六角恒廣による『中国語関係書目（増補版）』の著書（2001）がある。明治以後の近代日本において、中国語教育に使用された教科書を主として、辞書、商業会話・軍用会話・旅行会話などの類をも収録する。1867年から1945年を第1部とし、以後2000年までを第2部として増補。刊行年月日の順に配列している。全ての辞書を収録しているわけではないが、重要な参考となる。その後、六角恒廣はこれらの辞典の散逸を防ぐために、明治から昭和20年（1945）までの間に中国語学習に使用された辞典をおさめて、全16巻の『中国語辞典集成』を作り、2003、2004年に刊行した。多くの辞典は本集成に収録されている。1912年以前の辞典には『支那語彙』（1904）『日漢辞彙』（1905）『北京正音 支那新字典』（1905）『日華語学辞林』（1906）『同文新字典』（1909）がある。そのほかに、中国語に関わる以下の叢刊などにも何冊かが見られる：波多野太郎編『中国語学資料叢刊：白話研究篇』（1984）第2巻に『四声標註支那官話字典』（1902）を収録する；波多野太郎編『中国語文資料叢刊』第4篇第3巻（1994）に『日清会話辞典』（1903）を収録する。また、国立国会図書館のデジタルコレクションでも多くの辞書が公開されている。たとえば、以上の著書に収録されていない『日華会話辞典』（1906）がデジタル化されている。なお、論文に陳娟『清末における日本語の辞書—中国人学習者を対象として』があるが、日本人が編纂したすべての中国語辞典を取り上げてはいない。

2.1 明治・大正期の日本人編纂の北京官話辞典の書誌

日本では、1902（明治 35）年から 1926（大正 15）年までの間に、日本人によって出版された中国語辞典は、以下の 20 点である。

表 2.1 明治・大正時代に日本人による中国語辞典

	書名	編・著者	出版年（西暦）	出版社
1	四声標註支那官話字典	西島良爾・牧相愛 編	明治 35 年（1902.7）	青木嵩山堂
2	日清会話辞典	池田常太郎	明治 36 年（1903.9.19）	丸善株式会社
3	日台新辞典	杉房之助	明治 37 年（1904.11）	日本物産（台北）
4	支那語辞彙	石山福治	明治 37 年（1904.12）	文求堂書店
5	日華字典	善隣書院	明治 38 年（1905.3.15）	文求堂書店
6	日漢辞彙	石山福治	明治 38 年（1905）	南江堂・文求堂書店
7	北京正音 支那新字典	岩村成允	明治 38 年（1905.8.8）	博文館
8	日華語学辞林	井上翠	明治 39 年（1906.10）	東亜公司
9	日華時文辞林	中島錦一郎・杉房之助 編	明治 39 年（1906.6）	東亜公司
10	日華会話辞典	鈴木暢幸	明治 39 年（1906.10.27）	富山房
11	日台大辞典	台湾総督府民政局学務課	明治 40 年（1907.3.30）	編者（台北）
12	日華新辞典	松平康国・牧野謙次郎	明治 40 年（1907）	東亜公司
13	日台小辞典	台湾総督府	明治 41 年（1908.3.24）	大日本図書 KK
14	同文新字典	伊沢修二	明治 42 年（1909.1.15）	大日本図書 KK
15	日華合璧辞典	梅村美誠	大正 2 年（1913）	言成社
16	漢和発音字典	石山福治	大正 3 年（1914）	文求堂書店
17	支那官話字典	宮島大八	大正 6 年（1917）	善隣書院
18	日支日用語字典	石山喜一郎	大正 11 年（1922.11）	大阪屋號書店

19	漢字索引 日 華大字典	服部操	大正 14 年 (1925)	内外出版 KK
20	標準支那語辞 典	佐藤留雄	大正 15 年 (1926. 4)	同文社

*本表は六角恒廣『中国語関係書書目 (増補版)』(2001)、陳娟『清末における日本語の辞書—中国人学習者を対象として』(2014)を参考に作成した。

本論文では「中国語辞典」を考察したいが、ここでは、近代において中国語の主流となった北京語の辞典のみを考察対象とする。上掲表中の『日台新辞典』『日台大辞典』『日台小辞典』は省略し、残りの 17 点の辞典を編纂の年代順に、それぞれの内容の特徴を簡単に紹介する。

(1) 『四声標註支那官話字典』

西島良爾と牧相愛の共編、1902 年に発行された縦 19cm の日中辞典である。巻頭には近衛篤磨の題字「千里咫尺」と 1902 年の際の中国の領事・蔡熏により書かれた序がある。凡例には、「本書は編者が各其公餘の暇を以て従事せる講席に於ける教案中より其日常最も普通に使用せるものを蒐集したり…」とある。語の出典は書いてない。本文は縦書き、1 頁を上下に 2 段組で配列してある。日本語の単語や語句をいろは順に排列し、その下に中国語を記し、片仮名で発音を示している。

辞典部分と補遺の 2 部分から構成し、総数 4,454 語を収録する。辞典部分には 3,289 語があり、親字には会話文も入り、見出し項目の仮名数は最小が 2、最多が 27 である。補遺は 1,165 語あり、すべて単語で、字数は 5 字が最多である。北京語土語と当時の俗語を多く収録しているのが本辞典の明瞭な特色といえる。

例えば、「じぶんのことをしてひとをかまうな 你管你的罷不用管人家的事 (各掃自己門前雪休管他人瓦上霜)」は、中国語の白話小説、明代の『金瓶梅詞話』の第 33 回に「那老者見不是話，低着头，一声儿没言語走了。正是各人自掃檐前雪，莫管他家屋上霜。」⁹⁷とあり、同じ明代の『警世通言』にも「三官正厭王定多管……王定拜別三官而去。正是各人自管門前雪，莫管他家瓦上霜。」とある⁹⁸。

(2) 『日清会話辞典』

池田常太郎の編、1903 年に発行され、翌 1904 年 8 月 30 日に再発行された日中辞典である。『日清会話辞典』は関西大学図書館、大阪私立大学図書館に所蔵されており、波多

⁹⁷ 「あの老人は自分が違う話を言ったと意識して、頭を下げて言わずに帰りました。つまり、各自が自分の家の前の雪を掃き、よその家の瓦の上に降りた霜にはかまわない。」筆者翻訳。

⁹⁸ 「三官が王定の余計な世話を嫌って…王定は三官と別れて行きました。つまり、各自が自分の家の前の雪を掃き、よその家の瓦の上に降りた霜にはかまわない。」李泳炎・李亜虹編著『中華俗語源流大辞典』(中国工人出版社、1991 年)による。

野太郎編第4篇第3巻にも影印本として収録されている。本論文が利用したのは『中国語文資料彙刊』に見られる影印本である。

『日清会話辞典』の冒頭の表題紙にタイトルと編者の池田常太郎の氏名以外に、中国人の北京語教員と翻訳者であった者が校正し、補充したことを記載する⁹⁹。そのため、本辞典の中国語の発音と訳文の正確度は高いと推測できる。

表題紙の後は題字で、続いて緒言である。本辞典の編纂経緯は緒言に見られる。すなわち、池田常太郎が北京在留時に清国教師と共に日本の辞書、和英辞書、英清辞書等を参照し、もっぱら日常生活で使用される北京語のみを集輯し、完結までに4年間を費やした。緒言には四声略説と発音法の説明も記載してある。次が目次で、その後に176頁の正文がある。

内容は横書きで、日本語の発音のアルファベット表記、日本語の見出し、品詞、中国語の訳、中国語発音のアルファベットの表記の順である。そのうち、品詞は()で表示し、中国語の上に日本字の音を仮名で記している。中国語の発音について、字の上に仮名表記で示している上に、北京人が一番馴染みある方法と思われる表記法で注音している。作者は既刊の支那語書類の中で発音の最も正しいのはウェード式¹⁰⁰であるが、この辞典は北京人の慣用する発音を示すことにした¹⁰¹、と緒言で書いている。中国語の訳は簡潔で、例文がない。見出しは日本語の発音のアルファベット順に配列する。

例：Abekobe. 反對 (副) 對。面。兒 Toi mi alu
Abunashi. 危シ (形) 危 險 Wi shien

正文の後には付録が付いており、数字、月名、日数、一周日、時、四季、方角、貨幣、度制、斗量、衡制、官名、地名、締盟各国などが表の形で示してある。付録の最後の19-30頁は日用会話で、会話文典摘要、命令詞、疑問詞、会話の4種類に分けてある。

(3) 『支那語辞彙』

石山福治の編で1904年12月に初版、1921年と1925年に増改訂が発行された中日辞典である。本辞典は管見によれば、最初の中日辞典である。ここで取り上げるのは、1921年の増訂改版の18cmのものである。

⁹⁹ 清國前日本及奧地利公使館員北京語教師欽天監博士 榮善先生音校正 同奧地利公使館員北京語教師舉人 岳博先生補助編纂 同外務部頭等參贊管東文繙譯官候補道臺 陶大均先生補 同外務部東文繙譯官 候補知縣 李鳳年先生補

¹⁰⁰ ウェード式は『語言自彙集』で採用したローマ字による語音表記の方法である。詳細は本章2.2(3)を参照。

¹⁰¹ 『日清会話辞典』の緒言による。

序言がなく、例言、片仮名音順検索、辞彙字画索引をつける。例言には、初版後版を重ねるごとに少しの訂正を加え、時世の急なる変遷に従い言語を訂正した新版であり、使用されるのは北京官話を主とする、とある。

本文は 595 頁である。内容は縦書き、見出し語はすべて 1 字であり、五十音順に配列し、発音を片仮名で傍に標注し、四声を○で四隅に表し、品詞がなく、いくつかの例を後に付け、見出しの字は縦線に換える。発音の表記は仮名以外に、符号（がエ、オ、チ、シの後に付けられた場合がある。符号（については、例言に「エの後の（はエを出すよりもいささか口に丸みを加えると意味し、オの場合は少しく口に平みを加え、チおよびシの場合は舌先を歯の根に接近させる）などのように説明する。最後は 10 頁のウェード式の発音の索引である。

『支那語辞彙』は 1921 年に増訂改版された。改版する理由は、「例言」で説明している。

本書の初版は明治三十七年の冬にして、爾後版を重ねる毎に多少の訂正を加へ来りたれ共、時世の變遷急なるや、前の清國は十年以前に中華民國と變り、従つて支那の社會状態に於ける幾多の變革は眞に目まぐるしきものあり、時代人の思想に伴ふ言語の變遷著しき事相は、竟に間に合せの訂正を以て満足すべきあらざるに至りぬ…

すなわち、『支那語辞彙』は時世の移り変わりに応じて、言語も変遷している事実を踏まえて、内容の改訂を重ねた。

(4) 『日華字典』

善隣書院の編で、1905 年 8 月に出版された縦 15cm、横 10cm の小型で革装丁である。1910 年に再版されている。中国語の字を日本語で解釈する一種の中日辞典である。

『日華字典』は、岩手県立図書館に所蔵されており、六角恒廣編『中国語教本類集成』第 4 集第 3 巻にも収録されている。本論文が利用したのは、山口県立山口図書館所蔵の版本である。

この辞典は序言や凡例などはない。辞書部分は 320 頁、索引は 54 頁で合計 374 頁である。内容は横書きで、1 頁を左右に二分し、親字はすべて 1 字で、9,246 文を収録し¹⁰²、ウェード式のアルファベット順に配列する。親字の右側に小さく 1・2・3・4 の数字で親字の四声を表し、多音の場合は音調を表す数字を並べる。次は日本語の漢字と片仮名で意味を簡単に説明している。以下に例を出してみよう。

¹⁰² 字数は陳（2014）を参考。

例：回 2 振回ル、(一回) 一度

會 3.4 (一兒) 暫時

會 4 集一、黨派、教派、修得シタル能力、才智

例語を加える場合もあり、「|」で親字に換える。その後には他の読音を挙げる。例えば、凹は AO WA YAO の 3 か所で別々に出現するが、それぞれの後に他の 2 つの発音を標注する。

陳娟 (2014) は、本辞典は意味の解説を中心とし、声調とウェード式で引くことから、日本人の中国語学習者向けの実用的な字典であるとしている。一方で、六角恒廣は家蔵本に「呉子琴 WU TSZ CHIN」というスタンプ様のものがあるとの理由で、この時期は中国からの留学生の最盛期で、『日華辞典』も中国人留学生にも大いに使用されたとの意見を持っている¹⁰³。

(5) 『日漢辞彙』

石山福治の編で、1905 年 6 月 8 日に刊行された縦 15cm×横 10cm の特製本である。

『日漢辞彙』は山口県立山口図書館、島根大学附属図書館に所蔵されており、六角恒廣編『中国語辞典集成：編集復刻版』第 1 巻にも収録されている。本論文が利用したのは、山口県立山口図書館所蔵の版本である。

この辞典は全部で 346 頁があり、序言がなく、例言から始まる。例言では使用される符号や表音式などの体例、及び「兒」「子」「了」について説明している。即ち、「兒子」での「兒」と「子」が主字であるに対して、「狗洞兒」(いぬくぐり)、「肉瘤(瘤)子」(瘤)のような名詞に付く「兒(r)」と「子(tsu)」、及び一句の終わりに付き過去の働きを示す「了(la)」は接辞であり、中国語で常用されるので本辞典も多く採用すると述べている。石山福治がこの北京語の特徴に注目していることがわかる。

内容は縦書きで、一頁を上中下に 3 分して、見出しを並べている。親字は平仮名で書かれ、「」の中に漢字、() の中に品詞を示す。親字はすべて単語で、文がない。中国語の訳文は異なる意味は⊖⊖…を以て明瞭に分類する。中国語の右側に仮名で発音を表記し、四声を○で四隅に表す。日本語の品詞類に「活名」と「形動」があるが、凡例では品詞に関する説明がない。「活名」は動詞語尾変化によって名詞化するものであり、「形動」は形容詞のことを指すようである。たとえば、あめふり「雨降」(活名) 下雨、あやふし「危」(形動) 危険である。

本文の後に 5 頁のウェード式と片仮表記との対照表があるので併せて参考にできる。なお、付録の形で、地域・国名・中国の主要地名や人物・河川などをあげて、その発音を注している。度量衡の日中対照表も出ている。

¹⁰³ 六角恒廣編『中国語書誌』不二出版社、1994 年、p.105。

編者はその後、教科書を出したこともあるが、1945年6月に大部の『支那語大辞典』を出した。

(6) 『北京正音支那新字典』

岩村成允の編で、1905年8月に発行された18cmの1冊である。秋田県立図書館、国立国会図書館蔵書に所蔵されており、六角恒廣編『中国語辞典集成：編集復刻版』第1巻にも収録されており、国立国会図書館のデジタルコレクションでも公開されている。本論文が利用したのは公開されているデジタル版である。

この辞典の巻頭には1903年10月から4年間、駐日公使兼遊学生総監督をつとめた楊枢の題辞があり、次に編者の自序と緒言がある。緒言により、岩村は北京留学中に辞典の必要性を意識したため本辞典を編纂したことがわかる。発音の表記はアルファベットのウェード式と仮名を併記する方法を採用している。両方を対照し不足を補うためであると記しているが、実際に内容には仮名表音法は出ていない。次に凡例があり、四声を含む発音、索引法、配列順序、同音異声音などを説明する。後に目次と付録がある。

内容は横書きで、親字は一字の音節で、1・2・3・4の数字で四声を表し、熟語と俗語、文語を例とし後に出す。本文は230頁にわたり、英字音表によりアルファベット順、また同音の項目ごとに声調順に排列している。同意味の字を{の符号で表示している。例えば、tsan (ツァン_{ㄨㄢˋ})の発音の字のなかに、以下の4字がある。

{ 咎_{ㄉㄠˋ} 多咎・咎姓・tsa²
{ 僭_{ㄉㄠˋ} (同上) 僭們
{ 咱_{ㄉㄠˋ} (同上)
{ 嗜_{ㄉㄠˋ} (同上)

このうち、「咎」字の発音が違うので、後ろに特別に表記している。

本文の後の231頁から368頁までは書引部首目録、索引表、同字異音表、陪伴字表である。陪伴字とは量詞のことである。最後の40頁には数字、度量衡貨幣解説并比較表、清國管制大要、清國陸軍大要、清國官書官名異稱及英譯、皇族封爵表、地名発音略表、各省及省城、海陸通商地、在清國日本領事館所在地及管轄区域が載せてある。

この辞典は「北京正音支那新字典」と名付けられている通り、発音の記述を主とし、漢字の意味の説明はなされていない。このため、中国語の発音を知りたい学習者、特に日本人に対して利用価値が高い。

(7) 『日華語学辞林』

井上翠の編で、1906年10月に発行された菊判の1冊である。例言と索引は40頁、本文は616頁である。巻頭に当時の駐日中国欽差大臣兼遊学生総監督の楊枢が「言文行遠」

の題辞を寄せている。例言で、井上は日本人が中国語を研究しかつ中国人が日本語を学習するために、本来自身の生活の一助と思って収集したものを整理し世に出したと記している。例言は2篇あり、それぞれ日本語と中国語で書いている。日本語篇は体例および中国語の発音を簡単に説明し、中国語篇は索引の利用方法と清・濁・鼻・拗音の仮名とウェード式の発音の対照表を載せている。これを見ると、井上翠は本辞典を両国人に役立つように工夫したことがわかる。

辞典の語の順序は、岡本正文の『支那聲音字彙』(1902)により発音の順に並べている¹⁰⁴。

発音の次が四声で、例言の後は発音の索引と畫引索引である。版面は縦書きで、1頁を上下2段に分けて組んでいる。まず中国語の見出しをあげ、親字は一字と同字の詞・句の順で排列している。中国語に仮名で発音を示し○で四声を記す。下にそれぞれの日本語を記し片仮名で訳を付している。会話の性質をもつ短句も収録してあり、当時の北京語の特徴がよくわかる。たとえば、

○摘不○●開○身子○ 身ヲ引カレナイ (忙シクテ)。

『北京方言詞典』¹⁰⁵には、「摘」は上の例の中の意味がなく、同音節で声調の異なる(第2声)「擇」には同じ意味を記している。発音が近いので書き間違ったか、漢字が混用されたか現時点でまだ論証されない。

次に、「挨着大樹有柴燒(大火ノ傍ニ居レバ、薪ニハ不自由セヌ)」、「丈八燈臺照遠不照近(一丈八尺ノ高イ燈臺ハ遠クヲ照スガ近クハ照サナイ(燈臺下暗シ。))」のような俗語も多く載っている。

巻尾の奥付に、出版年を明治卅九年、光緒卅二年と両国の年号で表記してあるのは他の辞典には見られない。編者である井上の、日中両国で役立つようにという本辞典の出版意図が窺える。

(8) 『日華時文辞林』

中島錦一郎と杉房之助の共編で、1906年6月に発行された。この辞典は普通の辞典ではなく、当時の中国清朝の時文の専門辞典である。

『日華時文辞林』は名古屋大学附属図書館、横浜市立大学学術情報センターに所蔵されており、国立国会図書館のデジタルコレクションでも公開されている。本論文が利用したのは公開されているデジタル版である。

¹⁰⁴ 『日華語学辞林』の例言に「本書語詞排列ノ順序ハ岡本正文氏編支那聲音字彙ニ據リ音及ビ四聲ノ順序ニ排列セルモノナリ。」とある。

¹⁰⁵ 陳剛『北京方言詞典』商務印書館、1985年、p.322。

辞典はまず、凡例、発音例、五十音目次、付録目次（画数による漢字索引目次）がある。凡例によると、時文において最も広く用いられた熟語も収録している。本文は 137 頁で、2,682 語を収録し、訳語の日本語の五十音図の順に配している。このような配列順はこの辞典しか見られない。1 頁を上下 2 段に分け、縦書きである。上に時文用語を出し、仮名で発音を表示し、下に日本語訳を付けている。付録は 74 頁あり、信頭信尾用語、信札文例、廣告文例、證書文例がある。

付録の後に、特に漢字索引欄を設け、漢語によって訳語を探すに便利である。奥付に「明治三十九年六月十四日発行、光緒 32 年閏四月二十三日発行」及び「發兌處：東京市…清國發售處：清國上海…」とあるから、1906 年に中国と日本で発行されたことが分かる。

(9) 『日華会話辞典』

鈴木暢幸の編で、1906 年に出版された 19cm の一冊である。国立国会図書館蔵書で、国立国会図書館のデジタルコレクションでも公開されている。本論文が利用したのは公開されているデジタル版である。

序言はなく、巻頭は凡例である。本書は 2 編から構成され、凡例でその編纂の方針や使用方法などを箇条書きで述べている。

第 1 編は中国語の見出しを立て、その下に日本語の対訳を載せる形式である。見出しの漢字に平仮名で日本語発音の仮名を振っている。日本語の品詞は「」で表示し、「名」は名詞、「代」は代名詞、「動」は動詞、「形」は形容詞、「副」は副詞、「接」は接続詞を表す。第 2 編は第 1 編と反対で、日本語の見出しを立て、その下に中国語の対訳を載せる形式である。日本語に相応する中国語を知りたい者に便利のように本編の目的を説明している。日本語五十音図の順に配列する。凡例の後に発音、文字、名詞、動詞、形容詞、副詞をそれぞれ説明する。次に目次がくる。全書は縦書きである。

第 1 編は 275 頁ある。中国語の配列順は部首の画数であり、同部首の項目は部首以外の画数の順とする。詳細な索引がなく、ただ目次で 1 画から 15 画までの部首の頁を出している。字の頁の範囲が検索できる。始めに個数目、順数目、量数目、月、日、時の 6 つの種類を並べ、次に辞書の正文に入り、頁も 1 から始まる。語の分野は広く、生活と緊密に関わる語、句を含む会話用語が多い。連語や成語、俗語は収録していない。発音の表記もしていない。日本語で訳し、傍に平仮名で発音を注し、品詞類を下に表記し、ある見出し語の用例を挙げる。たとえば、

洗澡

風呂 (名)

澡堂的水熱了沒有 風呂わ沸いて居ますか

のようである。

一語が複数の品詞を持つ場合は、それぞれ日本語の言葉によって説明している。1 例を挙げる。

傷心

かなしい (形) かなしみ (名)

かなし-む. マ. ミ. メ (他動)

ところが、品詞類が完全でない現象が多い。見出しの字を含む例の代わりに、意味を説明するための例もよくある。たとえば、

雷

かみなり
雷 (名)

很利害的 ひどく鳴りますね

呀呵、好似落下那個地方去 おや、どっかへ落ちたようです

のようである。

第 2 編は 175 頁あり、約 3,500 語の日本語の語が登録されている。日本語は平仮名を使い、() で漢字と品詞類を別々に記し、中国語の訳は簡潔である。意味が複数の場合、

からい (辛) (形)

辣

難受、辛苦

のような形で表示している。「辣」は辛いの意味で、「難受、辛苦」はつらい、苦しいの意味である。

(10) 『日華新辞典』

松平康国と牧野謙次郎の共編で、1907 年に刊行された 13cm の 1 冊である。国立国会図書館蔵書で、国立国会図書館のデジタルコレクションでも公開されている。本論文が利用したのは公開したデジタル版である。

この辞典は序言や凡例、例言がなく、日本の彩色略図と屋内面の略図、及びその説明の 6 頁を含め、合計 2,061 頁である。その内、1,969 頁は「日華新辞典」の部分で、86 頁は「日本語法要略」である。

辞典部分は縦書き、五十音順で、平仮名で日本語語彙や外来語を示し、下に品詞、漢字と中国語訳が付いている。中国語訳の代わりに、或はその前に、日本語を挟んで訳し

ているものもある。例えば「開口」は「口を開く之意」と示す。後で活用形を出し、品詞類も付く。その上、出典を示し、或は挿絵を添える場合もある。挿絵を添えるというやり方は、この辞典が初めて採用した。

中国語訳は「謂…也」の句型が使用され、「謂」を省略し「…也」が一番多い。これは近代以前の中国の辞書に最もふつうに見られる訓詁の形式である。「あかし」の三語の例を挙げる。

あかし「活名」(燈)ともしび。あかり。燈火也。

あかし「活名」謂證據。

あかし「形動」(赤) ⊖色赤也。又紅也。⊙光明無一點陰翳也。⊖心無欲也。不疚也。(丹)

例に出した日本語について「活名」「形動」の品詞はこの辞典の特別な名称であり、ほかに「形名」もある。これらについての説明はないが、語から見ると、「活名」と「形名」は動詞と形容動詞の語尾活用による名詞化のこと、「形動」は形容詞のことと推測できる。

本文の後に、中国語の「日本語法要略」を付けている。日本語の品詞分類、自動詞他動詞、動詞の活用など日本語文法を詳細に紹介している。これは中国人が日本語を学習するために役に立つ。

このように、本辞典は形式から内容まで同時期の他の辞典より充実している。以後の辞典の参考となっているかどうかは今後で考察する。しかし、中国語の発音を付けていないのは残念である。本辞典は中国人の日本語学習者を主な対象とすると推論する。

(11) 『同文新字典』

伊沢修二の著で、1909年1月に、大日本図書株式会社発行した菊判である。東京都立中央図書館、山口県立山口図書館などの公共図書館に所蔵されている。本論文が利用したのは山口県立山口図書館所蔵のものである。

辞典は、序文と凡例40頁、本文302頁、索引102頁があり、巻頭には伊藤博文の題字「書同文」がある。

凡例によると、これは漢字統一会の主義に基づき中日韓3国の音と意味を注したものである。日本の漢字音は、平仮名で漢音と呉音を示し、中国音と声調は伊沢式記号、韓国音はハングルで表している。

(12) 『日華合璧辞典』

『日華合璧辞典』は梅村美誠が編著し、1913年1月、言成社により改訂版として発行された日中辞典である。

この辞典の1913年版は国立国会図書館蔵書で、国立国会図書館のデジタルコレクションでも公開されており、六角恒廣編『中国語辞典集成：編集復刻版』第3巻にも収録されている。そして、1922年の再版が波多野太郎編『中国文学語学資料集成』第2篇第2巻にも見られる。本論文が利用したのは国立国会図書館のデジタルで公開したものである。

『日華合璧辞典』は序文と本文が675頁、付録25頁から構成されている。本文の配列は日本語の発音のローマ字表記の順である。緒言には、大正の維新は支那問題が研究問題の主要な一つとなるために、初版の錯誤を直す一方、便のために発音表も加え、再版にとりかかった、とある。序文の後に「凡例」、「発音」と「発音表」がある。「発音」の部分では、有気音、無気音、寛音、窄音、捲舌音、舌尖音、開口音、合口音、上腭音、囁口音といった中国語の特別の発音を説明している。「発音表」では、字を出し、ウェード式の発音を付けてから仮名を用いて発音を表す順で並べている。そのうち、無気音、有気音¹⁰⁶で読み分けている二字を合わせ表している。例えば、

嗑 cha	}	チャ
茶 ch 'a		

のようである。正文の見出しの中国語解釈にはウェード式の発音も付いている。下に例をあげる。

Ageru あげる (上). 上, shang⁴. 起抬, ch 'i³-t 'ai².

(13) 『漢和発音字典』

『漢和発音字典』は石山福治によって、1914年に出版された漢字の発音辞典である。1922年に再版された。1914年版は東京都立中央図書館、山口大学図書館に所蔵されている。本論文が利用したのは山口大学図書館に所蔵されているものである。

例言には、この辞典は中国の地名や人名などを正しく発音する便のために編纂したとある。見出しは中国字の単字で、後ろには対応する発音を出し、発音が複数ある場合には { で複数音を括り、数字を以て四声を表す。例えば、

¹⁰⁶ 『日華合璧辞典』の「発音」の部分で、有気音と無気音について「有気音ハ（出氣音トモ云フ）其音強ク唾ヲ飛ハス程ニ發音ス。無氣音ハ普通ニ發音シ輕微ナル濁音ニ類ス。」のように説明している。（六角恒廣編『中国語辞典集成』第三巻、p.4.）

阿 { a^{1, 2, 3, 4}
o¹

である。計 11,000 字がある。巻末に日本字とローマ字との「支那音対照表」を収め、巻末に「支日音韻」を録している。例言によると、これは編者の研究の一端である。

(14) 『支那官話字典』

『支那官話字典』は宮島大八が編纂し、1917 年に善隣書院が刊行した中日辞典である。1945 年までに再版されたこともある。1917 年版は大阪教育大学附属図書館、山口大学図書館などに所蔵されており、国立国会図書館のデジタルコレクションでも公開されている。本論文が利用したのは山口大学図書館に所蔵されているものである。

始めに「支那官話辞¹⁰⁷典正誤表」がある。正文は見出しの部分で 765 頁があり、後に「畫引部首目録」と「畫引索引」が付いている。見出しは全部 1 字で、中国語の発音のウェード式ローマ字の順によって配列している。四声に関わらず同音の字は一組にし、字には四声を数字で右肩に記し、部首、中原音韻¹⁰⁸、及び例文を後ろに挙げている。たとえば、

挨¹ 手 椎蟹 【挨着】接近スル【 | 着次序】順番ニ。【今俗凡物相近謂之 |】
正字通。

唉¹ 口 灰 嘆息ノ聲【 | 豎子不足與謀】史。

のようである。

(15) 『日支日用語字典』

『日支日用語字典』は石山喜一郎が編著し、1922 年に大阪屋號書店により発行された日中辞典である。六角恒廣編『中国語辞典集成：編集復刻版』第 3 巻に見られる。本論文はそれを利用した。

この字典は 3 部分があり、一つは字と単語の部分で、128 頁があり、もう一つはその後の 129 頁から 218 頁の「語句と其の用例」である。219 頁から 236 頁までは「最近 尺牘及廣告文に使用せらる文字」である。第一部分の見出しの順番はローマ字に基づくが、第二、三部分は日本語五十音順である。

¹⁰⁷ 辞典の名称は『支那官話字典』であるが、同辞典の正誤表である「支那官話辞典正誤表」は「辞」を使用している。

¹⁰⁸ 中原音韻とは、中国元代に、周德清によって作られた韻書である。

凡例によって、作者は中国語の発音を仮名で表すことは徒勞に終わる様であるから付けないと考えたが、なるべく多くの人の便利のため、出来るだけ完全に近い仮名音を付けることにした。第一部分では、字と語の部分では、見出しの中国語解釈と例文はウェード式の発音を表示している。例文が単字のほかに語または文である場合は、字と字の間が短い横線で繋がっている。第二部分では日本語の文例の後ろに、中国語の説明を付け、中国語の字の上に仮名で表音している。第三部分では、日本語の見出しと中国語の説明だけあり、発音をつけていない。

(16) 『漢字索引 日華大字典』

服部操が著し、内外出版から 1925 年に出版した 19cm の 1 冊の中日辞典である。1926 年、1941 年も再版された。1925 年は国立国会図書館と山口大学図書館などに所蔵されている。本論文は山口大学図書館の所蔵本を利用した。

実際に、当時、中日辞典が少なかった。この辞典の序分から、服部操が中日辞典に着手した理由が窺える。澤柳政太郎¹⁰⁹が序を寄せ、以下のように記している。

中華民國の学生にして、日本に來り學べる者一時は一萬以上の多きに達したることあり。近時種々の原因よりして著しく其數を減ずるに至りたるも、尚百を以て算すべし。二十有餘年前より日本に來學せる者の數は、今正確に知るべからざるも、恐らくは十數萬に上らむ。此等の人士は何れも幾多の努力を爲して日本語を修め日本文を解するに至れる者なり。然るに一たび去つて故國に歸り、日文の書を読まんとするも、現在漢字を以て檢索し得る日華辭書なきを以て、其不便實に多なるべし。而かのみならず、日本に在りて日語日文を學ぶ者も、面り教師に就いて學ぶの外、自修する便を有せざるなり。日華辭書の編纂刊行は一日も放任すべきにあらざるや明なり。此の如き必要の事にして、今日に至るまで顧みられざりしは、職として其編纂の極めて困難なるに由れるは明なり。

そして、服部操自身の序文でも、中国語の発音の学習を遂げなければ意味を理解できないため、漢和辞典の編纂をせずにはいられなかった¹¹⁰、と言っている。本辞典の編纂は出版の 5 年前から始め、熟語四千余りを収録している。

序の後ろは「例文」、「部首索引」、「部首名稱」、「檢字」、「日本文法梗概」「文語動詞語尾變化表」、「文語形容詞語尾變化表」、「口語形容詞語尾變化表」と項目を立てて相关内容を説明している。次は本文、見出しは 1 字とこの字を開始する語で、部首の順に並

¹⁰⁹ 澤柳政太郎 (1865-1927)、近代日本の文部官僚、教育者、貴族院勅選議員。

¹¹⁰ 原文は「中華為吾國同文之邦。人所共喻也。然以音訓之殊。遂至語言不通。辭意不達。不便之甚孰有逾于斯哉。此兩國通用之辭書。所為不可須臾無也。…」である。

べている。発音を付けていない。計 1,240 の見出しがある。最後に 1 頁の「正誤表」がある。

(17) 『標準支那語辞典』

『標準支那語辞典』は佐藤留雄編、同文社により 1926 年に刊行された中日辞典である。

この辞典は山口大学図書館などに所蔵されており、六角恒廣編『中国語辞典集成：編集復刻版』第 3 巻にも収録されている。本論文は山口大学図書館の所蔵本を利用した。

自序によると、佐藤は中国語の学習者が信頼し得るに足りる字典に乏しいためにこの辞典の編纂に取りかかった。序文の後、「四聲の區別及び其變化に關する諸法則」で四声の説明をしておいて、本文に入る。297 頁までは見出しの部分で、299 頁から 363 頁までは発音表であり、発音はウェード式を採用し、多音字は符号 { で表示する。最後の 10 頁は「檢字」である。見出しはすべて 1 字で、日本語の説明は見出しの後に付いている。日本語発音のローマ字の順に並べている。見出しごとに発音を記してはおらず、部分的には用例を加えている。次のようである。

哀 悲しむ、憐れむ。 孤哀子 [孤兒] 哀求 [嘆願する]

2.2 明治・大正時代の日本人が編纂した中国語の辞典の特徴

周知のとおり、辞典が成立するまでには、材料の収集、整理・加筆、修正など複雑な過程を必要とし、編者にあつては知識、時間と情熱が非常に必要である。近代の辞典は現代の巨大な辞典と雲泥の差があるが、当時の日本と中国の学習者に対して大いに役に立った。

さて、明治期の中国語辞典はその前の時代の中国語の辞典と比べて大革新も見える。上述した明治・大正時代の日本人による中国語の辞典の 17 点の特徴をまとめると以下のようになる。

(1) 辞典の種類

17 点の辞典の内、中日辞典は 8 点 (中日韓の 1 点を含む)、日中辞典は 6 点、両方を均等に占めるのは 1 点、中中辞典は 1 点、漢字音の辞典は 1 点である。中日、日中の両方から構成する 1 点の辞典は、異なる読者の需要を満足させるためである。また、この 17 点の中には、会話辞典が 2 点、時文辞典が 1 点、中日韓辞典が 1 点、それぞれ含まれている。中日辞典が一番多いが、「中」または「華」の字を先頭に立てて命名されていない。『四声標註支那官話字典』『支那語辞彙』のようなものはまだその内容を連想出来

るが、『日華字典』『日華語学辞林』のような名称になると、内容を勘違いさせやすくなる。『東中大辞典』（中国 作新社 1908）の緒言は、近代における中日両国語の対訳辞典の命名について言及している。すなわち、母語に関わらず、親字の言語を名称の前に置くのが国際的な基準であるべきであるが、中国人はこれに従わないことが多い、というのである¹¹¹。このような状況は『東中大辞典』しかみられない¹¹²。同様に、明治期の日本人による中日辞典にも「中」または「華」を先頭に立てて命名するものは見られない。大正時代には、『漢和発音字典』が見られる。

日本での中国語辞典は、1902年から年に約2点が世に出ているが、明治期後期の1910、1911、1912年3年間は空白である。これは全体的な中国語教科書の出版数の成り行きと合致している¹¹³。

辞典が次々に出版されたのは辞典に対する需要があったからと考えられる。明治時代において日本人の中国語に対する関心が高まり学習者が増加していた一方、中国人の日本語への需要も強かった。特に1906年前後は日本への中国人留学生もブームとなった。そのため、中日両語の辞典に対する需要が増大した。大部分の辞典には編纂対象を明白に書いていないが、体裁からみると『日漢辞彙』は中国人学習者にとって使用しにくく、『北京正音支那新字典』は中国人に対して利用価値が少ないなど、その主な対象は編纂特色から推測できる。しかし、両者に活用される辞典が大部分を占める。

上述の17点の辞典の内容が重ならず、同じ辞典が再版されたものもあり、このように、明治・大正時代において、日本人学習者が中国語辞典に対する切実な需要を実感した。日本人による成し遂げた中国語辞典はそれに応じて利用価値を発揮したと考えられる。

(2) 辞典の形式

既述したように、日本における明治時代前の中国語教育は、唐話の教育であった。唐話に関わる辞典と学習書は、『唐話辞書類集』¹¹⁴に20点収録されている。それらを見ると、形式上、現代のわれわれがイメージする教科書や辞書であると言うよりは、素朴な対照語彙のような体裁である単語帳である。発音と意味を記すものは少数であり、漢字の右に片仮名で唐音を表記し、漢字には返り点と送り仮名を付し、唐話に続いて片仮名交じり文で日本語訳が示されている。一方、親字は単語に限らず、単語やフレーズを一字、二字、三字、…と字数順に配列して会話文に至る体裁が共通の特色である。

¹¹¹ 『東中大辞典』緒言：中國向例。凡外國語字書。不問性質如何。其署名皆以本國名冠首。而置外國名於下。……凡外國語字典。（或辭典）可分為二種。一則以本國語注解外國語。此種字典。其目的在使讀外國書者。檢出不解之語。而其適合本國何語。故必列外國語於前……一則…… 上海：作新社 1908年

¹¹² 陳娟『清末における日本語の辞書—中国人学習者を対象として』（2014年）を参考。

¹¹³ 日本における中国語教科書の出版点数は1904、1905年ごろは高潮、1905年から急に下がって、1909年から1913年までその動きは穏やかである。詳しくは1.1.2 (1)を参考。

¹¹⁴ 古典研究会編輯『唐話辞書類集』汲古書院、1969-1975年。

それと比較して、上述した明治・大正時代の辞典は相変わらず単語帳の形式が多い。それは、短期間に大量の単語が覚えられるように作成することが多く、辞典に対して実用、効率への期待が変らないからであろう。しかし、辞典としての体系性への配慮が窺え、形式上鮮明な変化が見られる。大部分の辞典は索引があり、音節ないし単語を親字とし、その下に2文字以上の漢字で構成される語を並べ、発音と解釈も付いている。一部分の辞典は語の品詞、用例も加え、さらに挿絵も採用する。それは唐話時代を踏み出し形式上の大進歩と言え、基本的な規範を打ち立てたと考えられる。

(3) 辞典の発音の表記方法

中国語辞典に収録される語は会話語を重点に置く傾向が見られる。その親字の配列順について、辞典は各自特色を持っている。日本語の場合は「五十音順」が主で、「いろは順」は1点のみである。中国語の場合は発音の「アルファベット順」が主であるが、漢字の部首または日本漢字音の「五十音語順」のものもある。

一方、全体から見ると、ほとんどの辞典は中国語の発音を表記している。その際、日本人にとって中国語は発音が一番難しく、四声を身につけておかなければならないことが教育界で共通認識になった。使用される表音方法は主に仮名とウェード式の2種類がある。現行の「漢語拼音方案」が表され、共通語の発音表記として用いられるようになったのは1958年のことである。

日本国内で中国語表記法の規範が確立していない時代に、日本人が学習しやすいように、仮名で中国語を注音した。明治時代以後、中国語の注音に仮名を用いることについて、日本人学者は種々の検討を重ねていた。中国語学者の倉石武四郎(1897-1975)は、仮名を利用しながら、注音符号だけの区別を一々表すとすれば、平仮名と片仮名をとりまぜた上に、注音符号に直して考えないと発音できないような、煩瑣な記号上の約束がたくさん生まれ、学習者は結局仮名のとりこになって、中国語にならなくなってしまうと¹¹⁵、批判したことがある。仮名式に伴う四声の表し方は、左下から、左上、右上、右下の四隅に○を附すのが一般的である。

もう1種のウェード式は、19世紀後半にイギリスの中国駐在公使を経てケンブリッジ大学教授となったトーマス・ウェードが『語言自邇集』で採用したローマ字による語音表記の方法である。四声をアラビア数字、つまり1、2、3、4で表記するので、漢字の声調は一目瞭然となる。

まとめると、以上の17点の辞典の発音の表記方法の状況は以下の通りである。

¹¹⁵ 倉石武四郎『支那語教育の理論と実際』岩波書店、1931年、p.144。

発音の表記方法	採用点数	
	明治時代	大正時代
片仮名式	5	0
ウェード式ローマ字	2 (中日 1 中中 1)	4
ウェード式・仮名	0	1
他・仮名	1	0
日韓中伊沢式記号	1	0
無し	2	1

明治時代の辞典では、「ウェード式ローマ字表記法」より「片仮名式表記法」のほうが多く採用されている。理由として、当時の日本人にとって、仮名式のほうが馴染みあり簡便であるからと考えられる。ある辞典は2つの表記法を同時に併用し、或は異なる表記法の発音表を記載している。これらの辞典が発音を重点に置き配慮したことは分かる。例えば『北京正音 支那新字典』は仮名表記法の不足をおぎなうために、『語言自邇集』におけるウェード式ローマ字により発音表を巻首に掲げる¹¹⁶。『日漢辞彙』にもウェード式と片仮表記との対照表を載せ、参考となる。それで、『日漢辞彙』のように、四声の表記法を説明せず使用し、その時代において通用するのですぐ分かるであろう。他にもウェード式以外のローマ字表記が採用されている辞典が1点あり、それは『日清会話辞典』である。

一方、大正時代の辞典では、「片仮名式表記法」より「ウェード式ローマ字表記法」のほうが多く採用され、これは一進歩といえる。日本人にとって馴染みがある仮名表記を廃止し、科学性を持つウェード式を用いるのは一外国語に対する認識の転換であろう。

以上、明治・大正期の日本人が編纂した中国語辞典を書誌的に記述し、その時代的な特徴をあきらかにした。辞典の形式は、語の品詞、用例、挿絵を採用することから、基本的な規範が形成されつつあるといえる。中国語学習者の需要に応じて、学習者の便宜を考えて、語の解釈が簡潔に付けられている。要するに、明治時代の中国語辞典は、形式を始め内容まで局限性があるが、唐話時代と比べると鮮明な進歩が見られる。発音などに対する処理は時代の特色といえる。辞典の注音方法について、明治時代は「ウェード式ローマ字表記法」より「片仮名式表記法」のほうが多く採用され、大正時代は大部分「ウェード式ローマ字表記法」を採用していることを明らかにした。

¹¹⁶ 『北京正音 支那新字典』の緒言には「支那語の音はもつとも困難にして 本邦の假名にて 到底之を書き現はすこと能はず 又英文綴は假名に比して 頗る正音に近しと雖 亦十分ならざる所ある故に 本書は英文綴を主とし假名をも併記して 其不足を補はんとす兩々対照して 之を習はゞ其正鵠を得るに庶幾からん乎。」とあり、発音表を掲げる理由を説明している。

2.3 井上翠と中国語辞典の補充研究

井上翠は明治から昭和時代にかけて活躍した中国語学者である。井上は中国語辞典の編纂に終生の事業として取り組み、戦前の中国語の学習者は彼の中国語辞典を最も信頼のおける辞典とし、学習に欠かせない道具として使用した。井上の編纂した辞典の主なものは『日華語学辞林』(1906. 10)を始め、『井上支那語辞典』(1928. 9)、『井上日華新辞典』(1931. 8)『井上支那語中辞典』(1941. 11)『井上ポケット支那語辞典』(1935. 4)『井上ポケット日華新辞典』(1937. 7)などである。

井上翠の生涯に関して参考となるのは『松濤自述』という伝記である。『松濤自述』は1930年に大阪外国語大学の中国研究会によって、「この本は先生にお願いして口述していただいたものを筆記して、更に先生に手を入れていただいたものです。」と「あとがき」にあるような経緯で出来上がったものである。当時、井上翠は71歳であった。井上翠の生涯については、六角恒廣の『漢語師家伝 中国語教育の先人たち』に載せている「井上翠一辞書編纂をライフワークに」に詳しく書いてあり、参照できるのでここでは省略する。

以下では、中国語学者としての井上の生涯と著書について、新しい資料を提示しつつ再考する。第一に、井上の東アジア経済と時文の研究を明らかにする。第二に、井上の日中辞典の直筆原稿『日清語辞典』を公開し、『井上日華新辞典』の原稿と確認した上で2点を比較して内容の変化をみる。

2.3.1 時文教科書と東亞経済研究

1916年、42歳の井上翠は山口高等商業学校(現山口大学経済学部)の教員として推薦され赴任した。山口高等商業学校は、1905年4月に従来の山口高等学校を改編して発足した。日露戦争の勝利が決定し、その後日本経済が朝鮮・中国へ進出する情勢をふまえてこの学校が開設されることになったのである。1914年、支那貿易研究科という専科が新設され、1916年井上翠は赴任した。『山口高等商業学校一覧 自大正七至同八年』に載っている「規則」の「職員」には「支那語、支那最近社会事情 井上翠 兵庫士族」、「支那語 中国人 恒峻」が見られる。

井上翠が山口高等商業学校で担当していた科目の中の1つは時文であった。時文の授業は週1時間ないし2時間の配当であった¹¹⁷。井上翠は教材の需要に応ずるために『支那時文教本』(1921)、『最新支那尺牘:標註』(1922)、『支那現代文教本』(1924)、『最新支那尺牘:標註』(1925)、『高等支那時文教本』(1926)、『初等支那時文読本』(1935)、『支那語講座時文篇』(1936)などの時文教科書を続々と編纂した。最初の『支那時文教本』は、井上翠が時文を教授したときに用いた稿本を修正し上梓したものである。その

¹¹⁷ 『支那時文教本』の例言では「支那時文ハ一週一時間乃至二時間ノ配當ニテ…」と記している。

材料は主に中国民国最新のものから選択し、なるべく広い分野に及ぶのを原則とした¹¹⁸。多年の教授と編纂経験を経て、時文にたいして井上翠は以下のような研究法を学習者に提唱している。

時文を研究するには無論先づ口語を取得し、それを基礎として時文の研究に入るべきが本體である。併し、我々日本人は誰しも多少は漢文の素養が有るのであるから、其の漢文の力を基礎として直ちに時文を研究すれば最も近路で、所謂半ばにして功倍するのである。…原来漢文そのものでも従来の訓読式でやる事は問題で、實際の効果が少ないのであるから、時文も矢張り棒読にして意味を取るのが安當である。既に支那語を学習せられた諸君は、聲音字典に據り發音と四聲とを調べ、音讀せらることを希望します¹¹⁹。

要するに、中国語は漢字で書いてあるから、発音も会話もできなくても時文を読めるが、口語を学習した上で時文を研究するとより効果があるので、井上は音讀することを希望していた。

一方、山口高等商業学校では、設立に当たり、文部大臣より朝鮮・中国の事情を特に研究すべき旨が指示されたので、東亜経済研究会という組織を設立した。この会は学校の生徒、卒業生と職員のなかで趣旨に賛成するものおよび一般有志者からなった。東亜における経済事情の調査研究を目的とするもので、主に、研究資料を収集し、2か月に1回の研究会を開き会員の研究事項を表し、年2回会報を発行し、並びに研究叢書『東亜経済研究』を発行するなどの事業を行った¹²⁰。

『東亜経済研究』という本を調べると、井上翠は1916年に同校に赴任し、本会に参加し、様々な情報を翻訳したことが分かる。以下は、『東亜経済研究』に掲載された井上の翻訳である。

年 号	掲 載 内 容
1917 年第 1 卷	『支那ノ鴉片禁止ニ関スル上論及上奏文』 鴉片禁止ニ関スル勅諭など五編
	『山東省嶧縣中興炭礦』 支那顧琅氏編中國十大礦廠調査ヨリ譯出
1918 年第 2 卷	『最近支那幣制整理ニ関スル公文』 支那幣制整理ニ関シ財政總長曹汝霖ノ呈請セル公文及ビ節略・金券條

¹¹⁸ 『支那時文教本』の例言では「本書材料ハ専ラ民國最新ノモノヲ撰ミ其ノ範圍モ廣ク各社會ニ及ボシ時文習得ト同時ニ最新支那事情ヲ知ルニ便ゼンコトヲ努メタリ」と記している。

¹¹⁹ 『支那語講座時文篇』（1936）による。

¹²⁰ 『東亜経済研究』（第一卷 1917年）の巻頭に「東亜経済研究会規則」が書かれている。

	例・幣制局官制・中華易有限株式會社章程
	『開灤炭礦事情』 開平礦務公司、灤州礦務有限公司、公司ノ聯合、地質及ビ炭層、出炭量及ビ採掘額、各礦廠現狀、秦皇島狀況、開灤礦務局ノ成績、開灤礦務局一年中營業狀況、灤礦開平聯合營業後ノ第三期結算概略
	『梁啓超氏ノ國債籌還曾ニ對スル意見』 論文ハ梁氏著飲氷室叢書中ノ政聞時言ヨリ譯出セルモノニテ清ノ宣統二年（一九一〇）ノ表ニ係ルモノナリ
1919年第3卷	『歐洲ニ於ケル中日兩國商品ノ販賣狀態調査』 支那唐通氏ノ調査ニ係ル氏ハ在歐十數年遍ク英佛獨澳ノ大都市ヲ遊歴視察シ其ノ結果ヲ公ニシ支那工商業界ニ奮告セルモノナリ
	『支那戰時商工業保護ニ關スル意見書』 農商公報第五卷第五冊ヨリ譯出
	『宣城縣炭鑛調査報告書』 民國八年七月發行ノ支邊農商公報ヨリ譯出
1920年第4卷	『經濟上ヨリ觀タル支那ノ禍因』 建設第一卷第二号記載戴季陶氏論文ヲ譯出
	『支那ニ於ケル綿業整理ノ狀況』 民國九年七月二日政府公報
1920年第5卷	『支那外債ノ失敗牽引』 銀行週録一七三号ヨリ譯出
	『最近支那財政ノ收入支出實況』 此ノ一篇ハ最近アル方面ヨリ接手セシ情報ナレバ茲ニ掲載シテ大方ノ一燦ニ供ス

この表からみると、井上が翻訳した内容は財政を主とし、中日両国の商売にも及んでいる。井上は自身の持っている中国語の能力を十分に発揮し、中国の新聞や官報の記事をいくつか訳すことによって、日本における中国事情の研究にある程度の貢献をした。

2.3.2 直筆原稿『日清語辞典』と『井上日華新辞典』の比較

山口大学東亜経済研究所に『日清語辞典』と題する直筆原稿が保存されている。筆者は比較作業の結果、これが『井上日華新辞典』の原稿であることを確認した。

『井上日華新辞典』は1931年に出版されるまで長い年月を要し、容易ではなかった。1907年9月、井上翠は京師法政学堂の日本人教習として中国北京赴任した。北京時代に日華辞典の編纂に取り組んでいた。『松濤自述』にその経緯を以下のように記している。

弘文学院で留学生に日本語を教えるに当たって、必要上日華辞典の編纂を思い立ち、言海を参考本として仕事に取りかかっている最中、招聘をうけたので、その稿本を携えて北京へ往きましたが、「百聞不如一見」で、内地で苦心惨澹の末やっと訳出した言葉も、事実に対面すると簡単に解決が付き、清国にはこと物はないと思って数十言を費やして説明を附した言葉も、眼前に実物を見しては、咄然としたこともあった。何でも宝の山に入り手を空しくしてはならぬと、歓喜に満ちた努力は着々と捗っていきました。この日華辞典は内地にはできない仕事ですから、どうしても在燕中に仕上げる必要があるので、わたしは全力をこれに傾注しました。巖谷博士は常にわたしを激励してくださって、「井上君、この頃は顔の色が悪いぞ。先ず一杯飲んでゆっくりやるがよい。」と度々饗應を受けました。原稿全部脱稿した時、博士は始めから終わりまで目を通してくださいました（その原稿は今山口大学の図書館にある）。」

1911年12月、井上翠は契約満期で帰国した。1916年、井上は山口高等商業学校に赴任した。最初の教授会で、校長横地石太郎は井上の『日華辞典』のことを紹介し、その出版についてもいろいろ遠慮してくれた。結局、同僚である稲葉岩吉（君山）の斡旋で、東京本郷の文求堂の田中慶太郎が引きうけてくれることになった。これ以後、井上の辞典はすべて文求堂から出版されるようになった。

『日華辞典』は、1920年から築地活版所で印刷に取りかかったが、組み方が非常に面倒なため時間がかかっていたところへ、1923年9月1日、関東大震災にあい、紙型はすっかり焼失し、辞典の出版は頓挫してしまった。井上はこれを「一大転機」とした。彼の原稿は清末で完成したものの、時代は既に中華民国になっており、制度や言語もいろいろ変化していた。井上はこの機会に、旧稿に大々的な改訂を加え、新しい語彙をふやし、訳語を改善し、用語例を大幅に増加した。この結果、面目を一新し、新時代の要望に即応できるようになった。この改訂補増が完了したのは、1929年のことであった。引き続き副本を作成し、実際に『井上日華新辞典』と名づけられ、出版されたのは、1931年5月のことであった¹²¹。

思えば、この辞典の仕事を始めてから26年の歳月を要した。その後、これを袖珍型に改編した¹²²『ポケット日華』は1923年に出版され、戦後の1953年に江南書院から重版された。

¹²¹ 『井上日華新辞典』の序文、六角恒廣と山根幸山の研究を参考してまとめた。

¹²² 例言には「本書は井上日華新辞典に訂正増補を加へ之を袖珍型に改編せるものなり。」とある。

原稿『日清語辞典』は1911年頃に北京で完成し、1936年に山口高等商業学校の図書館に寄贈された¹²³。全部で12冊ある。すべての直筆原稿が残っているのは珍しいといえる。前述のように、この辞典の出版は運命に弄ばれた。井上は1923年の震災をきっかけに前の原稿に増減を行ったが、筆者がその修正された内容を上掲の直筆原稿と比較したところ、東亜経済研究所所蔵の『日清語辞典』には修正が書き入れられておらず、著者は他の複写版を用いて修正を行っていたことがわかった。『日清語辞典』は1911年に完成した正本のままであると推測できる。『日清語辞典』と出版本の名前が違う。これは中国が清国から中華民国に入る時代変遷に従い、「清語」を「華語」と変えたわけである。名前だけをみても、原稿と出版本とを隔てる時間の長さが想像できる。

『日清語辞典』の第1頁に「井上翠 昭和11年6月 贈寄」の印が見える。次の頁に「用清書ノ時ハ發音ノ順序ニ從ヒ排列スルヲ要ス」と「銀行用語 醫學上用語 陸軍用語 動植用語 電信電話 数学 物理化学」との説明がある。語の配列順序とその種類を表明している。

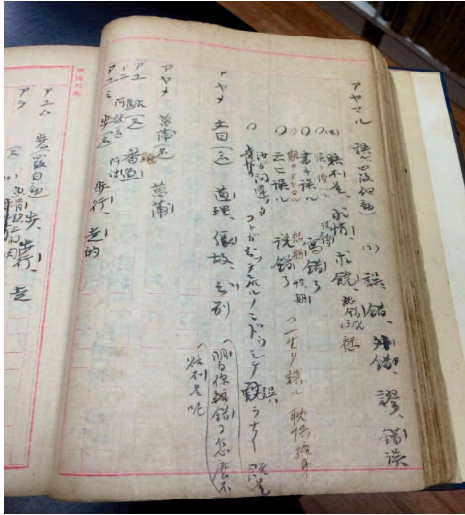
『日清語辞典』は直筆原稿であり、添削の痕跡が残っている。筆跡はすべて同じと見えるので、井上一人の筆跡であると判断できる。筆跡の色と墨跡から見ると、井上は少なくとも2、3回修正を繰り返した。

『日清語辞典』の形式は、まず日本語の単語を掲げ、下に中国語の解釈、例と関連する語句を配列している。日本語は全部片仮名で書き、中国語はその発音を殆ど表記しておらず、多音字の場合は例外的に特別に記している。たとえば、「睡早覺」の後に、「覺ハ chiao ノ去声」と付けている。『井上日華新辞典』では、「睡早覺(chiao4)」のような形式に変わっている。

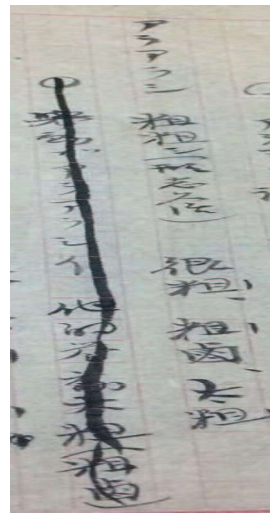
しかも、下の例の図①のように、井上は中国の単語と句に重念を横線で字のそばに引く形で表記する。これは刊行本に採用されない。

唉呀 可愛得 香魚 有人緣兒 和靄 應酬 行礼 天亮起来了

¹²³ 六角恒廣『漢語師家伝 中国語教育の先人人たち』東方書店、1999年、p. 256。



図①



図②



図③

原稿には修正された箇所が時々みえる。筆者が読める例を挙げて見よう。

	単語	修正前	修正後
1	アサクサガミ	紙名其質甚粗拭鼻涕拭糞多	手紙
2	火ノ手ガ上ル	火着起來	火炎冲上
3	手ガ明クナイ	没有閒着的功夫	膽不開身子
4	アヅカル	把人家寄放的東西或者銀子 收下	收留，收存
5	後先見ズニ事ヲスル	無思慮辦事	不前思後想辦事情
6	アラ	骨邊肉	魚骨頭上的肉
7	アイテ	對頭，對敵	對面兒的人 相對
8	アラソヒ	爭論，碰嘴	爭論，頂嘴
9	アオニサイ	年輕的人	奶牙還沒掉的
10	甘エタレタ口調	說話有嬌氣兒	說話有嬌氣
11	仕事ハ粗方出来マシタ	事情大概辦妥了	事情差不多都办完了

図②、③のように、例を消した箇所もあるが、はっきり読めないものが多いので、本表では一々出さないこととする。

原稿で、中国の世間で広く知れ渡っている諺を出して参考としているのがよく見られる。たとえば、「悪事」の項の、「「好事門を出でず悪事千里を傳ふ」好事不出門悪事傳千里」である。また、最初には出していなかったが、修正時に増加した箇所もある。たと

例えば、「アタマ (頭)」の項に、「頭ノ蠅 莫管他人瓦上霜」を、「アサ (麻)」の項に「心乱レテ麻ノ如シ」心乱如麻」を加えたことがある。

『井上日華新辞典』が原稿から増減した語を対照した結果、予測通り一定の規則がまとめられる。以下、いくつかの例をあげながら説明する。

まず、新しく増やした語は、下にあげたように大方が外来語であった。ア部を調べたところ、全部 52 個の語を付け加えている。

- ①アームチェアー (名) (Arm-chair) 摺手椅子、有扶手的椅子、圈手椅
- ②アーメン (感) (Amen) 亞們、心願如是
- ③アイヨウ 愛用 (名) 愛用、喜用
- ④アイロン (名) (Iron) 熨斗、烙鐵、燙鐵
- ⑤アウトライン (out-line) 外線, 外型, 大意, 大概, 大略, 綱領, 綱目

削減した語は、普段あまり使用されていない語、または時代遅れ気味の語である。ア部では 24 語が削除されている。5 例をあげてみる。

- ①アイコン (名) 銅牌子
- ②アイセウ 愛妾 (名) 愛妾
- ③アカダイコン 赤大根 (名) 紅蘿蔔
- ④アカラカニ 赤ラカニ (副) 有紅色 紅的
- ⑤アカル 明ル (四段自動) 開

また、同語であっても、訳にいくつかの変化が見される状況も多い。以下の例では、変化の部分を線で引いて表示する。

	『日清語辞典』の記載	『井上日華新辞典』の記載
1	アア (副) 「アア勉強シテハ體ヲ傷ネマス」 他那 ¹²⁴ 用功一定傷身子	「ああ勉強すると體をそこねます」 他那麼用功就傷身子
2	アア (副) 「アアシテ置イテオキナサイ」 先那 ¹²⁴ 摺着罷	「ああして置きなさい」 那麼摺着罷
3	アイキャウ 愛敬 (名) 可愛的 和顏悅色的 <u>有人緣兒</u> 和藹	あいきゃう 愛嬌 (名) 可愛的, 和顏悅色的, 和藹, 得人心得, <u>叫 人愛得, 吸引人的</u> 「 <u>顔に愛嬌がある</u> 」 <u>臉上和藹</u> 「あの支那語の上手が昨日一言云ひ損ねたがそれも愛嬌でした」

¹²⁴ 「麼」の略字。

		他那麼會說 中國話的昨天說 錯了一句倒有趣兒「動物園での愛嬌ものは猿です」動物園的動物最滑稽的還是猴兒
4	アイコ 愛顧 (名) 愛顧, 光顧, 抬愛	あいこ 愛顧 (名) 愛顧, 光顧, 照顧, 提拔, 惠顧, 栽培, 抬愛「毎度御愛顧を蒙り有難く存候」屢蒙照顧感謝不盡矣
5	アカヌケル 垢抜ケル (下一自動) 漂亮「アノ女は一シテ居ル」那個婦人漂亮	あかぬけ 垢抜 (名) 漂亮「あの女は垢抜して居る」那個婦人漂亮「彼の云ふ言葉はすっかり垢抜のした北京語です」他說 的一嘴的漂亮京話
6	アヤマル 誤ル (四段他動) 「汝が間違ったのが分かって居るにどうしてあやまらぬか」明白你辦錯了怎麼不賠不是呢(直す前) 明白你錯了怎麼不賠不是呢(直した後)	既是明白你錯了怎麼不賠不是呢
7	アラタニ 新ニ (副) コレハ新ニ舶来シタ上等ノ品デス 這是新近從外洋來的頂好的貨	これは新に舶来した品です 這是新近從外洋運進來的貨
8	アラレモナイ (形久活) 沒有道理, 不像樣兒	あられもない (形久活) 不像樣兒 (不體裁ナル) 不應該有 (アルベカラザル)
9	アリアワセル 有合 (下一段自動詞) 「アリ合セタ棒ヲ持テ打ッタ」拿起正在那兒攔着的棍子來打了他了(直した前) 拿起那兒現成的棍子來打了他了(直した後)	拿起那兒現成的棍子來打了
10	アラ (名) (1) 魚骨頭上的肉 (2) 短處「人ノアラヲ云フ」揭人的短處	あら (名) (1) 魚骨頭上的肉 (2) 短, 短處, 錯兒, 毛病「人のあらをさがす」挑斥, 揭人的短處, 找錯兒, 找碴兒, 挑毛病, 拿人的短兒, 找錯縫兒, 吹毛求疵「あらさがし」同上
11	アラカタ 粗方 (副) 大概, 大約, 差不多 「仕事ハ粗方出来マシタ」事情差不多都办完了	あらかた 粗方 (副) 大概, 大略, 差不多, 差不離「仕事は粗方出来た」事情差不多都辦完了「粗方勘定する」粗算, 草草的算「粗方知る」粗知大概

12	アラユル 有ユル (副) 所有	あらゆる 有ユル (副) 所有, 一切「 <u>有ゆる生物</u> 」所有生物「 <u>有りと有ゆる</u> 」所有一切, 一切無論什麼
13	アクドイ (形久活) 討厭, 麻煩, 囉瑣	あくどい (形久活) 惡麗 (修飾ノ)、太花哨 (同上)、油膩多 (味ノ) 口沈 (同上)、討厭 (ウルサシ)
14	アケユク 明行ク (四段自動) 天亮起来了, 天漸漸的亮、	「 <u>あけゆく</u> 」天亮起来了, 天漸漸的亮、 <u>天將曉</u>
15	アラ (代) 那, 那個	あら (代) (1) 那, 那個 (2) 他

以上の例をみると、大体的場合は解説と用例を充実させ、補充している。具体的には3番、4番、5番、8番、10番、11番、12番、13番と15番である。新しく加えた例には諺が多い。例えば、「悪事」の用例に「悪事を働く」做不好的事情，為非作歹を、「あけわたす」の用例に「砲臺「ハウダイ」を明渡す」讓交礮臺、「城を明渡す」の用例に「讓交城池，投降開城」をそれぞれ加えている。

そのほかに、2番、7番と9番が簡潔に直している。6番が「既是」という接続詞を使って文のリズムをよくするように感じる。14番が「天將曉」という文語的な言い回しを加えている。1番では、「一定」を「就」に変えているが、文の意味がまだ通じ合わないもので、訂正に失敗した例であろう。

また、原稿の用例を踏襲して採用していない場合もたまにはある。そのうち、下一段の活用動詞を略する扱いは決まっているようにみえる。2つの例をみる。

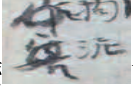
	『日清語辞典』の記載	『井上日華新辞典』の記載
1	アカム 赤ム (四段他動) 紅 アカメル 赤メル (下一段他動) 同上俗語 顔ヲ赤ム 臉上紅了, 紅着臉	あかむ 赤ム (四段他動) 紅, 紅着「顔を赤める」紅着臉、臉上紅了
2	アガム 崇ム (四段他動) 尊重, 尊敬 アガメル 崇メル (下一段他動) 同上俗語	あがむ 崇ム (四段他動) 尊重, 尊敬、恭敬, 恭維「誰も皆あの先生を崇めて居る」誰都恭維那位先生

外来語の見出し語の場合、『日清語辞典』では仮名だけを掲げているが、『日華辞典』では対応する英語を付け加えている。

アクセント (名) 重念

アクセント (名) (Accent) 重音, 重念, 語勢

次に、原稿の中で一旦直したにもかかわらず、『井上日華新辞典』では直す前の内容を採用する状況が少しある。下の例はその一つである。

『日清語辞典』の記載	『井上日華新辞典』の記載
貴下ソウ改マラナイデ少シオクツロギ下 サイ  您別這麼 請隨便坐	そう改まらないでおくつろぎ下さい 您別這麼作客請隨便坐

このように、井上は用語の選択を繰り返し考慮した様子が浮かび上がる。上の例では、現代標準語に照らせば、「拘泥」という語を用いるべきなのだろうが、井上が結果的に「作客」を選んだ。これは誤用であると断定することができず、地域の口語などを反映した特殊な用法である可能性がある。

以上のように、『日清語辞典』と、それに基づいて約20年を経て出版した『井上日華新辞典』とを比べると、後者には大きな変化が見られる。『日清語辞典』に書かれた見出しはほぼ引き継がれているが、時代の変化に従って外来語を補い、解説を詳しいものに直し、『日清語辞典』の旧語と冗句を削除し、体裁から内容までしっかり整え、規範するように工夫した。

一方、新資料である『日清語辞典』は、20年余りを経て刊行された『井上日華新辞典』と突き合わせることによって中国語の変化を明らかにすることができるという意味で好個の資料である。

2.4 まとめ

本章は明治・大正期の日本人が編纂した中国語辞典をめぐって考察したものである。筆者の調べたところに、明治・大正期の日本人が編纂した中国語辞典は、台湾語を除いて17点がある。それらを一々書誌的に考察することによって、日本近代中国語教育史の一空白を埋めることができた。中国語辞典の編纂に携わった井上翠について補充研究をし、特に現時点まで公開されていない『日清語辞典』を考察した。『日清語辞典』が直筆原稿で、井上翠が編纂した情景がいろいろと呈されている。『日清語辞典』及び17点中国語辞典は現在では通用できないが、そこに載っている見出し語と発音などが日本人の学習していた中国語の歴史を研究するための貴重な資料として注目に値する。

明治・大正期の日本人が編纂した中国語辞典の考察した結論は以下の通りである。

第一に、速成中国語を要望した背景のもとに作成された中国語辞典は、その形式と内容には局限性があると言わざるを得ないが、唐話時代と比べると鮮明な進歩が見られる。中日辞典でも日中辞典でも、凡例に始まり検字表に終わり、正文の見出し語と発音、品詞、用例、解釈さらに挿絵を並べている体裁は、すでに整備されている。

第二に、辞典の時代的な特色といえるのは命名と中国語の発音の表記法である。辞典の書名は中国語と日本語の翻訳する方向と関わらず日本語を先頭に立てるのは慣例であった。理由が複雑であるが、中国語が本気で外国語と認められず、実用語としての待遇されたことと関わっている。辞典の注音方法について、明治時代は「ウェード式」より「片仮名式」のほうが多く採用され、大正時代になると殆どが「ウェード式」を採用することになった。ウェード式の発音が一番正しいが、明治期はまだ日本人の便宜のために仮名式を採用した。大正期に殆どがウェード式を採用したことは、言語学上の科学性を優先した結果で、中国語辞典の一進歩である。

第三に、井上翠の原稿である『日清語辞典』と 20 年あまり後に出版した『井上日華新辞典』の一部分を比較して、大いに変化していることがわかった。解説が詳しくなり、体裁がよく整えられて規範的になった。中国語の表現では、旧語と冗句を新語や簡潔な語に変わってきたのが窺えた。さて、個々の中国語の選別した基準について本論では深い分析を行うことができなかった。

『日清語辞典』と『井上日華新辞典』を比較して、中国語の変化について綿密に検討する作業は、今後の課題とする。

第3章 明治北京官話教育初期に日本人が学習した北京語

—西島良爾の著書を中心に—

明治初期、北京官話への転換とともに、新しい教科書と辞典が用いられるようになった。これらの教科書や辞典の内容は一見すると、伝統的な言語習得の手法をふまえた単語集のようにみえるが、詳細にみると、書物によって言語の表現、文の文法などには違うところがあることに筆者は気付いた。そして当時、日本人が北京官話と称していた言葉は、実際は北京語とは少し違っていたのではないかとの思いが強くなった。近年、中国語史の研究資料として日本人が明治期に著した中国語教科書が注目を浴びている。そこで、この章では、西島良爾の『清語会話案内』と『四声標註支那官話字典』を利用し、日本人向けの北京語の内容の範囲、言語の特色、表現方法などを分析する。

3.1 『清語会話案内』の北京語の考察

1876年（明治9）からの北京官話教育の誕生に伴い、官立、私立のさまざまな形の中国語教育機関が生まれた。これに伴い、必要となる北京官話教科書をはじめ学習参考書も次々と出現した。これらの中の1点として、西島良爾によって『清語会話案内』という北京官話教科書が1900年に出版された。『清語会話案内』の内容の多くは西島が著した多くの教科書に踏襲されているので、その内容は北京官話教育初期において、日本人が広範に学習し、受容していたと判断できる。

以下では、『清語会話案内』の成立経緯について考察しつつ、その中に収められている言語を、先行研究と同時代の別の著者による教科書と比較しながら考察する。

3.1.1 『清語会話案内』の成立

『清語会話案内』（以下この章では『案内』と略す）は、1900年7月に上巻が、11月に下巻が、いずれも青木嵩山堂から刊行された。上巻は「単語」「散語」「抄話」、下巻は「単語」「續散語」「問答」「抄話」と付録「檢字」により構成されている。上巻の巻頭に、大阪控訴院長・加太邦憲による「弑語九鼎」の立派な題字があり、西島の中国人の恩師・長白桂林が序文を寄せている。序文は1892年に書かれていることから、上海貿易研究所に在学中の西島が講義録を持参し、教師の長白に序を求めた情景が浮かび、当時西島が既に教科書を作る意図を持っていたことが窺える。桂林が序文に「東国の西島君は博聞強記にして抄録に勤む。逐日の課程、之を集めて帙を成し、余に一言を乞ふ¹²⁵。」と書い

¹²⁵ 原文は「西島君博讀強記而勤於抄録逐日課程之成帙乞余一言」であり、日本語の翻訳は柴田清継（『西島

ているので、西島が中国語を学んでいた時に、子細に抄録・記録していた姿が想像でき、それが『案内』の源となったのは明白である。

『案内』の下巻には、官星階が序を寄せ、「西島君は抄録したものを本二冊とし、その序文を私に求めてきた。どこを見ても感嘆を禁じえず、難しい言語を实によく勉強しているのに感心した¹²⁶。」としている。自序にある「本書編纂ニ付テハ……多年師事セル桂林、馬耀春、陳文藻、官星階、御揮肅等諸先生ノ講話ヲ蒐集セルモノニシテ別ニ予ガ一個ノ卑見ヲ以テ語句ヲ作成セルモノハ之ヲ前記ノ諸先輩ニ訂シ勉メテ其謬リナカラコトヲ期シタレバ語言トシテハ稍ヤ遺憾ナルベシト信ス」という記述から、『案内』は中国人の助言と修正をうけたことが分かる。

筆者は、『案内』の成立を考察する過程において、構成と内容の比較により、『案内』が『華語跬歩』から多く引用しているのを発見した。『華語跬歩』は御幡雅文の著書で、1886年に初版、1890年に増刊が出版され、1908年の第7版に至るまで刊行が続けられた。御幡は上海日清貿易研究所の教員であり、以前、北京に留学していた時に中国人教師から教えられたものを書き留め、同書を著し出版した。御幡は既刊版の増訂をしたいと思っていたが、なかなか出来ず、1890年上海日清貿易研究所に赴任した時には1886年の初版をもって教科書とし¹²⁷、同年に改版刊行した。従って、1890年にその研究所に入学した西島は、『華語跬歩』の内容を学習していたはずである。

『華語跬歩』の1901年版に序文はない。1903年版には長白桂林の序文があり、その日付は1891年2月で、「既而將刊續卷。屬余校訂。其中百工庶務。罔所不該。」と記すように、御幡は校定作業に丹念に取り組んでおり、1903年版は既刊を踏まえての増刊である。従って、1901年版も1891年以前に出来あがったと推測される。時間的にみて『華語跬歩』が『案内』を参考にすることはありえない。

『華語跬歩』に収録された単語は15類に分けられ、それぞれの関連語句が配列してある。この形式は、御幡が東京外国語学校で南京語を学んだときに使用した『漢語跬歩』に準じているので、その書名もおそらくそれを模したのであろう¹²⁸。『漢語跬歩』は編者・刊年不詳で、全体の構成は、〔複写資料1〕のように関係する言葉を部と類に分けて配列する方法をとっている。これは、江戸時代の唐話の教本類に見られるものである。『華語跬歩』は北京官話教本であるので、両書の言語の表現が大変違っているようにみえる。

『漢語跬歩』、『華語跬歩』、『案内』の3点の教科書の形式上の変化を比較するため、複写資料を下に示す。

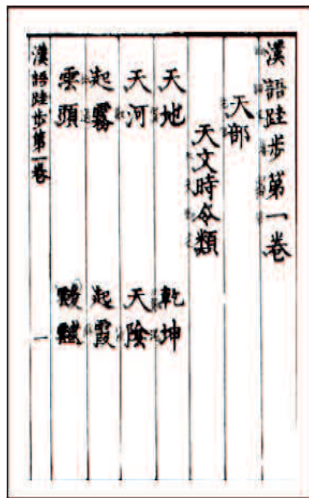
良爾—中国語とともに生きた明治人』2002年)を参考。

¹²⁶ 原文は「函南西島君。摘録日課。集成甲乙二卷。索敘於予。因捧其集。回環披閱。不禁觸感。竊嘆。言之不易而其功用大哉偉矣。」であり、訳は筆者。

¹²⁷ 六角恒廣『漢語師家伝 中国語教育の先人たち』東方書店、1999年、pp. 152-154。

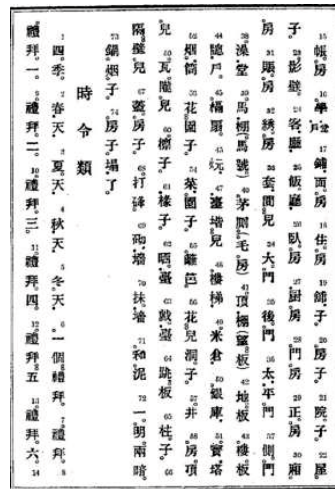
¹²⁸ 六角恒廣『漢語師家伝 中国語教育の先人たち』東方書店、1999年、p. 151。

複写資料 1



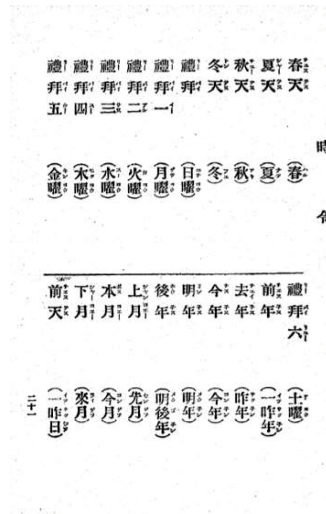
出典: 『漢語跬步』¹²⁹ (刊年不詳)

複写資料 2



出典: 『華語跬步』 (1901)

複写資料 3



出典: 『清語會話案内』 (1900)

3点の教科書の形式は、同類の語彙を縦書きしているが、『漢語跬步』と『華語跬步』には発音表記と日本語の翻訳を付けず、対して、『案内』は付け加えている。江戸時代の南京官話教育において、多くの単語やフレーズを暗唱することにより、大量の語彙を習得していく教育方法が、明治時代に北京官話教育に切り替わった後も受け継がれ、採用されている。

『漢語跬步』は四巻からなり、すべて単語と短いフレーズを一々並べている。第一巻の言葉の分野立てが『華語跬步』の参考にされているように見える。すなわち「天文時令類」、「地理類」などの分類方法である。『漢語跬步』は分量が『華語跬步』のおよそ2倍の多さである。そのうち少量の言葉は『華語跬步』において唐話から北京語に取り換えられているように見えるが、全体の内容に継承関係まではみられていない。

それに、会話という形式は唐話教科書にはすでにあるが、普及していなかった¹³⁰。しかし、こういう伝統が北京官話教科書に広範に受け継がれた。近代日本の中国語は実用的・実利的な会話本位の外国語¹³¹と認められている。『語言自邇集』をはじめ、それを受けついで日本の中国語テキストは、「問答」、「談論」という型式のなかで、主人と召使・外国人とを配して、有閑階級の人々との空談・宴会・観劇・訪問・会見などの社交の術を教えている¹³²。『漢語跬步』には会話の形式がみられていないが、「宴友往來逢迎尋訪類」のような会話に使われる言葉が集められている部分がある。『華語跬步』、特に『案内』には、「問答形式」の会話文が新しく加わった。例を挙げてみる。

¹²⁹ 『中国語教本類集成』第一集第一巻に収録されている。
¹³⁰ 李無未・陳珊珊『日本明治時期的北京官話「会話」課本』(2006)を参考。李・陳は唐話教科書である『唐話纂要』(1716)に載せている会話を例として挙げている。
¹³¹ 六角恒廣の論旨の1つである。六角恒廣『近代日本の中国語教育』不二出版、1996年、p.129、132。
¹³² 六角恒廣『近代日本の中国語教育』不二出版、1996年、p.130。

(1) 你是哪兒的、(2) 我是送信的、(3) 是給誰的信、(4) 是給這院裡高老爺的信、
(5) 你在那公館裏、(6) 我在德國公館裏……

(1) 汝ハドコノ者カ (2) 私ハ配達人デス (3) 其ハ誰ニ遣ル手紙カ (4) 是ハ此屋敷内ノ高旦那ニ遣ル手紙デス (5) 汝ハ何處ノ公使館ノモノカ (6) 私ハ獨乙ノ公使館ニ居リマス…

(『華語跬歩』 p.1 翻訳なし・『清語会話案内』p.61「帶信找人」)

(1) 您貴國是那一國 (2) 我是日本國人 (3) 貴姓 (4) 賤姓西島沒領教您納 (5) 賤姓李貴臺甫… (22) 那我是萬幸了我們倆雖然隔着有幾千里今兒僑們同宿也實在是
有緣您若不嫌棄我們外國人請您和我一塊兒搭幫走行不行 (23) 求之不得々々々々就
遵命罷…

(1) アナタノオ國ハドチラデスカ (2) 私ハ日本國人デス (3) ゴ苗字ハ (4) 賤姓ハ西島デス伺ヒマセンガアナタハ (5) 賤姓李ト申シマス…

(『清語会話案内』 p. 104「外人進京」)

『華語跬歩』と『案内』の会話に備わった性質は、六角恒廣が述べたように、実生活の色彩が強いことである。町を見物し、時間を打ち合せ、訪問、出逢った人との挨拶…いずれも日本人が中国の現場で生活を送るための会話である。

『華語跬歩』と『案内』の章立てを比較した結果を表 3.1 に示す。数字は対応する項目の数である。筆者が資料として用いた『華語跬歩』は 1901 年版と 1903 年版である。

表 3.1 『華語跬歩』と『清語会話案内』の比較

『華語跬歩』		『清語会話案内』	
		上巻	下巻
官話音譜	官話平仄編		
百家姓	天文類 53	第一章 單語 1-51 頁	第一章 單語 1-26 頁
地輿類 135	房屋類 74	數目 101 百家姓	第一 名稱 (國名 21、清
時令類 174	水火類 271	地名及官名 118 天文地理 58	國中央部官制 54、
稱呼類 174	舖店類 76	房屋 50 時令 54	雜名 56)
身體類 141	飲食類 126	人倫職業 88 店舖 40	第二 軍用語 142
傢伙類 附衣冠類 210		身體 48 飲食 50	第三 法律語 134
禽獸類 附昆蟲類 55		衣服 32 家具 44	第四 商用語 136
葯材類 29 疾病類 19		禽獸虫魚 76 金石藥材及	第二章 續散語 27-60 頁
貨物類 53 顏色類 13		病名 58	第三章 問答 61-106 頁
散語類 538 續散語類 566		草木花實 38 雜事 114	第四章 抄話 107-167 頁

家常問答	第二章 散語 52-139 頁	
接見問答 (1901 版無し)	短句	
常言類 (1901 版無し)	雑語	
	第三章 抄話 140-163 頁	

内容の継承ないし増減状況について、表 3.1 で、内容に共通点のある篇名には筆者が下線を引いた。『華語跬歩』は単語とフレーズと関わらず、分野によって言葉を並べている。『案内』はそれを分けて、単語は単語の部分におき、フレーズが散語の部分に収められている。

形式上の相違について、複写資料をみると、両書とも各方面の用語と事柄が分類別に集められているが、構成の面で『案内』のほうが系統的であるの是一目瞭然である。『華語跬歩』には発音表記が無く、ほとんどの中国語には日本語の意味を付していない。それに対して、『案内』は、下巻の「抄話」以外、全ての内容を国語に片仮名による発音表記と日本語の意味を付けているような体裁で並べている。中国語だけしか載せていないのは「抄話」のみである。「問答」の部分では、『華語跬歩』の 1901 年版に 36 話、1903 年版には 50 話があるのに対して、『案内』にはただ 19 話であるが、一つ一つの会話にタイトルをつけているので、形式はより整然としている。このように、西島は『案内』を教科書としてより完備した形にして教師と学生に提供した。

「単語」部分では、『案内』は殆ど『華語跬歩』から引用している。すべて数えないが、「天文」の 96% (24 語/25 語)、「地理」の 97% (32 語/33 語)、「地名」の 67% (55 語/82 語)、「時令」の 98% (52 語/53 語) は『華語跬歩』に見られる。『華語跬歩』の量が多いので、『案内』に選別され継承されているようである。「大胡同兒」「小胡同兒」「死胡同兒」を「胡同兒」1 つにして収録している場合は、3 つの語の 1 つしか引用されずにするという厳しい数えかたで、継承される語彙の割合はそれぞれ「天文類」30%¹³³、「地輿類」70%、「房屋類」53%、「時令類」63%である。このように、『案内』は『華語跬歩』の大部分の単語を採用している。それに、『華語跬歩』の「散語」の数字の内容を繰り上げて、単語のはじめに置いている。

ところが、『華語跬歩』が類義語を並べている場合は、『案内』はそのうち必要と思われる単語しか継承していない。例えば、「現在 (目下) (現今) (脚下)」のうちの「現在」だけが『案内』に収録されている。その単語の選択理由はここで追究せず今後の課題としたい。

『案内』は『華語跬歩』の大部分を拾集したものの、軍用・法律・商用の専門語は新たに補っている。これは西島自身の経歴と、当時の軍事政策や貿易上の必要性和関わっ

¹³³ 「天文類」の場合は、「太陽冒嘴兒」のようなフレーズが多く、一部分が『案内』の「散語」の部分に収められることになり、また「下雨」が「雨」に、「下雹子」が「雹子」に、「打雷」が「雷」に切られて収録されたものが多いので、継承される語彙の割合が実際に少なくない。

ていると思われる。以下、『案内』の天文地理、生活飲食、軍事商売など多岐にわたる単語の例とその語数を挙げる。原文が載せている日本語の対訳を後の（ ）に記すことにする。「清国（中國）（清國）」のような場合の見出しのすぐ後の（ ）は別の言い方を表している。

<上巻>

数目	一（一）	十萬（十万）
百家姓	趙錢孫李	周吳鄭王
地名及官名	清国（中國）（清國）	安徽（淮）（安徽）
天文地理	太陽（日）	峨眉月（三日月）
房屋	皇宮（皇居）	京城（北京）
時令	春天（春）	禮拜（日曜）
人倫職業	皇上（萬歲爺）（天皇）	買賣人（商人）
店舖	公司（會社）	鞋舖（鞋屋）
身體	脑袋（頭）	癩子（跛）
飲食	早飯（朝食）	茶（茶）
衣服	褂子（上衣）	棉花（木綿）
家具	飯碗（飯碗）	匙子（サジ）
禽獸虫魚	孔雀（孔雀）	狗熊（熊）
金石藥材及病名	金（金）	水銀（水銀）
草木花實	橘子（橘）	菊花（菊）
雜事	旗子（旗）	馬車（馬車）

<下巻>

名稱		
國名	日本國（東洋）（日本）	俄國（露西亜）
清國中央部官制	宗人府（皇族局）	吏部（内務省）
雜名	機器局（兵器製造所）	海關（税關）
軍用語	陸軍（陸軍）	兵船（軍艦）
法律語	法律（法律）	刑罰（刑罰）
商用語	會館（會議所）	公所（事務所）

それらの語彙を見ていえるのは、作者はなるべく多分野にわたる単語を収集していたのであろう。上巻と下巻の単語の性格が違い、上巻は社会・生活と緊密に関わっているが、下巻は追加されている単語が政治・商業の用語に偏っている。

また、「散語」の部分は、『案内』は全般的に『華語跬歩』の「散語類」を踏襲した足跡がみられず、指示代詞、方位詞、動詞、量詞、フレーズの順に並べているが、『華語跬歩』にある長い句の部分を一部取り出しているものが時々目につく。1例を挙げる。

『華語跬歩』	『清語会話案内』
懂得了沒有(懂得了麼)(p.11)	懂得(知テ居ル) 不懂得(知テ居内)(上p.53)

さらに、『華語跬歩』の「家常問答」は『案内』では「問答」と改められたが、ほぼ同じ内容である。『案内』ではテーマがおかれている。たとえば、『案内』下巻の第三章「問答」の、第一「帶信找人」、第二「送肉不新」、第三「商量逛街」、第四「辨事等人」、第五「托人買書」、第六「小的請安」、第七「貨價不對」、第八「逛廟碰人」がそれぞれ『華語跬歩』(1901)の「家常問答」の第一、六、七、三、十二、十八、十四、二十に対応し、第十九章の「外人進京」は『華語跬歩』の第三十六に対応するが、話し手は御幡から西島にかわり、会話の結末も少し変わっている。『華語跬歩』の「家常問答」を除く一部分の内容は『案内』の上巻の「抄話」に引用されている。『案内』の上・下巻の「抄話」の殆どは新しいものである。そのほか、語気詞については『案内』も重点を置き、「凡例」で特別に説明している。このような教科書は利便性が高かったであろう。

なお、『華語跬歩』の翻訳版は伴直之助による『華語跬歩総訳』(1904、1907)、及び御幡による『増補華語跬歩総訳』(1910)として出版された。この2点の出版年は『案内』より遅いので、伴や御幡が『案内』を参考にしたか、御幡の訳文を伴が参考にしていたかなどを検証するために、三書を比較してみたが、参考にした形跡は見られなかった。同じ内容の問答の一句の例を挙げてみる。

如何デス私が昨日二度アナタヲ尋ネタガオ留守デシタ。私ハ此二三日マコトニ多忙デス。

『案内』(1900)(句点は筆者)

昨日私は兩度、あなたを御訪ね申しましたが、どーして、あなたは、いつも御留守でした。私は此頃大層忙しいのです。

『華語跬歩総訳』(1907)

何ンデ昨日ハ私汝ヲ二度モ御訪ネシタノニ、汝ハイツモ御留守デシタ。ソーデス私ハ頃日真ニ多忙デスカラ。

『増補華語跬歩総訳』(1910)(句点は筆者)

このように、3例は全く同じではない。『華語跬歩総訳』と『増補華語跬歩総訳』全体に目を通して、同じ主旨の会話があっても、表現が異なっている。両者は、いずれも『案内』を参考にせず、互いに引用もしていないことが分る。

以上のように、『案内』と『華語跬歩』の関係について、西島は、『華語跬歩』の1890年版を学習し、抄写し、その内容に系統的な分類を施し、新しい内容を補い、発音と解釈を付けて『案内』を出版した。或は『華語跬歩』を目の前に置き参考にしたかどうかは今となってはわからないが、『案内』は『華語跬歩』を踏襲したと断定してよいであろう。

3.1.2 『清語会話案内』の北京語

3.1.2.1 北京語教科書としての『清語会話案内』

西島良爾は『案内』の凡例で北京官話について以下のように説明している。

清國各省至ル處語言ヲ異ニスト雖今日之ヲ大別シテ南北官話ノ二種トス蓋シ中人以上及商工者間ニ普通スルモノニシテ最モ廣ク用ヒラレ又最モ重ゼラルヽ所ノモノナリ本書ハ北京話或ハ京語ト稱スルモノ即チ北京語ナリ

これをみると、西島の理解は以下のようである。中国の言語は南京官話と北京官話という二種に分けられる。中上階層及び商工者の間に最も広く使用されているのは北京語である。北京語は北京話或は京語とも呼ばれている。

このように、『案内』の言語は北京語である。北京語と北京官話の概念をはっきり説明してない。という、日本の北京官話教育においても、北京語を基準とし行っていることは普通である。つまり、北京官話と北京語は実際に同じものと思われる。

『案内』の言語の実質を考察するために、先ず清朝の北京語について最も権威がある太田辰夫の研究を基準とし対比してみよう。太田は1969年に、7つの常用語を材料として、またそれに先立つ1964年においては項目として72項目、そして単語100語以上を取り上げ、文法的、語彙的特徴に関する精緻な研究を通じて北京語の実態をまとめた¹³⁴。それは後の研究者に大きな影響を与え、基準にされ利用されている。本論は太田(1969)のまとめた7項目、及びそのほか太田(1964)の指摘した72項目のうちの17項目¹³⁵を指標として『案内』の北京語の性質を検証する。

¹³⁴ 太田辰夫『北京語の文法特點』（『中国語文論集』汲古書院、1995年、p.243。）

¹³⁵ 17項目は、同じくある太田辰夫(1964)の指摘した北京語の特徴を利用してある教科書の北京語の実態を考察しようとしている山田忠司の『清末北京語の一斑『燕語新編』を資料として』（2003）という先行研究を参考して選び出す。

以下、その比較結果を表 3.2、表 3.3 で示す。表の「合致・否」欄の符号の○は合致する、×は合致せず、●は一部が合致、一部が合致しない、のを意味する。『案内』の用例欄は『案内』の中の 1、2 例を取り出したものである。なお、文の後ろの（ ）内の「上」は「上巻」を、「下」は「下巻」を表し、収載ページを示した。

表 3.2 太田（1969）の北京語の 7 つの特徴を用いた『案内』の言語の検証

No.	太田（1969）北京語の 7 つの特徴	合致・否	『案内』の用例
1	一人称の包括形 (inclusive) と除外形 (exclusive) を「咱們」「我們」で区別する。「俺」「咱」は用いない。	○ 「咱們」が少なく、「僂們」が多い	你要没事咱們找一个地方細細談々好不好 (下 p. 101) 你這程子沒有找僂們那位朋友去麼 (下 p. 81) 我們哥兒三 (下 p. 86)
2	介詞「給」を有する	○	我今兒個恭々敬々の。給您道喜來了。 (下 p. 31)
3	助詞「來着」を用いる	○	都在什麼地方來着 (上 p. 103)
4	助詞「哩」を用いず「呢」を用いる	○	人家病了。快沒指望得時候兒。雖然東廟燒香西廟禱告。那能靠得住呢。 (下 p. 47)
5	禁止の助詞「別」を有する	○	請您千萬別見怪 (下 p. 29)
6	程度副詞「很」を状語 ¹³⁶ に用いる	○	我很信了 (下 p. 145)
7	「形容詞」+「多了」で、「ずっと、はるかに」の意を表す	○	光景風俗。比從前差多了。 (下 p. 130)

¹³⁶ 中国語の「状語」（「連用修飾語は」とも呼ばれる）は、述語の前に置き、状態・程度・時間・場所・原因などを表す修飾的な成分である。状語になる語は副詞、時間詞、助動詞、代詞、形容詞、動詞、修飾フレーズなどである。

表 3.3 太田（1964）の北京語の特徴を用いた『案内』の言語の検証

No.	太田（1964）北京語の特徴	合致・否	『案内』の北京語用例	『案内』の他の表現
1	自称の代名詞「自各兒」がある	○	他不理 只顧自各兒喝。	你各人會梳不會 (下 p. 89) 是你一個人去的麼 (下 p. 78)
2	名詞のあとに「甚麼的」をつけて「等」の意を表す	● 甚→什	上海漢口煙臺天津 什麼的 (下 p. 105)	なし
3	「いつ」を表すのに「多咱」「多會兒」を用いる	● 「多咱」 ある「多會兒」なし	多咱開的市 (下 p. 94)	你幾時到的 (上 p. 69)
4	北京では「這程子」を用い、「這些時」を用いない	○	你這程子沒找咱們 那位朋友去麼 (下 p. 81)	なし
5	金額を問う「多兒錢」という言い方は南京官話にはない	×	なし	①現在你是多少銀子 不賣罷 (下 p. 77) ②多少錢買的 (下 p. 67)
6	北京官話には「倆」「仨」など数詞と量詞の合体した語がない	● 仨→三	我們哥兒三 (下 p. 88)	
7	「～的「得」慌」は一部の心理・感覚をあらわす。動詞に付きその程度をあらわす	×	なし	なし

8	起点を表すには北方では「起、解、打」を用い、南方では「從、由」を用いる	●	①我那天起天津來。(下 p. 50) ②打這就忙了(下 p. 111)	從那兒來(上 p. 68)
9	「大」を程度副詞に用いる。しかしそれほど自由には用いられない	○	①第二天。太晴了。(上 p. 158) ②太醉了(上 p. 152)	なし
10	「すっかり」、「ぜんぜん」などの意を表す「所」がある	×	なし	
11	「準」を「たしかに、きっと」の意の副詞に用いる	○	巧了買的準便宜罷(下 p. 84)	なし
12	「管保」はあるが「保管」はない	×	なし	なし
13	「敢情」「敢自」がある	● 「敢情」 ある「敢自」なし	這棵樹怪不得不長葉兒呢。敢情樹根兒。都叫螞蟻蛀着了。(下 p. 37)	なし
14	「左不過」はあるが「横豎」はない	×	なし	なし
15	「也許」「行許」など「許」によって推測をあらわすのも北方語である	×	なし	なし
16	類似を表す「…似的」を用いる	○	拿起來跟紙的似的(上 p. 104)	なし
17	「不咖」「別咖」のごとく接尾辞「咖」を用いる	×	なし	なし

以上のように、『案内』の北京語は太田（1969）の清朝北京語の7つの特徴とすべて一致する。太田（1964）の指摘する北京語の特徴では、17の項目のうち、半分以上が合致する（全部合致するものと一部が合致するものを含める）。表3.3の10番の「所」の代わりに、『案内』では「都」を使っており、この「都」は地域に関わらず常用語である。このように、『案内』の言語は清朝の北京語の特徴に合致し、北京官話を標準とする教科書であることが論証された。

3.1.2.2 『清語会話案内』の南京語の要素

『案内』の言語の標準が北京語であることは疑う余地はないが、表3.3に示した不一致の部分に、南京語が存在するものがある。そこで、『案内』はどのくらい南京語を採用したか、調べてみた。南京語と判断するための一次資料は少ないが、ここでは、前述した太田辰夫の論と、『「官話類編」所収方言詞対照表』（尾崎實 2007）¹³⁷、及び「清代南京官話方言の一斑—泊園文庫蔵『官話指南』の書き入れ」（日下恆夫 1974）¹³⁸論文の3つに見える南京語を『案内』の本文から見つけ出し、表3.4の中段に列挙した。日本語解釈は、『案内』に載っていないものは筆者が加えた。対応する言葉がない場合は「なし」で表記する。

表3.4 『案内』に見られる南京語と北京語の対照表

日本語	南京語	北京語
おととい	前天	前兒個
昨日	昨天	昨兒・昨兒個
今日	今天	今兒・今兒個
明日	明天	明兒・明兒個
安い	便宜	賤
見る	看看	瞧瞧
いくら	多少錢	なし
いつ	幾時	多咱（偌）
から	從	起・打
非常に	實在・十分	頂など
文末語気詞	咯	呀など

¹³⁷ 尾崎實『尾崎實中国語学論集』好文出版、2007年、p. 361。

¹³⁸ 『関西大学 中国文学會紀要』第五號、1974年、p. 20。

結果として、『案内』にある南京語、或は南方語は非常に少ない。例えば、『案内』下巻の第三、四章の「問答」「抄話」(pp.61-167)部分を調べて、「昨天」「今天」「明天」の意味を表す南京語と北京語の使用度数が以下のようである。

昨天 (7)	昨兒 (6)	昨兒個 (4)
今天 (4)	今兒 (6)	今兒個 (10)
明天 (2)	明兒 (3)	明兒個 (1)

この3つ時間を表す言葉はよく出ているが、類義語として、北京語は南京語より多く使用されているのは分かる。「幾時」は「你幾時來的(汝ハ何時来マシタ)」(上p.69)という一箇所しか見られず、そのほかある行動の時間を聞く場合はすべて「多咱(僂)」が使用されている。そのほかの南京語もだいたいそうであるが、「實在」は副詞として、「很」の次でている。「抄話」の部分で、「很」は16回、「實在」は9回みられている。「實在・十分」と「咯」は次の程度副詞の部分で詳細に説明する。

「南京語」から「北京語」へと転換する時期に際し、両方とも使用されたことは当然であるが、『案内』が北京官話の資料であることは疑う余地がない。

3.1.2.3 『清語会話案内』の北京語の実態

ここまでみてきたように、『案内』の言語は北京語の実態を反映していることは明らかである。この教科書の言語の性格を探ることで同時代の北京官話の実態を捉えることを目指し、『案内』に豊富に見られる程度副詞、文末語気助詞、および受身・使役を考察する。手法として、楊杏紅(2014)¹³⁹の関連成果を参照しつつ分析する。楊杏紅(2014)は『案内』以外に、『官話指南』をはじめ、10点の明治期の北京官話教科書¹⁴⁰を調査対象として、程度副詞を含んだ北京官話の文法について調査している。ここで、考察対象とする語が北京語であることを確認するために、『兒女英雄伝』¹⁴¹、『茶館』を主とする老舎の作品を基準とする。また、北京語でない場合、それが南方語であるかどうかを確認するために『上海的早晨』¹⁴²、『二十年目睹之怪現狀』¹⁴³を資料とし調査した。老舎の作品¹⁴⁴は北京大学中国語言学研究センターのコーパス(CCL)を利用して検索した。

¹³⁹ 楊杏紅『日本明治時期北京官話課本語法研究』廈門大学出版社、2014年。

¹⁴⁰ 『日本明治時期北京官話課本語法研究』は、主に『官話指南』『英清會話自學入門』『官話急救篇』『北京官話談論新篇』『清語教科書並續篇』『官話應酬新篇』『日英漢語言合璧』『北京官話支那語獨習書』『急救篇』『日華會話筌要』を材料としている。

¹⁴¹ 清代の白話体章回小説。文康作、四一回、1878年刊。北京語で書かれた。

¹⁴² 『上海的早晨』は周而復により1958年に創作され、尾崎實は『官話類篇』所収方言詞對照表において南方語の資料としている。

¹⁴³ 清代の小説、吳趸人著。尾崎實は『清代北京語の一斑』(1965)の中で本書を取り上げ、南方語の標準としている。

¹⁴⁴ CCIにある老舎の作品は『四世同堂』、老舎短篇、老舎長篇1、老舎長編2、老舎長編3、と老舎劇1である。

(1) 程度副詞

程度副詞とは、形容詞或は心理動詞の前に置いて、その程度を表す言葉である。表 3.2 の 6 番の「很」と表 3.3 の 9 番の「大」は、『案内』に多く使用されている。「很」「大」のほか、「頂」「眞」「太」「實在」「十分」「精」「勳」などもあるが、使用頻度が高いのは「很」と「頂」である。それぞれの例を挙げて説明する。

①「很」

「很」が状語として使用される例を、表 3 の 6 番に挙げた以外に 2 例挙げる。

- i 很攢倆錢（上 p.156） 彼はお金持ちである。（筆者訳）
- ii 其實他很沒有錢（上 p.156） 其實金ハ少シモナイ

このように、「很」が文の中で心理動詞ではなく動作動詞を修飾する役を担うのは、文法上現代中国語では通じなくなっている。太田（1969）によると、表 3 の 6 番のように、「很」の状語としての用法は清朝の北京語の特徴の一つである。

その他、「很」は、程度副詞として形容詞の前に多く使われている。

如今的人都很刻薄（下 p.39） 只今ノ人ハマコトニ薄情ダ

また、「很」は「形容詞+的很」の構造で、以下の例のように補語としての用法も多く見られる。

因為他鹽攔多了。勳鹹的很。（下 p.53） 彼ガ鹽ノ入レ方ガ多イ為ニ鹽辛クテタマラヌ

この 2 つの用法は、筆者が調べた資料のすべてに多く載っていたので、北京語、南京語に関わらず基本語または通用語である。

②「頂」

「頂」について、太田（1981）によれば、元来は頭の最上部を意味し、また広く物の一番上のところをもさす。これが副詞となって「最」の意味に用いられるようになった。清代前期には北京語で一般的に使われることはなかったが、後期からみえるようになった。或は南方の方言であったかもしれない¹⁴⁵。『案内』に出てくるいくつかの例をあげてみる。

¹⁴⁵ 太田辰夫『中国語歴史文法』朋友書店、1981年、p. 269。

i 頂胖大的 (上 p.108) 太ッテ居ル

ii 這眼井是頂深的呀 (上 p.105) 此井戸ハ非常ニ深イデスカ

iii 好的雖多那些個裡頭我頂喜歡的這一個 (上 p.118) 好イノハ多ケレドモ其中デ私ノ望ムノハ此一ツデス

「頂」の意味を見ると、③は「最も」の意味であるのは確かであるが、i と ii は「最」までには至らず「很」にあたる。楊杏紅 (2014) も、「頂」は「最」と「很」の2つの意味があるとしている。また、『清代南京官話方言の一斑一泊園文庫蔵「官話指南」の書き入れ一』で、「頂要紧」の例の「頂」を検討したときには、「頂」は南で用いられていると指摘し、共に『北京語の文法特徴』(太田辰夫)の説に合致するとしている。これからすると、「頂」は南京語の要素として『案内』に入っていることになる。「頂」は楊杏紅 (2014) においても北京語教科書に副詞として大量に出ているとされ¹⁴⁶、『案内』の20～30年後に書かれた老舎の作品にも見られる。『案内』には多数の用例があり、『上海的早晨』、『二十年目睹之怪現狀』にも用例がある。

以上から、副詞「頂」は、清末以降、南北方言を問わず通用していたと考える。

③「實在」

這實在可憐 (下 p.75) 之ハマコトニ憐レダ

楊杏紅 (2014) によれば、上記のように「實在」を程度副詞として使用することは、明治期の北京官話の教科書ではあまりないか、或はまったくないが、『案内』には5か所以上見られる。CCIのコーパス中の老舎の作品においては僅か8か所しかない¹⁴⁷のに対して、『上海的早晨』、『二十年目睹之怪現狀』には多量に使用されている。これによって、「實在」は北京より南方において通用していたのではないかと思われる。

④「太」

「太」は「很」「真」などより程度が甚だしいことを表し、「～過ぎる」を意味する。

我那個跟班的。太過於不小心。(下 p.45) 私ノアノ下男ハ不注意過ギルカラ

¹⁴⁶ 楊杏紅『日本明治時期北京官話課本語法研究』廈門大学出版社、2014年、p.82。

¹⁴⁷ 例えば、長編小説『无名高地有了名』には「看大家实在疲乏不堪了，他就说几句笑话，招大家笑笑，并且设法使大家轮流休息……」があり、戯曲『龍須沟』には「看她这么打里打外的，我实在难受」がある。

⑤「眞」

「眞」は「非常に」「真に」の意味である。

你想々差的眞利害了。(下 p.49) 汝想テゴ覽差ガアマリヒドイテハナイカ

⑥「十分」、「十分的」

「十分」、「十分的」を程度副詞とする例は、『案内』にはそれぞれ1つしか見られない。

i 十分討人嫌 (上 p.99) 十分人カラキラワレル

ii 他在外面很好。十分的平安。(下 p.43) 彼ハ外ニアッテマコトニ好ク十分ニ安全ダト云フ

「太」「眞」「十分」は『茶館』にも『上海的早晨』によく出てくるため、基本語と思える。「十分的」は「十分」の口語形式であるが、楊杏紅 (2014) によると、明治期のほか北京官話の教科書に、頻度は不明だが「十分」「十分的」がでてくる。『兒女英雄伝』と老舎の作品には「十分」が「十分的」より10倍ぐらい多く見られるのに対して、『上海的早晨』『二十年目睹之怪現狀』には「十分」が非常に多く「十分的」は全く見られない。これによって、「十分的」は北京語の口語にしか使用されていなかったと考えられる。

⑦「怪」

太田 (1981) によれば、「怪」はいうまでもなく「怪しい」「怪しむ」の意味であるが、「不思議に」「ひどく」の意に転じたものである¹⁴⁸。

怪澁的 (上 p.59) 澁イ

⑧「精」

「精」は程度副詞として「非常に」の意味で、『案内』には以下の1例しか見られない。

精的滿屋子精濕了 (上 p.115) 部屋中濕メツタ

⑨「齣」

「齣」は程度副詞として使用範囲は、味が塩辛過ぎ、甘過ぎの場合に限られている。

因為他鹽攔多了。齣鹹了的恨。(下 53) 彼ガ鹽ノ入レ方ガ多イ為ニ鹽辛クテタマラヌ

¹⁴⁸ 太田辰夫『中国語歴史文法』朋友書店、1981年、p.269。

以上のように、「怪・精・駒」は北京語の特色が濃く、今日でも北方のある地域で方言として使用されている¹⁴⁹。

また、北京語の特色である「大」の用例は表 3.3 の 9 番で示した 2 例だけが見られる。そのほか、「格外」「最」「越」なども稀に見られる。

日本の明治期の北京官話の教科書にある程度副詞は、楊杏紅（2014）によれば、主に「頂・很・太・挺・忒・好・越・多・怪・夠・短・稍微・略・些微・較比・一般・一邊兒・十分・非常・極其・萬分」などである¹⁵⁰。それと対照して、『案内』には「頂・很・怪・十分・越」は載っているが、それ以外はまったく見られなかった。その上、「實在」「真」が一定程度使用され、また「大」「精」「駒」「格外」もごくわずか見つかっただけであった。同じ北京官話教科書であっても、『案内』と他の教科書に載せている文に使われている程度副詞が違うということは、北京語といってもそれは均質ではないことを証明している。

山田忠司（2003）も北京官話教科書『燕語新編』を資料とし考察し、北京語と言ってもそれは均質的なものではないとの結論を出した¹⁵¹。本論は山田忠司（2003）の結論と一致する。北京官話の教科書の言語実態は、教科書の出典や、著者の学習背景などに関わっていると指摘できる。

副詞の使用範囲については、先行研究に対し、筆者は「頂」は南北方言を問わず通用していたと考える。そして、「實在」は北京より南方のほうでより通用していること、および「十分的」は北京語の口語にしか出現しないことを明らかにした。

(2) 文末語気助詞

文末語気助詞とは、文末や話し言葉でポーズが置かれる部分について、話し手の感情や態度を表す言葉である。語気助詞は疑問、推量、命令、感嘆、呼びかけ、念押し、確認などさまざまな感情を表す。明治時代において日本人が学習した北京官話は口語であるので、語気助詞が非常に多出することが予想される。『案内』には予想に違わず語気助詞が容易に見つかる。

上巻の「凡例」で、西島は、文末語気助詞はとくに「初學者ノ注意スヘキは語尾ニ付スル詞氣ナリ」とし、以下のように説明している。

¹⁴⁹ 例えば、この3字は方言で副詞として、以下の北方の地域の方言詞典（江蘇教育出版社 1997）に記載されている。

①怪：『哈爾濱方言詞典』 p.178、『西安方言詞典』 p.101、『徐州方言詞典』 p.201、『濟南方言詞典』 p.148

②精：『徐州方言詞典』 p.388、『哈爾濱方言詞典』 p.382、『濟南方言詞典』 p.307

③駒：『徐州方言詞典』 p.256、『哈爾濱方言詞典』 p.256、『濟南方言詞典』 p.203

¹⁵⁰ 楊杏紅『日本明治時期北京官話課本語法研究』廈門大学出版社、2014年、p.82。

¹⁵¹ 本論の序論の 4.2.2 を参考。

麼（來了麼、來タカ、疑問詞ナリ）
呀（該當的呀、當ニ然ルベキモノナリ）
罷咧（不爽罷咧、爽ハザルノミ）
呢（這準兒呢、之レハ正確デショウナ）
罷（來罷、才出デナサイ）
了（完了、終リマシタ）
的（我的、私ノ若クハ私ノモノ）
哪（吃着藥哪、藥ヲ食ベマスルヨ）

本論では西島に従い、これらを語気助詞として論じるが、「的」については異論を提出しておく。「的」の性質について、文法学者たちは歴史上さまざまな見解を出している。文末で語気を表す機能があるのは事実であるが、上記の「的（我的、私ノ若クハ私ノモノ）」のばあい、実際には、「的」は語気助詞ではなく、構造助詞である。上記の「我的」は、たとえば「我的書」の被修飾語「書」を省略し、連体修飾語だけで名詞句としての意味を表したものと見ることができる。たとえば、

那是個俗字字典上沒有的。（上 p.89） 之レハ俗字デ字引ニモナイ

である。しかし、「是」と呼応して断定を表す用例はもっと多い。2例挙げる。

- i 我想是黃泉路上沒老少的。（下 p.33）私ガ思フニ黃泉ノ路ニハ老少ノ差別ガナイ
- ii 真是白手成家的。（下 p.28）眞ニ空手デ儲ケダシマシタ

実際には、『案内』には「凡例」で書き並べているもののほかに、「啊」「来着」も多数使用されているが、「咯」は1例だけある。「来着」の用例は表3の3番に掲載したので、「啊」と「咯」の例を挙げる。

- i 你怎麼這麼貪心不足啊。（下 p.60） 汝ハ何故コンナニ貪テ足ルコトヲ知ラナイダ
- ii 鬍子都白咯（上 p.75） 髭ガ皆白クナッタ

「咯」は南京語であり、『案内』のみならず、楊杏紅（2014）が扱った明治期の他の北京官話教科書にも稀にしか出ていない。しかし、北京官話教育が日本に発足した時の最初の教科書である『語言自邇集』には大量に出てくる。その理由は、『語言自邇集』の著

者であるトーマス・フランシス・ウェードが長期にわたり中国南方で生活し、南京語である「咯」を採用したためである¹⁵²。

『案内』には、語気助詞「麼」が多くみられている。「麼」の発音の仮名表記は「マ」であるので、実は現在の「嗎 (ma)」である。太田(1981)によれば、「嗎」は是非疑問(肯定か否定かを問う)を表す場合、古代はほかの字で書かれ、宋代になると「麼」という字が用いられた。「嗎」という字が使われるようになったのは清代である¹⁵³。「嗎」は清代には中国の文学作品では「麼」より多く使用され普通になってしまったが、日本の北京官話の教材ではそうではなく、殆ど「麼」が使用されていたのである¹⁵⁴。

楊杏紅(2014)によると、明治期の日本の北京官話教科書に出ている主な文末語気助詞は「麼・罷・呀・哪 / 吶・咯・了・罷咧¹⁵⁵」である。『案内』も大体同じであるが、筆者の調べたところ、『案内』には「呢・的・啊・來着」も入っている。

(3) 使役と受身

『案内』において使役を表す場合、筆者の調べたところ「叫」のみが使われていた。2例を挙げる。

- i 我們老爺的意思就是留那倆舊家人叫我們這幾個人另找事罷。(下 p.75) 私共旦那考へ デハアノ二人舊イ家來ヲ残シ私共ニハ別ニ仕事ヲモトメサスル積リデス
- ii 真是叫我沒法子深不的淺不的。(下 p.54) 眞ニ私ハドウシテ好イカ分カラナイ

また、『案内』では、受身を表す場合でも「叫」を使うのが一番多い。「給」は、以下の3例のうちの③の1例しかない。

- i 這棵樹怪不得不長葉兒呢。敢情樹根兒。都叫螞蟻蛀着了。(下 p.37)
此ノ木ノ葉ガ長クナラナイハ不思議デナイナーニ樹ノ根ヲ蟻ガ食フタカラダ
- ii 在戲館裏扶我起來的那個人。準是個小絡。叫他偷了去了。(下 p.112)
芝居小屋で私を助け起こした人は、きっと泥棒で、彼に盗まれてしまった。(筆者訳)
- iii 給小絡偷了去了(上 p.77) 淘兒ニスラレタ

¹⁵² 楊杏紅『日本明治時期北京官話課本語法研究』廈門大学出版社、2014年、p.149・154。

¹⁵³ 太田辰夫『中国語歴史文法』朋友書店、1981年、p.360。

¹⁵⁴ 李無未、楊杏紅『清末民初北京官話語気詞例釈—以日本明治時期北京官話課本為依拠』(2011)を参考。李・楊は『官話指南』(1881)、『日漢英語言合璧』(1888)、『北京官話談論新篇』(1898)、『官話篇』(1903)を調査して、「麼」は『官話指南』に4例だけ見られる以外に、すべて「嗎」で書かれている、と結果した。

¹⁵⁵ 楊杏紅『日本明治時期北京官話課本語法研究』廈門大学出版社、2014年、pp.140-144。

李焯 (2004) によると、1890 年代以前の北京語では、「給」が受身を表すのは稀な用法であった¹⁵⁶。『案内』にも 1 例あるだけである。楊杏紅 (2014) によると、明治期の北京官話教科書では、「叫」を以て受身を表す比率が高く、「被」はただ少量使用されている¹⁵⁷。『茶館』を調べたところ、受身を表す言い方として、「叫」は 12 か所あったが、「被」は 3 か所に見られるのみであった。これに対して、『兒女英雄伝』では受身をほとんど「被」によって表し、「叫」の用例は見られない。この理由は考察する必要があると考える。

「叫」は使役と受身とに両用されるが、文の形からみれば、使役の場合は「叫〜」という形を取るが、受身の場合は「叫〜了」という文型である。しかし、現代語では、使役と受身は同じ形式であると言って差し支えない。使役と受身が同形式であるのは現代語或は白話¹⁵⁸に特有であって、古代語にはない¹⁵⁹。

以上のように、西島が編纂した教科書『案内』の北京官話を反映している価値を利用し、そこに使用されている程度副詞、文末語気助詞、使役と受身の表現方法を明らかにし、同時代の他の北京官話教科書などの状況と対照して、特に程度副詞の場合に一致しないところを多く発見した。調査を通じ、先行研究と一致しないところを指摘し、更に程度副詞と文末語気助詞に対して補充を行い、「頂」については先行研究に異論を提出した。

3.1.3 『清語会話案内』の誤訳

西島は中国語を母語とする中国人ではないため、自身が使い慣れている母語の語彙や文法などが彼の著書の訳文に反映している。これは 19 世紀末から 20 世紀始めの日本人編纂の中国語学習書のひとつの欠点であろう。以下に、誤訳の例を挙げる。左側は中国語、右側は西島の日本語の解釈である。

(1) 娘兒們 — 娘

他們家的那個娘兒們。是個好吃懶做的。(下 p.34) 彼ラノ娘ハマコトニナマケモノ

「娘兒們」は方言として女の意味であり、軽蔑の語感を持っている。日本語の「娘」には「親子関係における女の子、未婚の女性、娘分」など¹⁶⁰の意味があり、「娘兒們」とは異なっている。

¹⁵⁶ 李焯「清中葉以来北京話的被动“給”及其相關問題—兼及“南方官話”的被动“給”」『中山大學學報』2004 年第 3 期。

¹⁵⁷ 楊杏紅『日本明治時期北京官話課本語法研究』廈門大學出版社、2014 年、p. 183。

¹⁵⁸ 白話とは中国語における書き言葉の一種。知識人が古典を基礎として作った書き言葉であるのに対し、民間で話されている口語を反映させ、大衆にも理解できるように工夫されている。

¹⁵⁹ 楊杏紅『日本明治時期北京官話課本語法研究』廈門大學出版社、2014 年、p. 247。

¹⁶⁰ 『日本国語大辞典』第 12 卷、p. 981。

(2) 沒王法 — 仕方がない

有人溜進門來。把我的東西偷了好些個去了。咳。越發沒王法了。戴着老爺兒就鬧賊。(下 p.42) 人ガ門ヲ這入テ来テ私ノ品物ヲ澤山盜テ行キマシタアイ愈々仕方ガナイ日ノアル中カラ賊ガ鬧グカラ

「王法」は「国法／人を捕らえる時に使う道具¹⁶¹」という意味で、「沒王法」は「法律或は道徳を無視したり違反したりすること」であり、後ろの「戴着老爺兒就鬧賊」は昼間にあっても盗みを働くことをさすので、「沒王法」も泥棒を批判することである。「仕方がない」は「やむをえない」または「理不尽な事態に直面し肅々とその状況を受け入れながら発する文句」の意味を指すので、「沒王法」と異り、誤訳である。

(3) 吃飽了 — 食べ過ぎた (上 p.59)

「吃飽了」は「もういっぱい・満足するまで食べた」の意味で、「過ぎる」まで達していない。

(4) 明兒 — あした

問：你們家裡養活巴兒狗沒有 汝ノ家テハ犬ヲ飼テ居ルカ

答：我家裡有三只呢(中略) 私ノ家ニハ三疋アリマス

問：明兒再下的時候兒尋給我一個 明日マタ来ル時ニ私ニ一疋呉レルカ尋ネテ下サイ

答：等明兒有了我和我媽給你一個 (下 p.90) 明日私ガ母ニアナタガ呉レロト云フタト云ヒマショー

この場面では、「明兒」は「翌日」ではなく、「将来のある日」の意味である。これは現代の北京語では一般的に使われている。

ここで挙げた誤訳は確認できた一部のみである。また、意味を狭く解釈することもしばしば見られる。たとえば、

土 — 塵埃 (上 p.17)

¹⁶¹ 『日本国語大辞典』第12巻、p. 3178。

である。「土」は「土、ほこり、土地」など¹⁶²を指し、「ほこり」の意味を含んでいるのは当然であるが、「ほこり」と同義語ではなく、「ほこり」だけと訳せば範囲がごく狭くなってしまふ。このような訳が不備である

このような誤訳、または不適な翻訳が生じたのは、文字をそのまま翻訳したのが主因であろう。また、「娘們兒」のような方言を把握していないことも原因の一つである。誤訳も文法の混用も、規範が定まっていない時代の中国語教科書の普遍的問題であろう。

以上、『案内』の正立、『案内』の北京語の特徴、及びいくつかの誤訳を考察した。『案内』が『華語跬歩』を踏襲して成立したことを明らかにした。『案内』は編纂過程において、『華語跬歩』を踏まえつつ、形式上も内容上も外国語教科書の備えるべき要素を追加していったことが明らかとなった。『案内』の言語の全体の基準と実態を明白にし、そこに載せられた語彙が太田辰夫が挙げた清朝北京語の特徴とよく合致すると結論したことを通し、『案内』が北京語を基準に編纂されたことが実証された。しかし、南京語も少量含まれているのが実態である。また、『案内』の北京語の程度副詞、文末語気助詞及び使役・受身の表現方法を、楊杏紅（2014）などの先行研究に基づき、明治期の他の北京官話の教科書と相関する状況と対比しながら、資料を調査した。結果として、『案内』には、程度副詞の「稍微・略・些微・較比・一般・一邊兒」などはまったく採用されず、一方で、「實在・真・大・精・勳・格外」など先行研究に見当たらないものもあった。文末語気助詞は西島により特別に強調され、先行研究に「呢・的・啊・來着」を付け加えるなどの特色がみられた。使役・受身の表現方法は、他の北京語教科書とほぼ同じであった。そのうち、程度副詞の「實在」は清朝における南方語に、「十分的」は北京語の口語に使用されていたとする推論、及び「頂」が清末以降南北方言の別なく通用されていたという異論を提出した。これによって、『案内』の北京語の実態の一端が明白となった一方、明治期の日本人による北京官話教科書は北京語を基準として編纂していたものの、北京語の表現用法は決して均質なものではないことが判明した。さらに、『案内』にある誤訳をあげた。これは時代的制約のせいで避けられないが、ある程度教科書の伝播機能により日本人の北京語の到達レベルに影響を与えた。

3.2 『四声標註支那官話字典』の北京俗語の考察

『四声標註支那官話字典』は西島良爾と牧相愛の編によって、1902年に出版された日中辞典である。これは筆者の調べたところ、近代日本における最初の日中辞典である。

『四声標註支那官話字典』は字典と冠されているが、形式は整然としておらず、内容も洗練されておらず、誤りなどが多い。筆者はこの辞典を多角的に検討した結果、この辞典は実際には中日辞典の性質を持つという結論を得るに至った。『四声標註支那官話字典』

¹⁶² 大東文化大学中国語大辞典編纂室『中国語大辞典』角川書店、1993年、p. 3115。

典』は中国語を翻訳した日本語を見出しにし、中国語を訳語にするという編纂方法をとっている。このように取り扱っていた理由は、最初の中国語辞典として参考とする資料がなかったこと、および「中日辞典」より「日中辞典」を作りあげることに関心していたことなどが挙げられる。『四声標註支那官話字典』の見出し語句には貿易と軍事は稀で、生活に密着している言葉が非常に豊富で、しかも表現は官話より俗語のほうが多い。序論で述べたように、波多野太郎（1984）は「本書は北京土白やクラシックな口語をよく収録した辞典である点、異色である。¹⁶³」と指摘している。

そこで、本節ではこのあまり知られていない『四声標註支那官話字典』を、近代日本における最初の日中辞典であるという立場に立って、その編纂方法について筆者の提案する観点を論証する。次に、辞典に収録されている語彙の範囲、清末の北京土語、俗語の実態と意味を検討し、日本人が学習していた北京官話の一端を明らかにする。

3.2.1 『四声標註支那官話字典』の編纂

『四声標註支那官話字典』（以下『四声』と略）は、縦 19cm の日中辞典である。編者は西島良爾と牧相愛である。辞典の体裁について本論の 2.1 で述べたのでここでは省く。牧相愛の生涯についてまだよくわかっていないが、西島の上海の日清貿易研究所の同級生で中国語を習得し、卒業後は従軍したこともある。彼には『燕語啓蒙』（1899. 10）という著作がある。『四声』の巻頭には近衛篤麿の題字「千里咫尺」と当時の中国の領事・蔡燾による 1902 年端午の節句の 3 日後に書かれた序がある。

『四声』は、現在は公共図書館に所蔵されているのみで、あまり世に知られていない。また、『中国語学資料叢刊：白話研究篇』にも収録されており、そこに出版年を記していないが、波多野太郎の解題と序文をみると、1902 年に出版されたのは確かである。

『四声』は辞典と補遺との 2 部分から構成され、4,454 語を収録している。本文の前に序文と簡単な索引がある。辞典部分には 3,289 語があり、親字には会話文も入り、見出しの仮名数は、最小が 2 字、最多が 27 字である。補遺部分は 1,165 語で、すべて単語で、字数は 5 字が最多である。見出しは「いろは順」に排列され、上段は日本語、中段は中国語、下段は中国語の仮名表音で対応する縦書きになっており、1 ページを上下 2 段組にわけてある。一部分の日本語仮名（お、そ、え）は変体かなで書かれているが、偶々「ゑ」も見られる。

『四声』は基本的な北京語が網羅的に編まれているが、出处資料が使われていたかどうかは不明である。凡例から、本書は編者が「各其公餘の暇を以て従事せる講席に於ける教案中より其日常最も普通に使用せるものを蒐集して」なったものであるとわかる。しかし、西島が『四声』より先に出版した何冊かの教科書をみると、互いには重複した

¹⁶³ 波多野太郎編・解題『中国語学資料叢刊：白話研究篇』不二出版、1984 年。

内容が多く含まれている。『四声』もこれらの教科書を踏襲しているのではないかと思ひ、筆者は辞典の語彙をこれらの教科書と付き合わせてみた。結果的に大部分の文は教科書には出現しておらず、単語に同義語はあるが、言い方など少し違いがあるため、『四声』は教科書を踏襲していないと判断した。

『四声』の編纂に関しては、内容を避けて論じ得ない特異性がある。なぜなら、その見出しと解釈との関係は、普通の日本語から中国語へ翻訳する日中辞典と異なり、解釈の中国語から日本語へ翻訳したものを見出しとしているからである。『四声』はこのような過程を経てできあがったことを論証してみよう。

まず、多くの中国特有の事物が見出しとして用いられている。その例を下で示す。以下の例は原文の変体仮名を使わず一般的な仮名にする。

種類	見出し	解釈
書名	あんないき	官商快覽 ¹⁶⁴
	くわいわ	話條子(語言) ¹⁶⁵
官名	けいさつじむをゆうするもの	地面章京 ¹⁶⁶
	さんりよう(参領)	甲喇章京
諺	おどろかざるのこころ	為人不作虧心事半夜敲門心不驚
	へつらう	趕着他走動的(低三下四的)(巴結)(哈巴狗兒掀簾子嘴兒挑着)
	じぶんのことをしてひとをかまうな	你管你的罷不用管人家的事(各掃自己門前雪休管他人瓦上霜)

次に、中国特有の節気、料理なども収録されている。一般的に、日中辞典は、日本にある事物を優先的に見出しとするが、『四声』はそれに反して、日本の事物はあまり見られず、中国特有の事物が多い。同時期の他の日中辞典と比較するとそれは明白である。下に、1905年に出版された『日漢字彙』¹⁶⁷を例とし、両辞典のイ部の仮名数5字の一部語彙を比較してみる。

¹⁶⁴ 馮筱才『晚清変局中的官僚与商人』東方歴史評論(2014年6月2日)により、『官商快覽』は中国清朝後期の図書である。

¹⁶⁵ 常瀛生『封面満文書影一「話條子」(咸丰年手抄本)』(『満族研究』1992年)により、『話條子』は清朝の満語教育において使用された会話書である。

¹⁶⁶ 「章京」は中国清朝の官名である。清代早期において武官の称呼であったが、それ以後は武官に限らず使用されていた。

『四声』 1902	『日漢字彙』 1905
いけすうお 坑魚	いうちやう「優長」(名) 優優
いひかたぬ 説不過	いかがはし「如何」(形動) 靠不住
いふものの 雖然	いたらがひ「伊多良貝」江瑤柱
いてんした 搬家了(挪到了)	いちきたな「意地穢」(形名) 貪心
いりません 用不着	いちじゆく「無花果」(名) 無花果
いろつけに 紅燉的	いちじるし「著」(形動) 顯然
いもとむこ 妹夫兒	いとかりば「絲切齒」(名) 狗牙
いかにせん 奈因(無可奈何)	いひあてる「言當」(動) 說對了
いつしよに 一併(一塊兒)	いひあはず「言合」(動) 商量

このように、『日漢字彙』の見出しは純粹な単語で、日本語辞典の基本語彙といえるものである。それに対して、『四声』の見出しは単語のみならず、「いてんした」のような文もある。また、「坑魚、説不過、紅燉的、妹夫兒」のような中国特有の事物または方言が多数収録されている。

また、『四声』の見出しとなった日本語語句とそれに対応する中国語の解釈との間には合致しない点が目立つことから、訳し方に問題があると思える。例をあげて説明する。

① うんどう — 溜

「うんどう」を漢字の「運動」と翻訳することは日本人にとって容易なことで、『日漢字彙』にも見られるが、ここでは「溜」と間違えている。「溜」は「抜け出す」という意味で、翻訳者は正確な意味を把握せず、運動の一種と誤解し、「うんどう」と訳したのであろう。

② はじめる — 動手

「はじめる」を「開始」と翻訳するのは一般的で、『日漢字彙』では「開、起」と解釈している。「動手」は動詞で「人を打つ」、「手で触る」など複数の意味を持ち、「自分の力でやってみる」という意味もある。「動手」は「はじめる」の意味ももっているが、翻訳者は「動手」の本来の意味を凝縮して、「はじめる」の訳だけをとっている。

③ おおきい — 慇

「おおきい」は一見して、「大」と訳するのが普通だが、「慇」は「愚かな」の意味を持っており、愚かしい人はふてぶてしく、態度がおおきいので、「おおきい」と誤訳したのであろうか。

④ 暴食 — 大塊的吃肉

¹⁶⁷ 石山福治『日漢字彙』南江堂、1905年。

「暴食」は「無闇やたらとたくさん食べること」で、中国語に翻訳すると「暴食」でも通じる。「大塊的吃肉」は「肉を大きく切って食べる」ことで、肉を次々と口に放り込み、よく噛まずに食べる様子から「暴食」と訳したのではないだろうか。

⑤ くちにみつありはらにけんあり — 上頭説話脚底下使絆子

「くちにみつありはらにけんあり」は信用できない人のたとえである。諺としては日本語にも中国語にもある。翻訳すると、直訳して「口蜜腹剣」となるのが一般的である。

「上頭説話脚底下使絆子」は中国では口語的な諺で、「国学宝典」¹⁶⁸のデータベースを検索した結果、文学作品には『紅樓夢』のみに見られる。編者は『紅樓夢』または他の資料を手にし、「上頭説話脚底下使絆子」をみて、同じ意味の「くちにみつありはらにけんあり」へ翻訳したと推測される。

著者の中国語のレベルが低ければ、日本語から中国語への翻訳に間違いがあることは理解できるが、上にあげたような例は非常に多く、その解釈は常理に反している程である。一方、同時期の他の日本人による正確な解釈もあり、例えば『日華語学辞林』(1907)¹⁶⁹では「拔一抜く」「愍一太イ。愚ナル」と訳している。西島良爾と牧相愛にこの正確さが欠けているのは不思議であるが、それは編纂方法と関わっており、つまり著者が訳としての正確さに配慮しない日本語の語句を見出しとする。

ところで、『四声』が中国語を訳した日本語を見出しとした理由は、日本人にとって、見出しが日本語であれば調べやすいと思われる。しかし、この編纂方法によって、『四声』は辞典としての機能が低下することになった。『四声』より後に出た他の日中辞典を通覧したところ、『四声』の編纂方法を引き継いだものは無かった。

以上のように、参考できる日本語から外国語を検索する辞書というのは全くなかったが、『四声』より先行する教科書の日本語と中国語の対訳が参考することができると思われるような背景の下に、『四声』の編纂方法の考察を通して、近代日本における最初の中国語辞典の編纂は、中国語を翻訳ただけで日本語の修正に配慮しない語句を見出しとする段階に止まったと結論付けられる。

3.2.2 『四声標註支那官話字典』の北京俗語

『四声』はどのような意図を持って、語彙を選択したのであろうか。収録されている中国語の分野をみると、天文・地理、職業の呼称、食事・衣類、植物・動物など広い領域にわたっている。最も多いのは日常生活用の語句で、次は商業用語であり、軍事語や法律語は僅かである。一見、言葉に対する選別や練上げが全くなさそうに見えるが、実

¹⁶⁸『中国学術期刊』電子雑誌社有限公司による。中国先秦から民国にかけて2000年余の漢字による典籍、及び清代から現代まで学者たちの古籍について研究成果を、計4903点を収録している。經史子集、通俗小説と叢書を含む。

は日本人が中国のあらゆることに関心を持っていたことを反映していることは明らかである。とりわけ、社会生活を色濃く反映する職業の単語は豊富で、全部で56語ある。そのうち、対応する中国語の対訳は、違う言い方を（ ）で付け加えている。

いしや 醫生	いえぬし 本家兒 (房東)
とりて 馬快	とくい 主顧 (主戸)
かたり 拐子 (騙淨) (騙子手)	かりうど 獵戸
かゆをうるもの 賣粥的	たんてい 馬快
けび (婢) 丫頭	こじき花子 (老花子)
てんごく 牢頭子 (獄長)	てだすけ 幫手
でんれいし 命官	ぎようじ 判人
きんまんか (普通) 財主 (便家)	きんまんか (尊稱) 員外 (濶兒人)
めしつかいにん 使喚人 (當跟人) (跟班的)	(底下人) (打雜兒的)
みちあんない 帶道的 (引路的) (帶路的)	じぬし 地主兒
しゆじん 上頭 (東家)	しくわん 司官
ひようがしら (年期奉公) 長工	はかせ 博士
はしため 丫 鬟 (底下人)	へい 兵丁
ぬひはくし 繡花匠	るすばん 看家的
わかだんな 少爺 (小君)	かたい 乞丐 (花子) (要飯的)
かねもち 財主	がくしや 念書人 (斯文人)
かみゆい 剃頭的	かみそり 剃頭的
そばめ 妾 (丫 鬟)	なかだち 媒人
うば 奶媽子	うけにん 保人
のうふ 農夫 (莊稼的)	くりや 廚子
くるまや 車夫	くわうてい 皇上 (萬歲爺)
くわうごう 皇后	やもを 驛夫
ごうし 郷紳	てだい 夥計
あうびめ 嫖子	さくわん 泥匠
きんしゆ 財東	もんじん 門生
せしゆ 施主	よせせきのうたいめ 唱書的 (彈唱的)
かじや 鐵匠	やくしや 唱戲的
なかだち 媒婆子	むしよくぎようのひと 聞丁兒
なかがい 經紀 (經手)	

上記の中では、文語は「醫生」、「媒人」など数個しかないが、口語は「馬快、媒婆子」など多く収録されている。「めしつかいにん 使喚人（當跟人）（跟班的）（底下人）（打雜兒的）」のように、同じ職業の異なる呼称を登載したものもある。階級社会において、言語は階級性など社会的色彩を帯びている。「財主」、「車夫」、「唱書的」、「騾夫」のような多くの職業はすでに、または殆ど消失してしまったのである。これらの職業語は、現在では使用されていないのに、中国清末における大多数の下層民が生計を立てるために肉体労働に従事していた社会の実情を反映している。

会話語では、一番多いのは「いふばかりでじつがない 白説靠不住的」「ばかのきよく搬着屁股作嘴不知香臭」のような口喧嘩でよく使われる言葉、次に多いのは「おおかねをもうけた 發了大財了」、「おどつてやねにのぼる 蹭一聲上了房」のような日常会話や行為の言葉である。

また、30程の慣用語が載せられている。それらは当時もっとも流行っていた慣用語であろうと推測し、「国学宝典」と『中華俗語源流大辭典』¹⁷⁰を参考に調べてみた。以下の10例を挙げ、括弧内には「国学宝典」にあげられた書物の数と「国学宝典」或は『中華俗語源流大辭典』から記載書名の1つを記載する。

- ① 君子一言快馬一鞭 いふたこと¹⁷¹はけつしてちがはぬよ（4、明代『金瓶梅詞話』）
- ② 一客不煩二主 いちじかならずにゝんをもとめず（27、明代『水滸伝』）
- ③ 沒有不透氣的牆 かべにみみあり（なし）
- ④ 先小人後君子 りをさきにしてぎをあとにす（7、明代『西遊記』）
- ⑤ 無風三尺土有雨一街泥 ほこりがひどくみちがわるい（1、清代『文明小史』）
- ⑥ 一方水土一方人 とちになれてゐる（2、清代『郷言解頤』）
- ⑦ 八九不離十兒 ちがいががない（なし）
- ⑧ 上頭説話脚底下使絆子 くちにみつありはらにけんあり（1、清代『紅樓夢』）
- ⑨ 前不着村後不着店兒 みうごきができぬ（8、明代『金瓶梅詞話』）
- ⑩ 耳聞不如目睹 みるはきくにまさる（3、宋代『資治通鑑』）

上記の例のように、ほとんどの慣用語は社会生活と関わったもので、明清以前の小説に使用されており、当時流行っていた慣用語であると断定してよいであろう。⑦と同じ言い方はないが、同じ意味の「十不離九」は「国学宝典」で2回出現している。また、⑤のような北京特有の慣用語といわれる¹⁷²もあるので、北京の生活と密着したものを収録したと思われる。

¹⁷⁰ 李亞虹『中華俗語源流大辭典』中国工人出版社、1992年。

¹⁷¹ 原文では「こと」が平仮名の合字になっているが、印刷の都合上二字で表記する。

¹⁷² 『文明小史』（清の小説）で、「原来前人有两句即事诗，是专咏京城里的风景的，叫做：“无风三尺土，有雨一街泥。”」（古人により北京の町を形容する詩が2文があり、すなわち「无风三尺土，有雨一街泥。」である。筆者翻訳）がある。

このように、『四声』は庶民の生活用語に重点を置いていることがわかる。『四声』を通して日本人は中国人の庶民生活を理解することができたであろう。

ここでは、北京土語について更に詳しく考察するために、同時代の北京語の語彙と会話句を大量に収録している『日華語学辞林』（井上翠・以下『日華』と略称）を対照しながら、「国学宝典」のデータベース、現代の『北京土語辞典』（徐世榮 1990）、『北京方言詞典』（陳剛 1985）『北京話詞典』（高艾軍・傅民 2013）、『漢語大詞典』（漢語大辞典出版社 1986）、日本で最大規模の国語辞典『日本国語大辞典』第二版を参考にして検討する。

『四声』に登載されている北京語には、現在通用している北京語と異なり、旧時代に北京の人が使用し、現代では年配の北京市民のみに理解できる言葉が多数見られる。

まず、『四声』にあり、かつ、現在の北京語辞典にも見られるものを一部挙げてみよう。

ほやけ 記臉子	もおけぐち 得項
ちいをえたる 得項	おしきことには 可惜了兒的
ろじく 打野盤兒	としご 埃肩兒
ととなふ 齊截了	くれあいのじぶんに 挨晚兒的時候兒
くびいつばいのあせ 肆脖子汗流 ¹⁷³	やちんぐらし 喫租子（喫瓦片兒）
まるぬれ（雨ニ）精濕了	ざんげんのためにしす 舌頭底下壓死人
さげて 提溜着	あらぬい 粗針大麻線的

これらの語彙は北京語辞典にもあることにより、当時確実に存在した北京語であると確認した。

次に、現代の北京語辞典には収録されていない語彙も多々あるので、それらの内のいくつかを挙げる。

おにかわら 貓頭兒瓦	ちうぐらい 中中兒
ちのえき 血津兒	ちやうばのくるま 站口兒車
ぼんやりと 胡哩嗎哩的	ちいさきあやまり 錯縫子
おつや 座夜	きんまんかのしてい 胎裏紅
いば 爐上	なると 一放
とうげをこす 過梁	うへきし 把師
しんせいほんば 到邦到地	いづれもよかつた 兩可着了
いけどり 活拿着	うしろむきになりて 轉過春梁來
じをかりてをんをとる 借字抄音	はるのすえになつた 春景兒完上來了

¹⁷³ 『北京土語辞典』では「四脖子汗流」と書かれている。

やんだ（雨が）住上來了	とおびてあたためる 篩熱
ときかたがしんせつ（書物）解得很切	花細工人 花作
くらしかたがおおきい 嚼用大	ていとうになす 做為典
こくじはんのしゅりょう 把滋事頭兒	
ふくめんをかぶりたるもの 勾上臉的	

これらの語彙を詳しくみていくと、以下のことが分かる。

- ・始めの8つ（「猫頭兒瓦」、「中中儿」、「血津儿」、「站口儿車」、「胡哩嗎哩的」、「錯縫子」、「座夜」、「胎裏紅」）は『日華』にも載っているが、「座夜」は『日華』で「坐夜」と変えられている。

- ・「爐上、一放、到邦到地」は『四声』にしか見出されない。しかし、中国語でも日本語でも一体どういう意味であろうか、不明である。

- ・「過梁」は恨みなどが消え去ったことである。「两可着了」の意味は「どっちもよい」であろうと推定できるが、この2つの言い方は『四声』しか見られない。

- ・「活拿着」の意味は「捕まる」である。類似する言い方の「活拏住」は『日華』に見られる。

- ・「把師」については検出していないが、「植木師」は植木の栽培や庭づくりを職業とする人の意味から、「把師」が「把式・把勢（有某种专门技术的人）」¹⁷⁴（専門的）の誤字の可能性も考えられる。『日華』には「把勢 力業。山ヲハル。」とある。

- ・「借字抄音」は、天津方言の成語として『天津市地方志網』¹⁷⁵に収録されている。

- ・「完上來了」の意味は「終りそう」であるが、現在の北京語辞書にもない。「国学宝典」によると、清代の『儿女英雄伝』の第三十九回に「飲了一巡，安老爺看了看台上的楚漢争鋒是唱得完上来了……。一时酒阑人散，乐止礼成。」がある。

- ・「雨住了」は「国学宝典」によると10点の書物に見られるが、「（雨）住上來了」はない。

- ・「篩熱」は酒を暖めるという意味であろう。「国学宝典」によれば、5点の書物にある。明代の『金瓶梅詞話』には全部で7回ある。

- ・「很切」という言い方は、清代の『品花宝鑑』の第24回に「這考語出得很切，足見蕊香近日識見又長了好些」など2か所に出ている。

- ・「細工」は、手先を使って細かい器物などを作ること。また、それを作る職人、細工師である。「花作」は調べたが、見当たらない。日本語の「花作り」は、花の咲く草木を栽培すること。また、それを業とする人で、日本語を中国語に混用、誤用した可能性もあるかと思われる。

- ・「嚼用大」は、『紅樓夢』に「好大的嚼用呢」、「添出許多嚼用」がある。

¹⁷⁴ 高艾軍・傅民『北京話詞典』上海：中華書局、2013年、p.18。

¹⁷⁵ <http://www.tjdfz.org.cn/tjtz/msz/di9pian/3zhang/3/index.shtml>

・「做為典」は検出できなかったが、日本語の「ていとうになす」から、「抵当」を意味すると判断できる。

・「把滋事頭兒」の言い方も検出できなかったが、『日華』に「滋事」があり、「事面倒ニスル」と解釈している。「頭兒」は一般的にリーダー、先導者、代表人など高い位に立つ人を指すが、「把」は前置詞になると「把+名詞+動詞」の句型で「〇〇をやらせる」という意味を表すため、「滋事頭兒」の後ろに動詞が必要だが、この文にはない。日本語の「こくじはんのしゅりょう」と中国語が結びつかないため、その意味もよくわからない。

・「勾上臉的」は「ふくめんをかぶりたるもの」となっているが、中国の伝統芸能である京劇における顔にくまどりをすることである。

以上で検討した北京俗語は、前述した5点の中国語辞典とデータベースには収録されておらず、筆者が『四声』を詳しく調べたことによって、その存在が明らかとなった語句である。清末の頃に流行した北京語の中には、現代まで伝わってこなかったものも数多くあるはずであり、その実態の一端が今回の研究で明らかとなった。これにより、北京俗語に新たな語句を加えることができることになり、今後の北京俗語の研究に大いに役立つであろうことを確信する。『四声』を北京俗語の貴重な資料であるとの位置づけを高める一方、日本人の学習していた北京官話は「官話」だけではなく、俗語も多い事実を掘り起こした。

3.2.3 『四声標註支那官話字典』の誤訳

『四声』が中日翻訳書である事実を踏まえて、中国語から日本語への翻訳を検討してみよう。既に3.2.1において、その誤訳の一部を見てきた。

以下に、『四声』に見られる誤訳の例を、その原文の日本語から中国語への順序を入れ替えて提示し、明治期の他の中国語辞典を参照し、誤訳の理由を分析してみる。

① 饅餛 — うどん

中国語の饅餛は「ワンタン」である。日本語の「うどん」は小麦粉に少量の塩と水を加えてこね、薄く伸ばして細かく切ったもので、茹でて汁と共に煮たりして食べるもの。「うんどん」または「きりむぎ」とも呼ぶ。ワンタンとうどんは全くの別物である。「うどん」の語源は漢語のウンドンの約¹⁷⁶が、『日漢字彙』(1905)には「うどん「饅餛」(名) 麩。」もあるので、当時の「うどん」は麩であることがわかる。なぜ『日漢字彙』

¹⁷⁶ 『日本国語大辞典』第2巻、p. 376。

が正しく『四声』が間違っているといえるのかということ、『四声』の訳は日本語と中国語の混用に起因していると考えられるからである。

② 拔 — うごかす

「拔」は「引き抜く」の意味で、「うごかす（物を他の位置に移す）」動作の一種であるが、「動かす」と対訳するのは間違っている。つまり、ある場合で、『四声』はある中国語の語義を拡大、一般化して、日中対訳の見出し語にしてしまった。

③ 站住 — すわり

「站住」は「立ち止まる」であるが、「すわり」は「坐」である。

④ 一不成二不休 — やぶれかぶれ

「一不成二不休」とは、やり出したからには手を引かない、乗りかかった船との意味で、日本語の諺である「やぶれかぶれ」は自棄になることや自暴自棄なさまを表し、「一不成二不休」とは合致しない。

⑤ 先小人後君子 — りをさきにしてぎをあとにす

「先小人後君子」は、「後でいざこざのないように前以て目先の利害（金などの）話をはっきりつけておく。」、相手との関係を重んずるための人間交際術といえる。「利を先にして義を後にす」は「利益の追求を先にして、正しい人の道を後にする。」で、マイナスの意味の諺である。このように、「先小人後君子」と「利を先にして義を後にす」とは同じ意味ではない。

⑥ 前不着村後不着店兒 — みうごきができぬ

「前不着村後不着店兒」は旅に行き暮れて泊まる宿屋もない、頼るべきものもなく進退窮まることを指し、具合の悪いことに喩える時もある。「みうごきができぬ」では、本来の意味を表すことができない。

⑦ 嫉賢妒能誤國害民 — かんゆう（奸雄）

「嫉賢妒能誤國害民」とは、賢い人を恨むことは、国家と人民の安泰を脅かすということであるが、「かんゆう」は悪知恵入を働かせて英雄となった人である。中国語と日本語が合致していない。

⑧ 白刀子進去紅刀子出來（進退兩難） — のっぴきならぬ

「白刀子進去紅刀子出來」は人を殺した後ナイフが赤くなった、を意味する。「進退兩難」とは進むことも引き返すことも出来ないことで、両語の意味が異なる。「のっぴきならぬ」とはどうにもならないことで、「進退兩難」となるはずである。従って、編者の「白刀子進去紅刀子出來」の理解は正確ではない。『日華語学辞林』には収録されているが、日本語訳が付いていない。

『四声』には、単語の翻訳に関して、名詞より動詞のほうに誤訳が多い。「饅飽」の誤訳は中国語に対して、日本語の要素を与えたため発生したのであろう。動詞が日本人に

とって困難であり、多義語を単一の意味にしか分からないようなことは誤訳をもたらしている。

慣用語や諺の翻訳については、中日に同じものも多いが、慣用語の翻訳方法は、日本語の諺を借りるほか、「しゅうとめがやかましくてもよめはだまつてこらゆる 婆婆嘴碎 媳婦耳聾」「いちじかならずににんをもとめず 一客不煩二主」のような直訳、及び「いさかい 碟兒大碗兒小」「ちがいが無い 八九不離十兒」のような意識がある。日本語の諺を中国のものに無理に合わせたことも誤訳の生じた原因の一つになっている。

とにかく、辞典の作者の不注意は誤訳の起こった理由であるが、この辞典が中国語特有の語句を多く取り上げたことも翻訳の間違いの原因と思われる。

以上は、現時点でまだ世に広く知られていない『四声』を検討、分析したものである。得られた結果は以下の通りである。

第 1 に、『四声』は近代日本における最初の中国語辞典に位置づけられる。序論ですでに述べたように、近代日本の中国語教育は主として外交・商業・軍事といった実目的のためにおこなわれていた。その教育の場にあつては、教師も学習者も、科学的教育の必要性を自覚していなかった。『四声』はこのような背景の下で作られた最初の中国語辞典である。形式も内容も整然としていないが、それは中国語研究への関心の浅さ、および試行の段階という特殊性によると考えられる。

第 2 は、その特別な編纂方法である。『四声』の編纂方法は、中国語を日本語へ翻訳し、その日本語が正しいかどうかを中国人の校閲を経ていないまま見出し語としたことである。この編纂方法は、明治時代の中国語辞典において、『四声』にしか採用されていない。つまり、近代日本において中国語辞典の最初の段階は翻訳であることである。また、この方法は辞典の利用価値に影響しており、編者の試行錯誤を反映するでもある。

第 3 に、『四声』の語彙は当時の中国人の生活と密着していた日常語を収録する方針をとっている。これは、当時、中国と中国人の生活を速かに理解することが中国語教育の目的の 1 つであったと推測できる。

第 4 に、『四声』の言語的な価値は、北京俗語の要素が強く、現時点までに発見されていない清末北京俗語の新たな用例も収載していることである。筆者は収集し調査し、意味を明らかしようと思図したが、一部は解明できなかった。しかし、存在したことは確実であるから、当時の北京俗語として補充できると思われる。

第 5 に、『四声』には中国語の意味に合致しない日本語訳が多い。これは初期において日本人は中国語への理解が欠如していたからと考えられる。

3.3 まとめ

本章は、日本人が学習していた北京官話の実態を描写している教科書『清語会話案内』と辞典『四声標註支那官話字典』をめぐって、それぞれの編纂と言語を考察したものである。

『清語会話案内』の編纂について、『華語跬歩』を踏まえつつ、形式上教科書の備えるべき要素を追加し、内容上軍用、商業などの内容を補充していったことが明らかとなった。『案内』の言語的特徴を考察するために、

太田（1964）、太田（1969）で指摘されている北京語の特徴とどの程度一致するかを調査し、また、楊杏紅（2014）などの明治期の他の北京官話の教科書と関連する先行研究と比較した。考察の結果、北京語を基準に編纂されているものの、『案内』が北京語を基準に編纂されたが、『案内』の程度副詞、文末語気助詞及び使役・受身の表現方法と時期が同じく出版されたほかの教科書のそれと相違することがわかった。これよって、教科書殆どは北京語を基準にしても、表現方法は決して均質的ではないことが判明した。

『四声標註支那官話字典』は近代日本における最初の中国語辞典と位置づけられる。その内容を考察した結果、次のことが明らかになった。この辞典は中国語を日本語へ翻訳し、その日本語を見出し語としたような編纂方法を採用している。この方法は以後の辞典に受け継がれなかった。『四声』の体裁も内容も整然としていないが、これは至急に作り上げる必要と試行段階の特殊性からと考えられる。また、『四声』は中国人の生活と密着していた日常語を収録し、語彙が北京俗語の要素が強く、現時点まで発見されていない清末北京俗語も見られる。さらに、『案内』にも『四声』にも誤訳があり、教科書と辞典の伝播機能により日本人の北京語の到達レベルに影響を与えた。

『案内』と『四声』とは同じく西島良爾の著作で、同じ北京語を基準に作られたのである。それでいて、この2書の内容はすぐ判別できるほど異なっている。語彙と文の分野と表現が違う。『案内』の北京語は明治期のほかの教科書の表現とは異なるところが見られるが、多少の俗語を含む一般的な北京語と受け取られる。『四声』の北京語は殆ど俗語であり、意味が確認できない言葉が多く目につく。このように、北京官話の学習書が載せている北京語から見て、日本人が学習した北京官話は統一されていなかったといえる。

ここでは、日本人が受容した北京官話の実態の一端だけを明らかにしたが、多くの北京官話資料を取り上げ対照しながらさらに深く分析を進めるべきである。これを今後の課題にしたい。

第4章 明治・大正期の日本人の北京官話 r 化音の学習

r 化音とは、中国語において「兒」を語尾に附加することによって語末に捲舌音化が起こる音声現象である。「兒」は単独の音節とはならず、直前の音節と併せて1音節を構成する。r 化した語は r 化語と呼ばれている。

中国では r 化音は明代中期から生じ、明代後期に多用されてきた。清末の北京語で r 化語が急増し普及されることになった¹⁷⁷。現代まで、r 化語は北京語の顕著な特色とされている。r 化語は文語より口語で頻繁に使用され、近代日本の中国語教育界では会話が重視されていたため、r 化語は主たる学習対象になった。これについて、1867年の『語言自邇集』は r 化語は北京語に多いと指摘している¹⁷⁸。陳明娥(2014)は14点¹⁷⁹日本の明治期の北京官話教材を取り上げ、それらに収録している膨大な語彙の性質と表現を考察してから、北京官話教材の語彙の特色の1つは r 化語が豊富であることを論証した¹⁸⁰。しかし、韻母における複雑な音交替という弱点がある r 化音に対して日本人はどのように対応したのであろうか。

北京官話教材に載せられた r 化語は、清末の北京語の r 化語のをそのまま残しており、日本人の r 化語に対する認識を反映している。明治・大正期の多くの教材は発音を表記しているので、音声学などの専門書があまりなかった時代の、北京方言や音声の学習の様相を研究する上で極めて参考価値の高い資料である。残念なことに、北京官話教材を資料として、その価値を発掘した研究は非常に希少であり、明治・大正期における日本人の r 化音に対する認識についての研究はなされてこなかったのが現状である。筆者が調べたところ、r 化音への認識について、意外にも言語学上の規則に従っている精密さが見られた。当時出版された多くの北京官話学習書の中で、『日漢英語言合璧』の r 化語についての記述と注音上の様々な工夫は、その時期においては先駆的であったといえる。

本章では、『日漢英語言合璧』を主な資料とし、明治・大正期に日本人の編纂した他の教材も利用して、日本人の r 化音に関する認識、学習方法を検討し、明確にする。

¹⁷⁷ 趙傑『北京話的滿語底層和“輕音”“兒化”探源』北京燕山出版社、1996年、p.231-232。

¹⁷⁸ ここで参考したのは『中国語教本類集成』(第三集第二卷)に収録されている復刻版である。原文は「「兒」 $\dot{e}rh^2$, also meaning son, is used in the same way as frequently as $tzü$; in Pekingese, more frequently …」である。つまり「兒」は「息子」の意味である同時に、接尾語「子」と同じ使い方もある。特に北京語で頻繁に使用されている。(『中国語教本類集成』第三集第二卷、p.395)

¹⁷⁹ 利用された資料は『官話指南』(1881)、『英清会话自学入門』(1885)、『日漢英語言合璧』(1888)、『北京官話談論新篇』(1898)、『支那語学校講義録(第1~7号)』(1901-1902)、『清語読本』(1902)、『燕語生意筋絡』(1903)、『言文对照北京紀聞』(1904)、『北京官話実用日清会话』(1904)、『官話急就篇』(1904)、『日清会话語言類集』(1905)、『日華会话筌用』(1905)、『実用日清会话』(1905)、『北京官話常言用例』(1905)、『清語正規』(1906)、『北京官話清国民俗土産問答』(1906)、『最新清語捷徑』(1906)、『官話応酬新篇』(1907)である。

¹⁸⁰ 『日本明治時期北京官話課本詞彙研究』厦門出版社、2014年、p.259。

4.1 『日漢英語言合璧』に見る発音の片仮名表記

『日漢英語言合璧』(以下『合璧』と略)は鄭永邦・呉大五郎により、明治21年(1888)に初版が発行され、以後大正8年(1919)まで15版を重ねて発行された。3国語対訳の教科書で、英語、中国語、日本語の順に横書きになっている。内容は初学者のために基本的な文字、単語、文を網羅的に教えるために編まれたものである。特徴的なことは、英語も中国語も日本語の片仮名を用いて注音していることである。r化語の発音の仮名表記の分析に入るまえに、『合璧』の中国語の仮名表記の体系を明らかにしておかなければならない。以下、特殊な発音表示符号と韻母の仮名表記の規則を考察する。

4.1.1 『日漢英語言合璧』の発音表示符号

『合璧』は、中国語の特別な発音を表示するために、いくつかの符号を採用している。凡例で説明しているが、不可解なところがあり、また本文中には凡例の説明に違反している例も見られる。それらの符号の意味を解明するために、本文の例を探し集めて検討する。筆者は現在通用的な中国語を発音するピンイン符号を利用して、『合璧』の符号の意味を分析する。

(1) 漢字の左下、左上、右上、右下の四隅に○を以て示すことにより「上平、下平、上声、去声」を表す。

符号○を用いて漢字の四隅に書き添え、中国語の四声を表示するのは明治・大正時代において常用されていた方法である。

(2) 符号‘について、凡例の「漢語切音畧例」で「‘符ヲ加フル者ハ。喉頭音及ビ舌音。唇音ノ喉頭ニ響クモノ。即チ

ê 俄 (‘オー)	t ê 得 (‘トー)	‘ho 河 (‘ホー)	lê 勒 (‘ロー)
sê 嗇 (‘ソー)	‘hêi 黑 (‘へイ)	kei 給 (‘ケイ)	‘hu 戸 (‘ホウー)
‘hua 花 (‘ホ ^フ ー)	‘huai 懷 (‘ホ ^フ ー)	k’ uai 快 (‘ク ^フ イ)	kuei 貴 (‘クイ)
chê 這 (‘チ ^フ オー)	shê 舍 (‘シ ^フ オー)	jê 熱 (‘ジ ^フ オー)	

等ナリ。」と書かれている。

『合璧』の凡例では、例中の発音表記はローマ字を用いてウェード式を採用しているが、正文ではウェード式を採用せずに仮名で表記している。『合璧』では、発音の仮名表

記は字の上にも書いているが、本論文では見やすいように字の後ろに（ ）に入れて書き添えることにする¹⁸¹。

しかし、「喉頭音、舌音、及び唇音の喉頭に響くもの」はいったい何をさすか。この問いを明らかにするために、筆者は正文中で符号‘が使用されている例を調査してみた。以下の例のピンインは筆者が加えたもので、原文にはない。

① 軟口蓋無気閉鎖音 g を声母とする音節の大多数

姑（‘クー） gu 褂（‘クワー） gua 過（‘クワー） guo 國（‘コフ） guo
桂（‘クイ） gui 怪（‘クワイ） guai 館（‘クワヌ） guan 光（‘クワン） guang
哥（‘ケー） ge 個（‘ケ） ge 給（‘ケイ） gei 跟（‘ケヌ） gen
狗（‘コウ） gou

例外は以下の6つある。

橄（カヌ） gan 高（カウ） gao 虹（カン） gang 瓜（クワー） gua
共（コン） gong 礦¹⁸²（コン） gong

「瓜」の仮名表記の「クワー」は特別で、ほかの同音字はすべて「‘クワー」として
いるからである。「瓜」の場合は書き漏らしがあるかもしれない。

声母 g の音節の例からみると、符号‘の使用は韻母によって違う。韻母が u、ua、
uo、ui、uai、uan、uang、e、ei、en 及び ou である場合は‘を使っているが、韻母が an、
ao、ang である場合は使っていない。

② 軟口蓋有気閉鎖音 k を声母とする音節の一部

刻（‘コー）¹⁸³ ke 庫（‘クー） ku 困（‘クエヌ） kun 快（‘クワイ） kuai

同じ情況で、‘が使われていない例もある。

咖（カー） ka 坎（カヌ） kan 烤（カウ） kao 開（カイ） kai
孔（コン） kong

¹⁸¹ ピンインを使うのは分析するには便宜上の措置であって、音韻史的な矛盾がない。

¹⁸² 原文は「礦（或）窰」で、日本語の説明は「礦山」であり、(p. 16) 仮名表記「コン」からみると「gong」と読んだはずである。『現代漢語詞典』（第五版 p. 796）では、「礦、旧読 gōng」と記されている。

¹⁸³ 作者は例文で、字の上に横線を引くことによって有気音を表示するという説明があるが、本文には横線が引かれていない有気音も見られる。「庫」(p. 51)の上には横線がない。本論では読みやすいために、横線を仮名表記の下で引くことにする。

それで、声母 k の音節では、‘は韻母が u、un、uai や e である音節において採用されている。

③ 軟口蓋摩擦音 h を声母とする音節の一部

和 (‘ホー) he 很 (‘へス) hen 戸 (‘ホウー) hu 話 (‘ホワー) hua
化 (‘ホワー) hua 伙 (‘ホヲ) huo 厚 (‘ホウ) hou 黒 (‘へイ) hei

同じ情況で、‘が使われない字もある。

孩 (ハイ) hai 號 (ハウ) hao 旱 (ハス) han 行 (ハン) hang
紅 (ホン) hong 胡 (ホウー) hu 回 (ホイ) hui

h を声母とし、‘が採用されている音節の韻母は e、ei、en、u、ua、uo、uang、ou である。声母 h はハ行の仮名を以て表している。日本語のハ行音は正確には声門音であって軟口蓋音ではないが、中国語の h と近似する音としてハ行音があてられている。

以上のように、符号 ‘は、舌根音 g、k、h を声母とする上に、e を主母音とする韻母、u を介音とする韻母、及び u、ou と結びつく音節において付けられているのが一般的である。その理由を考えると、g、k、h の発音は舌の根元、口の奥の方から発する。e、u、ou を発音する時、舌も後ろから始まる。g、k、h、e、u、ou が含まれている音節は、発音する時舌の位置が後ろにあるので、『合璧』で「喉頭音、舌音」と定義されるようである。

符号 ‘は主に以上に載せている声母が g、k、h である音節に付けられているが、それ以外にも一部の例にも見られる。

④ e を主母音とする音節の大部分

本 (‘ベス) ben 門 (‘メス) men 雷 (‘レイ) lei 朋 (‘ボン) peng
盆 (‘ポエヌ) pen 櫂 (‘トン) deng 等 (‘トエン) deng 得 (‘ト) de
疼 (‘トエン) teng 色 (‘ソー) se 正 (‘チオン) zheng
這 (‘チオール¹⁸⁴) zhe 疹¹⁸⁵ (‘チエヌ) zhen 城 (‘チオン) cheng
舍 (‘シオー) she 神 (‘シエヌ) shen 甚 (‘シエ) shen

¹⁸⁴ この仮名表記に出ている r 化を表す仮名「ル」は印刷上の間違いのほうである。

¹⁸⁵ 「zhen」という音である字のほとんどは「チエヌ」と記されているが、「疹」字は「チエヌ」とされている。

繩 (‘シオン) sheng 熱 (‘ジオー) re 忍 (‘ジエヌ) ren

e を主母音としても符号 ‘ が使用されていない例も見られる。

北 (ペイ) bei 没 (メイ) mei 麼¹⁸⁶ (モ) me 真 (チエヌ) zhen
著 (チヲ) zhe 舌 (オー) she 扯 (チオー) che 塵 (チエヌ) chen
車 (チオー) che 人 (ジヌ) ren 爺 (イエー) ye

このように、e を主母音とする音節の中、韻母が en、eng である音節に符号 ‘ を添える場合は多く、韻母が e である音節のほぼ半分には付けるが半分は付けていないが、韻母が ei である音節は一個しか見られていない。

単母音 e の発音は日本仮名の「エ+オ」の間のような発音になる。日本語には e に相当する発音がなく、『合璧』は、「オ、ヲ、ウ」段の仮名をもって表記している（本論 4.1.2 (p. 115) を参考）。そして、符号 ‘ を添えて仮名の本来の発音をせず、実際の発音が変わるという意味を表すはずである。しかし、同じ韻母が e である音節にこの符号をつけない例も 5 つ見られ、作者の迷いがあるように見える。

en、eng の発音において、e は後ろの [n]、[ŋ] を発音する時の舌の動きの影響で音色が変わる。日本人にとって、「ウ」、「オ」、「エ」のどっちに近いかが判断にくくなる。『合璧』は、en を「エ段+ン」で記し、eng を「オ段+ン」で表記している（本論 4.1.2 (p. 115) を参考）。その上、符号 ‘ を添えて仮名の元の仮名通りに発音をせずに、すぐ後ろの鼻音に相応するために発音するという意味を表すと推測できる。その上、舌音 d、t 及び唇音 b、p が声母である音節も見られる。「真 (チエヌ) zhen」、「塵 (チエヌ) chen」には ‘ が付いていない。印刷上の間違いであろうと思われる。

二重母音 ei が韻母である音節は 3 つしかなく、のみには ‘ がついている。ei では、その e が日本語の「エ」の音に近い発音になり、i の音をそえる。『合璧』は「エ段+イ」を用いて表記している（本論 4.1.2 (p. 115) を参考）。「北 (ペイ) bei」、「没 (メイ) mei」で符号 ‘ をつけていないが、「雷 (レイ) lei」には出てくる理由は不明である。

⑤ u を韻母または介音とする音節

退 (トイ) tui 駝 (トヲ) tuo 孫 (ソウエヌ) sun 索 (ソヲ) suo
算 (ソワヌ) suan 軟 (ジヨワヌ) ruan

¹⁸⁶ 「麼」は多音字で、『合璧』では 2 つ発音も出ており、それぞれは①「沒什麼 (モ) 了 (p. 81)」、「這麼 (モ) 着 (p. 82)」などで、現在の漢語拼音方案で「me」と読める；②「你知道麼 (マ) (p. 82)」、「你吃烟麼 (マ) (p. 83)」などで、現在の漢語拼音方案で「ma」と読める。

同じ条件で使用されていない例もある。

布 (ブー) bu 葡 (プー) pu 母 (ムー) mu 父 (フー) fu 肚 (ツ[○]ー) du

例をみると、u を介音とする韻母がウ段以外の仮名と繋がる場合は、符号 ‘ が採用されている。それで、符号 ‘ をつけるのは、仮名の本来の音を発せず、後ろに繋がる韻母と合致しようと発音するという意味を表す。

⑥ ou を韻母とする音節

斗 (‘トウ) dou 頭 (‘トウ) tou 頭 (‘トエウ) tou 樓 (‘ロウ) lou
走 (‘ツオウ) zou 肉 (‘[∨]ジョウ) rou 某 (‘モウ) mou

同じ韻母であってもこの符号が使用されていない例もある。

帚 (‘[∨]チオウ) zhou 臭 (‘[∨]チオウ) chou 瘦 (‘[∨]シオウ) shou 走 (ツオウ) zou

ou の発音は喉に響くと聞き取る。日本語には ou という発音と全く同じ発音がないので¹⁸⁷、符号 ‘ を付けて、仮名の本来の発音をしなくするように意味する。ところで、符号 ‘ は、舌音の d、t、l とそり舌音の r に使用され、そり舌音の zh、ch、sh には使用されないのは不可解である。声母が唇音 m である「某 (mou)」は「‘モウ」と「モウ」、「門 (men)」は「‘メヌ」と「メヌ」のような違う仮名表記がある。これは作者が「唇の喉頭に響くもの」の判断が曖昧であった結果と思われる。

⑦ ong を韻母とする音節。但し、次の2つの音節のみある。

籠 (‘ロン) long 絨 (‘[∨]ジョン) rong

実は、「籠 (long)」には「‘ロン」と「ロン」の2つの仮名表記がある。上記の2例のみに符号 ‘ を付けている理由は不明である。

⑧ r 化音節。1例のみ

¹⁸⁷ 韻母「ou」の発音は日本語の「オ+ウ」と似ているが違っている。韻母「ou」の音声表記は [ou] であり、日本語の「オ+ウ」の音声表記は [ou] である。

末兒（‘モール）mor

この例以外の r 化音節はすべて ‘をつけていないので、これは印刷上の問題と思われる。

以上のように、符号 ‘ は舌根音 g、k、h が声母である音節に集中的に付けられている。そのほか、一部の主母音が e である音節、韻母が ou である音節にも見られる。符号 ‘ の使用目的は、日本の仮名の本来の発音をしないと表示することである。作者の「唇音ノ喉ニ響クモノ」は現代の音声学では理解できないが、彼自身の聴覚的に喉が響く音節を指すと思われる。一方、符号 ‘ が付されていないながら、その意味が不明な例もある。そのような状況であるから、符号 ‘ の使用が厳密さを欠くと言わざるを得ない。

しかし、特別な符号 ‘ を作ることによって、『合璧』が日本語にはない中国語の特別な発音に注意を払ったことはわかる。

(3) 符号 ̣ について、「̣ 符ヲ加フル者は。噤口音ニシテ。即チ

ū 於 (イー) chū 句 (チー) nū 女 (ニ) hsū 須 (シー)
lū 呂 (リー) yūan 圓 (イ^エ) chūan 卷 (チ^エ) hsūan 懸 (シ^エ)
lūan 戀 (リ^エ) 等ナリ。」と説明している。

正文では、噤口音 ū がある音節は一律に符号 ̣ を書き添えている。例えば、

驢 (リー) lū 具、橘、局 (チー) jū 絹 (チ^エ) jūan
取、去 (チー) qū 泉 (チ^エ) qūan 雪、靴、學 (シ^エ) xūe
血 (シ^エ) xūe

である。

(4) 符号[○]について、「[○]ヲ加フル者ハ。舌音ニシテ。即チ

tu 都 (ツ[○]) ti 的 (チ[○]) t' ing 亭 (チ[○]ン) t' ien 天 (チ[○]エ)

等ナリ。」と述べている。

凡例に挙げている例に出現する声母の「d、t」は舌尖音である。全書において、d、t の 2 つの子音に対応する仮名は一部分だけに符号[○]が添えられている。以下に挙げてみる。

① d を声母とする音節

第 (チ^〇ー) di 的 (チ^〇) de 的 (チ^〇ー) de 碟 (チ^〇エー) die
鵬 (チ^〇ヤウ) diao 點 (チ^〇エス) dian 頂 (チ^〇ン) ding 肚 (ツ^〇ー) du

d を声母としても^〇を添えない例もある。

大 (ター) da 島 (タウ) dao 道 (タウル) dao 袋 (タイ) dai
單 (タス) dan 蛋 (タオ) dan 當 (タン) dang 顛 (テン) dian
多 (トヲ) duo 鈍 (トウエス) dun 短 (トワス) duan 冬 (トン) dong
得 (ト) de 斗 (トウ) dou 撓 (トン) deng 等 (トエン) deng

② t を声母とする音節

體 (チ^〇ー) ti 鐵 (チ^〇エー) tie 縹 (チ^〇ヤウ) tiao 天¹⁸⁸ (チ^〇エス) tian
廳 (チ^〇ン) ting 塗 (ツ^〇ー) tu 土 (ツ^〇ー) tu

t を声母とする^〇が添えられていない例もある。

踏 (ター) ta 太 (タイ) tai 桃 (タウ) tao 毯 (タス) tan
條 (タヤウ) tiao 堂 (タン) tang 頭 (トウ) tou 頭 (トエウ) tou
退 (トイ) tui 疼 (トエン) teng 腿 (トイ) tui 駝 (トヲ) tuo
通 (トン) tong

以上のように、この符号は、声母が d、t で、韻母が i、e、ie、iao、ian、ing、u である音節に使用されている。これらの韻母に先行する声母 d、t の仮名表記はチ、ツである。日本語のチ、ツは歯擦音で、閉鎖音である d、t と違っている。それで、符号^〇の使用には 2 つの意味がある。1 つは「d、t」が舌尖音であることを指摘すること、2 つは仮名チ、ツの発音を d、t に変えること。

(5) 符号^Vについて、「^Vヲ加フル者ハ。開口齒音ニシテ。即チ

shên・深 ^Vシエヌ

¹⁸⁸ 凡例の例では「チ^〇エヌ」と書いているが、正文では「チ^〇エス」と書いている。

等ナリ。」と説明している。

凡例に挙げてある他の 2 例には顕著な間違いがあるのでここでは略する。符号[∨]の使用状況は一体何か、筆者が正文を調べ統計してみると、この符号はほとんどそり舌音の zh、sh、sh、r を声母とする音節に使われている。以下に挙げてみる。

① 声母が zh

チ	詐 (チヤ [∨]) zha	著 (チヲ [∨]) zhe	姪、紙、枝 (チ [∨]) zhi
	蛛 (チウ [∨]) zhu	豬 (チウ [∨]) zhu	住 (チウ [∨]) zhu
	站 (チヤヌ [∨]) (チヤヌ [∨]) zhan	真 (チエヌ [∨]) zhen	照 (チヤウ [∨]) zhao
	帚 (チオウ [∨]) zhou	桌 (チオー [∨]) zhuo	鐺 (チヨオ [∨]) zhuo
	丈 (チヤン [∨]) zhang	中、鐘 (チヨン [∨]) zhong	重 (チオン [∨]) zhong
	莊 (チヨワン [∨]) zhuang		
‘チ	這 (‘チオー [∨]) zhe		
‘チ	正 (‘チオン [∨]) zheng		
チ	站 (チヤヌ) zhan		

この表に載せている例をみると、zh を表示する仮名のほとんどが右肩に[∨]を添えている。「站 (zhan)」が「チヤヌ[∨]」、「チヤヌ」の 2 つの形で表され、「正 (zheng)」が「‘チオン[∨]」で表されているのは、符号[∨]が書き漏らされたのであろう。

② 声母が ch

チ	又、茶 (チヤ [∨]) cha	池、匙 (チ [∨]) chi	廚 (チユウ [∨]) chu	
	處、出、朱 (チウ [∨]) chu	柴 (チヤイ [∨]) chai	吵、潮 (チヤウ [∨]) chao	
	轆、鏟 (チヤヌ [∨]) chan	春 (チユイヌ [∨]) chun	臭 (チオウ [∨]) chou	
	船 (チヨワヌ [∨]) chuan	長、腸、廠 chang (チヤン [∨]) (チヤン [∨])		
	橙 (チエン [∨]) cheng	誠 (チオン [∨]) cheng	蟲 (チヨン [∨]) chong	
	窓、牀、瘡 (チヨワン [∨]) chuang	茶 (チヤ [∨]) cha	出 (チ [∨]) chu	
	處 (チウ [∨]) chu	差 (チヤイ [∨]) chai	塵 (チエヌ [∨]) chen	
	長 (チヤン [∨]) chang			
	‘チ	扯 (‘チオー [∨]) che		
	‘チ	車 (‘チオー [∨]) che	城 (‘チキン [∨]) cheng	
チ ^〇	蟲 (チ ^〇 ヨン [∨]) chong			

ch の仮名の大部分には[∨]を加えている。しかし、音節 che、chu、chai、chang、chong などには[∨]を加えているものと加えていないものと2つの形が見られる。[∨]を付けていない例は少数であるので、作者の書き漏らしだと思われる。

③ 声母が sh

シ	鯨 (シヤー) sha	舌 (シオー) she	是 (シー) shi
	薯 (シウ) shu ¹⁸⁹	數 (シウー) shu	少 (シヤウ) shao
	閃 (シヤヌ) shan		
	身 (シエヌ) shen	深 (シエヌ) shen	
	瘦 (シオウ) shou ¹⁹⁰	手 (シオウ) shou	熟 (シヨウ) shou
	刷 (シワー) (シヨワー) shua		説 (シヲ) shuo
	水 (シウイ) shui ¹⁹¹	誰 (シウイ) shui	上 (シアン) shang
	商 (シアン) shang	盛 (シオン) sheng	
‘シ	舍 (‘シオー) she	神 (‘シエヌ) shen	甚 (‘シエ) shen
	繩 (‘シオン) sheng		
シ	霜 (シヨワン) shuang		

この表からみると、sh を声母とする音節では、「霜 shuang (シヨワン)」以外、sh を表す仮名は、すべて符号[∨]が付けられている。そのうち、「是」や「水」の仮名表記は2つの形を以ている。「霜」には符号[∨]を書き漏らしした可能性が高いが、『合璧』ではシを以て x を代表するのが普通であるので作者は「霜」の発音を「xüang」とした可能性もある。

④ 声母が r

ジ	日 (ジー) ri	人 (ジヌ) ren	
シ	褥 (シウ) ru		
‘ジ	熱 (シオー) re	忍 (シエヌ) ren	肉 (シオウ) rou
	輦 (シヨワヌ) ruan	絨 (シヨン) rong	

¹⁸⁹ この音節の字はほとんど仮名表記「シウ」を採用しており、例えば「薯、樹、叔、梳、書」などがそうである。「シウー」を採用しているのは「數」だけである。

¹⁹⁰ この音節の字の大部分は仮名表記「シオウ」を採用しており、例えば「瘦、獸」などがそうである。「シオウ」「シヨウ」を採用している例はそれぞれ「手」「熟」だけである。

¹⁹¹ この音節の字の大部分は仮名表記「シウイ」を採用しており、例えば「誰、稅」などがそうである。「水」は2つの形をもっている。1つは「水 (シウイ) 盆」(p. 29) のようであるが、2つは「水 (シウイ) 缸」である。

r を表す仮名はすべて符号^vを付け加えている。

(6) 字の上に横線を引くことによって有気音を表示する。凡例では「漢字字頭ニ一符ヲ施スモノハ。出氣ノ記號トス。蓋シ出氣トハ。喉頭ヨリ激發スル音勢ヲ謂フ。而メ出氣セサル音ハ。之ニ反シテ内ニ吸フガ如キ勢ヲ謂フ。例ヘバ「茶 (チ^vャー)、乍 (チ^vャ)」等ノ如シ。」と説明している。本論文は読みやすさの点も考慮して、仮名表記の下に横線を引く形式に改めている。

『合璧』では、声母が有気音である字の上には横線を引いている。しかし、「瀑 (パウ)」、「票 (ピヤウ)」のような遺漏は偶々ある。

(7) 符号 ˆ について

凡例には印刷上の間違いがあるので、符号^ˆについての説明がみられない。「tzü 子 (ツ^ˆ一)」と「ssu 絲 (ツ^ˆ一)」の2例しかみられないが、正文では、「絲」の仮名表記は「ス^ˆ一」となり、凡例と違っている。『合璧』を通覧して、この符号は5字だけの仮名表記に見られる。

子 (ツ^ˆ) zi 次 (ツ^ˆ一) ci 司 (ス^ˆ一) si 絲 (ス^ˆ一) si 厠 (ス^ˆ一) ce

zi, ci, si は舌歯音である。「次」字は1回だけでている。「子」は非常に多くあり、発音の仮名表記が2つ違う形があり、それぞれは「ツ^ˆ」と「ツ」である。両者の出現する回数は均等で、語の選択上にも特別な基準がみられない。例えば、

ツ^ˆ 木廠子、飯館子、賣果子的
ツ 戲子、刀子匠、看園子的

である。

「絲」は3回出ており、それぞれが「絲 (ス^ˆ一) 線」(p. 34)、「絲 (ス^ˆ一)」(p. 65)、「煙絲 (ス^ˆ一)」(p. 68) のようである。声母 c は仮名「ツ」を以て表すのは普通だとみえるので、「厠」が仮名「ス」を用いるのは間違いと思われる¹⁹²。ほかには、「si (ス^ˆ一) 四」、「zi (ツ^ˆ一) 自」は同じ舌歯音であるが符号^ˆが付けられていない。印刷上の遺漏かもしれない。

¹⁹² 原文の例は「茅厠」(『日漢英語言合璧』p. 25) であるので、「廡」などの誤字だと思われたい。

さて、『合璧』の中国語の発音の表示符号は先行した教科書を踏襲したり、後に出てくる教科書に影響を与えたりしたのであろうか。筆者は『合璧』を『語言自邇集』と対照して、両者の符号が全く異なっていると結論した。例えば、『語言自邇集』は符号‘を以て有気音を表している。それに、明治・大正期の他の 12 点の教科書と辞典（本章 4.3.1 に取り扱うもの）をみても、同じ符号を使用する本はみつからない。

『合璧』の発音表示符号は、中国語の発音が仮名で表記できないことに細かく配慮して、舌音、摩擦音、有気音、舌歯音などが適切に表記されるよう工夫をこらしており、一定の科学性、独創性を備えていると評価できる。

4.1.2 『日漢英語合璧』の韻母の仮名表音体系

『合璧』では 22 の声母（ゼロ声母を含む）が見られる。これは現在の漢語拼音方案と同じである。韻母が 34 が見られ、漢語拼音方案の ueng の例が見られない。筆者は『合璧』の韻母の仮名を統計、整理して、漢語拼音方案のどの韻母が対応するかを、表によって示すことにした。表では、仮名ごとに用例を 1 つ挙げ、特殊な場合は 2、3 例を挙げる。zi、ci、si の韻母の i は舌歯音で、他の音節にある舌面音の i と異なるので、符号 * を付けて表示する。現代の発音と異なる古い発音または方言音は記号 ∞ をつけて注で詳しく説明する。韻母の仮名系統と外れる仮名表記は で表記して例外とする。

『合璧』では、仮名「エ」が小さく書かれる場合、旧仮名「エ」で記すが、以下では、統一的に「エ」で表す。仮名「ヌ」には大きいものと小さいものがあり、特別な意味を持たないと思われるが、以下の例では原文のまま引用する。

仮名表記	例	韻母
ア段	巴 (バ)	a
ア段+一	八 (パー)	a
	鳴 (ヤー)	ia
ア段+イ	百 (パイ)	ai
ア段+ウ	葯 (ヤウ)	iao
	匍 (パウ)	u
	包 (パウ)、 鶴 (ハウ) ^{∞193}	ao
ア段+ヤ ウ	條 (タヤウ)	iao
ア段+ス	岸 (アス)、 半 (ハス)	an
ア段+ヌ	萬 (ワヌ)	uan
ア段+ズ	晩 (ワズ)	uan
ア段+ン	幫 (パン)	ang
	虹 (カン) ^{∞195}	
	洋 (ヤン)	
ア段+ル	二 (アル)	er
ア段+一 イ	那 (ナーイ) ¹⁹⁶	a
ア段+ウ ル	道 (タウル) ¹⁹⁷	ao
イ段	裏 (リ)、 的 (チ ^〇) [∞]	i
	呢 (ニ) [∞]	e

仮名表記	例	韻母
イ段+ヨ ヌ	船 (チヨヌ)	uan
イ段+ヨ ワン	莊 (チヨワン)	uang
イ段+ヨ ワー	耍 (シヨワー)	ua
イ段+ユ ウ	留 (リユウ)	iu
イ段+ヌ	人 (ジヌ)	en
	林 (リヌ)	in
イ段+ヌ	蘋 (ヒヌ) ¹⁹⁴	in
イ段+ヲ	説 (シヲ)	uo
イ段+ヨ オ	鐺 (チヨオ)	uo
イ段+ヨ ワ ヌ	軟 (‘ジヨワヌ)	uan
イ段+ヨ ン	兄 (シヨン)	iong
イ段+ヌ	雲 (イヌ)	un
イ段+ワー	刷 (シワー)	ua
イ段+ヲ	著 (‘チヲ)	e
イ段+ン	明 (ミン)	ing
ウ段	子 (ツ) *	i
ウ段+ワー	法 (フワー)	a
ウ段+ワ	髮 (フワ)	a
ウ段+ア ー	雜 (ツアー)	a

¹⁹³ 「鶴」は文語音で「he」と読み、口語音で「hao」と読む。仮名表記の「ハウ」によっては「hao」と読むはずである。同時期の『日華語学辞林』（井上翠 1906年 p.157）でも「鶴（ハオ）hao」と注音されている。

¹⁹⁴ 「蘋果」（『日漢英語言合璧』p.40）

¹⁹⁵ 「虹」の発音は仮名表記によると古い発音の「gang」である。

¹⁹⁶ 「那」の発音の仮名表記は「ナー」のはずであるが、「ナーイ」とするのは「那一個」という語源から変わってくるからと思われる。

¹⁹⁷ 「道」の発音の仮名表記はほとんど「タウ」である。「タウル」はr化を表したもので、「小道」（『日漢英語言合璧』p.17）の「道」の表音に見られる。

	女 (ニ)	ü
イ段+ア ー	倭 (チアー)	ia
イ段+ー	鼻 (ピー)	i
	驢 (イー)	ü
	油 (ユー)	ou
イ段+ー ン	井 (チーン)	ing
イ段+アヌ	站 (チヤヌ)	an
イ段+アン	商 (チアン)	ang
イ段+ウ	蛛 (チウ)	u
イ段+ウー	初 (チウー)	
イ段+ウ イ	水 (シウイ)	ui
イ段+ウイ	税 (シウイ)	ui
イ段+エ	月 (ユエ)	ue
イ段+エ	甚 (シエ)	en
イ段+ユ ー	秋 (チユー)	iu
イ段+エー	別 (ピエー)、 血 (シエー) ²⁰⁰	ie
イ段+エ ー	鐵 (チエー)	ie
イ段+エヌ	便 (ピエヌ)	ian
	泉 (チエヌ)	uan
	震 (チエヌ)	en
イ段+エヌ	邊 (ピエヌ)	ian
イ段+エヌ	身 (シエヌ)	en
イ段+オウ	帚 (チオウ)	ou
イ段+オウ	手 (シオウ)	ou

ウ段+アイ	再 (ツアイ)	ai
ウ段+アウ	早 (ツアウ)	ao
ウ段+ワヌ	飯 (フワヌ)	an
ウ段+アヌ	蠶 (ツアヌ)、 胖 (ハヌ) ^{∞198}	an
ウ段+ワン	方 (フワン)	ang
ウ段+アン	髒 (ツアン)	ang
ウ段+オウ	走 (ツオウ)	ou
ウ段+オン	總 (ツオン)	ong
	風 (フオン)	eng
ウ段+ー	厠 (スー) ¹⁹⁹	e
	自 (ツー)*	i
	布 (ブー)	u
ウ段+エイ	飛 (フエイ)	ei
ウ段+エヌ	分 (フエヌ)	en
ウ段+エン	怎 (‘ツエン)	en
ウ段+ウー	祖 (ツウー)	u
ウ段+ウー	醋 (ツウー)	u
ウ段+ワー	褂 (‘クワー)	ua
ウ段+ヲー	國 (‘クヲー)	uo
ウ段+ウオ	昨 (ツウオ)	uo
ウ段+アオ	左 (ツアオ)	uo
ウ段+オー	鎖 (スオー)	uo
ウ段+ワイ	怪 (‘クワイ)	uai
ウ段+ワイ	快 (クワイ)	uai

¹⁹⁸ 「胖」は多音字である。「パヌ」によると「pan」と読むはずである。

¹⁹⁹ 4.1.1の(7)を参考。

²⁰⁰ 「血」は多音字であり、仮名表記によると「xue」と読むはずである。

イ段+オー	舌 (シ [∨] オー)	e
	桌 (チ [∨] オー)	uo
イ段+オン	正 (‘チ [∨] オン)	eng
	重 (チ [∨] オン)	ong
イ段+ヤー	家 (チヤー)	ia
イ段+ヤ	甲 (チヤ)	ia
イ段+ヤー	詐 (チヤー)	a
イ段+ヤイ	柴 (チヤイ)	ai
イ段+ヤウ	錶 (ピヤウ)、 雀 (チヤウ) ^{∞201}	iao
イ段+ヤウ	鵬 (チ [○] ヤウ)	iao
イ段+ヤヌ	站 (チヤヌ)	an
イ段+ヤン	丈 (チヤン)	ang
イ段+ヤン	亮 (リヤン)	iang
イ段+ユウ	廚 (チユウ)	u
イ段+ユイ	春 (チユイヌ) ²⁰³	un
イ段+ヨウ	熟 (シヨウ)	ou
イ段+ヨン	中 (チヨン)	ong
イ段+ヨン	絨 (‘シヨン)	ong
	窮 (チヨン)	iong

ウ段+イ	桂 (‘クイ)	ui
ウ段+ウイ	嘴 (ツウイ)	ui
ウ段+ワヌ	館 (‘クワヌ)	uan
ウ段+オワヌ	鑽 (ツオワヌ)	uan
ウ段+エヌ	困 (‘ク ^エ ヌ)	un
ウ段+ワン	光 (‘クワン)	uang
エ段+イ	北 (ペイ)	ei
エ段+ヌ	本 (‘ペ ^ヌ)	u
エ段+イー	野 (エー)	ie
エ段+ン	顛 (テン) ²⁰²	ian
オ段+ウー	戸 (‘ホウー)	u
オ段+ワー	話 (‘ホワー)	ua
オ段+ヲ	多 (トヲ)	uo
オ段+イー	駱 (‘ロー)	uo
オ段+イ	退 (‘トイ)	ui
オ段+ワヌ	短 (トワヌ)	uan
オ段+ウエヌ	鈍 (トウエヌ)	un
オ段+エヌ	輪 (‘ロエヌ)	un
オ段+エヌ	倫 (‘ロ ^エ ヌ)	un

²⁰¹ 「雀」の発音は仮名表記によると「qiao」である。『現代漢語詞典』(第五版・p.1098)によると「qiao」は口語音である。「孔雀」(『日漢英語言合璧』p.46)という単語に見られる。

²⁰² 「撒顛魚」(『日漢英語言合璧』p.48。)

²⁰³ 「春天」(『日漢英語言合璧』p.11。)

以上を、韻母を基準として、規則をまとめると以下のようなになる。

韻母	規則 (同一仮名は大小に関わらず 大きい仮名で書く)
a	「ア段」或は「ア段＋ー」で 終わる
ai	「ア段＋ー」で終わる
ao	「ア段＋ウ」で終わる
an	「ア段＋ヌ」で終わる
ang	「ア段＋ン」で終わる
o	「オ段＋ー」で終わる
ou	「オ段＋ウ」で終わる
ong	「オ段＋ン」で終わる
e	「オ、ヲ、ウ段」或は「オ」、 「ウ段＋ー」で終わる
ei	「エ段＋イ」で終わる
en	「エ段＋ン」で終わる
eng	「オ段＋ン」で終わる
i	「イ」或は「イ＋ー」で終わ る
ia	「ア段」或は「ア段＋ー」で 終わる
ie	「エ＋ー」で終わる
iao	「ヤウ」で終わる
iou	「イ段＋ー」で終わる
ian	「エヌ」で終わる

韻母	規則 (同一仮名は大小に関わらず 大きい仮名で書く)
in	「イ段＋ ^ス 」で終わる
iang	「ヤン」で終わる
ing	「イ段＋ン」或は「イ段＋ー ン」で終わる
iong	「ヨン」で終わる
u	「ウ」或は「ウ＋ー」で終わ る
ua	「ワー」で終わる
uo	「オ、ヲ」或は「オー」、「ヲ ー」で終わる
uai	「ワイ」で終わる
uei	「ウイ」或は「イ」で終わる
uan	「ワヌ」で終わる
uen	「エヌ」で終わる
uang	「ヨワン」で終わる
ü	「イ段」或は「イ段＋ー」で 終わる
üe	「ユヱ」
üan	「イ段＋ ^{エヌ} 」
üen	「イヌ」
er	「アル」

上掲の韻母を表す仮名表記においては、韻母が e である場合、仮名表記はオ、ヲ、ウ
 或はオ、ウ段の仮名で終わる。だが、これらの仮名の発音は [e] と近くなく、[o] 或は
 [u] に近い。何故これらの仮名を採用したのかと考えると、e を発音する時の舌の位置
 が大体 o と同じ (o より稍高い) であり、かつ、e は非円唇、o は円唇で、区別するのが
 難しいからであろう。o の唇形を狭くすると u 音になる。日本語には中国語の e に相当
 する母音がないので、e の発音方法について、現代の日本で使われているある中国語の
 教科書は、「日本語の「エ」を発音する時の唇の形で、のどの奥から「オ」を発音する」
 204 というように説明している。そのため、初級の日本人学習者はともすれば「オ」と発
 音してしまう。

更に、上掲の表で収集した韻母の仮名表記からは、以下のような規則が発見できる。

- ① i で終わる韻母 (ai、ei、ui、uai) は、すべて仮名「イ」で終わる。
- ② 前鼻音の -n で終わる韻母 (an、en、in、un、ian) は、ほとんど小さい仮名「ヌ」
 で終わる。特殊な例は「站 (チヤヌ)」、「身 (シエヌ)」、「怎 (‘ツエン)」、「顛 (テ
 ン)」、「船 (チヨワヌ)」、「軟 (‘ジヨワヌ)」、「萬 (ワヌ)」であり、これらは「ン」
 または大きな「ヌ」を用いている。
- ③ 後鼻音 -ng で終わる韻母 (ang、ong、ing、iang、iong、uang) は、1つの例外「胖
 (パヌ)」を除いて、すべて仮名「ン」で終わる。
- ④ 単韻母が a、及び主母音が a である複韻母 (a、ia、ua) は、1つの例外「那 (ナーイ)」
 を除いて、すべて「ア段の仮名」、或は「ア段の仮名＋一」で終わる。
- ⑤ 3つ以上の仮名符号で表し、韻母が -n、-ng で終わるもの以外の音節は、大部分
 が2番目の仮名を小さくして右肩に書き添える。例外は「站 (チヤヌ)」、「道 (タウル)」、
 「雀 (チヤウ)」、「錶 (ピヤウ)」、「條 (タヤウ)」だけである。

4.2 『日漢英語言合璧』の r 化音

4.2.1 『日漢英語言合璧』の r 化語

『合璧』には多くの r 化語が載っている。筆者の統計によると、r 化語は 95 個あり、
 198 回登場する。それらの r 化語を以下に並べる。使用されている回数が 2 回以上なら
 ばその数字を後ろにつける。

今兒 (2)	今兒個 (2)	明兒	後兒	昨兒	前兒 (2)	花兒洞子
裏兒	女孩兒	小孩兒	侄女兒	媳婦兒	嘴唇兒	下巴頰兒
房頂兒	杌凳兒	取燈兒 (2)	七星罐兒	汗褸兒	戒指兒	頂針兒

²⁰⁴ 杉野元子・黄漢青『大学生のための初級中国語 40 回』白帝社、p. 10。

兜兒 鈕子眼兒 信封兒 墨盒兒 胡椒麵兒 杏兒 棗兒
 山藥豆兒 家兔兒 松鼠兒 羊羔兒 猴兒 鸚哥兒 家雀兒
 小雞兒 蝴蝶兒 火虫兒 跑堂兒的 貓兒眼 麻子臉兒 茶葉末兒
 中中兒 等一等兒 一塊兒 (2) 瞧兒 名兒 油味兒 靜靜兒的
 會兒²⁰⁵ 這溜兒 克蘭合店兒 (2) 幾步兒 雞子兒 小塊兒 (2)
 飯廳兒 一樣兒 錯兒 總碼兒 門口兒 待一待兒 那邊兒
 下邊兒 左邊兒 個兒 分兒²⁰⁶ (2) 煙捲兒 球兒房 球兒
 跑堂兒的 現成兒的 鞋後跟兒 儘溜頭兒 賠本兒 坎肩兒 (2) 下兒²⁰⁷
 時候兒 (2) 沒準兒 幾兒 (2) 等等兒 歇歇兒 抄近兒 信皮兒
 剃頭刀兒 多兒錢 小妞兒 這兒 (9) 歲數兒 (6) 道兒 (7)
 一點兒 (4) 點兒²⁰⁸ (33) 那兒 (=哪兒)²⁰⁹ (21) 那兒²¹⁰ (6) 樣兒²¹¹ (10)

r 化語の中で、出現頻度が高いのは「那兒 (=哪兒)」、「樣兒」、「這兒」、「那兒」、「道兒」と「歲數兒」である。「那兒 (=哪兒)」、「樣兒」、「這兒」、「那兒」は会話でよく使用されている語で、「道兒」と「歲數兒」は道順を聞く会話と年齢についての会話があるため、多く出現する。語によっては r 化と非 r 化の 2 つの形が見られるが、使用度数はどちらもほぼ同じである。例えば、「時候兒」と「時候」などがそうであろうと思われる。

『合璧』にある r 化語が常用の語であるかどうかを確認するために、筆者は『北京話兒化詞典』²¹²を一々調べた。その結果、96%の語が収録されており、収録されていないのは 4 つしかない²¹³。このため、『合璧』にある r 化語は常用であろうと思われる。

²⁰⁵ 例はそれぞれ「待會兒」「坐會兒」である。

²⁰⁶ 「分兒」は「份兒 (分)」の意味で、現在は「份兒」と書く。原文の 1 つの例として「給我們預備三分兒飯 (三人前出シテクダサイ)」がある。

²⁰⁷ 「下兒」は時間を指し、原文は「我想現在兩下兒鐘罷 (今二時ダロート思ヒマス)」である。

²⁰⁸ 「點兒」は動詞または形容詞の後に使用される。原文の例は以下のようなものである。

a 動詞+點兒：喝點兒 快著點兒 慢著點兒 壓點兒 打點兒水 淡點兒 耍點兒 用點兒 布點兒 拿點兒
 有點兒 吃點兒 暖着點兒 有點兒 便宜點兒 放點兒 有點兒 鉸點兒 使點兒

b 形容詞+點兒：好點兒 晚了點兒了 肥點兒了 好點兒 貴點兒 慢點兒 晚點兒

²⁰⁹ この「那兒」は「哪兒 (どこ)」の意味で、原文の 1 つの例として「他在那兒住 (何處ニ彼人ハ住デオリマスカ)」がある。

²¹⁰ この「那兒」は「そこ」の意味で、原文の 1 つの例として「咱們快到那兒了 (モー程ナク彼處ニ着マセフ)」がある。

²¹¹ 「樣兒」は「種類、タイプ」などの意味で、原文にある文は「我有好些樣兒/我們有好些樣兒價錢的/這兒有幾樣兒/兩樣兒/時樣兒/那樣兒」である。そのうち、「那樣兒」の意味は「哪樣」と同じ、原文は「您要那樣兒罷 (何方ガ御入用デゴザイマスカ)」。

²¹² 賈采珠、1990 年、新華書店北京發行所。

²¹³ それらは「等一等兒」、「待一待兒」、「靜靜兒」、「飯庁兒」である。「等一等兒」と「待一待兒」は「A—A」重ね型の動詞である。この類の r 化語は、『北京話兒化詞典』には 4 つしか見られない。「靜靜兒」は「AA」重ね型の形容詞である。この類は『北京話兒化詞典』にも少ない。

4.2.2 『日漢英語言合璧』の r 化音

4.2.2.1 『日漢英言語合璧』の r 化音の注音方法

『合璧』において、「兒」は、名詞として、例えば「○兒（アル）子」という語を作る場合、左肩の○によって第2声であることが示され、仮名で「アル」と記されている。一方、r 化語の場合は、

ラロ ‘トロエ
老° 頭-兒

のように、「兒」の前には短い線「-」が入り、「兒」の声調は記されていない。表音仮名は「アル」から「ル」と変わるのみならず、「兒」の上²¹⁴に記されずに前の漢字のすぐ上に、あたかも合体して一字を成すように書かれている²¹⁵。「ル」の字の大きさについては、多くの場合小さく書かれるのに対して、一部の語では大きい「ル」が出現する。その差異が何を表しているかについては、後文の 5.2.2.2 で検討する。

r 化音は、本来の音節と声調を失い、直前の韻母と融合する現象であるから、『合璧』の r 化音の注音方法はこの規則に沿っている。

『合璧』の凡例に、r 化語の発音について記述が見られる。

語氣ニ依テ字音ノ短縮スルモノアリ。例ヘバ孩兒二字ノ如キ。其字音ヲ分テバ。(孩兒ハイアル) トナルモ。言語ノ勢ニ於イテハ。(ハル) ト成ル。此他一點兒ハ(イチ° エール)。個個兒ハ(‘コーコル) 等。此例ニ準ズ。

その「字音ノ短縮」は前の音と合併する変化を指すはずである。『合璧』の r 化音の注音方法も r 化についての説明も、基本的に r 化音の音声現象としての特殊性を指摘したものである。

4.2.2.2 『日漢英語言合璧』の r 化韻

『合璧』には、r 化韻が 23 ある。北京語の r 化韻の「uangr」、「uengr」と「iongr」の3つがみられない。r 化に際しては音声交替規則があり、韻母の最後の音素が捲舌動作と共存できるかによって音交替が起こる。この部分は『合璧』の r 化韻の仮名表記と r 化の音交替の規則を考察する。

²¹⁴ 本文は字の上に注音しているが、本論文は読みやすいように字の右に書き出すことにする。

²¹⁵ 1つの例外として「鸚哥(‘コ)兒(ル)」があるが、印刷の間違いと考えられる。

以下、韻尾及び韻母ごとに『合璧』の中の r 化語の例²¹⁶を挙げる。同じ音節がない場合は空白にする。

① 韻尾が i

韻母の交替	基礎音節 ²¹⁷ の仮名	r 化語	r 化音節の仮名
ai>ar	ハイ	孩兒	ハル
	タイ	待兒	ター ^ル
uei>uər	ウ ^オ イ	油味兒	ウヲル
	ホイ	會兒	ホル
uai>uar	‘クワイ	塊兒	‘クワ ^ル

韻尾が「i」で終わる字が r 化すると、韻尾「i」が脱落し、主母音が捲舌母音化するという音交替がある。『合璧』は「i」に対応する「イ」を削除し「ル」を加えており、この規則に従っている。

② 韻尾が -n

韻母の交替	基礎音節の仮名	r 化語	r 化音節の仮名
an>anr	ペ ^ス	一半兒	バル
	チエ ^ス	前兒	チエ ^ル
	イエ ^ス ・イエ ^ス	眼兒	イエ ^{ール}
	チ ^〇 エ ^ス	店兒・點兒	チ ^〇 エ ^ル
ian>ianr	チエ ^ス	坎肩兒	チエ ^{ール}
	リエ ^ス	臉兒	リエ ^{ール}
	ミエ ^ス	麪兒	ミエ ^ル
	ピエ ^ス	邊兒	ピエ ^ル
uan>uar	‘クワ ^ス	七星罐兒	‘クワ ^{ール}
en>ər	‘ペ ^ス	賠本兒	‘ペ ^{ール}
	フエ ^ス	分兒	フエ ^ル

²¹⁶ r 化語の仮名表記が多数ある場合は、主流の表記を記入する。

²¹⁷ r 化する前の音節の仮名表記と指す。

	‘ <u>チ</u> エヌ	頂針兒	‘ <u>チ</u> エル
		鞋後跟兒	‘ <u>コ</u> ール
in>iər	チヌ	近兒	チル
	チヌ	今兒	チル
uen>uər		準兒	<u>チ</u> ユイル
	<u>チ</u> ユイヌ	嘴唇兒	<u>チ</u> ユイル
üan>uar	チエヌ	烟卷兒	チエル

「n」は捲舌を妨げるので、r化する時「n」を削除し、主母音の上でr化するという規則がある。『合璧』は、「n」を小さい「ヌ」を以て表す。r化音では、小さい「ヌ」を消し、代わりに「ル」を付け加えている。「肩兒」、「臉兒」、「本兒」ではその上長音を加えている。長音を加える意味がよくわからないが、「ヌ」を取り消すのはr化の音交替規則を守っている。

③ 韻尾が-ng

韻母の交替	基礎音節の仮名	r化語	r化音節の仮名
ang>angr	ヤン	様兒	ヤル
	<u>タン</u>	跑堂兒的	タール
ong	<u>チ</u> ヨン	火虫兒	<u>チ</u> ヨル
eng>engr	‘ト ^ン ・‘ト ^{エン}	杌欖兒/取燈兒	‘ト ^{エル}
	フオン	信封兒	フオール・フオル
	‘ <u>チ</u> エン	現成兒	‘ <u>チ</u> オール
	‘ <u>シ</u> オン	聲兒	‘ <u>シ</u> オル
	チ ^ン ヨン	中中兒	チ ^ン オル
ing	ミン	明兒	ミル
	ミン	名兒	ミール
	<u>チ</u> 〇ン	飯廳兒	<u>チ</u> 〇ル
	チン	靜靜兒的	チル
	チ〇ン	房頂兒	チ〇ール

-ng で終わる音節は r 化する際に、-ng を取って、主母音が鼻音化した上で r 化する。表から見られるように、『合璧』は-ng を仮名「ン」を用いて表しているが、r 化語の中、「跑堂兒的」、「現成兒」、「房頂兒」、「信封兒」の4つは、「ン」を「ル」に変えるのみならず、後ろに長音符号を加える。（「信封兒」は長音を加えない形と長音を加えた形の2つがある。）「長音+ル」という形は「ər」を表す意味があるが、ここではその必要がないので、意味は不明である。もしただ主母音を長くするというと、母音が鼻音化する規則とは関係がないので、作者自身の判断によった結果であろう。

しかし、大部分の r 化音の仮名表記は、ただ「ン」を大きい「ル」または小さい「ル」へ切替えている。『合璧』の表記は、韻尾-ng の消失を表示しているが、主母音が鼻音化することは表示していない。

④ 韻母が i、ü

韻母の交替	基礎音節の仮名	r 化語	r 化音節の仮名
i>iər	リ ²¹⁸	裏兒	リール
	チー	小雞兒	チール
	チー	幾兒	チル
	ピー	信皮兒	ピール
ü>üər	ニ	姪女兒 ²¹⁹	ニール
	ニ	孫女兒	ニル

「i」「ü」を主母音とする韻母は、r 化する時にもとの音節に「ər」音を加える。『合璧』では、主母音が「i」である r 化語の表記に3つの形式がある。「裏兒」は、r 化韻の仮名表記は「ール」を加え、「幾兒」は長音を消して長音「ル」を加え、「小雞兒」と「信皮兒」は「ル」のみを加える。

「ü」を主母音とする韻母の r 化の表記には、「ル」または「ール」を加える2つの形が見られる。

このように、「ール」が「r」と区別する「ər」音を表しているとするならば、作者は主母音「i」「ü」を含む韻母が r 化する時の特別の音交替に、ある程度の注意を払っていたことになる。

²¹⁸ 「裏」の仮名表記は「リ」であるが、同じ音節を持っている字（「荔、狸、利、籬、蠣」など）はすべて「リー」と表示されている。

²¹⁹ 「孫女（ニル）兒」など長音符号を加えない例も見られる。

⑤ 韻母が舌尖母音-i

韻母の交替	基礎音節の仮名	r 化語	r 化音節の仮名
i>ər	ツ、 <u>ツ</u>	雞子兒	ツル
	<u>チ</u>	戒指兒	<u>チ</u> ル
	<u>チ</u>	姪兒	<u>チ</u> ル

「-i」で終わる韻母が r 化すると「-i」が読まれずに「ər」音をつける。

韻母が舌尖母音-i である音節では、仮名表記で長音符号がついている。r 化すると、『合璧』はもとの韻母の上に「ル」を加える。こうすると、「ər」を示す長音表記で示している。

⑥ 韻母 a、o、e、u、ia、ua、ao、ou、uo、iou は r 化すると、主母音が変わらず「r」が加わる

韻母の交替	基礎音節の仮名	r 化語	r 化音節の仮名
a>ar	<u>ター</u>	汗襖兒	<u>ター</u> ル
		那兒	ナール
	マー	碼兒	マール
o>or		茶葉末兒	‘モール
e>er	‘ <u>コー</u>	哥兒們・個兒	‘ <u>コー</u> ル
	‘ <u>コー</u>	鸚哥兒	‘ <u>コ</u> ル
	コ ‘ <u>ー</u>	下巴頰兒	‘ <u>コ</u> ル
	‘ <u>ホー</u>	墨盒兒	‘ <u>ホー</u> ル
		這兒	‘ <u>チ</u> オール
u>ur	フー	媳婦兒	フール
	ホウー	鼻煙壺兒	‘ <u>ホウ</u> ール
	ツ〇ー	家兔兒	ツ〇ール
	<u>シウ</u>	松鼠兒	<u>シウ</u> ール
	<u>シウ</u>	歲數兒	<u>シウ</u> ル
ao>aor	タウ	道兒・刀兒	タウル
	マウ	貓兒眼	マウル

	ツ ^ア ウ	棗兒	ツ ^ア ウル
		羊羔兒	カウル
ou>our	‘トウ	兜兒・山葍豆兒	‘トウル
	‘トウ	老頭兒・頭兒	‘トウル
	‘ホウ	猴兒・時候兒	‘ホウル
		門口兒	‘コウル
ia>iar	シヤー	下兒	シヤール
ie>ier	シエー	歇歇兒	シエ ^ル
	チエー	姐兒們	チエール
	チ ^〇 エー	蝴蝶兒	チエール
ua>uar	‘ホ ^ワ ー	花兒洞子	‘ホ ^ワ ル
	‘ホ ^ワ ー	花兒匠	‘ホ ^ワ ール
uo>nor		錯兒	ツ ^ヲ ール
		多兒錢	ト ^ヲ ル
iou>iour	リ ^ユ ウ	溜兒	リ ^ユ ル
	チ ^ユ ー	球兒	チ ^ユ ール
	ニユウ	妞兒	ニユール
	ニユウ	小妞兒	ニ ^ユ ール
üe>üer	チヤウ	家雀兒	チヤウル

この表からみると、大部分の韻母が r 化する時に大きいまたは小さい「ル」を加え、音交替の規則に従っている。ただし、3 つの特殊な現象があり、音交替の規則に違反している。

- ①「哥兒」、「頰兒」、「歇兒」、「球兒」はもとの長音を取って「ル」を加える。
- ②「鼠兒」、「妞兒」は「^ル」を加える。
- ③「溜兒」はもとの仮名「ウ」を消して「^ル」を加える。

それに、r 化韻の仮名表記には大きい「ル」と小さい「ル」が見られるが、書き分けの条件は見いだせない。

4.3 明治・大正期における日本人の r 化音への認識諸相

4.3.1 明治・大正期の日本人の r 化音への認識諸相

明治・大正期の北京官話学習書における r 化語の状況について、筆者は約 30 点の資料を調べた結果、r 化語について記載があるのは 12 点であった。以下にそれらの書名、著者と出版年を挙げ、具体的な記載を紹介する。

『日清会話』	参謀本部	明治 27 年 (1894 年)
『支那語独習書』	宮島大八	明治 33 年 (1900 年)
『清語会話案内』	西島良爾	明治 33 年 (1900 年)
『清語教科書』	西島良爾	明治 34 年 (1901 年)
『四声標註支那官話字典』	西島良爾・牧相愛	明治 35 年 (1902 年)
『支那語辞彙』	石山福治	明治 37 年 (1904 年)
『初歩支那語独修書』	原口新吉	明治 38・39 年 (1905、06 年)
『清語正規』	清語学堂速成科明	明治 39 年 (1906 年)
『日華語学辞林』	井上翠	明治 39 年 (1906 年)
『支那語独習全書』	石山福治	大正 2 年 (1913 年)
『最新实用支那語教科書』	西島良爾・林達道	大正 4 年 (1915 年)
『实用支那語教本：北京官話』	本田清人	大正 6 年 (1916 年)

以上のうち、『日清会話』、『支那語独習書』、『初歩支那語独修書』、『支那語独習全書』、『最新实用支那語教科書』、『实用支那語教本：北京官話』については、国立国会図書館デジタルコレクションが公開した版本を利用した。『清語会話案内』、『清語教科書』、『清語正規』、『日華語学辞林』は山口大学図書館に所蔵されている版本を利用した。『四声標註支那官話字典』は波多野太郎編『中国語学資料叢刊：白話研究篇』の第 2 巻に収録されている影印本を利用した。『支那語辞彙』は六角恒廣編『中国語辞典集成』第一巻に収録されている影印本を利用した。

(1) 『日清会話』

『日清会話』のなかで、「兒」字の本来の発音の仮名表記は、「兒 (アル) 子」の例からみると「アル」である。r 化音では、普通直接「ル」を付け加えるのみで、音交替の規則が反映しているのを見出し得ないが、時々仮名に変化がみえる。

小孩 (ハイ) 子 → 女孩 (ハー) 兒 好 (ハオ) 好 (ハーオ) 兒的
等 (ターン) 一等 (ター) 兒

しかし、r 化音の仮名の変化は統一していない。例えば、「女孩兒」は以上の表記方法のほか「女孩（ハイー）兒」もある。

(2) 『支那語独習書』

本書では、「[○]兒（ア^ル）子」のように、非 r 化語の場合は「兒」を第 2 声の声調表記と「ア^ル」で表示する。「鳥[○]（ニャオ）[○]兒（ル）」のように、r 化語の場合は「兒」が第 2 声のままだが、仮名は「ル」に変わっている。「響聲（ショヌ）兒」、「請吃點[○]（デェン）[○]兒（ル）點[○]（デェン）心」のように、r 化語においても「n」「ng」に対応する「ン」と「ヌ」を削除せず、音声交替を反映させていない。

(3) 『清語会話案内』

本書には四声が付いていない。r 化語が豊富に見られる。r 化語の品詞は名詞が一番多く、動詞、形容詞、副詞もある。「兒」は非 r 化語では、「過繼兒（アル）子」のように「アル」によって表音され、r 化語の場合韻母に関わらず「ル」を採用するのが圧倒的多数である。ただ「レ」「ール」「ヌレ」等で記した例外が 5 つだけ見られる。

跑堂（タン）兒（レ）的　杏（シン）兒（レ）　砍（カヌ）肩（チエ）兒（ヌレ）
變戲法（フワ）兒（ール）的　花（ホワ）兒（ール）匠

これらは印刷上の間違いと判断した。前の 3 例と同じ韻母を持つ字は「幫忙（マン）兒（ル）的」、「房頂（デン）兒（ル）」、「飯館（コワヌ）兒（ル）」のような表記が一般的で、即ち「レ」は「ル」、「肩（チエヌ）」と「肩」にあるはずである。「法兒」・「花兒」においても、例えば「一枝花（ホワー）兒（ル）」の例に見られるように、「ール」の長音符はそれぞれ前の「花」、「法」にあるべきものである。

一方、主母音や韻尾の音交替は、大部分の例に反映されていない。

澡堂（タン）子→跑堂（タン）兒的　眼（エヌ）睛→肚臍眼（エヌ）兒
花（ホワー）子→一枝花（ホワー）兒　小雞（チー）→小小雞（チー）兒

「點」「今」は r 化に伴って仮名表記に変更が加えられ、例外的である。

慢着點（デ）說→查點（デヌ）兒　小心點（デ）兒　比我矮一點（デァー）兒
今（チヌ）天→今（チン）兒

r化ではない場合の「點」は、韻母「ian」の韻尾「n」に当たる「ヌ」がみられず、r化すると「查點兒」では「ヌ」を加えるが、「小心點兒」「比我矮一點兒」では「ヌ」をつけない。「今」は「チヌ」がr化によって「チン」と変わるのが理解できない。

(4) 『清語教科書』

本書において、声調について「聲音ノ變化」に「去聲同字重複シ語尾ニ虛字「兒」ヲ有スルトキハ中ノ字ヲ上平ニ變聲スベシ²²⁰」という解説がある。すなわち、第4声の単音節語が重複して成る疊語は、r化すると、2番目の音節は第1声になるという。しかし、変調規則では、形容詞の疊語はr化すると2番目の音節は第1声になるべきだが、第4声の単音節語から成る疊語に限られない。それで、本書のr化による変調の解説は不完備である。

r化語の表音について、「過繼[○]兒（オル）子」「太陽冒嘴[○]（ツイ）[○]兒（ル）」のように、「兒」の仮名を「オル」から「ル」と変え、声調は第2声と表記し、音交替を表していない。

(5) 『四声標註支那官話字典』

『四声標註支那官話字典』は字典と冠されているが、一字から句まで見出しとして並べる。r化語の数は多い。r化する前の品詞は、名詞が一番多いが、動詞の「竟貪玩兒」「打顛兒」「擺設兒」なども豊富にみえる。「兒」はr化語尾でない場合、「過繼兒子（コオーチイオルツ）」のように「オル」で表音する。r化語の場合は「字眼兒（ツウエヌル）」のように「ル」となる。-n（「ヌ」）、-ng（「ン」）の脱落現象は発音表記に現れていないことが確認できる。

(6) 『支那語辭彙』

『支那語辭彙』は中日字典であり、本文は495頁で、頁ごとに均等に10語の見出しが見られるので大体4,950の語数を収録している。そのうち、r化語はたまにしか見当たらない。数えたところ語数は僅か138で、全部の語の2.7%ぐらいを占める。ここまでに取り上げた教科書、字典の積極的にr化語を収録している様子とは異なり、石山が字典にはできれば口語より文語を登録しようと考えたか、と推測できる。

『支那語辭彙』は「兒」字を説明する時に、「息子、小兒、名辭と結合して其意味を完全にするに用ひらる」と書いているように、「兒」の「語尾」としての用法を意識していたことがうかがえる。「兒」は第2声、「ア[○]ル」を以て注音され、r化語にあっても不変で、同様に扱っている²²¹。大正10年改訂版の『支那語辭彙』もこれを継承した。

²²⁰ 『清語教科書』 p.18。

²²¹ 見出しの一字の後ろに、数語を並べるが見出し字の音が省略される。故に、r化語の音交替が窺えない。例えば、見出し「紋ウエン」の用例である「紋兒」は、ただ「兒」を「ア[○]ル」で注音し、「紋」の音を注していない。

(7) 『初歩支那語独修書』

『初歩支那語独修書』の「音の變化」の部分では、「(〇兒) 只字音ヲ發スルノミニテ無意義ニ名詞ニ附セラル者甚ダ多シ此場合ノ(〇兒) ハスベテ上平ニ變ズ」と解説している。また、「子供」を意味する場合は「^〇兒ハ字義ヲ有ス故ニ四聲ヲ變化セズ」(傍線は原文のまま、以下同じ。)であるために「^〇兒^〇子」と読むのに対して、r化語の「^チ〇^ル今^ツ〇^ル兒^ル ●^ホ村^ル〇^ル兒^ル 〇^ル花^ル〇^ル兒」は「三ツノ名詞ニ附セラレタル^〇兒ハ只ルノ音ヲ發スルノミニテ何タル字義ヲ有セズ故ニスベテ上平ニ變ス」と、例を挙げながら説明している。

文法の部分では、r化についての記載もある。

「兒」

本来の意義を為すときに四聲「下平」にして「アル」の音なり

此例に用いられる場合此字の上に音脚(ン)若くは(ヌ)を有する文字の在るときには其(ン)或は(ヌ)は消え去りて發音せず左の例の中に其形あり、特に注意せよ 例：猴兒 棗兒 勁兒……²²²

本書に載せているr化語をみると、「兒」はr化語では「ル」で音を表記する。韻尾が-nである時r化韻の仮名表記は音交替の規則に従う。韻尾が-ngであると、-ngに対応する「ン」を取り「ル」を加えるのは、主母音の鼻音化を反映していない。「兒」の声調について、「上平(第1声)に変へる」と規定している点には誤りがある。「兒」は前の韻母に影響を与えた同時に、自身も併せて一音節になってしまうので、声調は前の字の声調に従うこととなる。第1声に変わるとは限らないのである。

(8) 『清語正規』

『清語正規』の序文には清語学堂の長である原口新吉の署名がある。『初歩支那語独修書』と同じく原口が関わる書だからだろうか、2冊の教科書は重なる内容が多く、r化語についての記載と用例も殆ど相違がない。r化語の性質について、『清語正規』の「四聲の變化」に、

(〇兒) は只其字音を残するのみにて無意味の助詞として或名詞に附加せらるる場合甚だ多し、此の如き場の(兒)(子)の四聲は總て上平に變じて可なり²²³

例： ●^ツ村^ル〇^ル兒^ル²²⁴ 〇^ホ花^ル〇^ル兒

²²² 『初歩支那語独修書』 p. 21。

²²³ 『清語正規』 p. 12。

²²⁴ 『清語正規』の「音の別」(p.7)、『初歩支那語独修書』の「有氣音と無氣音の別」(p.6)による。

と書いている。「兒」を、「子」と共に助詞と定義している。r化は本質的に一種の形態音韻論的現象で、「子」は接尾語である。さて、「兒」を加える理由は、後文の「無意味の加字」で、

清語には同音の字多きが故に名詞の一字より成るものは四聲のみにては其何たるを判別し難きこと多し。故に一字若くは二字より成る名詞には無意味の字を加え…

例： 蓋^カ〇〇^ル兒 〇^{ホウ}猴^ル兒 海^{ハイ}〇^{ビエ}邊^ル兒 外^{ワイ}〇^{タオ}套^ル●〇兒

と説明している。ここはただ名詞の場合の理由を述べるにとどまる。r化に実質上の意味がないのは事実であるが、意味を変えたり、動詞を名詞に変えたり、語気を和らげたりする文法上の意味があるはずだ。

『清語正規』は、r化の場合の「兒」の声調を第1声に変えるとの説明が『初歩支那語独修書』と同じである。「兒」の仮名がr化語で「アル」から「ル」と変えている。r化された音交替について、『清語正規』は韻尾が「n」「ng」の場合は、韻尾が削除され、主母音が捲舌母音化する規則を特別に扱っている。

(9) 『日華語学辞林』

『日華語学辞林』は井上翠により、権威ある工具書として広く利用されていた²²⁵。その中には、r化語も大量に収録されている。「兒」の項目で「〇兒 (ÉRH・アル) 息子。小兒。名詞代名詞ノ接尾語トシテ用ラル。」と解釈しているように、井上はr化語の言語現象についてよく知っている。r化語における「兒」の表記は、仮名は「アル」ではなく「ル」となるが²²⁶、声調表示は第2声のままである。「心眼 (イエヌ) 兒」「杏 (シン) 兒」のように、仮名による音交替を試みた形跡は見当たらない。

(10) 『支那語独習全書』

『支那語独習全書』は理論を主にし、用例が少ない。音韻、四声の知識を章立てしているが、r化語を特別に説明してはいない。ただ、「去聲音の同字が相連りて、其次に「兒」を有する時は次の一字が上平音に變ずること²²⁷」の記述が見られる。例えば、

快●●快〇兒 (ル) 的²²⁸ 慢〇〇慢〇兒 (ル) 的

²²⁵ 六角恒廣『漢語師家伝 中国語教育の先人たち』東方書店、1999年、p.261。

²²⁶ ただし、「小兒」の「兒」が「ル」と表音され、著者の間違いと思われる。

²²⁷ 『支那語独習全書』p.77。

²²⁸ 『支那語独習全書』は〇を以て、字の四隅に付けて四声を表す。●は有気音を表示する。

である。これはしかし、r 化語の音交替規則では、形容詞の疊語で 2 番目の音節は第 1 声になり、第 4 声の単音節語から成る疊語に限られない。本書の r 化による変調の解説は不完備である。

『支那語独習全書』では、r 化語は音交替の現象が表されていない。「兒」の仮名表記の変化と疊語以外の「兒」の変調は見られる。「[○]兒（アル）子」、「小[○]孩[○]兒（ル）」からみると、「兒」は「アル」から「ル」に、第 2 声から第 1 声に変わる。

ほかに、「那[○]（ナ）個→那[○]（ナ）兒（ル）有他的」「那[○]（ナー）個（イコ）→那[○]（ナー）兒（ル）有俗們的²²⁹」の「那」は長音により声調を区別していること²³⁰が窺える。

(11) 『最新实用支那語教科書』

『最新实用支那語教科書』は語を表音せず、r 化語については「去聲同字重複シ語尾ニ助辭「兒」ヲ有スル場合ハ中ノ字ヲ「上平」に變聲スル²³¹」と解説している。この記述は上の (4) と (10) の教科書に見られるものと同じである。

(12) 『实用支那語教本：北京官話』

本書の「語法大要」では r 化された韻母の音交替について「[○]今[○]兒 [○]明[○]兒ノ如ク[○]兒ノ上ニヌ若クハ[○]即チ (n) 若クハ (ng) ト云フ窄音又ハ寬音ヲ冠リタル場合ハヌ若クハ[○]響カザル音トシテ直チニアルト發音スルヲ普通トナセリ²³²」とある。本文はローマ字はウェード式で表音しており、単語部分に載せている計 43 個の r 化語をみると、表音上、「今 (chin) 天=[○]今 (chin) [○]兒 (erh)」のように、r 化された音交替が見られない。「兒」の表音は、21 例が「rh」、22 例が「erh」で記されているように異なっている。

「rh」は韻尾 n、ng を持つ韻母に、「erh」はそれ以外の韻母にそれぞれ接続する形であると予想されるが、調べると以下の結果となり、規則が全くない

rh の前の韻母²³³：

韻母	o	ou	an	en	ai	ao	e	iu	ie	ua	ang	eng
回数	1	1	3	1	1	4	3	1	2	1	2	1

²²⁹ 『支那語独習全書』 p. 79.

²³⁰ 「那」が第 3 声の場合は「何処」を意味し、第 4 声の場合は「そこ」を意味する。

²³¹ 『最新实用支那語教科書』 p. 8.

²³² 『实用支那語教本：北京官話』 p. 12.

²³³ 「rh」で表音されているのは「坡 (p ‘o) 兒」「村莊 (chuang) 兒」「擺渡口 (k ‘ou) 兒」「海灣 (wan) 兒」「犄角 (chiao) 兒」「鳥 (niao) 兒」などがある。

erh の前の韻母²³⁴ :

韻母	o	e	i	ü	ao	uo	ou	an	en	i	n	un	ang	ing	ong
回数	1	1	2	1	2	2	2	2	1	1	1	1	3	1	1

『实用支那語教本：北京官話』はウェード式を用いて発音を表記しているとみえるので、ここでは『語言自邇集』に見られる r 化語表記に調査の手を伸ばしてみよう。ここでは、「兒」は単音節である時「êrh2」で注音されるが、r 化語ではすべて「rh」と注音されている。「這 (cê4) 兒 (’ rh)」、「昨 (tso2) 兒 (’ rh)」のように、「兒」は単音節から直前の韻母と融合して r 化音となり、声調もそれに従うことを表示している。それで、『实用支那語教本：北京官話』はウェード式を継承しているが、『語言自邇集』の正確な記述をすべて吸収してはいないことがわかる。

以上の 12 点の資料を調査した結果、r 化語では「兒」の変調について考察することが必要であると考えられる。(7)、(8) の教科書では、「兒」が統一的に第 1 声に変わると言っており、(4)、(10)、(11) は 4 声の字を作る疊語の r 化語では「兒」が第 1 声に変わると説明している。実は、疊語の場合は 2 番目の字が第一声になるので、「兒」も一緒に一声になるといえるのは正確である。しかし、それ以外の場合は、「兒」は直前の字の四声に従うべきである。このように、明治・大正時代に、日本人が r 化語における「兒」の変調に気づいたが、変調規則がまだ把握できていなかったと思われる。

4.3.2 『日漢英語言合璧』の r 化音の位置づけ

以上の考察を通じて、『合璧』の r 化音についての表記は、明治・大正時代の教科書と辞典の中で先進的な位置にあると結論できる。以下、『合璧』を含む 13 点の書籍を考察した結果を表にする。

そのうち、関わる内容がないのは空欄、「項目」欄の記述が当てはまるものは○、当てはまらないものは×をそれぞれ記す。→を以て変化を表し、＝を以て不変化を表す。説明が必要な場合は注をつける。

²³⁴ 「erh」で表音されている語には「山澗 (cheien) 兒」、「昨 (tso) 兒」、「前 (ch ‘ien) 兒」、「三十 (shih) 兒」、「虫 (ch ‘ung) 兒」などがある。

書名 項目		『日清会話』	『日漢英語言合璧』	『支那語独習書』	『清語会話案内』	『清語教科書』	『四声標註支那官話字典』	『支那語辞彙』	『初歩支那語独修書』	『清語正規』	『日華語学辞林』	『支那語独習全書』	『最新実用支那語教科書』	『実用支那語教本・北京官話』
		○ アル ↓ ル	○ アル ↓ ル ²³⁵	○ ア° ル ↓ ル	○ ア ル ↓ ル	○ オ ル ↓ ル	× ア° ル ア° ル	○ オ ル ↓ ル	○ ア ル ↓ ル	○ ア ル ↓ ル	○ ア ル ↓ ル	○ ア ル ↓ ル	○ ア ル ↓ ル	
r 化語尾「兒」の発音、 表記、声調	単字音 「er」 ↓ r 化音 「r」	○ アル ↓ ル	○ アル ↓ ル ²³⁵	○ ア° ル ↓ ル	○ ア ル ↓ ル	○ オ ル ↓ ル	× ア° ル ア° ル	○ オ ル ↓ ル	○ ア ル ↓ ル	○ ア ル ↓ ル	○ ア ル ↓ ル	○ ア ル ↓ ル		×
	前字と合 体して記 す	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×
	第2声 ↓ 前字に従う	×	○	× 2 2		× 2 2		× 2 ↓ 2	× 2 ↓ 1	× 2 ↓ 1	× 2 2	× 2 ↓ 1		
r 化音 交替	韻尾 n	× 236	○	×	×	×	×	×	× 237	○	×			○ 238
	韻尾 ng	× 239	○			×	×	×	○	○				○
	ng 韻母 が鼻	×	×	×	×			×	× 240	×	×			×

²³⁵ 1つの例外「鸚哥（‘コ）兒（ル）」がある。

²³⁶ 規則に従っている例には「茶盤（パー）兒（ル）」、「一點（ディエ）兒（ル）」、「前（チイエ）兒（ル）」があり、規則に従わない例には「打盹（トウエヌ）兒（ル）」、「伴（パヌ）兒（ル）」、「紐攆（パヌ）兒（ル）」、「茶罐（コワヌ）兒（ル）」がある。

²³⁷ 規則に従っている例には「海邊（ビエ）兒」、「茶館（コウ）兒」などがあり、規則に従わない例には「煙捲（チュウ）兒（ル）」（「捲」の仮名表記は「チュアン」）などがある。

²³⁸ この場合の「ヌ」が脱落する記述があるが、r 化語の注音に現れていない。

²³⁹ 規則に従う例には「様（ヤー）兒（ル）」、「火虫（チョー）兒（ル）」などがあり、規則に従わない例には「勁（チーン）兒（ル）」、「地方（ファン）兒（ル）」などがある。

²⁴⁰ 主母音が鼻音化し、韻尾「ng」が削除される規則に従う例は「取燈（トオ）兒（ル）」（「燈」の仮名表記は「洋燈（トン）」）があり、韻尾「ng」が削除される規則にのみ従う例には「聲（シヨ）兒（ル）」、「房頂（ディー）兒（ル）」などがある。

	音化													
韻尾 i	iが脱落	× 241	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×
韻母 i、ü	erを加える	×	x	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×
舌歯音 -i	-iを削除しerを加える	×	×	×	×	×	×	×	x ²⁴⁶	×	×			×

この表からうかがえるように、『合璧』はr化音の表記と音交替の規則に従っている精密さがみられ、最も先進的である。『初歩支那語独修書』と『清語正規』もr化の音交替の知識を把握していた。彼らのr化への認識は、明治・大正期において希有といえる。

一方、大部分の北京官話学習書においてr化に伴う仮名表記の変更が見られないのは、それを意識しないか、或は意識しても注音に実践せずに終わったと考えられるが、先行する『合璧』などの先進的な扱いを継承しなかった。その著者の宮島大八、西島良爾、牧相愛、井上翠、石山福治など、中国語の教育領域で活躍していた人士であっても、r化語への認識が薄く、本格的な研究を展開しなかった。

4.4 まとめ

r化語は北京語の顕著な特色とされている上、文語より口語で頻繁に使用されている。近代日本の中国語教育界では会話が重視されていたため、r化語は主たる学習対象になった。ゆえに、日本人のr化音の学習は本章の課題とされる。

²⁴¹ 規則に従う例には「女孩(ハ)兒(ル)」があり、規則に従わない例には「一塊(クワイ)兒(ル)」、「一塊(クワイ)兒(ル)」がある。

²⁴² 規則に従う例には「蓋(カ)兒(ル)」、「小孩(ハ)兒(ル)」があり、規則に従わない例には「等一會(ホイ)兒(ル)」がある。

²⁴³ 規則に従う例には「蓋(カ)兒(ル)」があり、規則に従わない例には「味(ウオエ)兒」、「一塊(コワイ)兒(ル)」、「快(コワイ)快(コワイ)兒(ル)的」、「一會(ホイ)兒(ル)」がある。

²⁴⁴ 韻母がüである例の中で、「孫女(ニ、ユー)兒」(「女」の仮名は「ニーイ」)が規則に従う。韻母がiである例の中で、「裏(リー)兒(ル)」(同音字「禮」の仮名は「リー」)は規則に従わない。

²⁴⁵ 韻母がiである例の中で、「衣裳的裏(リー)兒(ル)」が規則に従う。韻母がüである例は見られない。

²⁴⁶ 規則に従う例には「瓜子(ツー)兒(ル)」、「槍子(ツー)兒(ル)」(「子」の仮名は「ツ」)などがあり、規則に従わない例には「樹枝(チー)兒(ル)」(同音字「指」の仮名は「チー」)がある。

まず、北京官話学習書『合璧』を主な資料として考察した。結果的に、『合璧』の仮名表記は、ほぼ完璧に発音を表しうる仮名表記系統をもっている。発音表示符号でも、韻母の仮名表記でも、r化語の仮名表記でも、一定の規則が見出せる。発音表示符号について、『合璧』の作者は日本語にない中国語の発音に目を向け、真剣な考察をしていたようにみえる。r化音の音交替の仮名表記は、殆ど音韻学上の規則に従っている。これによって、日本人の科学的な方法で北京官話r化音を学習した事実を証明した。

次に、明治・大正期のr化語の記録が見られる他の12冊を調査した。結果として、大部分の日本人のr化語とr化音に対する認識における科学性が乏しい中、『初歩支那語独修書』と『清語正規』はやや優れるといえる。『合璧』に見られるr化音の音交替の認識は、それらと比べると、当時最高の水準にある。残念なことに、『合璧』のr化音についての記載はそれ以後の教材に影響を与えることがなかった。

明治・大正期の中国語学習教材は膨大であるので、r化音についての記録は筆者の調べたもの以外にも必ず残っているに相違ない。それらから見られるr化韻への認識と学習方法はどうか、また昭和時代に入ると進歩があるか。こうした問題を以後の課題とする。

第5章 北京官話辞典における北京官話 r 化語の扱いの変化

前述したように、r 化語は北京語の特色であるため、北京官話時代にも日本人に学習されていた。r 化語は、発音上の特徴以外に、他のそれなりの特別な性質をもつ。すなわち、多くの r 化語が書面では r 化してもしなくても意味が通じるということである。

発話された話し言葉は多様であるが、文面に定着した場合は、一定の基準がなければ、記録が混乱してしまう。そして、言葉はどこの国でも時間の経過とともに、自然に洗練され、また人為的な規定の下で、その時々「標準語」の基準に沿って変わっていく。中国で現在の標準語と位置づけられているのは「普通話²⁴⁷」である。元々特に北京語で目立った r 化語は、「普通話」に相応しいために、一定の規則で規範化されてきた。つまり、ある単語が r 化するかしらないかは、清末から近現代にかけての「普通話」の基準に沿って変化してきた。

それに対して、日本の中国語教育において、明治から大正・昭和初期にかけて、どの語を r 化するか、変化があるかが課題となった。第4章では日本人の r 化語の性質と音交替への認識を明らかにしたので、本章では個別の語を r 化するかしらないかに対する日本人の対応を考察する。

何の時代でも、言語を学習するには、辞典はできればあらゆる語彙を網羅する性質を持っているので、時代の語彙を研究するために看過できない資料である。近代日本の北京官話教育において、代表的な辞典である井上翠の『井上支那語辞典』（1928）は『日華語学辞林』（1906）を踏襲した。-r を継承するものと削除したのが見られる。また、石山福治の『支那語辞彙』の1921年版と1904年版の r 化語を比較してみると、-r を継承している場合と削除している場合が見られる。これらの変化の基準を明らかにすることが本章の目的である。本章で用いる資料は上述した『日華語学辞林』、『井上支那語辞典』、『支那語辞彙』1904年版、『支那語辞彙』1921年版の4点である。

筆者は『日華語学辞林』所載の556個の r 化語の『井上支那語辞典』への継承状況、及び『支那語辞彙』1904年版所載の131語の1921年版への継承状況を確認した上で、r 化語の性質を考察した。その結果、『井上支那語辞典』と『支那語辞彙』1921年版

²⁴⁷ 1956年に、中国政府は「關於推廣普通話的指示（普通話の普及に関する指示）」を發布した。この指示の中で、「普通話」については次のように述べられている。「漢語統一の基礎は既に存在している。それは、北京語音を標準音とし、北方方言を基礎方言とし、手本となる現代白話文の著作をもって文法規範とするところの普通話である。」

は r 化語の一部を非 r 化語に移行し、現在の標準語に近づく傾向が読み取れた。これは明治から大正・昭和期にかけての北京官話辞典における r 化語の扱いの変遷でもあるといえる。以下に、この結論を論証する。

5.1 『日華語学辞林』と『井上支那語辞典』における r 化語の扱い

実は、r 化語は一種の口語として、現実に地域や人により r 化することもあるので、その語が r 化するかどうかを規定するのは困難である。近代中国の歴史上、r 化するかどうかをめぐる議論も続けられている。

魯允中の『兒化規範問題的討論』²⁴⁸によると、普通話の r 化語の規範に関する議論が始まったのは 1920 年代である。黎錦熙の『国語辞典』(1937) は r 化語を「北京の地元の人々の発音を基準とし、必ず r 化する r 化語に「兒」を付け、r 化してもしなくてもよい r 化語には「(兒)」を付ける。」という基準に基づいて作成された。張洵如の『北平音系小輻編』(1949) は「北京口語の r 化語を基準とし、必ず r 化する r 化語を主に収録し、r 化してもしなくてもよい r 化語も兼ねて収める。」という規則で r 化語を収録している。『現代漢語詞典』(1960) は r 化語は「口語で必ず r 化するが書面上どちらでもよい r 化語」と「口語で一般的に r 化するが、書面上一般的に r 化しない r 化語」に分類し注を付けて区別した。1963 年の『漢語拼音詞彙』(増訂稿) に至って、「必ず r 化する r 化語」だけに「兒」が付けられている。具体的にどのような r 化語が必ず r 化するか、という問題を深く研究したのは周祖謨の『普通話的正音問題』²⁴⁹である。周祖謨は次の 4 種の語は必ず r 化するとした。それらは、①「小孩兒」のような小さい意味を表すもの、②非 r 化語と意味の区別があるもの、③品詞が変わったもの、④「一點兒」のような特殊な意味を表すものである。魯允中(1956) は先行した議論の上で一層詳しい基準を提案した。①北京語の口語を基礎標準とするが、土語とは区別する。②非 r 化語と意味または品詞が変わったものと特殊な意味を表す r 化語は必ず r 化にする。③現在北京人の習慣と r 化する割合の実情も考慮すべき。④特殊な場合のみに r 化するのは r 化しないことにする。それには、周祖謨(1956) の 4 つの基準を含める。

²⁴⁸ 魯允中『普通話的輕声和兒化』北京：商務印書館、1995年、pp. 130-139。

²⁴⁹ 『中国語文』1956年第5期、p. 24。

小川郁夫 (2006)²⁵⁰は『現代漢語詞典』に基づいて、「普通話」において必ず r 化する語を「絶対的 r 化語」、r 化しても r 化しなくてもよい語を「任意的 r 化語」と規定するのが適当であると論じている²⁵¹。つまり、『現代漢語詞典』で「兒」が付いた r 化語が絶対的 r 化語で、「(兒)」のように表示されているものが任意的 r 化語である。例えば、「小孩兒」は絶対的 r 化語で、「米粒 (兒)」は任意的 r 化語である。

本論文は小川 (2006) による「絶対的 r 化語」と「任意的 r 化語」という 2 つの概念を導入する。その上で、書面上、口語における r 化語の表現をできるだけ網羅するため、『現代漢語詞典』を利用する上に、r 化語を専門に記載する資料、CCI とインターネットも基準とする。例えば、「小孩兒」は小川 (2006) では「普通話」で必ず r 化することを根拠に「絶対的 r 化語」と認めているが、実際には「小孩」という表現もみられ²⁵²、「小孩兒」とした場合と比べ意味が変わらないので、本論文では「任意的 r 化語」とする。「絶対的 r 化語」は、必ず r 化式だけ見られることと、非 r 化語と意味または品詞の区別があること、という 2 つの条件に満たす。

判断標準の資料は、r 化語を専門的に記載している『北京話兒化詞典』(1990 年版) と老舎の作品 (以下 A で示す)、普通話の資料としての『現代漢語詞典』(2005 年版) (以下 B で示す) である。一方、それらの資料にみられない語もあるので、CCI 及びインターネットを利用して判断する。

『北京話兒化詞典』は清朝の『紅樓夢』から現在までのいくつかの北京語の文学作品、小説、劇、「相声²⁵³」、新聞などから収集した r 化語の辞典である。老舎の作品は 1950 年代前後に出来上がり、近代の北京語を巧みに操って書かれたものである。普通話は 1956 年に制定され、『現代漢語詞典』(2005 年版) は普通話の規範にのっとった標準語を収録する辞典である。『支那語辞彙』は 1921 年に出版され、『井上支那語辞典』は 1928 年に発行されたが、普通話の推進の過程にあたる時期に出版されたものである。

r 化語の性質の判断は具体的には以下のようにする。数字は基準の適用順序を示す。つまり①で判断できない場合は②以下で判断するようにする。

²⁵⁰ 小川郁夫『「現代漢語詞典」における軽声語とアル化語』(『福岡国際大学紀要』2006 年、p. 1.)

²⁵¹ 小川郁夫は『現代漢語詞典』ではアル化を「口語で必ずアル化する語」と「口語で一般的にアル化する語」に分けているが、この規定はやはり北方方言に偏重するものであり、「普通話」においては「小孩兒」のように必ずアル化する語を絶対的アル化語、「米粒 (～兒)」のようにアル化してもアル化しなくてもよい語を任意的アル化語と規定する方が適当であると思われる。」と述べている。

²⁵² 例えば、『中国成語大辞典』には「従来小孩愛戴高帽兒」があり、『1994 年報刊精選』には「我比別人多一個小孩」がある。

²⁵³ 中国の伝統的な話芸で、日本の漫才に相当する。

★任意的 r 化語

- ① r 化式が A にあり、非 r 化式が B にあるもの。
- ② r 化式が A にあり、非 r 化式が B になく、CCI で検索された他の書籍にあるもの。
- ③ r 化式は A にはなく、非 r 化式が B にある。r 化式は CCI またはインターネットで検索された他の書籍にあるもの。
- ④ A にも B にもないが、r 化式と非 r 化式が CCI またはインターネットで検索された他の書籍にあるもの。

★絶対的 r 化語

- ① r 化式が A にも B にあり、非 r 化式が B になく、r 化しなければ語と認められないもの、または意味が変わるもの。
- ② A にあり、B には当該の語（r 化の如何に関わらず）がなく、r 化しなければ語と認められないもの、または意味が変わるもの。
- ③ A にも B にもないが、r 化しなければ語と認められないもの、または意味が変わるもの。

以下、まず井上翠の『日華語学辞林』（1906）と『井上支那語辞典』（1928）における r 化語の扱いの変化をみる。『日華語学辞林』に掲載されている全ての r 化語を対象とし、「減点儿價錢」と「慢点儿走」の「点儿」のように、同じ語が複数の見出しの中に繰り返し現れる場合はそのうち 1 つしか取らないことにしたところ、556 個の r 化語となった。

この 556 の r 化語の『井上支那語辞典』への継承状況を調べた。『井上支那語辞典』は 56 個の r 化語を削除した。それらを除いた 503 語の継承状況を対照し、非 r 化形式になる語と r 化のまま継承された語を分けて、r 化語の性質を先述した判断方法で、「任意的 r 化語」或は「絶対的 r 化語」と分類した。すべての結果を本章の付録 1、付録 2 に示す。本節では項目ごとに例を示し、任意的 r 化語は数語をあげ、絶対的 r 化語の基準②③で判断されたものはすべて挙げて詳細な説明をつける。r 化語は文の中に使われる場合は、その文をそのまま引用し、対象となる r 化語を下線で表示する。語形が変化した語には符号 → を用い、左側に『日華語学辞林』の表記、右側に『井上支那語辞典』の表記を示す。変化のない語彙は『日華語学辞林』の r 化語のみを表記する。後ろの（ ）の中は、『日華語学辞林』の日本語訳である。

(1) 『井上支那語辞典』で非 r 化形式になる語

★任意的 r 化語 (119 個)

①

唱曲兒→唱曲 (歌ヲウタフ) 照樣兒→照樣 (見本ノ通りニ)
起根兒→起根 (始メ、最初) 家當兒→家當 (身代、家庭)
…73 語

②

打野盤兒→打野盤 (野宿スル) 碗足兒→碗足 (碗ノイトゾコ)
房頂兒→房頂 (屋根) 痰盒兒→痰盒 (痰壺)

③

松鼠兒→松鼠 (栗鼠) 地皮兒→地皮 (地方)
門房兒→門房 (大門ノ両側、或ハ一侧ニ於テ、通路ニ向ヒ扉ヲ有スル
室ニテ門番ノ居ル所。)
…34 語

④

伏窩兒 (スニツク) 吊眼角兒 (ツリ目)
桅梢兒 (桅柱ノ尖) 掐着指頭兒算 (指ヲ折ル)
…8 語

★絶對的 r 化語 (1 個)

蓋兒→蓋 (蓋)

単音節語である「蓋」は r 化しないと動詞或は副詞を表すため、名詞の場合は r 化しなければならない。

(2) 『井上支那語辞典』でも r 化した形で継承された語

★絶對的 r 化語 (55 個)

①

這兒 (此處) 這當兒 (此ノ節、此ノ頃)
前兒 (一昨年) 昨兒 (昨日)

懷抱兒²⁵⁴ (赤ン坊)

主兒 (頭長。主意。)

取燈兒 (マツチ)

三分兒飯 (飯三人前)

… 36 語

②

襖兒 (襖ニ同ジ、又タ襖子)

尖兒 (尖リタルサキ、サキ…)

姪兒 (オヒ、メヒ)

渣兒 (カス、屑…)

摺兒 (折り目、襞 (ヒダ))

裏兒 (裏)

溜兒 (近所)

輸個東兒 (オゴル、賭事ヲシテ負ケテ)

賭個東兒 (オゴル、賭事ヲシテ)

對兒 (敵手)

手縫兒 (指ノ股ノスキ)

二小兒 (次男 (自分ノ))

勁兒 [渾身上下不得勁兒] (全身力ナク弱ル…)

…13 語

③

鍼鼻兒 (針ノ孔)

減點兒 價錢 (値段ヲ少シ引ク)

屁股蛋兒 (臀)

屁股溝兒 (臀ノ割目)

屁股眼兒 (臀ノ穴)

格兒 (體格)

…6 語

②に挙げた語について、「尖」は形容詞で、「裏」は方位詞、r 化して名詞となる；「摺」と「溜」は動詞で、r 化して名詞になる；「襖」、「勁」、「渣」は一字であれば文法上語と認められず、「兒」を付けることによって語と認められる；「東兒」と「東」は意味が全く違い、「東」は東の方向と指し、「東兒」は賭博のことである；「對」は動詞または形容詞で、「對兒」は名詞になる；「手縫」は手で縫うという意味で、「手縫兒」とは意味が異なる；「二小」の意味は召使いであるが、「兒」を加えつくと次男の意味に変わる。

以上の語は、r 化によって品詞或は意味が変わるので、絶対 r 化語と考えられる。

²⁵⁴ 名詞である「懷抱兒」は、動詞である「懷抱」と意味が違う。

③に挙げた語は前述した辞典のいずれにもみられないが、②と同様 r 化によって意味が変わるので、絶対 r 化語とした。具体的には、「鼻」は器官の名で、「鍼鼻兒」の場合は「鼻兒」が「穴」となる。「點」は名詞と動詞であるが、「點兒」は量詞で、少しの程度を表す。「蛋」は卵を指し、「蛋兒」は卵だけでなく丸い物の意味があるので、「屁股蛋兒」の場合は「兒」を付けなくてはいけない。「溝」と「眼」も同じで、本来とは別の意味を持たせるためには r 化しなければならない。「格兒」は体調の意味であるが、「格」は格子の意味である。

★任意的 r 化語 (325 個)

①

抄近兒 (近道ヲスル)

眨巴眼兒 (マバタキスル)

茶館兒 (茶屋…)

這邊兒 (此ノアタリ)

車箱兒 (車ノ胴)

下巴頰兒 (頤)

…173 語

②

初生的犢兒不懼虎 (生レ立ノ小主ハ、虎ヲ畏レナイ (盲蛇ニ怖ヂズ))

賣花兒的 (植木屋)

弄個套兒 (竊ヲカケル)。

波(白)稜蓋兒 (膝頭)

…39 語

③

小河兒 (小川)

血津兒 (血液)

對頭兒 (敵)

客坐兒 (客ノ坐ル席)

一撥兒 (一度)

逛青兒 (遊山)

…42 語

④

照本兒 (元價ニ照シテ、元價通ニ)

挨一挨兒 (逐ツテ…)

插關兒 (門ノ栓…)

長尾巴兒 (子供ノ誕生日 (詼諧ノ語))

箭箭兒中 (百發百中)

…71 語

そのうち、r 化語と非 r 化語の両方を集録している語もある。すなわち、『井上支那語辞典』では、『日華語学辞林』から継承した r 化語を見出し語とせずに例として挙げ、見出し語は非 r 化式 2 つの言い方を採用している状況がたまに見られる。例えば、

鶏子兒 → 鶏子… (3) 鶏卵〔鶏子兒〕

である。このように、非 r 化語を見出しとし、説明する時に他の言い方である r 化語を附加している。

『井上支那語辞典』に語項目そのものが無い 56 語を除いた 500 語の内訳は、以下の通りである。

『日華語学辞林』 の r 化語	『井上支那語辞典』 で非 r 化する	任意的 r 化語	119 個
		絶対的 r 化語	1 個
	『井上支那語辞典』 で r 化のまま ²⁵⁵	絶対的 r 化語	55 個
		任意的 r 化語	325 個

つまり、『井上支那語辞典』は『日華語学辞林』を継承した 500 語の内、約 24% の 119 語を非 r 化形式とした。これは、『井上支那語辞典』が r 化語を適切に減らした結果である。

r 化語の性格をみると、『井上支那語辞典』は、絶対的 r 化語である 55 語をすべて r 化のまま載せている。これによって、『井上支那語辞典』は r 化語の性質の判断においては科学性があることがわかる。

5.2 『支那語辞彙』1904 年版と 1921 年版における r 化語の扱い

石山福治著の『支那語辞彙』は 1904 年に初版を刊行し、1921 年に改訂再版を刊行した。1921 年版は体裁は変わらないが、例言によると、時世の変化に応じて語彙の追加、削除を行ったという²⁵⁶。1904 年版所載の r 化語は、21 年版では-r を継承するもの

²⁵⁵ この項目は、非 r 化形式とした語を見出し語、r 化語を例で挙げる場合も含む。

²⁵⁶ 本論文の 2.11 (3) を参照。

としないものがある。その背後には石山の人為的な取捨選択の判断基準があると思われる。

本節は『支那語辞彙』1904年版に掲載されている全ての r 化語 131 個を対照し、1921年版への継承状況を調査した。その結果、56 語を継承せず²⁵⁷、57 語を r 化した形で継承し、18 語を非 r 化語に移行していることがわかった。

(1) 『支那語辞彙』1921年版で非 r 化形式とした語

★任意的 r 化語 (18 個)

①

大宗兒 (主なる、主要なる)	家雀兒 (雀)
地皮兒緊 (不景気なる)	多早晚兒 (いつしか、其中に、何時)
氣味兒 (匂ひ、臭ひ)	

②

使勁兒 (力を用ゆる)	宅門兒 (住宅)
悄不聲兒 (極めて小聲に)	雜耍兒館 ²⁵⁸ (寄席 (よせ))

²⁵⁷ 『支那語辞彙』1921年版で継承していない r 化語は以下の 56 語である。

褲腿帶兒 (袴の最下部を緊むる紐)	拐彎兒 (路、街の曲る所をいふ)
哥兒 (若旦那)	狗洞兒 (犬くぐり穴 (塀を穿ちて))
小雞兒 (雛子)	小馬兒 (馬子、小馬)
小聲兒 (小聲、密々)	耍猴兒的 (猿廻し)
山芋頭兒 (馬鈴薯のこと)	死心眼兒 (心の死せること、(活気なき人物))
孫猴兒 (西遊記の孫悟空をいふ)	蛋殼兒 (卵のから)
當間兒 (中間に居ること)	翅膀兒 (つばさ (鳥の))
去一點兒 (少し取り去る、少し切り去る)	窄袖兒 (狭き袖口)
夾道兒 (別れ路)	這塊兒 (此近所、此邊)
這個當兒 (此時)	車箱兒 (車の内部)
抄近道兒 (近路 (ちかみち))	悄悄兒的 (ヒソヒソと)
躡着脚兒 (脚を十字に組む、あぐちを組む)	儘隔壁兒 (近所合壁といふ意)
靜靜兒 (静かに、しづしづと)	帳主兒 (債主、債權者)
敞臉兒 (片側 (懷中時計の))	昨兒個 (昨日)
昨兒晚上 (昨夜)	在當間兒 (中間に於て)
菜種兒 (野菜の種子)	廳兒 (巡查、番人)
賭博廠兒 (大賭博場)	使勁兒 (適合せろ、相當せろ、氣の合ふ)
燈苗兒 (洋燈の焰)	那兒都有 (何處にも有りますといふ意)
娘兒倆 (母子兩人、長輩 (必ず女) と晚輩 (男女を論せず) と二人)	
小孩兒 (女兒)	嫩嫩兒的 (軟らかなることの形容)
抱孩兒 (小兒を抱く、胎兒を孕みたる)	泡堂兒的 (給使、使丁、丁稚)
礮子兒 (砲丸)	費勁兒 (力を費す)
撲燈蛾兒 (火取虫)	普李普兒 (普ねく、凡て)
背陰兒 (物陰)	賠了本兒 (資本を損する)
猴兒似的 (猿の如き、猿に似たる)	火虫兒 (螢)
馬撒歡兒 (小兒などの喜びを狂ふこと)	帽結兒 (帽子の上部にある小さき組糸)
門口兒 (門口 (かどくち))	悶壳兒 (両側 (懷中時計の))
洋取燈兒 (摺附本 (マツチ))	老爺兒 (太陽のこと)

變戲法兒（手品のこと）

③

長毛兒（長髪、粵匪）

土物兒（其土地の産物）

④

公公兒的（極めて公平に）

甕洞兒（城門の口（穹窿形の））

早些兒（些し早く）

早早兒的（早々と）

貓兒眼（玉の一種）

啣嚙兒（不平を鳴らす音、ゲツゲツ言ふこと、つぶやくこと）

これらの r 化語の性質を前文で述べた判断方法で調べたところ、すべて任意的 r 化語に属す。つまり、石山福治は任意的 r 化語の一部を非 r 化語にしている。

(2) 『支那語辞彙』 1921 年版でも r 化した形で継承された r 化語

★絶対的 r 化語：(14 個)

①

一點兒（些し、少々）

蓋兒（蓋（ふた））

前兒（一昨日）

後兒（明後日）

那兒的話（ド一致しましてといふ意）

②

坐兒（坐席）

偷兒（盜賊）

一塊兒（一つしよに、一同に）

那一塊兒（彼の邊（所））

壓着本兒（資本をねかす、資本の流転せざる）

③

繫兒（結び目（繼などの））

鍼鼻兒（針の溝）

短點兒（些し不足なり）

貓兒頭（梟（ふくろふ））

玩兒（遊玩）

²⁵⁸ 『北京話兒化詞典』（p. 128）には「雜耍兒」がある。

★任意的 r 化語 (43 個)

①

一焜兒 (暫らくの間、少時の間、一瞬の間) 姨兒 (をば (母方の))
一會兒 (少刻 (しばらく)、霎時の間) 紋兒 (しわ、すぢ)
爺兒倆 (長輩 (男) と晚辈 (男女を論せず)) 蔭涼兒 (涼し蔭 (樹木などの))
噶啦兒²⁵⁹ (室の隅などをいふ) 坎肩兒 (短衣 (チョツキ))
口頭語兒 (口癖 (話の)) 市口兒 (市場 (いちば))
歲數兒 (年齢) 下巴頰兒 (頰 (あご))
打頭兒 (最初、始めは…、始めより…) 杏 (兒) (あんず)
打盹兒 (坐眠 (みねむり) 晝寝) 打雜兒的 (使丁、人夫)
鎗子兒 (銃丸) 鑿個眼兒 (穴を掘る)
葱白兒 (葱の頭根 (かしら)) 拿大價兒 (莫大の價格を言ふ)
偷偷兒的 (ヒソヒソと、コソコソと) 娘兒們 (女等 (をんなども))
妞兒 (小女、娘) 汗褸兒 (襟袷 (したぎ))
半道兒 (中途) 鬢角兒 (びん (髪))
瓶塞兒 (コルク) 玩意兒 (遊び、遊び物、おもちゃ)

②

沿邊兒 (邊り) 套兒 (上袋、さや (鞆))
嘎嘎兒天 (北京の俗語にして朝夕冷) 燈罩兒 (洋燈の「ホヤ」)
大家夥兒 (皆々して…、多人数組合) 裏兒 (うら (衣類などの))
打頭兒 (最初、始めは…、始めより…)

③

燕尾兒 (婦人髻の後部 (びん)) 手套兒 (手袋)
趁空兒 (すきに乗じて)

④

肱星兒 (缺點、短所) 半不道兒 (半途にも到らざる)
步行兒走 (徒歩 (かちあるき)) 帽盒兒 (帽子箱)
矇矇亮兒 (ボンヤリ明るくなる (夜の明け方))

『支那語辞彙』1921 年版に語項目そのものが無い 56 語を除いた 75 語の内訳は、以下の通りである。

『支那語辞彙』 1904年版のr化語	『支那語辞彙』1921年版 で非r化する	任意的r化語	18個
	『支那語辞彙』1921年版 でr化のまま	絶対的r化語	14個
		任意的r化語	43個

『支那語辞彙』1921年版は『支那語辞彙』1904年の131語の内の75語を継承した。そして、75語の24%を非r化語に移行した。r化語の性格をみると、『支那語辞彙』1921年版は、絶対的r化語である14語を、すべてr化のまま載せている。『支那語辞彙』1921年版がr化語を扱う判断基準は、現在の標準語と一致するといえる。

5.3 明治初期の中日辞典に見られるr化語の安定性の一考察

— 『日華語学辞林』のr化語の現代北京市民への調査を通して—

前述した『日華語学辞林』の中にある556個のr化語の安定性を考察するために、2016年4月に、筆者は現代の北京市民に、それらの語彙をr化するかどうかの調査を行った。調査はアンケートの方法で行い、回答者は出身地・成育地ともに北京市である。筆者は知り合いに頼んで、アンケート30票を2つのグループに配った。1つは北京にある某保険会社の人事部門に務めている北京市民で、1つは今年52歳の北京市民の同級生グループである。回収した有効なアンケートは17部である。結果からみると、個人差が顕著であった。例えば、そのうちの4人の回答は以下のものであった。

	回答者 (年齢・性別)	語の割合		
		r化する	r化しない	意味が分からない
1	27歳の女性	50%	40%	10%
2	35歳の女性	60%	25%	15%
3	52歳の女性	97%	3%	0%
4	52歳の女性	83%	17%	0.8%

²⁵⁹ 意味からみると「杓見兒」と書くはずである。

北京語の r 化語は口頭語であるため、その発現に個人差を生じるのは意外なことではない。

筆者は当初、年長者は年少者より r 化する語が多い、と予想した。そして、アンケートから得た結果は予想通りであった。こうした実情を踏まえて、筆者は 17 名の北京人の年齢を、青年層(26～35 歳)と中年層(48～52 歳)²⁶⁰の 2 つの年齢層に分けて、1 つの語の r 化する人数の割合を計算した。青年層のアンケートは 12 部、中年層のは 5 部である。その結果を中年層の結果を多い順に表を作り、本章の最後に付表として付けた。表中、空欄は無効²⁶¹の回答を意味する。

その結果に基づき、北京人が r 化する割合によって、r 化語の個数を数えると、以下の通りである。例えば中年層の語数の欄のいちばん上の段に「326」とあるのは、調査対象の 556 語のうち 326 語について、この年齢層のアンケート回答者の 100%が「r 化する」と回答したことを意味する。回答を求めた r 化語のうち有効なものは、48 歳～52 歳の場合 556 語全てであるが、26～35 歳では無効のもの 7 個を除いて 549 語である。

r 化する割合	26～35 年齢層の語数	48～52 年齢層の語数
100%	87	326
80%～99%	97	95
60%～79%	64	86
40%～59%	112	33
20%～39%	63	11
1%～19%	71	1
0%	55	4
総語数	549	556

r 化する割合を 2 つの年齢層に分けて図示したものを以下に示す。

²⁶⁰ ここでは意識的に 36 歳から 47 歳の層は取り上げるのわけではない。アンケートは 2 つの団体に配り、1 つは北京にある某保険会社の 1 部門で、社員が 26～35 歳に集中している。もう 1 つは 50 歳の北京人の同級生で、年齢が 50 歳前後に集中している。

²⁶¹ 回答者が書き漏らした場合、または読めない記号であった場合は、無効な回答にした。

図1 青年層（26～35歳）の北京市民が r 化している語の割合

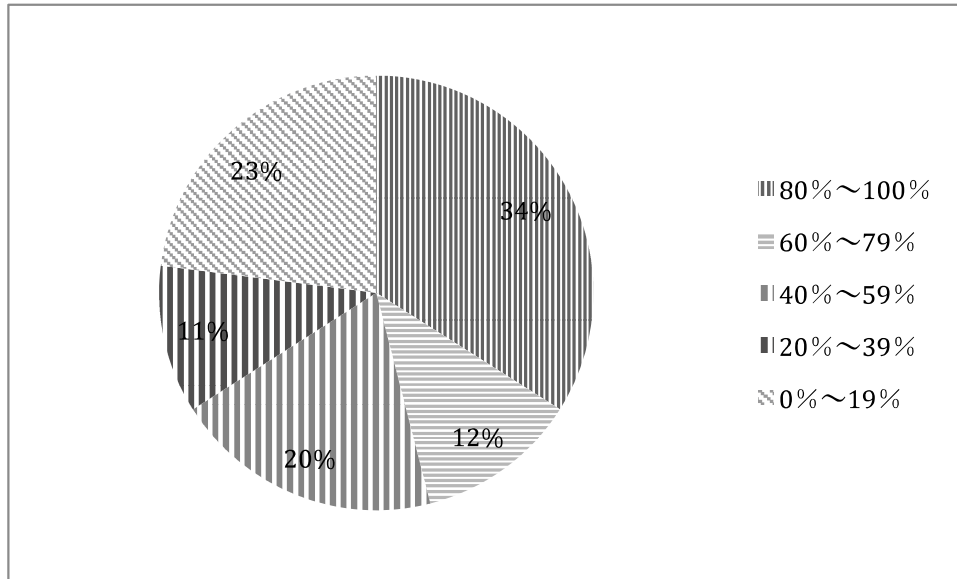


図2 中年層（48～52歳）北京市民が r 化している語の割合

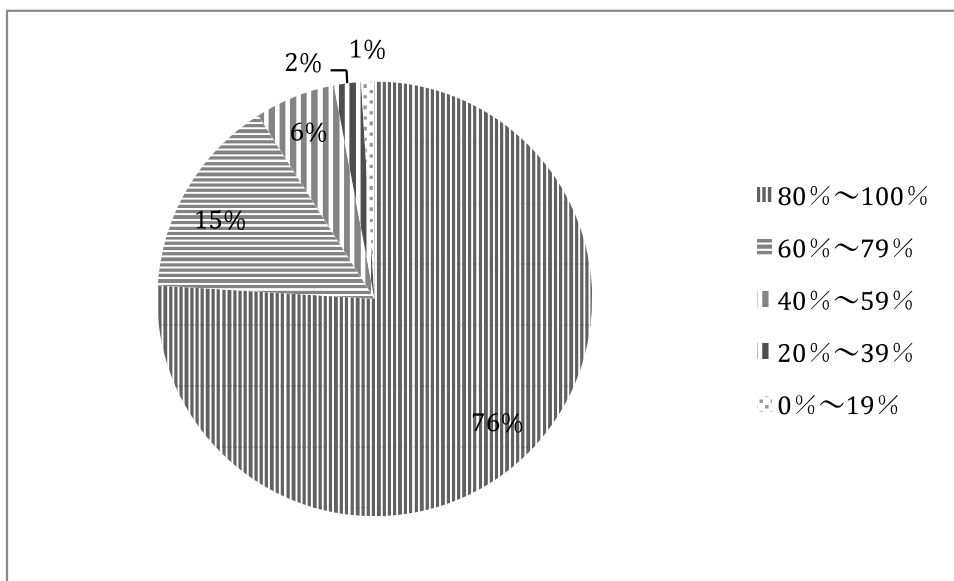


図1と図2をみると、青年層と中年層の北京市民のr化する状況とその差異は一目瞭然である。中年層がr化する言葉の割合は青年層のほぼ2倍である。一語一語についてみると、同じ語に対して年代により非常に異なる回答をしているものもある。

一方、青年層はr化語の割合が減っていく趨勢が現れている。『日華語学辞林』の時代から今日まで約120年経過したが、そこに収載されているr化語は、現在の北京

人にそのまま引き継がれていることがわかる。特に 1960 年代に生まれた北京人は多くの語を r 化する習慣をもっている。また、30 代の北京人も、ほぼ半分の語を r 化している。ここから、『日華語学辞林』にある大部分の r 化語は、1 世紀あまりを経ても、現在の北京人に使用されており、安定性を持っているといえる。

5.4 まとめ

中国の清代は全国で言葉を統一しようと図り始め、そして民国以後に標準語に関する議論が真剣に開始された。標準語の r 化語の規範についての議論も行われた。必ず r 化する r 化語については異なる意見があるが、非 r 化語の意味と区別されるもの、品詞が変わるもの、特殊な意味を表すものが「絶対的 r 化語」であるという認識は共通している。清末から民国を経て現代までという漢民族の標準語の規範が確立しつつある時期に、日本の中国語教育界において r 化語も少しずつ変遷したと思われる。

本章は井上翠の『日華語学辞林』（1906 年）と『井上支那語辞典』（1928 年）、及び石山福治の『支那語辞彙』の 1904 年初版と 1921 年版を取り上げ、比較することによって r 化語の扱いの変化をみた。

その結果、『井上支那語辞典』は『日華語学辞林』の 556 個の r 化語を、継承せず 56 語を除いて 500 語を、24%の r 化語を非 r 化語とした。非 r 化語とされた語はすべて「任意的 r 化語」と判断される。「絶対的 r 化語」と判断される 55 語を r 化式のまま継承した。

『支那語辞彙』1921 年版は『支那語辞彙』1904 年版の 131 語の中の 75 語を継承した。その内の 24%を非 r 化語に移行し、「絶対 r 化語」と認定される 14 語をすべて r 化式のまま継承した。

このように、大正・昭和期の北京官話辞典は、明治期の r 化語を選別して継承した。24%ぐらいの r 化語を非 r 化語へ替えており、明治の r 化語を減らす傾向が見られた。それに、非 r 化語された r 化語の性質はすべて「任意的 r 化語」で、「絶対的 r 化語」と判断される r 化語は漏れなく r 化語として継承した。すなわち、辞典における r 化語の扱いには現在の判断基準で言葉を規範化しようとする傾向が見られる。

また、現在の北京人へのアンケートを通して r 化語の安定性を調べた。『日華語学辞林』に載せている r 化語は、半分以上が安定性を持ち、100 年以上経ても現在の北京人に話されていることが判明した。

但し、大正・昭和期の辞典で、明治期の r 化語を r 化語のまま継承しているものもあり、継承しないものもあり、r 化語についての選択意識はどうであるかについては、今後考察を進める。

5.5 付録

付録1 『井上支那語辞典』で非 r 化形式とした語

★任意的 r 化語 (119 個)

①

挨肩兒→挨肩 ((1) 兄弟姉妹ノ順序 (例エバ長男ト次男ト、次男ト三男トノ續キ合ヒ) (2) 肩ヲ接スル)	唱曲兒→唱曲 (歌ヲウタフ)
照樣兒→照樣 (見本ノ通りニ)	起根兒→起根 (始メ、最初)
家當兒→家當 (身代、家庭)	肩膀兒→肩膀 (肩…)
姐妹兒→姐妹 (姉妹)	耳脣兒 ²⁶² →耳垂 (耳タブ)
親家兒→親家 (1) 姻戚ノ關係アルモノ…	伏天兒 ²⁶³ →伏天 (蝸)
風絲兒→風絲 (微風)	服軟兒→服軟 (服従スル)
汗褌兒 ²⁶⁴ →汗褌 (襯衣)	鞋後跟兒→鞋後跟 (靴ノ踵)
行動兒→行動 (挙動)	袖口兒→袖口 (袖口)
花兒→花 (花)	號兒→號 (店) ²⁶⁵
路口兒→路口 (路ノ辻)	褲脚兒→褲脚 (袴ノ裾)
老婆兒→老婆 (老婆。愚妻。)	兩頭兒→兩頭 (雙方)
兩頭兒蛇→兩頭蛇 (兩頭ノ蛇)	麻子臉兒→麻子臉 (痘痕面)
門口兒→門口 (門口)	抹粉兒→抹粉 (白粉ヲツケル)
躡手躡脚兒→躡手躡脚 (スキ手ヌキ足シテ)	生路兒→生路 (生活ノ道)
事由兒→事由 (コトガラ。手蔓。)	樹枝兒→樹枝 (木ノ枝)
打價兒→打價 (價ヲマケル)	臺塔兒→臺塔 (石段。上リ段。)
討好兒→討好 (機嫌ヲトル)	燈虎兒→燈虎 (謎)
低三兒下四的→低三下四 (諂フ)	吊桶兒→吊桶 (釣瓶)
頭生兒的→頭生 (長男)	砸着嘴兒 ²⁶⁶ →砸着嘴 (舌打スル)
遭遭兒→遭遭 (度々)	翠花兒的→翠花的 (造花討賣)
肚臍眼兒→肚臍眼 (臍)	瓶塞兒→瓶塞 (コルク)

²⁶² 『北京話兒化詞典』(p. 249) では「耳垂兒」と記している。

²⁶³ 『現代漢語詞典』には「伏天兒」と「伏天」両方がある。

²⁶⁴ 『現代漢語詞典』には「汗褌兒」と「汗褌」両方がある。

²⁶⁵ 「號」は商店、店の意味を表す場合では、「銀號」のように必ず「號」に先立つ名詞がある。

²⁶⁶ 『北京話兒化詞典』(p. 255) では「砸嘴兒」と記している。

字眼兒→字眼（文章中ニ用ヒテアル故事。必要ナ文字。）
 字號兒→字號（骨牌様ノ紙片ニ書付ケタル、一字ヅツノ文字。）
 打扮兒→打扮（扮装。風。） 碗口兒→碗口（碗ノフチ）
 杌欏兒→杌欏（腰掛） 咬舌兒→咬舌（舌ガマワラナイ）
 心眼兒→心眼（根性玉） 臉蛋兒→臉蛋（頬）
 打盹兒→打盹（居睡ル） 陰涼兒→陰涼（日陰）
 倒座兒→倒座（正房ニ對シ中庭ヲ隔テ、中門ヲ後ニシテ建テタル一棟ヲ云フ、門ニ對スル方ニ入口ナク、正房ニ對スル方ヨリ出入ス、ヨリテ此稱アリ。）
 逗笑兒→逗笑（可愛シイ事ヲ云ツテ、人ヲ笑ハセル。）
 壓山兒→壓山（西ニ傾ク（太陽ガ）） 頭目人兒→頭目人（主立ッタ人。）
 杏仁兒²⁶⁷→杏仁（杏の仁） 話頭兒→話頭（話）
 抽空兒²⁶⁸→抽空（暇ヲ繰合ス、暇ヲ見出ス） 鼻煙壺兒→鼻煙壺（カギ煙草入）
 好好兒的→好好的（ヨク。注意シテ。） 蛋黃兒→蛋黃（卵ノ殻）
 嘴唇兒→嘴唇（唇） 唱曲兒²⁶⁹→唱曲（歌ヲウタウ）
 真子兒→真子（實弾） 繫扣兒→繫扣（結目ヲムスブ）
 脚丫巴兒→脚丫巴（足ノ指ノ股） 矯理兒→矯理（理屈ヲコヂツク）
 橋翅兒→橋翅（橋ノタモト） 錢貫兒→錢貫（錢縉）
 桌子腿兒²⁷⁰→桌子腿（卓ノアシ）
 抽工兒→抽工（暇ヲ繰合ス、暇ヲ見出ス）
 巧媳婦兒做不出沒米兒的粥→巧媳婦做不出沒米的粥（如何ニ賢キ妻モ米無シニ粥ハ出来ナイ、無イ袖ハ振ラレナイヲ云フ）

②

打野盤兒→打野盤（野宿スル） 碗足兒→碗足（碗ノイトゾコ）
 房頂兒→房頂（屋根） 痰盒兒→痰盒（痰壺）

③

松鼠兒→松鼠（栗鼠） 地皮兒→地皮（地方）
 門房兒→門房（大門ノ両側、或ハ一側ニ於テ、通路ニ向ヒ扉ヲ有スル室ニテ門番ノ

²⁶⁷ 「杏仁」は老舎の『正紅旗下』、『北京的春節』に用いられているが、『四世同堂』、『二馬』には「杏仁兒」となっている。

²⁶⁸ 「抽空」は『四世同堂』と『二馬』に見られる。

²⁶⁹ 「唱的小曲兒」は老舎『文博士』に見られる。

²⁷⁰ 「桌子腿兒」は老舎の『二馬』と『牛天賜傳』に見られる。

前兒 (一昨年)	昨兒 (昨日)
昨兒個 (昨日)	今兒 (今日)
今兒個 (今日)	後兒 (明後日)
明兒個 (明日オ目ニ)	大後兒 (明後日)
出花兒 ²⁷¹ (1) 出痘ニ同ジ (2) 秀才ノ歳貢、武官ノ軍政、又ハ商人ガ借 金ヲ返濟スルヲ出花兒ト云フ	
嚼過兒 ²⁷² (暮向ノ費用)	種種兒 (種ヲ蒔く)
懷抱兒 ²⁷³ (赤ン坊)	主兒 (頭長。主意。)
取燈兒 (マツチ)	三分兒飯 (飯三人前)
好性兒 (性質ノヨイ)	小性兒 (短氣)
由着性兒的 (氣儘ナ氣性)	耐着性兒 (我慢スル)
猴兒 (猿、男 (人ヲ罵ル語))	一頭兒 (端)
一點兒 (少シ)	灣兒 (角)
一點兒都・一點兒也 (スコシデモ)	根兒裡 (モト。最初。)
繞灣兒 ²⁷⁴ (マワリ遠ク。遠廻シニ。)	亮兒 (燈火)
臉放在那兒啊 (面目ナイコトダ。)	買好兒 (機嫌ヲ取ル)
不是頑兒的 ²⁷⁵ (冗談ジャナイ)	自各兒 ²⁷⁶ (自分獨。己。)
底根兒 (以前。モトハ。始メカラ。)	骨頭節兒 (骨ノ關節)
那兒的話呢 (ドウ致シマシテ)	
②	
襖兒 (襖ニ同ジ、又タ襖子)	尖兒 (尖リタルサキ、サキ…)
姪兒 (オヒ、メヒ)	渣兒 (カス、屑…)
摺兒 (折り目、襞 (ヒダ))	裏兒 (裏)
溜兒 (近所)	對兒 (敵手)
輸個東兒 (オゴル、賭事ヲシテ負ケテ)	手縫兒 (指ノ股ノスキ)
賭個東兒 (オゴル、賭事ヲシテ。)	二小兒 (次男 (自分ノ))
勁兒 [渾身上下不得勁兒] (全身カナク弱ル…)	

²⁷¹ 「出花兒」の「花兒」は一般の花を指す時には、r化の有無に関わらず意味が同じであるが、「天然痘・醜」の意味を表す時にはr化しなければいけない。

²⁷² 『現代漢語詞典』では「嚼裏兒」と記している。

²⁷³ 名詞である「懷抱兒」は、動詞である「懷抱」と意味が違う。

²⁷⁴ 『現代漢語詞典』では「繞灣兒」と記している。

²⁷⁵ 『北京話兒化詞典』でも『現代漢語詞典』でも「玩兒」と記している。

²⁷⁶ 老舎の作品には「自個兒」があり、『現代漢語詞典』では「自個兒」と記している。

③

鍼鼻兒（針ノ孔）

減點兒 價錢（値段ヲ少シ引ク）

屁股蛋兒（臀）

屁股溝兒（臀ノ割目）

屁股眼兒（臀ノ穴）

格兒（體格）

★任意的 r 化語（325 語）

①

抄近兒（近道ヲスル）

眨巴眼兒（マバタキスル）

茶館兒（茶屋…）

這邊兒（此ノアタリ）

車箱兒（車ノ胴）

家兔兒（家兎）

家雀兒（雀）

家小兒（妻子）

家長裡短兒（日常ノ雜事）

夾當兒（時、場合）

蹺腿兒（脚ヲ組ンデ休ム）

球兒（球、マリ）

接頭兒（(1) 始メカラ… (2) 物ノツギ目…）

接骨眼兒（處、機會、ハヅミ）

借字兒（借用證書）

戒指兒（指輪）

指甲蓋兒（爪ノ甲）

指甲草兒（鳳仙花）

紙籤兒（紙ノ札）

翅膀兒（鳥ノツバサ）

喫瓦片兒（借家ヲ持チ人ニ貸シテ生業トセル者）

重孫女兒（曾孫（女））

酒窩兒（笑窩（エクボ））

扎花兒（模様ヲ刺ス(刺繡ノ)）

前不着村兒後不着店兒（進ミテモ村ナク退キテモ旅店ナキ不便ノ地）

踢毽兒・拍毽兒（「毽」は玩具ノ名、之ヲ二人ニテ靴ノ跟ニテ蹴リテ遊ブ）

出了門兒不管換（一旦御引取ノ品物ハ御引換申サザ侯）

儘着力兒（力一杯デ、精一杯デ）

家家兒（家ゴトニ）

儘着量兒→〔儘着量兒喝〕（精一杯デ飲ム）「儘量」（思フ存分、精一杯）

住脚兒（住所）

中中兒（中程）

中間兒（中程）

浮頭兒（ウワ皮）

西頭兒（西寄り）

南頭兒（南寄り）

北頭兒（北寄り）

東頭兒（東寄り）

細細兒的（詳シク）

下邊兒（下ノ方）

香串兒（珠数（手ニ纏フ））

響聲兒（音響）

像篇兒²⁷⁷（寫眞）

小雞兒（鶏ノ雛）

小孩兒（小供）

小嬌兒（弟ノ妻）

小妞兒 (小娘)	苗兒 (苗)
小苗兒 ²⁷⁸ (苗)	小人兒 (人形)
新手兒 (新参ノ者)	性格兒 (性質)
杏兒 (杏)	学伴兒 (学友)
胡椒麵兒 (胡椒粉)	花兒匠 (造花師)
花兒洞子 (室)	話把兒 (話ノ種)
紅角兒 (流行兒)	活扣兒 (ヒザオリ結ビ)
一撲納心兒 (本氣デ。一心ニ。)	人緣兒好 (人ズキガスル。)
一邊兒……一邊兒…… (一方ニハ……シ一方ニハ……ス。) 哥兒們 (兄弟)	
嘎嘎兒 (木ヲ球ノ如ク卵形ニ剥リ、棒ヲ以テ打チテ遊ブ玩具。)	
胳膊肘兒 (臂)	掛屏兒 ²⁷⁹ (四幅對)
官板兒 (錢)	歸一塊兒 (一所ニ纏メル)
空兒 (暇隙)	空着手兒 (カラ手)
蠅々兒 (蟋蟀)	坎肩兒 (チョッキ)
過個門礮兒就好了 ²⁸⁰ (門ノ敷居ヲ過ギレバソレデヨイ。子供ガ虚弱ナル時ハ、他人ヲ義父ニ見立テテ、假ニ其家ノ養子トス、サスレバ其子供ガ丈夫ニナルト云フ咀。)	
拉成兩半兒 (二ツニ引き割ル)	好些樣兒 (幾種モ)
宜兒不打送禮的 (役人ハ、送物ヲ持ち来ル者ヲ、憎マナイ。)	
老頭兒 (老人。夫。)	老兩口兒 (翁ト媪)
立字兒 (證文ヲ書ク)	領道兒 (道案内スル)
領着頭兒 ²⁸¹ (頭トナル)	羅鍋兒 (儂人)
路數兒 (方略)	露水珠兒 (露ノ珠)
麻花兒 (花林糖)	馬尾羅兒 (糊漉)
馬撒歡兒 (嬉シク飛ビ上ル。氣ガ勇ム)	螞蚱腿兒 (眼鏡ノ脚)
馬掛兒 ²⁸² (上衣ノ名、我ガ羽織ニ當ル、禮服トシテ用フ、袖ハ手首ニ至リ、丈ハ下胴ノ當リマデアリ。)	
毛兒窩 (毛ノ靴)	苗頭兒 (原因)

²⁷⁷ 『現代漢語詞典』では「像片」と記している。

²⁷⁸ 『北京話兒化詞典』(p. 377)にあるのは「苗儿」である。

²⁷⁹ 『現代漢語詞典』では「挂屏」と記している。

³⁵⁶ 『北京話兒化詞典』(p. 38)にあるのは「門檻兒」である。

²⁸¹ 『北京話兒化詞典』には「領頭兒」があり、『現代漢語辭典』には「領頭」がある。

²⁸² 『現代漢語詞典』では「馬褂」と記している。

名兒 (名)	末末了兒 (終ニ。ツマリハ。)
木頭人兒 (木偶。馬鹿ノ人。)	那樣兒 (ドンナ。)
南邊兒 (南清)	娘兒們 (婦人。女子。)
鳥兒 (鳥)	年頭兒 (年柄。収穫。)
妞兒 (女ノ子)	女孩兒 (女ノ子。息女。)
八字兒 (某年某月某日某時ノ八字)	扒頭兒 (手ガカリ)
拍巴掌兒 (手拍子ヲ打ツ)	搬指兒 ²⁸³ (韞)
伴兒 (仲間。友達。)	旁邊兒 (傍)
飽呃兒 (吃逆)	跑堂兒的 (給仕人)
本主兒 (本ノ主人)	鼻尖兒 (鼻ノ尖)
變戲法兒 (手品)	鬢角兒 (鬢角)
波浪鼓兒 (鼓兆)	不像樣兒 (不括好。見苦シイ。)
步々兒留心 (何事モヨク氣ヲ附ケル。)	衫兒 (單ノ上衣)
三鼻子眼兒朵出口氣兒 (鼻ノ穴三ツデ、氣息ガスギル、餘計ナ事ヲスル譬。)	身挺兒 ²⁸⁴ (體格)
賞封兒 (纏頭。祝儀。)	使個眼色兒 (目クバセスル)
聲兒 (聲)	書皮兒 (表紙)
手頭兒寬綽 (手元ガ豊カダ)	樹陰涼兒 (木ノ蔭)
屬猴兒的 (申ノ歳デス)	四嘎拉兒 ²⁸⁵ (四隅)
死心眼兒 (馬鹿正直)	打嗝兒 (吃逆ヲスル。)
歲數兒 (歳。年齢。)	打哨兒 (口笛ヲ吹ク)
打飽嗝兒 (オクビヲスル)	打顫兒 (慄エル)
打球兒 (打球)	大夥兒 (大勢)
打燈虎兒 (謎ヲ判ズル)	打下個底兒 ²⁸⁶ (下相談ヲスル。下調スル。用意スル。)
單間兒的屋子 (離レノ部屋)	耽誤工夫兒 (暇取ル)
貪頑兒 ²⁸⁷ (遊ビニ飽ケル)	當間兒 (中間)
探口話兒 (人ノロブリデ、其意ヲトル。)	到了兒 (ツマリ)
道兒上 (途中)	套間兒 (奥ノ部屋)

²⁸³ 『北京話兒化詞典』には「扳指兒」があり、『現代漢語辭典』には「扳指」がある。

²⁸⁴ 『北京話兒化詞典』(p. 503)には「身艇兒」があり、『現代漢語大詞典』には「身挺」がある。

²⁸⁵ 『北京話兒化詞典』(p. 390)には「杓兒」があり、『現代漢語大詞典』には「杓兒」がある。

²⁸⁶ 『現代漢語詞典』には「打底」がある。

²⁸⁷ 『北京話兒化詞典』では「玩兒」と記し、『現代漢語大詞典』では「貪頑」と記している。

調兒（調子）	天天兒（毎日）
天老兒（生レ付イテノ白髮實頭ノ人）	聽相聲兒（假聲）
偷偷兒的（コッソリト）	透個話兒（話ヲ通ズル）
對過兒（向ヒノ）	動不動兒的（稍モスレバ）
外間兒（表ノ部屋）	玩意兒（玩弄物）
油味兒（チャンノ臭氣。油ノ臭氣。）	味兒（香、味）
洋取燈兒（マッチ）	夜消兒（夜食）
煙捲兒（卷煙草）	煙捲兒盒子（卷煙草草入。）
有趣兒（面白イ）	月芽兒（三日月）
拐灣兒（街ノ角ヲ曲ル）	玩兒（遊ブ）
抓週兒（小兒生後一個年ノ誕生日ニ祝宴ヲ設ケ種々ノ物品ヲ床上ニ安置シ小兒ヲシテ弄セシム…）	
歲數兒（歳）	鎗子兒（銃丸）
驢兒不喝水不能強搵頭（驢馬ガ水ヲ飲マナイヲ、無理ニ頭ヲオサヘテ飲マスコトハ出来ナイ（無理ニ人ヲ服従サセル事ハ出来ナイ）。	
銀盤兒（銀ノ相場）	劊口兒（切レ目、割レ目）
雞子兒（雞卵）	
②	
初生的犢兒不懼虎（生レ立ノ小主ハ、虎ヲ畏レナイ（盲蛇ニ怖ヂズ））	
賣花兒的（植木屋）	弄個套兒（罾ヲカケル）。
波（白）稜蓋兒（膝頭）	普裏普兒的（悉皆。普ネク。）
手拉手兒（手ニ手ヲ引イテ	好說話兒（心易イ）
細高挑兒 ²⁸⁸ （丈ノ細高イ人）	舌兒（喉小僧）
一子兒掛麵（一把ノ素麵）	個個兒（皆々）
一個個兒（一ツ一ツ）	姪兒媳婦（甥ノ妻）
一股腦兒（一纏メニシテ）	光兒 ²⁸⁹ （詐）
任着意兒（心ノママニ。カマワズ。）	高粱稈兒（高粱ノ藁）
穀嚙過兒 ²⁹⁰ （暮向ニサシツカエナイ）	掛瓶兒（掛花瓶）
對出光兒來 ²⁹¹ （秘密ガ露レル）	鍋兒（煙管ノ雁首）

²⁸⁸ 『北京話兒化詞典』には「細高挑兒」がある。p. 379

²⁸⁹ 光兒：サシコム光〔對出光兒來了〕人ノ詐ヲ露ハス。（『井上支那語辭典』p. 768）

²⁹⁰ 『北京話兒化詞典』（p. 302）には「嚙裏兒」がある。

²⁹¹ 『北京話兒化詞典』にあるのは「對光兒」で、『現代漢語大詞典』には「對光」があるが意味が違う。

老家兒²⁹² (年寄) 老公嘴兒 (髭ノ生ヘナイ人)
 老爺兒地裏 (日ノ當ル所) 螞蚱腿兒 (眼鏡ノ脚)
 驢糞球兒外面光 (驢馬ノ糞ハ、外面バカリハ、光ッテ居ル。外面バカリ美シク、内
 部ハ穢イコトノ譬。)
 沒影兒的瞎話 (跡形モナイウソノ話) 沒事人兒 (ヒマ人)
 鈕子眼兒²⁹³ (鈕ノ穴) 巴兒狗 (狎)
 努嘴兒擠眼兒 (口ト目デ知ラセル) 梱兒²⁹⁴ (締)
 仰八腳兒²⁹⁵ (仰ニ大ノ字ニナッテ寝ル) 退身步兒 (逃ゲル餘地)
 耳唇兒 (耳タブ) 胰子盒兒 (石鹼ノ箱)
 好說話兒 (心易イ) 使勁兒 (カヲ出ス)
 嘎嘎兒天 (朝夕冷ヤヤカニ、日中暑キ天氣ヲ云ウ)

③

下巴頰兒 (頤) 小河兒 (小川)
 血津兒 (血液) 對頭兒 (敵)
 客坐兒 (客ノ坐ル席) 一撥兒 (一度)
 兩頭兒不見面兒的話 (中傷的ノ言葉) 逛青兒 (遊山)
 賣花子兒的 (種子屋) 毛道兒 (毛並)
 摸黑兒 (手サグリニ) 墨盒兒 (墨壺)
 白醜兒 (黴) 一黑早兒 (未明ノ頃)
 砲子兒 (砲丸) 邊框兒 (眼鏡ノ框)
 不住口兒 (云ヒツヅケル) 散話兒 (散語)
 山嘴兒 (岬) 身軀兒 (體格)
 樹梢兒 (木ノ梢) 樹葉兒 (木ノ葉)
 雙臉兒的鞋 (靴ノ前ニ、二本ノ筋ノ入りタルモノ) 挺兒 (莖)
 四平八穩兒 (都合ガヨクナル。穩當ニナル。) 外場面兒 (ウワベ)
 單數兒 (奇数) 銅吊兒 (菓罐)
 瓦隴兒 (支那ノ屋根ハ、我ガ俗ニ本葺ト云フモノニ類セリ、其低クナリテ、雨
 水ノ流レ落ツル處ヲ、瓦隴兒ト云フ。)

²⁹² 『北京話兒化詞典』あるが、『現代漢語大詞典』にある「老家」は故郷の違う意味である。

²⁹³ 『北京話兒化詞典』(p. 105)には「扭子眼兒」があり、『現代漢語詞典』にはない。

²⁹⁴ 『井上支那語辞典』では「網兒」となっている。『北京話兒化詞典』(p. 245)では「梱兒」と記している。『現代漢語詞典』には「網兒」があるが、意味が「約束」という違う意味である。

²⁹⁵ 『北京話兒化詞典』(p. 388)では「仰巴脚兒」と記している。

牙花兒 (ハクソ)	有情趣兒的 (面白イ)
魚竿兒 (釣竿)	扶手兒 (手摺。手助ケ。)
吐了活動話口兒了 (承知シソウナ、ロブリデアッタ。)	
河沿兒 (河岸)	毛邊兒 (痕)
步行兒走 (徒歩スル)	要路口兒 (肝要ナ場所)
褡褳兒 (首カラ懸ケテ、懷中スル財布。)	花朵兒 (蕾)
眼面前兒的 (目ノ前ノ、アリフレタ。)	小漢仗兒 (小男)
④	
照本兒 (元價ニ照シテ、元價通ニ)	挨一挨兒 (逐ツテ…)
悄不聲兒的 (ヒソカニ、コソソリト)	箭箭兒中 (百發百中)
長尾巴兒 (子供ノ誕生日 (詼諧ノ語))	插關兒 (門ノ栓…)
千里馬還得有千里人兒 (駿馬ハ才能ノ人ナラバ御シ能ハヌ)	
悄莫聲兒的 (同上)	臭味兒 (臭氣)
錢鏝兒 (錢ノ表面)	窓戶擋兒 (窓ノ格子)
縫紐襷兒 (扣ヲヒッカケル紐ヲクケテ縫フ)	燈苗兒 (火口)
衙衙口兒 (横町ノ入口)	擔錯兒 (過失ヲ引受ル)
算盤子兒打的清 (勘定ガキレイニ出来テ居ル。)	牙縫兒 (齒ト齒トノ隙)
太老祖兒 (高祖父 (祖父ノ祖父))	年年兒 (毎年)
敢擔錯兒 (過ヲ引キカブル)	有要沒緊兒的 (グズグズシテ)
各自各兒 (銘銘)	這宗晚兒 (同「這早晚兒」)
卵胞兒 (睾丸ノ袋)	銅殼兒 (菓莢)
官座兒 (芝居ノ高棧敷)	爐門兒 (爐ノ口)
帽盒兒 (帽子箱)	大襖兒 (袍子ニ同ジ)
塞頭兒 (瓶ノツメ)	單皮兒的繩子 (一重繩)
親家女兒 (子ノ妻ノ姉妹)	爛爛兒的 (グダグダナ)
等一等兒 (少シ待チナサイ)	放主兒 (貸主)
什不聞兒的 (イツモ、時々)	捲毛兒 (チヂレ毛)
船稍兒 (船ノ軸)	耳朵嘴兒 (耳ノヒコ)
帽結兒 (帽子)	高板兒 (女ノ髮ノ結様ノ名)
高纂兒 (女ノ髮ノ結様ノ名)	背岔兒 (運ガ悪イ)
老沒兒 (永ラク御目ニ掛リマセン)	波泡兒 (波ノアワ)

力把兒頭（未熟ナル者）	帽襷兒（帽子ノヒモ）
涼窓兒（夏ハ紗ニテ窓ヲ張ル）	小零兒（ハンタ）
古兒詞（小説）	信桶兒（郵便函）
來了空空兒（御出ニナッテモ、何ノオ構モ致シマセンデシタ。）	
貓頭兒瓦（鬼瓦）	捻把兒（龍頭（時計ナドノ））
傍帳兒（車ノ兩側ノ窓ノ日蔽）	面子情兒（ウハベノ愛相）
扮兒（扮装、風）	眼鏡字兒（眼鏡ノ度）
眼犄角兒（目尻）	獅子鼻兒（獅子鼻）
山音兒（山彦）	暴子眼兒（出目）
跳格兒（紙ニ横豎ニ罫ヲ引キテ、其中ニ文字ヲ書カセル習字手本）	
火虫兒（螢）	桶球兒（玉突）
趕一會兒（暫クシテ。）	山藥豆兒（馬鈴薯）
旁盆兒話（ゴタツキ。）	重重兒的（重ク、ヒドク）
貓兒眼（寶石ノ名）	
換鐘兒（双方ノ父母ノ間ニ約束シテ、成立スル結婚。）	
撲燈蛾兒把燈撲滅了（火取虫ガ、火ヲ打チ消シタ。）	

付録3 現在北京人に対する『日華語学辞林』のr化語についての調査

番号	『日華語学辞林』の r化語	26～	48～
		35歳	52歳
1	好些様兒	100%	100%
2	河沿兒	100%	100%
3	猴兒	100%	100%
4	杏仁兒	100%	100%
5	小孩兒	100%	100%
6	小嬾兒	100%	100%
7	小苗兒	100%	100%
8	心眼兒	100%	100%
9	杏兒	100%	100%
10	杏仁兒	100%	100%
11	胡椒麵兒	100%	100%
12	一點兒	100%	100%
13	一股腦兒	100%	100%
14	熱心腸兒	100%	100%
15	肉片兒	100%	100%
16	蓋兒	100%	100%
17	桌子腿兒	100%	100%
18	坎肩兒	100%	100%
19	老頭兒	100%	100%

20	老兩口兒	100%	100%
21	這兒	100%	100%
22	羅鍋兒	100%	100%
23	路口兒	100%	100%
24	馬掛兒	100%	100%
25	前兒	100%	100%
26	賣花兒的	100%	100%
27	毛邊兒	100%	100%
28	今兒	100%	100%
29	沒影兒的瞎話	100%	100%
30	今兒個	100%	100%
31	明兒	100%	100%
32	明兒個	100%	100%
33	面兒	100%	100%
34	面館兒	100%	100%
35	南邊兒	100%	100%
36	南頭兒	100%	100%
37	鳥兒	100%	100%
38	年頭兒	100%	100%
39	女孩兒	100%	100%
40	八字兒	100%	100%
41	跑堂兒的	100%	100%
42	重孫女兒	100%	100%
43	鼻尖兒	100%	100%
44	屁股蛋兒	100%	100%
45	屁股溝兒	100%	100%
46	屁股眼兒	100%	100%
47	變戲法兒	100%	100%
48	瓶塞兒	100%	100%
49	尖兒	100%	100%
50	不像樣兒	100%	100%

51	姪兒	100%	100%
52	價碼兒	100%	100%
53	聲兒	100%	100%
54	使勁兒	100%	100%
55	勁兒	100%	100%
56	屬猴兒的	100%	100%
57	樹梢兒	100%	100%
58	樹根兒	100%	100%
59	一點兒都·一點兒也	100%	100%
60	打盹兒	100%	100%
61	打球兒	100%	100%
62	打飽嗝兒	100%	100%
63	大夥兒	100%	100%
64	渣兒	100%	100%
65	單間兒的屋子	100%	100%
66	蛋黃兒	100%	100%
67	摺兒	100%	100%
68	偷偷兒的	100%	100%
69	透個話兒	100%	100%
70	昨兒個	100%	100%
71	肚臍眼兒	100%	100%
72	茶館兒	100%	100%
73	接頭兒	100%	100%
74	指甲蓋兒	100%	100%
75	唱曲兒	100%	100%
76	酒窩兒	100%	100%
77	照樣兒	100%	100%
78	哥倆兒	100%	100%
79	臉蛋兒	85%	100%
80	茶盤兒	85%	100%
81	房頂兒	85%	100%

82	房簷兒	85%	100%
83	服軟兒	85%	100%
84	好好兒的	85%	100%
85	後兒	85%	100%
86	西頭兒	85%	100%
87	細高挑兒	85%	100%
88	下巴頰兒	85%	100%
89	小雞兒	85%	100%
90	小性兒	85%	100%
91	抽空兒	85%	100%
92	小人兒	85%	100%
93	鞋後跟兒	85%	100%
94	袖口兒	85%	100%
95	花兒	85%	100%
96	花藍兒	85%	100%
97	話頭兒	85%	100%
98	活扣兒	85%	100%
99	一頭兒	85%	100%
100	一撥兒	85%	100%
101	繞灣兒	85%	100%
102	各式各樣兒	85%	100%
103	骨頭節兒	85%	100%
104	褲腳兒	85%	100%
105	拐灣兒	85%	100%
106	歸一塊兒	85%	100%
107	鬼臉兒	85%	100%
108	癩々兒	85%	100%
109	過個門礮兒就好了	85%	100%
110	裏兒	85%	100%
111	兩頭兒不見面兒的話	85%	100%
112	領道兒	85%	100%

113	溜着點兒走	85%	100%
114	馬撒歡兒	85%	100%
115	螞蚱腿兒	85%	100%
116	沒趣兒	85%	100%
117	沒事人兒	85%	100%
118	門口兒	85%	100%
119	門房兒	85%	100%
120	苗兒	85%	100%
121	抹粉兒	85%	100%
122	那樣兒	85%	100%
123	那兒的話呢	85%	100%
124	耐着性兒	85%	100%
125	白丁兒	85%	100%
126	伴兒	85%	100%
127	旁邊兒	85%	100%
128	北頭兒	85%	100%
129	鼻子眼兒	85%	100%
130	表姪女兒	85%	100%
131	邊框兒	85%	100%
132	鬢角兒	85%	100%
133	散了班兒了	85%	100%
134	姪兒媳婦	85%	100%
135	書皮兒	85%	100%
136	樹葉兒	85%	100%
137	樹陰涼兒	85%	100%
138	打嗝兒	85%	100%
139	打哨兒	85%	100%
140	大前兒	85%	100%
141	貪頑兒	85%	100%
142	痰盒兒	85%	100%
143	當間兒	85%	100%

144	道兒上	85%	100%
145	套間兒	85%	100%
146	天天兒	85%	100%
147	嘴唇兒	85%	100%
148	翠花兒的	85%	100%
149	對面兒	85%	100%
150	眨巴眼兒	85%	100%
151	玩兒	85%	100%
152	味兒	85%	100%
153	牙縫兒	85%	100%
154	煙卷兒	85%	100%
155	由着性兒的	85%	100%
156	有趣兒	85%	100%
157	魚竿兒	85%	100%
158	球兒	85%	100%
159	接骨眼兒	85%	100%
160	前不着村兒後不着店兒	85%	100%
161	踢毽兒·拍毽兒	85%	100%
162	出了門兒不管換	85%	100%
163	扎花兒	85%	100%
164	臭味兒	85%	100%
165	窗戶擋兒	85%	100%
166	氣頭兒	85%	100%
167	耳圈兒	85%	100%
168	探口話兒	71%	100%
169	扶手兒	71%	100%
170	好說話兒	71%	100%
171	號兒	71%	100%
172	響聲兒	71%	100%
173	像篇兒	71%	100%

174	小姐兒	71%	100%
175	學伴兒	71%	100%
176	話把兒	71%	100%
177	一邊兒…一邊兒…	71%	100%
178	各自各兒	71%	100%
179	拉成兩半兒	71%	100%
180	官兒不打送禮的	71%	100%
181	亮兒	71%	100%
182	領着頭兒	71%	100%
183	溜兒	71%	100%
184	卵胞兒	71%	100%
185	驢糞球兒外面光	71%	100%
186	麻花兒	71%	100%
187	買好兒	71%	100%
188	名兒	71%	100%
189	末末了兒	71%	100%
190	墨盒兒	71%	100%
191	娘兒們	71%	100%
192	擺渡口兒	71%	100%
193	本主兒	71%	100%
194	波（白）稜蓋兒	71%	100%
195	樹枝兒	71%	100%
196	水墩兒	71%	100%
197	死心眼兒	71%	100%
198	打下個底兒	71%	100%
199	大後兒	71%	100%
200	擔錯兒	71%	100%
201	土坡兒	71%	100%
202	東頭兒	71%	100%
203	桶球兒	71%	100%
204	自各兒	71%	100%

205	外間兒	71%	100%
206	灣兒	71%	100%
207	玩意兒	71%	100%
208	羊羔兒	71%	100%
209	眼胞兒	71%	100%
210	眼球兒	71%	100%
211	陰涼兒	71%	100%
212	油味兒	71%	100%
213	花兒匠	57%	100%
214	一個個兒	57%	100%
215	矯理兒	57%	100%
216	嘎拉兒	57%	100%
217	趕一會兒	57%	100%
218	看樣兒	57%	100%
219	個個兒	57%	100%
220	空着手兒	57%	100%
221	臉放在那兒啊	57%	100%
222	露水珠兒	57%	100%
223	蕪楷棍兒打狼	57%	100%
224	苗頭兒	57%	100%
225	木頭人兒	57%	100%
226	妞兒	57%	100%
227	努嘴兒擠眼兒	57%	100%
228	弄個套兒	57%	100%
229	搬指兒	57%	100%
230	襖兒	57%	100%
231	山藥豆兒	57%	100%
232	衫兒	57%	100%
233	手頭兒寬綽	57%	100%
234	歲數兒	57%	100%
235	當的月分兒	57%	100%

236	討好兒	57%	100%
237	燈苗兒	57%	100%
238	銅殼兒	57%	100%
239	碗口兒	57%	100%
240	洋取燈兒	57%	100%
241	仰八口兒	57%	100%
242	煙卷兒盒子	57%	100%
243	眼面前兒的	57%	100%
244	蹺腿兒	57%	100%
245	挨肩兒	57%	100%
246	翅膀兒	57%	100%
247	悄不聲兒的	57%	100%
248	虻螻兒	57%	100%
249	雀兒	57%	100%
250	打顫兒	42%	100%
251	家家兒	42%	100%
252	花朵兒	42%	100%
253	官座兒	42%	100%
254	這當兒	42%	100%
255	爐門兒	42%	100%
256	帽盒兒	42%	100%
257	摸黑兒	42%	100%
258	百十各樣兒的比方	42%	100%
259	抱窩兒	42%	100%
260	獅子狗兒	42%	100%
261	雙臉兒的鞋	42%	100%
262	四嘎拉兒	42%	100%
263	大襖兒	42%	100%
264	太老祖兒	42%	100%
265	單數兒	42%	100%
266	聽相聲兒	42%	100%

267	銅吊兒	42%	100%
268	字號兒	42%	100%
269	喫瓦片兒	42%	100%
270	悄莫聲兒的	42%	100%
271	雞子兒	42%	100%
272	起根兒	42%	100%
273	絡星兒	29%	100%
274	格兒	29%	100%
275	老家兒	29%	100%
276	鉗子眼兒	29%	100%
277	旁盆兒話	29%	100%
278	塞頭兒	29%	100%
279	手拉手兒	29%	100%
280	單皮兒的繩子	29%	100%
281	多兒錢	29%	100%
282	多宗晚兒	29%	100%
283	吐了活動話口兒了	29%	100%
284	動不動兒的	29%	100%
285	夜靜的時候兒	29%	100%
286	親家女兒	29%	100%
287	二小兒	29%	100%
288	小河兒	29%	100%
289	嘎嘎兒天	29%	100%
290	該班兒	29%	100%
291	馬尾纂兒	29%	100%
292	汗褌兒	14%	100%
293	好性兒	14%	100%
294	腳丫巴兒	14%	100%
295	一子兒（一子兒掛麵）	14%	100%
296	靠着牆兒	14%	100%
297	客坐兒	14%	100%

298	鬼頭兒鬼腦的	14%	100%
299	爛爛兒的	14%	100%
300	路數兒	14%	100%
301	住腳兒	14%	100%
302	躡手躡腳兒	14%	100%
303	扒頭兒	14%	100%
304	波浪鼓兒	14%	100%
305	不是頑兒的	14%	100%
306	賞封兒	14%	100%
307	什不閒兒的	14%	100%
308	事由兒	14%	100%
309	算盤子兒打的清	14%	100%
310	打扮兒	14%	100%
311	到了兒	14%	100%
312	外場面兒	14%	100%
313	夾當兒	14%	100%
314	人緣兒好	6%	100%
315	井臺兒	0%	100%
316	放主兒	0%	100%
317	三分兒飯	0%	100%
318	洗衣裳坊兒	0%	100%
319	皮襖桶兒	0%	100%
320	書童兒	0%	100%
321	抄近兒	0%	100%
322	家小兒	0%	100%
323	巧媳婦兒做不出沒米 兒的粥		100%
324	空兒		100%
325	月芽兒		100%
326	指甲草兒		100%
327	捲毛兒	100%	80%

328	伏天兒	100%	80%
329	耳唇兒	100%	80%
330	兩頭兒	100%	80%
331	這邊兒	100%	80%
332	中間兒	85%	80%
333	下邊兒	85%	80%
334	減點兒	85%	80%
335	家長裡短兒	85%	80%
336	肩膀兒	71%	80%
337	香串兒	71%	80%
338	衚衕口兒	71%	80%
339	哥兒們	71%	80%
340	掛瓶兒	71%	80%
341	兩頭兒蛇	71%	80%
342	出花兒	71%	80%
343	鼻煙壺兒	71%	80%
344	三鼻子眼兒朶出口氣兒	71%	80%
345	家雀兒	71%	80%
346	船稍兒	57%	80%
347	耳朵嘴兒	57%	80%
348	伏窩兒	57%	80%
349	閒工夫兒	57%	80%
350	新手兒	57%	80%
351	嘎嘎兒	57%	80%
352	賣花子兒的	57%	80%
353	帽結兒	57%	80%
354	年年兒	57%	80%
355	半冠兒	57%	80%
356	抓週兒	57%	80%
357	紙籤兒	57%	80%

358	縫紐攀兒	57%	80%
359	重孫兒	42%	80%
360	姐妹兒	42%	80%
361	浮頭兒	42%	80%
362	小舌兒	42%	80%
363	餡兒	42%	80%
364	胰子盒兒	42%	80%
365	敢擔錯兒	42%	80%
366	根兒裡	42%	80%
367	高板兒	42%	80%
368	老沒兒	42%	80%
369	麻子臉兒	42%	80%
370	貓兒眼	42%	80%
371	背岔兒	42%	80%
372	波泡兒	42%	80%
373	一撲納心兒	29%	80%
374	官板兒	29%	80%
375	光兒	29%	80%
376	力把兒頭	29%	80%
377	涼窓兒	29%	80%
378	兩半頭兒	29%	80%
379	驢兒不喝水不能強搵頭	29%	80%
380	滿冠兒	29%	80%
381	毛兒窩	29%	80%
382	帽襷兒	29%	80%
383	散話兒	29%	80%
384	任着意兒	29%	80%
385	鎗子兒	29%	80%
386	初生的犢兒不懼虎	29%	80%
387	取燈兒	29%	80%

388	小零兒	29%	80%
389	紅角兒	29%	80%
390	抽工兒	29%	80%
391	馬尾羅兒	29%	80%
392	眾毛兒攢氈子	14%	80%
393	風絲兒	14%	80%
394	細細兒的	14%	80%
395	夥計兒	14%	80%
396	高纂兒	14%	80%
397	來了空空兒	14%	80%
398	老婆兒	14%	80%
399	老公嘴兒	14%	80%
400	老爺兒地裏	14%	80%
401	貓頭兒瓦	14%	80%
402	捻把兒	14%	80%
403	巴兒狗	14%	80%
404	爬蔓兒	14%	80%
405	傍帳兒	14%	80%
406	碰兒	14%	80%
407	山音兒	14%	80%
408	手丫巴兒	14%	80%
409	鍼鼻兒	14%	80%
410	箭箭兒中	14%	80%
411	盡着量兒	0%	80%
412	小漢仗兒	0%	80%
413	緊扣兒	0%	80%
414	穀嚼過兒	0%	80%
415	面子情兒	0%	80%
416	拍巴掌兒	0%	80%
417	扮兒	0%	80%
418	步々兒留心	0%	80%

419	這宗晚兒	0%	80%
420	腳掌兒	0%	80%
421	盡着力兒	0%	80%
422	昨兒	100%	75%
423	吊眼角兒	85%	75%
424	調兒	85%	75%
425	對過兒	85%	75%
426	松鼠兒	71%	75%
427	耽誤工夫兒	71%	75%
428	蝶兒大碗兒大	71%	75%
429	對出光兒來	71%	75%
430	牙花兒	71%	75%
431	夜消兒	71%	75%
432	煙台桿兒	71%	75%
433	倒座兒	57%	75%
434	套褲袋兒	57%	75%
435	澄沙餡兒	57%	75%
436	砸着嘴兒	57%	75%
437	打價兒	42%	75%
438	燈虎兒	42%	75%
439	底根兒	42%	75%
440	挺兒	42%	75%
441	對兒	42%	75%
442	銀盤兒	42%	75%
443	說帖兒	29%	75%
444	地皮兒	29%	75%
445	逗笑兒	29%	75%
446	天老兒	29%	75%
447	桅梢兒	29%	75%
448	咬舌兒	29%	75%
449	眼鏡字兒	29%	75%

450	掐着指頭兒算	14%	75%
451	吊桶兒	14%	75%
452	挑肩兒	14%	75%
453	頭目人兒	14%	75%
454	腿着手兒	14%	75%
455	杌欏兒	14%	75%
456	大鞍兒	0%	75%
457	瓦隴兒	0%	75%
458	窯妓兒	0%	75%
459	眼犄角兒		75%
460	高粱稈兒	100%	60%
461	棚兒	100%	60%
462	胳膊肘兒	85%	60%
463	主兒	71%	60%
464	火套兒	57%	60%
465	錢貫兒	57%	60%
466	山嘴兒	57%	60%
467	手縫兒	57%	60%
468	花兒洞子	42%	60%
469	火虫兒	42%	60%
470	立字兒	42%	60%
471	家兔兒	42%	60%
472	借字兒	42%	60%
473	照本兒	42%	60%
474	掛屏兒	29%	60%
475	鍋兒	29%	60%
476	毛道兒	29%	60%
477	白醜兒	29%	60%
478	飽呢兒	29%	60%
479	片段兒	29%	60%
480	身挺兒	29%	60%

481	獅子鼻兒	29%	60%
482	輸個東兒	29%	60%
483	換鐘兒	29%	60%
484	一黑早兒	29%	60%
485	仇扣兒	29%	60%
486	中中兒	14%	60%
487	血津兒	14%	60%
488	劃口兒	14%	60%
489	逛青兒	14%	60%
490	嚼過兒	14%	60%
491	暴子眼兒	14%	60%
492	撲燈蛾兒把燈撲滅了	14%	60%
493	普裏普兒的	14%	60%
494	生路兒	14%	60%
495	插關兒	14%	60%
496	錢鏝兒	14%	60%
497	智數兒	0%	60%
498	靜靜兒	0%	60%
499	重重兒的	0%	60%
500	號數兒	0%	60%
501	步行兒走	0%	60%
502	身軀兒	0%	60%
503	使個眼色兒	0%	60%
504	事體兒	0%	60%
505	重重兒的	0%	60%
506	髻了兒	0%	60%
507	穀澆裏兒		60%
508	跳格兒	71%	50%
509	字眼兒	57%	50%
510	要路口兒	57%	50%
511	玩器兒	42%	50%

512	裕褌兒	29%	50%
513	打野盤兒	29%	50%
514	打燈虎兒	29%	50%
515	臺塔兒	29%	50%
516	對頭兒	29%	50%
517	打着墜轂轆兒的要	14%	50%
518	遭遭兒	14%	50%
519	賭個東兒	14%	50%
520	退身步兒	14%	50%
521	碗足兒	14%	50%
522	刷貨兒	0%	50%
523	韜略兒	0%	50%
524	低三兒下四的	0%	50%
525	停兒	0%	50%
526	頭生兒的	0%	50%
527	壓山兒	0%	50%
528	站班兒	100%	40%
529	種種兒	42%	40%
530	有情趣兒的	42%	40%
531	直格兒	29%	40%
532	鄉風兒	14%	40%
533	古兒詞	14%	40%
534	家當兒	0%	40%

535	香囊兒	0%	40%
536	真子兒	0%	40%
537	紅十字會兒	0%	40%
538	橋翅兒	0%	40%
539	戒指兒	0%	40%
540	有要沒緊兒的		40%
541	四平八穩兒	0%	25%
542	打靶兒	0%	25%
543	等一等兒	0%	25%
544	長尾巴兒	14%	20%
545	折盅兒	14%	20%
546	信桶兒	0%	20%
547	性格兒	0%	20%
548	家主兒	0%	20%
549	貓兒哭耗子	0%	20%
550	挨一挨兒	0%	20%
551	雀尾兒	0%	20%
552	千裏馬還得有千裏人兒	14%	10%
553	車箱兒	14%	0%
554	暗路兒	14%	0%
555	親家兒	0%	0%
556	懷抱兒	0%	0%

結 論

1 本論文の独自性

本論文は、明治・大正期の日本人がどのように北京官話を学習していたかを明らかにするという主旨のもとで、多数の北京官話資料を論拠とし詳細な考査を通して、日本人が北京官話を語学として認識し、一定の科学的な方法で学習した事実を証明したものである。

明治・大正期における日本人の北京官話学習をめぐって、本論文は北京官話資料の収集、特に辞典の全体像を捉え、日本人の北京官話、特に北京官話の特色である r 化語の認識と学習方法を明らかにした。

明治以後の日本の中国進出と歩調をあわせ、日本人の中国への関心は高まり、中国語学習者は増加した。明治初期に至るまで教授されていたのは南京官話であったが、中国で南京官話に代わり北京官話が重要になる国情の変化に伴い、日本と中国との関係がいよいよ深まったため、明治9年(1876)、日本の中国語教育も南京官話から北京官話に転換した。

北京官話が採り上げられることは政治・商業といった面と大きくかかわっていた。よって、近代日本の北京官話教育は単に商用や戦争遂行の手段であったり、その教育の場にあっては、教師も学習者も、科学的教育の必要を自覚していなかったりしていたといった批判をよく耳にする。

従来中国語教育は漢文を読むことを重んじ、学問を修めるということであった。明治初期に始まった北京官話教育は、本を読み解くことを目指さずに中国語の発音で会話できることを目指すことになってきた。つまり、北京官話時代に入ってから、中国語の発音で会話ができるという目的が全般の主潮となってきた。日本人が中国語の発音を学習するにはかなりの困難を伴うのは想像に難くない。

北京官話は日本人にとって実用語といえども一種の外国語である以上、科学的な学習法を採用しなければ発音の希求を満たすことはできないであろう。北京官話教科書を見ても、日本人が様々な発音の表記方法を採用し、特別な符号を利用して発音を学習した記録が確かに見られる。発音の表記方法も特殊な符号も統一されていなかったにもかかわらず、ある記載を詳細に調べると、一定の科学性が見られ、体系が整えられているようである。

一方、北京官話が取り上げられたことに応じて、北京官話学習書が必要となり、数多くが発行されてきた。先行研究によって取りあげられた資料は、膨大な北京官話教科書、辞典の内の極僅かであった。言語学習について研究するには、個別資料の詳細な調査が不可欠である。山田忠司（2004）が『北京官話 今古奇観』で扱ったような個別の北京官話資料の研究はすでにあるとはいうものの、北京官話をどのように学習していたかという角度から中国語学習書の内容に踏み込んだものは見られない。そのため、北京官話教育の実態をもっと知るために、さらに資料を発掘し、考察を増やし広げて行かなくてはならない。

そして、本研究は、明治・大正期において日本人が、北京官話を実用語とするのは否定されないが、語学として認識し、一定の科学的な方法で学習した態度と努力もあるという新しい観点を提出し、北京官話資料を利用して実証した。これが本研究の独自性である。

2 各章の要約と考察成果

本論文の研究方法は、北京官話資料を収集し、論点を論証できる資料を選び出し利用して、詳しい考察を展開することである。

明治・大正期において日本人がどのように北京官話を学習していたかを明らかにするのを主旨とし、この主旨に沿って、まず北京官話資料の収集と全般的な考察をしておかなければならない。それは、先行研究の不足を補充する意図も含む。この部分は本論の第1、2章を占める。資料を調査する過程で、上に提出した問題を解決するために、主な資料を選定した。

日本人による北京官話の学習を課題として取り上げる本論文では、北京官話が具体的にどのような様子かを明らかにするべきである。特に表現と文法などの実態を把握する必要がある。そこで、第3章では初期の北京官話の実態の一端をみた。

次は、北京官話の最も顕著な特色である r 化語が日本の北京官話教育時期にも多く出たので、日本人の r 化語の学習に関する考察することにした。r 化語が複雑な性格を持っているので、本論文では r 化語の性質と音交替、ある語を r 化するかしらないかという2つの問題点をあげ、第4章、第5章で解決した。

このような研究方法と論証構想で、本論文の本論は5章に分けて、日本人の北京官話学習と関連する諸問題を検討した。各章ごとの論旨、それに応じて利用した資料、考察した経緯、及び論文全体での位置付けを以下に概説する。

第1章は北京官話教科書に関する今日までの研究を補足した。

北京官話教科書については、本論文は今日まで取上げられることがなかった資料を掘り起こした。その結果、近代日本の中国語関係学習書は、六角恒廣の『中国語関係書目』の近代部に収録されている資料に新たに12点を加えることができ、合計1,486点となった。これらの学習書の「戦争語学」的性格について、出版年、出版点数の経年変化、書名、さらに内容から、教材と軍事の進行との関連を明らかにした。

多数の中国語教科書を著した西島良爾の中国語観については、実用的な目的で中国語に取り組んだが、のちに言語学研究に近づき、中国語の発音、文法などの研究を積極的に進めようとする姿勢が窺えたことを明らかにした。

第2章は北京官話辞典を系統的に考察した。これは日本の近代中国語教育史の一つの空白を埋めるものである。

明治・大正期に日本人が編纂した中国語辞典は、筆者が調べたところ、台湾語の辞典を除いて17点ある。それらの体裁は江戸時代より飛躍的に進歩し、すでに整えられていたといえる。辞典の時代的な特色は、書名と中国語の発音の表記法である。辞典の書名は日本語を先頭に立てるのが慣例であった。注音方法について、明治時代は中国語の発音表記として当時最も適切であった「ウェード式ローマ字表記法」より、日本人にとって馴染みのある「片仮名式表記法」が多く採用されていたが、大正時代になると殆どの辞典で「ウェード式ローマ字表記法」が採用されるようになった。これは言語学上の科学性を優先したもので、中国語辞典の一進歩であった。中国語辞典の編纂に一生携わった井上翠については、特に現時点までに公開されていない直筆原稿『日清語辞典』を検討した。そこに残されている中国語の修正の痕は、日本人が学習していた中国語の歴史の資料として十分に価値がある。

第3章は『清語会話案内』と『四声標註支那官話字典』を利用して、日本人が学習していた北京官話の様相をみた。日本人が学習した北京官話は均質ではなく、学習書によって異っていたことが明らかになった。

第1節では、『清語会話案内』の成立経緯と北京語の副詞などの一部を明白にした。『清語会話案内』の編纂については、『華語跬歩』を踏まえつつ、形式上教科書の備えるべき要素を追加し、軍用、商業などの内容を補充したことを発見した。『清語会話案内』の言語が太田辰夫が挙げた清朝北京語の特徴とよく合致することから、北京語を基準に編纂されたことを実証した。一方、『清語会話案内』の程度副詞、文末語気助詞及び使役・受身の表現方法を、明治期の他の北京官話の教科書と対比した結果、異なるところがあった。

第2節は『四声標註支那官話字典』をとりあげた。この辞典は1902年に出版され、筆者の調査によれば現時点では近代日本人が編纂した最初の中国語辞典である。この立場から考えると、参考にするものもない時期でのこの辞典の成立過程、編纂方法と内容については注目すべきである。考案した結果、この辞典は中国語を日本語へ翻訳し、その日本語を見出し語とする編纂方法を採用し、所載語彙は北京俗語の要素が強いことがわかった。『清語会話案内』と比べると北京語の分野も表現も異なっている。そのため、明治・大正時代の北京官話学習書はほぼ北京語を基準にしているが、その表現方法は決して均質的ではないことが判明した。つまり、日本人が学習した北京官話は統一されていなかった。

第4章は北京官話 r 化音に対する日本人の認識と学習方法を考察し、日本人が一定の科学的な方法で北京官話 r 化音を学習した事実を明らかにした。

第1節は『日漢英語言合璧』の中国語の仮名表記と r 化音の注音を分析した。『日漢英語言合璧』は鄭永邦と呉大五郎により、1888年に出版された教科書である。筆者の調べたところ、『日漢英語言合璧』の r 化語についての記録は先進的である。第2節では、同期に発行され、r 化語に関わる記述が記されている北京官話学習書12点を調べた。大部分の日本人の r 化語と r 化音に対する認識に科学性が乏しい中、『初歩支那語独修書』と『清語正規』は稍優れたところがあった。

結果的に、『日漢英語言合璧』はほぼ完璧に発音を表しうる仮名表記体系をもち、発音表示符号でも、韻母の仮名表記でも、r 化語の仮名表記でも、一定の規則が見出せた。r 化音の音交替の仮名表記は、殆ど音韻論的な規則に従っており、『日漢英語言合璧』に見られる r 化音の音交替の認識は、当時としては最高の位置に付けることができる。これによって、日本人の科学的な方法で北京官話 r 化音を学習した事実を証明した。

第5章は明治・大正期の北京官話学習において、明治から大正期を経て昭和初期にかけての日本人のr化語の扱いの変化を考察した。北京官話r化語の扱いは現在の標準語の基準に近づいてきたことを明らかにした。

ここで利用した辞典は井上翠の『日華語学辞林』(1906)、『井上支那語辞典』(1928)及び『支那語字彙』の1904と1921年版である。『井上支那語辞典』は『日華語学辞林』を踏襲して20年以上を隔てて刊行されたことから、両者に収載されている語のr化するかどうかに関する扱いには異なりが見られる。『支那語字彙』1904年版と1921年版は17年間という長い時間を隔ている。1921年の改版は1904年版所載のr化語につき-rを継承するか削除するかの点で初版とは違う扱いが見られる。第1節では『日華語学辞林』に掲載されているr化語をデータとし、『井上支那語辞典』のそれらの継承状況を調べた。第2節は『支那語字彙』の1904年版所載のr化語が1921年版に継承された状況を考察した。

2組の辞典のr化語の継承状況について、『井上支那語辞典』は『日華語学辞林』よりも、『支那語字彙』1921年版は1904年版よりも、約4分の1を非r化語に移行した。引き継がれた語と非r化語とされた語彙の性質の確認によって、非r化された語はすべて「任意的r化語」であり、「絶対的r化語」は漏れなくr化語として継承されていた。このような扱いは、現在の標準語(普通話)の基準と一致している。

最後に、現代の北京人へのアンケートを通じて明治時代の『日華語学辞林』のr化語の安定性を考察した。『日華語学辞林』に掲載されているr化語は、半分以上が安定しており、100年以上経ても現在の北京人に話されていることが判明した。

3 全体的な結論

本論文は、明治・大正期における日本人の北京官話の学習をめぐって、資料を収集した上で、主な資料の内容の分析を通じて、北京官話の実態、北京官話r化語の学習方法を考察・分析した。各章の結果を踏まえ、研究課題に対する結論を予約すると、以下ようになる。

- (1) 明治・大正期における日本人が学習した北京官話は、文体や語彙が均質ではなく、学習書によって異なりが生じている。

これは南京官話から北京官話への転換期に際し、北京官話学習書の編纂は、短期間で集中的に北京官話を学んだ者たちによって行われていた結果である。日本人の学習した北京官話が統一されていなかったのは、時代の緊迫性に由来することであり、当時の日本の北京官話学習の特徴といえる。

(2) 明治・大正期の日本人の北京官話学習には、言語学の角度から見て、一定の科学性が見られる。

当時の日本人は北京官話の発音、特に r 化音についてはほぼ正しい規則に従う表記方法を採用していたことがある。そのうち、『日漢英語言合璧』の r 化音についての記録は、調べたところに最高と位置付けることができる。明治・大正期の北京官話辞典において、r 化語の扱いは現在の標準語の基準に近づいてきた。辞典は個々の語彙を精しく調べ集合し、語彙の研究を次第に発展させて来た結果であるから、明治・大正期の日本人が北京官話に就て時代に応じて研究してきたといえる。

ゆえに、実用語と認識されていた北京官話は、日本人によってまったく研究の手がつけられていないわけではなく、語学として認識し、積極的・科学的に学習した事実もある。

4 今後の課題

本論文は日本人の北京官話の学習をめぐって考察を加えた。北京官話の学習は r 化語を中心にして考察した。r 化音についての記録は筆者の調べたもの以外にも必ず残っているはずである。昭和時代に入ると r 化語の記述に進歩があったか。そして、大正・昭和時代の辞典には明治の辞典にある r 化語を継承しているものも継承しないものもあるが、収録に当たっての r 化語の選択基準はどうであったか。という問題は今後引き続き研究されるべきである。

勿論、北京官話を学習する上で問題になる点は r 化語に限らない。声調（軽声を含む）、接尾語（例えば「子」である）など日本人に馴染みのないものの記録と学習方法なども、今後は本論文と同じ見地から考察していきたい。明治初期の四声についての記述は、筆者が調べたところ、中国の唐・釈処忠『元和韻譜』の「平声哀而安、上声厉而举、去声清而遠、入声直而促」を模倣したもの、または主観的に経験を加えたも

のが多い。例えば、「上平聲之平而安、下平聲之平而輕者、上聲聲之上而猛烈者、去聲其去而哀遠者。」(『亞細亞言語集支那官話部』広部精、1879)、「上平：聲ノ平穩ニシテ直上シ尚餘音ヲ有スル如キヲ云フ、下平：聲ノ平穩ニ發聲シ物ニ驚キテ失聲セルガ如キヲ云フ、上聲：聲ノ重長ニシテ終始大小ナキモノヲ云フ、去聲：聲ノ重短ニシテ餘音ナク止ムヲ云フ」(『支那官話字音鑑』西島良爾、1902)である。それについての分析、加えて大正・昭和時代になってから変えるかを調べていくつもりである。

近代日本の北京官話資料は、膨大な数があり、そして比較的良い状況で保存されてきた。北京官話資料は、従来の文学、思想、宗教などを収める漢文学資料と異なり、口語に偏るといふ特別な性格を持っている。北京官話学習書は、中国語を学習する人々に供されるだけでなく、日本の中国語教育史においても、言語研究にとって重要な資料とされている。本論文は、日本人の北京官話の学習の実態の一端を明らかにしたのみで、膨大な北京官話学習書のなかで、ただ個別の北京官話資料を扱い、その出処、編纂経緯、言語表現などを明らかにしたにすぎない。『四声標柱支那官話字典』内容の出処は解明されず、『日清語辞典』と『井上日華新辞典』の比較により中国語の変化が見られたが個々の語を選別した基準についての分析はしていない。井上翠の『井上支那語字典』の利用価値も十分に発揮されていないといった問題が残っている。

『井上支那語字典』については、凡例 に「韻書のような文献を使うことを避け、北京旗人の実際のことばを標準にして書いた」とあるように、本辞典は当時の実際の北京語の発音を反映している。ということは、清末北京語の発音の価値が高い資料である。清末北京語と現代語との発音が異なる場合があるのは周知の事であるが、現時点までの資料に記録されていない発音も見られる。例えば、「埃」という字は、『井上支那語字典』では2声と記され(p.3)、現在の標準語では1声であるが、昔は2声があったという記載も見つけていない。筆者が『清語会話』(皆川秀孝、1909)と『支那官話字音鑑』(西島良爾と牧相愛共編・1902)を調べた結果、どちらも2声と表記している。そして、中国語学習書の源流といえる『語言自邇集』を調べると、「埃」が[2nd tone]²⁹⁶と記されている。「埃」の歴史上の発音が今と違うのか、それとも、日本の北京官話教材は『語言自邇集』の不正確な記録をそのまま受け継いだのか。証明できる資料がまだ見つからないため、1つの問題として残っている。本研究は清末北京官話

²⁹⁶ Thomas Francis Wade 『語言自邇集』 p.10 (六角恒廣編『中国語教本類集成』、第三集第一巻、1991年、p.307。)

を対象として言語学の研究ではないが、このような問題は日本人が学習した北京官話の実態とも緊密に関連するため、今後は取組んでみたい。

一方、明治時代の日本人の中国語学習の姿勢について、日本の団体及び個人を対象にした研究が進んでいる。本論文では西島良爾の生涯と中国語観を調査したが、荒尾精から影響を受けて興亜論のもとで中国に対する姿勢から中国語への態度を決めたか、或いは教育者の立場で中国語への研究意図が生じたか、手に入れた断片的な資料からは明らかにできない。井上翠についても彼の中国語観まで掘り下げていない。そのため、西島良爾と井上翠についての調査は今後も続けたい。勿論、北京官話教育に関する日本人はまだ多くいる。例えば石山福治は著作が多く、中国語あるいは中国と関係する認識についての発表もある。(『東亜経済研究』(1917)には石山福治の「支那語ノ将来ニ對スル日本人ノ態度」の一文が掲載されている。) 今後は、更に資料を発掘・収集して、これらの人物の業績や思想を把握したい。

参考文献

1 日本語文献篇

- 安藤彦太郎 1971. 『日本人の中国観』 東京：勁草書房
- 岩村正允 1932. 「外交と支那語」. 『中国文学』 「支那と支那語」 特輯 83:30-38
- 埋橋徳良 1999. 『日中言語文化交流の先駆者：太宰春台、阪本天山、伊沢修二の華音研究』 東京：白帝社
- 太田辰夫 1981. 『中国語歴史文法』 京都：朋友書店
- 太田辰夫 1964. 「北京語の文法特點」. 1995 『中国語文論集』 東京：汲古書院 243-265
- 太田辰夫 1950. 「清代の北京語について」. 1995 『中国語文論集 語学篇』 東京：汲古書院 90-96
- 小川郁夫 2006. 「『現代漢語詞典』における軽声語とアル化語」. 『福岡国際大学紀要』 16 : 1-11
- 小川郁夫 2015. 「『現代漢語詞典』第6版におけるアル化語」. 『福岡国際大学紀要』 33 : 35-44
- 小川郁夫 2001. 「アル化語と中国語教育」. 『福岡国際大学紀要』 6 : 25-33
- 尾崎實 2007. 「『官話類編』所収方言詞対照表」. 『尾崎實中国語学論集』 351-388
- 尾崎實 2007. 「清代北京人の一斑」. 『尾崎實中国語学論集』 27-47
- 王秋陽 2012. 「日本統治前期の台湾における「国語」教育に関する研究」 山口大学博士論文
- 奥村佳代子 2007. 『江戸時代の唐話に関する基礎研究』 大阪：関西大学出版部
- 日下恆夫 1974. 「清代南京官話方言の一斑—泊園文庫蔵『官話指南』の書き入れ」. 『中国文学會紀要』 5 : 20-47
- 倉石武四郎 1931. 『支那語教育の理論と実際』 東京：岩波書店
- 坂西利八郎 1932. 「陸軍と支那語」. 『中国文学』 「支那と支那語」 特輯 83:26-29
- 柴田清継 2007. 「西島函南」. 『孫文研究』 42 : 30-41

- 柴田清継 2002. 「西島良爾神戸在住期の対中国活動—『日華新報』の初歩的考察を兼ねて」. 『孫文研究』 32 : 19-45
- 柴田清継 2002. 「西島函南」. 『孫文研究』 42 : 30-41
- 柴田清継 2002. 「西島良爾—中国語とともに生きた明治人」. 『關西黎明期の群像第二』
大阪 : 和泉書院 153-188
- 邵艶 2005. 「戦前日本の高等商業学校における中国語教育 : 山口高等商業学校を中心に」. 神戸大学『研究論叢』 12 : 1-13
- 邵艶の論文 2005. 「近代における中国語教育制度の成立」. 『神戸大学発達科学部研究紀要』 12 (2) : 371-400
- 曹欽源 1932. 「台湾と支那語」. 『中国文学』 「支那と支那語」特輯 83 : 45-50
- 曾徳興 1979. 「中国語の発音表記に関する若干の問題点」. 『中央学院大学論叢. 一般教育関係』 14 (1) : 65-80
- 田中慶太郎 1932. 「出版と支那語」『中国文学』 「支那と支那語」特輯 83:39-44
- 陳娟 2014. 「清末における日本語の辞書—中国人学習者を対象として」. 『東アジア文化交渉研究』 7 : 519-530
- 中田敬義 1932. 「明治初期の支那語」. 『中国文学』 「支那と支那語」特輯 83:11-19
- 中嶋幹起 1999. 「唐通事の担った初期中国語教育」. 『東京外国語大学史』 855-911
- 渡辺慎治 1908. 『天才乎人才乎 : 現代実業家月旦』 東京 : 東京堂
- 藤井 (宮西) 久美子 2003. 『近現代中国における言語政策』 東京 : 三元社
- 松田かの子 2001. 「官話教科書『華語萃編』の成立に関する一考察」. 慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』 80 : 178-194
- 山田忠司 2003. 「清末北京語の一斑—『燕語新編』を資料として」. 文教大学『文学部紀要』 17(1) : 23-35
- 山田忠司 2004. 「『北京官話 今古奇観』の言語について」 文教大学『文学部紀要』 18(1) : 101-114
- 中村雅之 2007. 「官話と北京語」. 『KOTONOHA』 1-3
- 李无未 2004. 「清末期の日本人学者による北京官話の声調認識—四種類の、日本人学者編集の中国語の辞書と教科書を手がかり—」. 『日本文藝研究』 56 (2) : 1-19
- 六角恒廣 1989. 『中国語教育史論考』 東京 : 不二出版
- 六角恒廣 1999. 『漢語師家伝 中国語教育の先人たち』 東京 : 株式会社東方書店

- 六角恒廣 1994. 『中国語書誌』 東京：不二出版
- 六角恒廣 1996. 『近代日本の中国語教育』 東京：不二出版
- 六角恒廣 1998. 『中国語学習余聞』 東京：同学社
- 劉建雲 2005. 『中国人の日本語学習史—清末の東文学堂—』 東京：學術出版会
- 林怡州 2011. 『『亜細亞言語集』の中のアル化語彙—明治期における中国語教材の探究—』 『国際関係研究』 31(2) : 139-149
- 林怡州 2013. 「宮島大八『官話急就篇』の語彙について」(2013). 『国際文化表現研究』 9 : 353-360

2 中国語文献篇

- 陳明娥 2014. 『日本明治時期北京官話課本詞彙研究』 厦門：厦門出版社
- 趙傑 1996. 『北京話的滿語底層和“輕音”“兒化”探源』 北京：北京燕山出版社
- 遠藤光曉・朴在淵・竹越美奈子 2011. 『清代民国漢語研究』 ソウル：学古房
- 何九盈 1995. 『中国現代語言学史』 廣東：廣東教育出版社
- 黃笑山 1995. 『「切韻」和中唐五代音位系統』 臺北：文津出版社
- 李無未・李遜 2007. 「中国学者與日本明治時期北京官話教科書的刊行」. 『国際漢語教學動態与研究』 北京外国語大学. 2007 年第 3 期。
- 李無未・趙小丹・李遜 2007. 「清末中日学者北京官話“變調”意識—以日本『日清會話辭典』為依據」. 『開篇』 26 : 155-179
- 李無未、楊杏紅 2011. 「清末民初北京官話語氣詞例積—以日本明治時期北京官話課本為依拠」. 『漢語學習』 1 : 96-103
- 李小蘭 2006. 「清末中国人編日本教科書之探析」. 『杭州師範学院學報』 28(4) : 97-102
- 李煒 2004. 「清中葉以來北京話的被動“給”及其相關問題—兼及“南方官話”的被動“給”」. 『中山大學學報』 44 (3) : 35-40
- 魯允中 1995. 『普通話的輕聲和兒化』 北京：商務印書館
- 吳菲 2007. 『『日漢英語言合璧』語音教學研究』 吉林大學修士論文
- 武春野 2014. 『「北京官話」與漢語的近代轉變』 山東：山東教育出版社
- 徐世榮 1980. 『普通話語音知識』 北京：文字改革出版社

楊杏紅 2013. 「日本明治時期北京官話課本中的儿化詞」. 『長春師範学院學報：人文社會科學版』 32(11):41-45

楊杏紅 2014. 『日本明治時期北京官話課本語法研究』 廈門：廈門大學出版社

3 資料篇

3.1 辭典と教科書

足立忠八郎 1903. 『北京官話 支那語學捷徑』 東京：金刺芳流堂

池田常太郎 1903. 『日清會話辭典』 東京：丸善株式會社

伊沢修二 1909. 『同文新字典』 東京：大日本圖書 KK

梅村美誠 1913. 『日華合璧辭典』 東京：言成社

石山福治 1904. 『支那語辭彙』 東京：文求堂書店

石山福治 1905. 『日漢字彙』 東京：南江堂

石山福治 1913. 『支那語獨習全書』 東京：文求堂書店

石山福治 1914. 『漢和發音字典』 東京：文求堂

石山福治 1921. 『支那語辭彙』 東京：文求堂書店

石山喜一郎 1922. 『日支日用語字典』 大阪：大阪屋號書店

岩村成允 1905. 『北京正音 支那新字典』 東京：博文館

井上翠 1906. 『日華語學辭林』 東京：博文館

井上翠 1921. 『支那時文教本』 東京：文求堂書店

賈采珠 1990. 『北京話兒化詞典』 北京：新華書店北京發行所

郭祖培・熊金壽 1903. 『日語獨習書』 大阪：東文學堂

吳大五郎・鄭永邦 1888. 『日漢英語言合璧』 東京：鄭永慶

金國璞・平岩道知 1900. 『北京官話 談論新篇』 積嵐樓書屋藏版

鈴木暢幸 1906. 『日華會話辭典』 東京：富山房

坂井鈞五郎 1894. 『日清韓三國會話』 東京：松榮堂

作新社 1908. 『東中大辭典』 上海：作新社印刷局

佐藤留雄 1926. 『標準支那語辭典』 東京：同文社

參謀本部 1894. 『日清會話』 東京：參謀本部

- 清語学堂速成科 1906. 『清語正規』 東京：文求堂
- 杉房之助 1904. 『日台新辞典』 台北：日本物産
- 杉野元子・黄漢青 2016. 『大学生のための初級中国語 40 回』 東京：白帝社
- 善隣書院 1905. 『日華字典』 東京：文求堂書店
- 台湾總督府民政局学務課 1907. 『日台大辞典』 台北：台湾總督府民政部
- 台湾總督府 1908. 『日台小辞典』 東京：大日本図書 KK
- 陳剛 1985. 『北京方言詞典』 北京：商務印書館
- 通文書院 1904. 『日露清韓会話自在』 東京：玄牝洞
- 中島錦一郎・杉房之助 1906. 『日華時文辞林編』 東京：東亜公司
- 西島良爾 1900. 『清語会話案内』 大阪：青木嵩山堂
- 西島良爾 1901. 『清語教科書』 大阪：堀越幸
- 西島良爾・牧相愛 1902. 『四声標註支那官話字典』 大阪：青木嵩山堂
- 西島良爾・林達道. 『最新实用支那語教科書』 大阪：石塚書舗 1915
- 西島良爾・林達道 1915. 『最新实用支那語教科書』 大阪：石塚書舗
- 西島良爾 1932. 『日支会話獨修：三週間完成』 大阪：松浦一郎
- 日本大辞典刊行会 1974. 『日本国語大辞典』 東京：小学館
- 波多野太郎 1984. 『中国語学資料叢刊：白話研究篇』 東京：不二出版
- 原口新吉 1905、06. 『初歩支那語獨修書』 東京：広報社
- 東亞經濟研究會 1917、18、19、20. 『東亜經濟研究』 山口：東亞經濟研究會
- 平岩道知 1929. 『日華會話筌要』 東京：岡崎屋書店
- 広部精 1880. 『亞細亞言語集 支那官話部』 東京：青山清吉
- 本田清人 1916. 『实用支那語教本：北京官話』 大阪：石塚書舗
- 服部操 1924. 『漢字索引 日華大字典』 京都：内外出版
- 松平康国・牧野謙次郎 1907. 『日華新辞典』 東京：東亜公司
- 宮島大八 1900. 『支那語獨習書』 善隣書院：善隣書院
- 宮島大八 1917. 『支那官話字典』 善隣書院：善隣書院
- 六角恒廣 1998. 『中国語教科本類集成』 東京：不二出版
- 李亞虹 1992. 『中華俗語源流大辭典』 北京：中国工人出版社

李泳炎・李亞虹 1991. 『中華俗語源流大辭典』 北京：中国工人出版社

李亞虹 1992. 『中華俗語源流大辭典』 北京：中国工人出版社

1904. 『滿洲語會話一ヶ月卒業』 大阪：石塚猪男藏

3.2 叢書類

李無未等 2015. 『日本明治教科書匯刊（江戸明治）』 北京：中華書局

六角恒廣 1991. 『中国語教本類集成』 東京：不二出版

波多野太郎 1984. 『中国語学資料叢刊：白話研究篇』 東京：不二出版

六角恒廣 2003. 『中国語辞典集成：編集復刻版』 東京：不二出版